
プリンセスオークション！

檜山英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセスオークション！

【Nコード】

N3591P

【作者名】

檜山英

【あらすじ】

未曾有の大不況に陥った近未来の日本、性風俗規制が大幅に緩和された街に帰ってきた一人の青年が風変わりな風俗店を経営する、様々な女の子が集まり、泣き笑い、時には反目しながらもふれあいと何気ない日々を大切にして、精一杯生きていきます。

第1話「街に帰ろう」 (前書き)

本作品はリアルな風俗業界の描写はありません (作者が知りません)
、あくまでも創作です。

第1話「街に帰ろう」

0

―都内某所―

「納得のいかない話だったよな」

様々な会話が喧騒と言ってもよい勢いで交わされている居酒屋チエーン店のカウンター席で、とある総合商社に務める松永は後輩の肩を優しく叩く。

後輩は入社二年目の真面目な男だが、今日は酷く落ち込んでいる。その原因は簡単だ。

仕事での失敗、あきらかに彼に落ち度のない事柄なのだが、普段から頭の上がない取引先がいちゃもんに近い文句をつけてきて、失敗が彼の責任になってしまったからであった。

3

「やっていけそうにありません」

頭を垂れて、くやしそうにしている後輩。

松永としても表向きだけでなく、心底同情していたので見てられない。

「……仕事はつらい事もある、そうだな」

松永はそこまで言って、間を置き、財布の中身を思い浮べ、

『大丈夫だな』

後輩に悟られないように勘定すると、

「よし！ カワイイ女の子に元気をもらいに、新大空町に繰り出するか！」

と、ニンマリ笑い、切り出したのである。

「新大空町ですか？」

後輩が赤面するのは酒のせいだけではない。

「そう、知ってるだろ？ お上公認の風俗街、ちょっと相場が高いが、怖いにーちゃんが出てくる事はないし、カワイイ女の子もいる！ さあ、半額奢ってやるから行こうぜ」

松永が立ち上がると、

「半額ってのがなんですけど……喜んで行きます、ありがとうございます」

後輩も笑い、彼についていくのであった。

「坊っちゃん……突然に、姿を見せた事は謝らせて頂きます」

アパートの一室。

片付けられてはいるが、くたびれた部屋に不似合いな、ピシッとスーツに身を包んだ美人が正座して頭を下げる。

「坊っちゃん……って、その呼び方は止めてくれませんか、高音さん」
困った、といった風に頭を掻くトレーナーにジーパン姿の青年。

彼の名は御神本幸四郎^{みかもと こうしろう}、年齢は23歳。

職業はフリーター。

百七十?半ばの身長に中肉中背、顔立ちは優しげで、よく言われる言葉を借りてしまえば、見た目草食男子である。

「坊っちゃんは坊っちゃんではありませんが……私にとっては幼い頃より面倒もたくさん見ましたし、それを変えろというのは難しい注文です」

丁寧だが、目の前の美人は眼鏡をクイツと中指で上げて答えた。

彼女は原高音^{はら たかね}、33歳。

後頭部でお団子にまとめ、両方のもみあげを綺麗に伸ばした髪型は、幸四郎の幼い頃からの記憶からほとんど変わっていない。

変わったのは、丸く少しだけつり目がちだった瞳が美しく細長になったのと、視力が落ちたらしく、眼鏡をかけたくらいである。

「もう相変わらずキツイなあ……で、二年も家に帰ってないオレを急に高音さんが訪ねてきたのは、なんでですか？」

幸四郎が苦笑してから訊くと、

「そうですね……坊っちゃんが会長と喧嘩をされて家を出て、もう、二年も経つのですか……」

高音は細い息をふう、と吐く。

「会長か、偉そうな肩書きだよねえ……そりゃ新大空町にいくつも店を経営してれば、儲かるよな」

幸四郎は肩を竦めた。

皮肉っぽくはなったが、別に父親を恨んではないし、新大空町という土地で父親が営んでいる風俗業に嫌悪感がある訳ではない、ただ単に、その年頃にある一人暮らしへの憧れと父親への程度の低い反抗心である事は今は気付いていた。

201×年。

未曾有の不況の中で、困窮しきった政府はある政策を打ち出す、それが隠れた税収の見込める風俗営業の規制の大幅緩和だ。

しかし、それは全面的な物ではなく、あくまでもテストケースとして、政府の管理する地域に限り、その地域は今、日本に六ヶ所し

かない。

風俗営業に付き物の背後の暴力団への流れを政府の管理により断ち切り、違法就労等も厳しく警戒されている、それだけに経営者も許可制でかなり突っ込んだ経歴をも調べられ、暴力団との繋がりなどが見つければ、即座にその地域での営業の資格を失うなど、罰則は厳しい。

新大空町は小さな商店街が中心で昔からの下町であったが、それと同時に、夜の繁華街の活気も昔からあり、商店街とは仕入れなどで、常に持ちつ持たれつの関係で、今は政府の風俗管理法による公認の営業街として指定されているのである。

幸四郎の父親は、その新大空町で風俗の店を幾つも経営しているトップクラスの実力者であった。

「会長の事……そんなにお嫌いではないでしょう？」　優しげな笑みの高音。

「……どうかな？　少なくとも、昔から高音さんみたいな美人を秘書にしているのは羨ましかったし、悔しくもあったよ」

幸四郎はすまして答えるが、

「こんな所と同棲する彼女がいるわけでもなく、1人で暮らしてるくせに……生意気ですよ」

と、切り返されてしまい、返答が出来ない。

まごつく幸四郎、高音はわずかに口元を弛ませ、

「当たりましたか……まあ、良いでしょう、私はそんな話に坊っちゃんを訪ねた訳ではないのです」

と、神妙な口調で再び佇まいを直し、いきなりその場で、スツと土下座をしたのである。

「高音さん!？」

目の前の女性は少なくとも冗談や酔狂でそういう事はしない、幼い頃より高校生の高音、そして社会人になり父親の秘書の役割を有能にこなしてきた彼女のプライドが高いのを幸四郎は知っているのだ。

「坊っちゃん、お願いします……どうか、どうか新大空町に戻られて下さい、そして……そして会長を、父上をお助け下さい!」

切なる訴え。

幸四郎は由々しき事態の到来を感じると、苦笑していた顔を引き締め、土下座していた高音の両肩をつかんで、顔を上げさせた。

「坊っちゃん……」

その強気さを感じさせつつも整った瞳には、涙が溢れている。

「高音さん……何か大変な事があったんだな!? 家を出ちゃった意気地なしの俺だけど……高音さんが泣いちゃうような事態に逃げられる程にはなっちゃいないよ……さあ、話してみてよ」

「ありがとうございます」

涙を拭って礼を述べると、高音は唇を噛み締めながら、幸四郎を見つめ、

「実は一年前から会長の体調が思わしくなく……そして、ついに先日お倒れになったのです」

と、告げてきたのだ。

「親父が!? あれで結構元気だったのに?」

二年間ほとんど連絡は取らなかったが、父親を忘れるほど親不孝ではない。

母親は病弱で、幸四郎が小学生の時に病死していたが、父親は剛毅な性格で、身体も丈夫なイメージが幸四郎にはあるのである。

「やはり坊っちゃんの家を出られてからは少し寂しげな様子もありました……体調を崩されてからも、傘下の店の管理などはしっかりしていたのですが、実は数ヶ月前、一大風俗会社を名乗る風俗大王チェーンという会社が、かなり強引な手口と豊富な資金をバックに、各店舗に圧力をかけてきていたのです、その対応もお体に障り、倒れられてしまったのです」

「風俗大王!?!? な、何だ、そりゃ?」

「変わった名前です、まだ新興なのですが、人気の女の子や有能なスタッフ引き抜き等にかんりの額を使ってきて、会長が倒れられて入院してしまった事も大きく……」

そこまで話すと、高音は俯く。

「店舗はどうなったったんですか?」

幸四郎が訊くと、高音は答えにくそうに、

「相手の採算度外視の資金攻勢に一つ一つの店が苦しくなり、ちょうど新店舗準備の資金繰りをしていた悪い時期に重なって……」
「重なって?」

「未完成の新店舗を残してすべて手放す羽目になってしまいましたあ!」

いきなり、高音は堰を切った様に、泣きださんばかりの情けない声を上げると、その場で伏して、まるで漫画の登場人物よろしく、泣きだしてしまったのである。

「た、高音さん! 落ち着いて、落ち着いて!」

高音を慰めないといけないのは当然だが、アルバイト生活でどうにか暮らしている安普請のアパートだ。おいおい、と泣き出した女性の声は、周りの住民にまる聞こえるに違いなく、どう誤解を受けるか、まったくわからない。

「これが落ち着いていられますかあゝ、あんなあんな下世話な相手に、街の皆様と二人三脚でやってきた御神本グループがあゝ」

「だ、だって、さっきまでは、あんなに毅然としたいいつもの高音さんだったじゃないかよ!？」

「我慢していたんですっ、でもでも、やはり我慢できませんっ!」

高音はそう叫ぶと、再びワンワンと泣く。

「高音さん、でも俺の所に来たのなら何か頼みたい事があるんだろ？ だから親父の所、新大空町に戻ってこいなんて、土下座してまで頼んだんだよね？」

幸四郎がどうか高音を落ち着かせようと尋ねると、彼女はハッと、思い出した様に顔を上げる。「そうです、今のこの事態をどうにかする為にも、坊っちゃんには新大空町に戻って来てほしいのです」

「でもさ、俺が戻っても何も出来ないよ!？」

バツの悪そうに頭を掻く幸四郎。

だが高音は首を振って、

「会長はそうは思われていません、私は病床の会長から、未完成の

新店舗のオーナーにあなたがなるように頼んできてくれ、と託されたのですから」

と、切り出してきたのである。

「な、なんだってえ！」

幸四郎は驚愕する。

しかし、口ではそう答えていたが、頭の中では断る口実でなく、どうやったら、それを上手く出来るのかを思案しはじめていたのであった。

今の出口の見えない家出と変わらない生活を送り続けるくらいなら、親を助ける為に生まれ育った街に帰ろう。
そう即決していた。

3

三日後。

幸四郎は高音とある建物の中に立っていた。

壁はコンクリートが丸出しで、窓にもガラスも付いてない、いわゆる建設途中の建物だ。

「レイアウトはまだ変更できるよね？」

「平気です、なるべく坊っちゃんが好きにして欲しい、というのが会長のお言葉ですから」

スーツ姿の高音は眼鏡を直す仕草をする。

「じゃあさ、細かいところは任せるけど……一階には舞台と広めのホールが欲しいんだけどな、あとは厨房もね」

「え!?! まさかショー形式の店を考えてますか?」 キョトンとする高音。

「違うよ、今どきショー劇場もないでしょ? あと二階と三階は部屋、それも個室みたいな狭い部屋じゃなくて、少なくともビジネスホテルくらいの広さが良いんだけど」

幸四郎はそう言って、にっこり笑った。

「わかりました」

頷く高音。

経営について助言は求められたらするし、気がついた事は指摘すると彼女は言ったが、根本的には幸四郎の自由にさせてくれる。

「坊っちゃん……聞かせてもらってもいいですか?」

「なに!?!」

「ショー形式でなくて、舞台があるなんて……一体、どういう形態のお店にするおつもりですか?」

高音の問い。

対して、幸四郎は悪戯っぽく笑い、

「女の子と部屋で過ごす権利の値段を、お客様が決める、実はオークション形式をとりたいたんですよ」

と、答えた。

「オークション!？」

「そう、オークション」

驚く高音に頷く幸四郎。

「この新大空町に限っては、近年キツくなるばかりの風俗条例や方が一斉に緩和されてるでしょ？」

「ええ……性風俗に限ればこの新大空町は治外法権といってもいい、確かにこの街には、今までの風俗街には無かったタイプの店もたくさんありますが……」

高音が眼鏡をツイと上げると、

「だったら……こんなのも有りじゃないかな？ とかちょっと前から考えていたんです、今回の事を割と早く引き受けたのは、もちろん親父の事もあるけど、前から考えていた、それが通用するのか試してみたかったですよ、舞台に登った女の子、その子とお部屋で過ごす権利をお客様同士がオークションしてもらう訳です、普通の営業形態じゃ、俺みたいな素人がこの街で店が出来る訳ないのは、火を見るより明らかですからね」

高音にどう？ と聞きたげな顔を見せる幸四郎。

「なるほど」

高音はそれだけ答えると口元に手を当て、その突拍子もない考えに思案を巡らせたが、その答えはすぐには出なかったのだった。

4

夢。

叶わぬ、と思っただけで終わる者もいる。

努力して叶わず、諦める者もいる。

努力が実り、それを実現した者もいる。

そして……それを実現したが、夢の世界の現実を味わい、その中途で退場を余儀なくされる者もまたいるのであった。

「ちくしょう！」

遠藤知世^{えんどう ちせ}は、駅前のファーストフード店の二階で一人、周りをはばかりる事無く怒鳴り散らした。

「許さねえ……あいっら」

ワナワナと震え、ハンバーガーとコーラの置かれたテーブルを叩く。

ポテトはいかがですか、と聞かれた0円スマイルは黙って睨み返したので、ポテトがテーブルから宙を舞う事は無かった。

染めた栗色のセミロング、両方の側頭部に赤いリボンを結び、そこから真横にちよんと、アクセントに垂らした髪型。

年齢よりも幼く見える輪郭に、丸い瞳。

高くはないが、均整の取れた鼻筋から薄い唇。

身長はやっと百五十？を越えたくらいで、体付きも細身の幼児体形なのが、外身で分かる。

なりは小さいが、誰が観ても十分な美少女だ、しかし今日の彼女は、それを掻き消すくらいに荒れていたのであった。

「まさか解雇されちまうとは……」

ひとしきり暴れた後で知世はべたべたと顔をテーブルにつけて
呟く。

「この世界……解雇なんてされたら滅多な人気者でもなきや、他の事務所は相手してくれないだろうな、こんな事態は想定外だ」

すっかり常温に馴染んでしまったコーラ。

知世はそれをそのままの体勢で力無げに見つめ、

「……でも、これは身から出たなんとかかなあ」

と、息をついた。

彼女はある弱小芸能プロダクションに所属している、いや数時間前まで所属していたアイドルだった。

数年前にスカウトされて、同期の同じ年齢の少女とデュオを組んでデビュー、その少女も知世とはタイプの違う正真正銘の美少女で事務所も期待していたが、世の中は甘くなく、二人の美少女は泣かず翔ばずの時期を過ごした。

そんなある時、知世のパートナーの少女の歌の才能が偶然、注目される。

彼女は元々、ギターも弾けシンガーソングライターとしての才能もあり、ソロで発表した曲がオリコンにトップ10に入ると、知世はデュオのじゃない方として扱われてしまう。

じゃない方として扱われているうちは良いが、パートナーとしての役割が果たせない知世をそのうち邪魔者にも扱う関係者があらわれ、知世は仕事場に呼ばれない日々が続く。

パートナーであった筈の少女とのいつの間にか構築された厚い壁。それを越えられない自分の能力。

期待もしない周囲の者達の目線。

結果、知世は乱れた。

素行のよくない三流アイドルの男子と遊びまわり、払いは事務所にまわして、無駄遣いを繰り返す。

そして……ついに素行不良を理由に、デュオは解散、そして知世は解雇されてしまったのである。

「自業自得……か」

ポツリと答えを出す。

誰かに腹を立て荒れたが、そう思えば許せないのは周りではなく、自分だ。

「明日からどうしようかなあ……でも……」

しばしの間を置く。

「生きていかなきゃいけないからな……」

と、席を立ち上がると都会の雑踏に一人、歩き出して行くのだった。

第2話に続く

第2話「店舗完成！」

1

幸四郎が新大空町に帰ってきて、一週間が経過していた、新規店舗は高音の知り合いの地元の業者が請け負い、幸四郎の提案通りのレイアウトに完成する様に急ピッチの作業が続いている。

幸四郎もそれを待っているだけでは気が済まず、昼間は業者の工事の終えた部分で、自分の出来る限りの事をしようと決め、

「資金が潤沢じゃないんだからね、出来る所は自分でやらないとな」

と、完成した部屋の内装作業として、壁紙を貼ろうと店にやってきていた。

しかし、幸四郎は全くの素人。

やり方は調べたものの、慣れない作業に悪戦苦闘していると、

「坊っちゃん、オレ達はこれから昼メシに行ってきますんで」

他の部分に手をかけていた50代くらいの業者の職人が、笑顔で丁寧な断りを入れてくる。

「はい、どうぞ」

幸四郎は振り返る。

「壁紙張りですかい？ 御神本の坊っちゃんがそんな事しなくてもいいですよ、後でオレ達がついでにやりますよ、綺麗に部屋の四方に貼るには、簡単そうで技がいるんですよ」

愛想よく笑う職人。

「いや、その……なるべく自分でやらないとなかなか予算が潤沢でないもんで」

幸四郎は素直に白状したが、

「何をみずくさい、その辺りは高音さんと話して、いくらでも相談に乗ります、工事を請け負って、壁紙貼りを坊っちゃんにやらせたとあっては、先代に受けた恩を仇で返す事になっちまう、坊っちゃんの一国一城なんですから、ドカツと構えていて下さい」

職人は笑顔ながらも引かない。

「……でも」

やはり自分でも何かをしないと、という思いが口から出かけるが……

「相良さん、では壁紙の方も宜しくお願いします、追加料金の方は、また相談させてください」

幸四郎の言葉を遮るように背後から声が聞こえる。　高音であった。

相良さがらと呼ばれて職人は、

「これは高音さん、任せてください、坊ちゃんもそういう事で！」

と、高音と幸四郎に笑顔を見せて現場を出ていく。

「坊っちゃんもお昼でしょう？　お弁当を買ってきましたよ」

高音は何かの弁当の入ったビニールを持ち上げ、幸四郎に笑いかけってきた。

高音の買ってきたのは、近くの弁当屋のしょうが焼き弁当。

工事途中の廊下部分にシートを敷いて、そこに座っての昼食だ。

「はい、坊っちゃん、お茶ですよ」

「ありがとうございます、でもいいんですか？」

「何がです？」

ペットボトルからお茶を紙コップに注がれながら、幸四郎が訊くと、首をかしげる高音。

「いや……壁紙貼りくらいは自分達でやらないといけないかな……と」

「お客様をお迎えする場所なんですからプロにお任せしましょう、

それに彼等は坊っちゃんを少しでも助けたいんですよ」

「俺を？」

「そうです、彼等は会長には大変世話になってるんですよ、それで坊っちゃんに肩入れしてるんです、恩を返したいんですよ」

「なるほど……」

複雑な表情で、しょうが焼きを口に入れる幸四郎、高音は少し笑い、

「親の恩に報いようとする人の親切を受けるのはお嫌ですか？」

と、訊く。

「そうかもしれませんね」

ため息をついて答えた幸四郎に高音は言った。

「生意気です」

「……ですよね」

幸四郎は素直にそれを認めざる得なかった。

職人達が昼から戻ると、幸四郎は高音と一階部分のレイアウトなどを確認する、まだまだ内装なども全くの状態だが、どこに何を置くかの完成したイメージを打合せるのは重要だ。

「舞台横の壁が気になりますよね」

「なるほど……何か大きな絵でも飾りますか？」

高音とそんな話を話していると……

「幸ちゃん、お帰りなさい、やっぱり帰ってたんだね！」

不意に元気な声が響いて、背中に感じる衝撃と柔らかな感触。

「……く、くるみ!？」

驚きながら幸四郎が振り返ると、ニッコリ笑う少女が抱きついてきていたのであった。

「えへへ……お久しぶりだね、幸ちゃん！」

少女は顔を上げてくる。

知らない顔ではない、彼女は幼い頃から一緒に界限を走り回った、幼なじみであった。

いりき
入来くるみ。

年齢は19歳。

切りそろえた前髪、短めのツインテール。

童顔で丸めの瞳、鼻筋から唇ともに特に高いとか薄いとかはないが、可愛いらしく整っている。

身長は160?に届かないくらいだ。

「幸ちゃんが帰ってきたのを教えてもらって、飛んできたんだよね」

「そうか……そう言えばお前に連絡しておかなかったのは良くなかったな、スマンスマン」

頬を餌を頬張るハムスターの様に膨らませたくるみに謝りながら、ポンポンと頭を叩く。

「おそらく坊っちゃんの事ですから、新規店舗で頭が一杯で、くるみさんには伝えていないと思いますして私が昨日、電話しました」

「ありがとね、高音さん」

頭を下げる高音に、くるみは礼を言って笑う。

幼なじみのくるみと昔から家にいた高音は、もちろん知り合いで、どれくらいの頻度かはわからないが、連絡を取り合っているのだらう。

「坊っちゃんもくるみさんには、どれくらいご無沙汰でしたか？」
「そうだな……家を出てから会ってないから、二年だよ、あんまり変わってないけどな」

高音に訊かれたのでくるみを見ながら答える幸四郎だが、少し視線が止まってしまう。

「あんまり……かわってない……けど」

反芻した言葉の後半が疑問型になりかけてしまう。

「ん……!？」

首をかしげるくるみ。

「まあ、少しは大人っぽい印象にはなったかもしれないな、もう二十歳になるんだから当然だ」

幸四郎は早口になりながら、くるみの髪をくしゃくしゃと掻く。

「てへへへ……」

小学生の頃と変わらない笑顔。

だが、それを向けられた幸四郎は……

『くるみの奴って、こんなにプロポーション良かったか？ 特に胸なんか……昔から小さくはなかったし、あるとは思っていたけど』

などと、思いながら赤面を必死に我慢する自分に気付いてしまう。

「ふふふっ……」

高音が笑った。

「どうしたの？　いきなり笑ったりしてさ」

くるみは目をパチクリさせるが、幸四郎は高音には何か見透かされた様な気がして、顔をしかめたのだった。

3

それから工事は着々と進んでいき、内装なども形になってきていた。

一階はホールに舞台、厨房に支配人室と事務所があり、二階、三階にはそれぞれの女の子の部屋だ。

最上階の四階は今は区割りもされていない空白階で屋上に続いている。

「形としては一階でお客様に女の子と部屋で過ごす権利を競り落として頂き……二階の女の子の部屋に行ってもらおう」

「そういう事」

一階の事務室。

高音の確認に頷く幸四郎は、

「部屋で、どう過ごすかなんて事は女の子とお客様の個人的な事、

女の子への時給はオークション参加の報酬、そして時給の他に、女の子にはオークションの値段の四割を支給する」

と、続ける。

「時給は風俗店からみればすこし安いですが、オークションの値段が上がれば、女の子の取り分が増える、いわゆる歩合制ですか」

「うん、女の子の評判が良くなれば、店の評判も良くなると思う」

「……わかりました、それで決定しましょう」

少しの沈黙の後で高音は頷く、彼女の的には意見があるのだろうが、父親の幸四郎の好きにやらせるようにという言い付けを守っているのだろう。

「問題は女の子の質です、かなり見かけでハイレベルな女の子を揃える必要がありますし、お部屋でのやりとりは素人の娘ではどうにもならないでしょう」

そう問題を提起する高音に、

「ルックスは、まあ可愛い娘が募集に来てくれるのを祈るしかありません、けどお部屋でのやりとりは、逆に素人さんの方が人気が出る確率も高いかも……そういう所もあるでしょう？」

そう幸四郎が答えると、

「くるみさんみたいな女の子ですか？ 会わない間に凄く色っぽく成長したでしょ？ 坊っちゃん、目線が泳いでましたよ」

と、突っ込まれてしまい、返す言葉がなかった。

それから一週間が経過し、御神本幸四郎がオーナーを務める、御神本グループ最後の砦ともいえる店舗が完成する。

その名は……「プリンセスオークション」と名付けられていた。

第3話に続く

第3話「スカウト！」

1

「ここからが問題なんですけどね……」

高音は外観は完成して、後は内装の一部と必要な物を運び入れるだけとなった店舗を見上げる。

「そうですね、ここまでは誰でも出来ますからね、要はここから……先ずは人をどうにかしないと、働いてくれる女の子ですね」
「その通りです」

高音は眼鏡を中指で直しながら、

「募集広告は任せて下さい、昔からの知り合いがいますから……あとはこの街で働きたい女の子向けの紹介所も在るので、そちらにも当たりますよ」

と、答える。

「紹介所！？ そんなのあるんですか？」

驚く幸四郎。

「ありますよ、言わば風俗のハローワークとでも言えば良いのでしょうか、大不況ですからね、様々な場所から、右も左も判別のつかない女の子が来ます、そういう娘が、かなりの確率で訪れますよ」

「へえ、知りませんでしたよ、風俗のハローワークがねえ」

高音の説明に幸四郎は妙に感心し、

「なるほど……」

腕を組んで見せてから、少し考えて顔を上げて高音を見つめ、

「高音さんはこの界限では顔が広そうですね？ やっぱりもしかしたら、そのハローワークにも知り合いが居たりします？」

と、訊いたのであった。

2

「へえ、外から見ても普通のハローワークの事務所みたい、中も広くは無いけど、ちゃんと検索用のパソコンまであるし……」

「あくまでもみたいです、ここは国の補助を受けてますが、新大空町の風俗営業店組合がやってるんです、あまりキョロキョロしないでくださいね」

声を上げる幸四郎は高音は注意した。

新大空町駅から徒歩数分の所にその建物はあった、新大空町風俗営業店協会雇用相談所という長い正式名のその場所は、鉄筋二階建

のまさに新大空町風俗店のハローワークだ。

何人かの紹介所職員が、一人ずつ女性達と面談しながら、仕事を探している姿は見た目は何も普通のハローワークと違いがない。

ただ単に言えば、探している側が女性ばかりなのが特徴である。

「この街はホスト系の店は殆ど無いですからね、裏方の男性の募集は広告で済んでしまうので、ここは女の子ばかり、だから坊っちゃんが目立ってます」

「別に悪い事している訳じゃ無いですからね、目立つ分にはいいですよ」

幸四郎はあまり気にしていない様に笑いながらも、真剣な眼差しで事務所内を見渡す。

「坊っちゃん！？　ここでどうなさるんですか？　別に来るだけならば、知り合いの職員の方にわざわざ知らせる必要はなかったと思いますけど……」

高音が訊くと、事務所内の女の子を一人ずつ見るような視線は外さずに、

「いえ、募集はかけていても待ってるだけじゃ、店に必要な女の子なんて揃わないと思っちゃってね、ここで1日見てて、気に入った娘をスカウトしちゃおうかと……わざわざ職員の人に断りを入れたのは、目立つ男が一日中、事務所を眺めていたら怪しすぎるからですよ」

と、答えた。

「ここでスカウトですか！？ 見た目だけで？」

「そうです、でもこの街で働く意志があって、第一印象を観てから、様子や仕草を観察して、さらにその中から選んで自由に話を出来る環境なんて中々無いですからね……始めは見た目で十分です」

そう腕を組む幸四郎。

真剣な横顔。

高音はそれを見て思わず息を呑む。

『坊っちゃん……いや、この御神本幸四郎という青年はもしかしたら……もしかするかもしれない』

幸四郎は別段、凄い事を思い付き、行動している訳ではない。だが、身体は久しぶりの感覚に捉われる。

『この緊張感、まるで健在な時の会長に従っている時のような……』

高音は僅かに身体を震わせた。

「よし、あの娘だ」

30分ほど事務所全体を隅から高音と観ていた幸四郎は呟き、一人の女の子に歩きだす。

検索用のパソコンの前に座っている、黒髪の首が隠れる位のショートカットの女の子である。

「ちよつとごめんね？」

「は……は、はいっ？」

幸四郎に話しかけられると、その女の子は少し驚いた様に振り返った。

白いトレーナーにジーパン姿、足元には大きなスポーツバック。
柔らかな曲線の綺麗な輪郭、パツチリした可愛らしい瞳が印象的な娘だ。

「さっきから検索用のパソコンに苦戦しているみたいだけどさ……」
「は、はい……パソコンとかって、苦手なんです、使い方がわかんなくって」

笑いかける幸四郎に苦笑を返す娘。

「そうなんだ？ この街で仕事を探すの初めてかな？ 俺はこの街で店を新しく開く者なんだけど、良ければ、そこで少し話を聞かせてもらえない？ この街で働く意志があるなら、ちよつと俺、君の第一印象が気に入っちゃって」

そう言つて幸四郎は、事務所の壁ぎわに並んだ椅子を指差した。

「^{さくら}崎原みなみ、ちゃんかあ、なんだか可愛い名前だね？」

「あ……ありがとうございます」

椅子に座っている先程、声をかけた女の子、崎原みなみは、幸四郎にそう言われながら差し出されたカップのコーヒーを緊張気味に受け取る。

「ルックスは垢抜けてない感じが可愛いですね、都会っ子な感じがしないのがかえっていいです」

高音が微笑を見せると、

「い、田舎から出て来てますんで……」

みなみはそう答えてからコーヒーに口をつける。

「さっき言った様に、俺は新しく開く店の女の子をスカウトしに、ここに直接来てたんだよ」

「それで……私に!?! でも周りには、私よりもずっと綺麗な女の子もたくさんいるけど」

戸惑いを隠さないみなみに、幸四郎は首を振る。

「いやいや、この中でもみなみちゃんはトップクラスの可愛さだと思っうよ、だから俺は声をかけたんだからね」

「そ、そんな事を言って……田舎から出て来て、パソコンも使えない、ケータイも持っていない私を騙そうとしているんじゃない……」

みなみはスポーツバックを抱える様にして、幸四郎と高音を交互に見る。

「まあ、警戒するのも当然ですが……この街はお上の管理がしっかりしているので、女の子を騙す様な事は出来ませんよ、もし疑われるなら、坊っちゃんの免許証でも見せてもらってからでも、その職員さんに名前を訊いてみてみたらどうですか？」

高音が笑いながら肩を竦めると、

「わかった……じゃあ、免許証見せて下さい」

みなみは幸四郎にジッと視線を向けてきたので、

「うん、いいよ」

と、財布から免許証を抜き取り、みなみに見せる。

「み、みかみも……みかみもとみゆき、しろ」

「みかもと……みかもとこうしろうだよ、もし何だったら、職員さんに頼んでパソコンで検索してもらえれば、まだ開いてないけどちゃんと、認可済みの店舗がこの街にあるのもわかると思うよ」

「わ、わかった」

身分を疑われたが、気持ちにはよく分かる、幸四郎が笑顔で言うところ、みなみはうんうんと頷き、近くの職員の座る対面式のカウンター席の走っていく。

「田舎の娘ですね、でもルックスもプロポーションも良いですよ、磨けば、垢抜けて人気が出そうです」

席に座り職員と話す、後ろ姿に呟く高音に、

「いやあ、あの娘は垢抜けない可愛らしさが良いかもしれませんよ、そういう所が気に入ったので……」

と、幸四郎は頭を掻く。

「坊っちゃんはそのような娘が好みですか？」

ジロと視線を送る高音。

だが、幸四郎は首を振りながら答える。

「個人的にも好きだけど、お店の事ですからね、綺麗でも似たようなタイプの美人ばかりいてもしょうがないから、先ずは第一印象でいろんなタイプに声をかけてみますよ……でも、その後はある事だけは、気にする様にしてね」

「ある事？ それは何ですか！？」

「簡単な事です、お客様は二人だけで、その娘と部屋で過ごす権利をお金を出して競り落とす訳じゃないですか？ だから一緒に過ごして楽しそうな娘、優しそうな娘、思いやりがありそうな娘を誘いたいです」

その幸四郎の返事に高音は、

「滅茶苦茶に難しい事を簡単に言う所も会長にそっくりですよ……」

と、ため息をつく。

視線の先には、職員に確認を終えた、みなみが笑顔で走り寄ってきていた。

第4話に続く

第4話「面接！」

1

「案外広い、私はもっと風俗の店って狭くて暗いイメージがあったから……」

崎原みなみが、ホールと舞台のある、一階を見ながら口を開けると、

「わ、私もですう、舞台に上がって、お客様に見てもらうのかな？」

みなみの隣でもう一人の女の子が緊張した表情で、舞台を見た。

いかるが
れいん
斑鳩恋音。

ほわっとした感じの肩にかかるくらいの、わずかに茶色い髪。レベルの高い可愛らしさの童顔。

背も162?のみなみよりも10?は低く、プロポーションが良
い、みなみに対して幼児体型。彼女もみなみをスカウトした数時
間後、事務所の業務終了時間直前に幸四郎が声をかけた娘だった。

恋音の童顔は可愛らしさとしては、まったく問題ないのだが、就
業年齢に達しているか、幸四郎としては不安を覚えた程だ。

「二人とも……まずは面接しましょう」

高音が事務室に向かって歩きだしたので、

「そうだな、まずは色々と話してからだな……じゃあ、行こうか？」

みなみと恋音を促し、幸四郎も高音に続いた。

事務室は広くはないが、応接用のテーブルとソファがあり、恋音とみなみが並び、テーブルを挟んで高音と幸四郎が対面する。

「まずは、二人とも身分を証明できる物を提示して頂きます、あと履歴書も一緒をお願いします」

「はい」

高音の求めにみなみは大きなスポーツバッグから、恋音は小さなピンクのバックから、履歴書とみなみは車の、恋音は原付バイクの免許証を出した。

「坊っちゃんもよく確認をお願いします」

高音に言われ、幸四郎も履歴書と免許証をみなみ、恋音ともによく確認する。

就業年齢に達していない女の子を雇ってなどいたら、小細工は通用しない、二度と新大空町で店を開くのは不可能となってしまう。

「同じ歳には……」

履歴書を見てから二人を比べ、呟く高音。

「はははは……」

みなみと恋音はお互いを見合い、苦笑し合う、みなみは年相応だが、恋音が幼すぎるのだ。

「まあ、そういう需要はかなり見込めます……問題は二人とも年齢からして、風俗で働いた経験は、なさそうですね？」
「すいません、ないです」

高音の言葉に恋音はペコペコと頭を下げ、みなみの方は、

「んー、まあ……ないよね？ 田舎だったし」

と、頬を掻く。

「男性の方の経験はどのくらいですか？」

「高音さん!？」

続けての高音の直球ストレートな質問に、幸四郎は声を上げる。

「参考までにです、我々の店には決まったサービスはありませんからね、あくまでも参考です、答えてくれなくてもいいです」

高音が、そう前置きしてから二人を見ると、

「だ、大丈夫ですっ……慣れてるとか、どうだかは解らないですけど」

恋音は頬を赤らめ、

「まったく無ければ、こういう仕事ってなかなか選べないと思う」

みなみは、少し不機嫌そうに上目遣いで答えた。

「なるほど……わかりました、プリンセスオークションでは、お客様はあなた方と二時間過ごす権利を競り落とします、そのお客様を満足させてあげられたら良いんですよ」

「あのおく、じゃあ……部屋では何を」

高音の言葉に迷いを見せる恋音。

「何でもどうぞ？ 逆に何もしなくてもいいですよ、一緒に二時間過ごせば、基本的には問題無しです、もしお客様の期待に添えなくても一度、競り落としたお金は戻せませんし……」

高音は微笑む。

「でも、お客様を満足させられない事を続けたら、恋音ちゃんの人気が無くなって、オークションされる金額が安くなっちゃう、そして結局は恋音ちゃんが貰える金額が少なくなるよね」

みなみは呟いた。

「……お客様を満足させて帰らせてあげる」

揃えた膝に置いた手をギュッと握る恋音。

「恋音ちゃん、そう考える事ないよ……どんな事を君に求めているかは、お客様ごとに違う、君の優しさでそれを感じ取って上げたら良いんだよ、マニュアルなんてないから、難しい事は確かなんだけど、逆に幾らで何だ、とかいうサービスじゃ君達の良さが消えちゃう気がする」

幸四郎が、不安そうな恋音に微笑むと、

「あ、ありがとうございます！ 精一杯がんばらせてもらいますっ」

恋音は顔を上げて、健気な笑顔を返し、

「色々と頑張らなくちゃいけないね！」

みなみも、グッと両手を握り締めた。

『二人とも可愛いなあ……何の苦勞があって、この街で働く事にしたのかはわからないし、訊かないのがこの世界の礼儀って物だけど、俺自身も頑張って彼女達を盛り立てる様になりたいよな』

思う幸四郎。

「じゃあ、二人とも……もしよろしければですが、殿方を悦ばせる初歩的な幾らかの技を教えてあげられますが……どうします？」

いきなり高音が二人にそう切り出す。

「な……技!？」

声を上げる幸四郎だが、高音はそれをまったく気にしない様子で、恋音とみなみに笑みを見せる。

「いえ、強制はしませんし識らなくても良いかもしれませんが、でも識っておいて損は無いかもしれない、男性諸君が大好きな技の事ですよ」

「こ、言葉をオブラートに包むのはな、何かと大変なんですね」

高音に恋音はアハハハと苦笑いした後、

「ぜ、是非お願いします! お客様を悦ばせる技なら識っておきたいですっ」

と、赤面しながらも頭を下げ、

「うん……識っておかないと困るもんね」

みなみも意を決した様に頷いたのだった。

『まあ、まったくの素人って、訳にもいかないか』

声を上げた幸四郎自身も二人を見ながら、そんな事を思っている
と、

「坊っちゃん」

幸四郎を呼ぶ高音。

「どうしました?」

「さっそく二人一度に二階の部屋で始めますから、一緒に来て下さい」

高音はそう告げると、スタスタと二階への階段を上がり始めたので、

「あの……俺がついていったら経験があまりない二人は緊張しちゃうから」

と、幸四郎としては氣を使った台詞を返す。

だが、高音は眉をしかめて、こう言ったのである。

「はあ? 坊っちゃんがいなければ始まりませんよ、男性を悦ばせるテクニクの実践練習を女三人でどうしろと!? 坊っちゃんが練習台に決まってるじゃないですか? 頑張ってもらいますからね」

第5話に続く

第5話「呆れた笑顔」

1

「坊っちゃん……起きていますか？　どうです？　満足いただけましたか？」

「あ……は、いつ……まあ、す……ごく」

幸四郎は、朦朧としかけた意識の中で、聞こえてくる高音の問いかけに情けない返事をした。

「そのようでしたね」

腕を組み、幸四郎を見下ろす高音の視線。

「あ、あの二人は？」

「あれだけやれば二人とも、坊っちゃん同様にお疲れです、横を見る余裕ありませんか？」

「えっ!？」

横をみると、そこにはみなみと恋音が、仲良くシートにくるまり、スヤスヤと寝息をたてていた。

「坊っちゃんがスツカリ果てた後で、お二人でお風呂に入ってたよ」

「そ、そうですか……」

みなみも恋音も下着姿である。

「二人とも可愛かったでしょう？ みなみさんはあんまり場馴れしてない感じがかえって良かったですし、案外、恋音ちゃんが積極的で巧かったのもいいんじゃないですか？」

「……二人とも凄く可愛かったし、高音さんの言う通りです、正直言って役得とか思いながら、本当に心地よく二人の実験台になっていました……少しだけ納得のいかない点が」

仰向けになりながら、見下ろしてくる高音に苦笑する幸四郎。

「納得のいかない！？ それは気になります、後々の参考までに聞かせてもらえますか？」

意外そうに首を傾げる高音に、

「いや、高音さんはずっと部屋の隅で腕を組みながら、二人に色々と指導をして観てただけでしょ？ それが気になって……いっその事、手本を見せながら、してくれた方が……」

そう幸四郎が答えると、高音はあっという間に耳まで真っ赤にして、

「ち、調子に乗るんじゃないやしませんっ！ もう今日は家にかえりなさいっ！」

と、踵を返して部屋を出ていったのだった。

「あら……高音さんも何と言うか、よいしょ」

幸四郎は苦笑して見送り、倦怠感を振り切り上半身を起こす。

「んんっ……」

「んっ」

下着姿でシートにくるまる、みなみと恋音。

幸四郎と高音のやり取りで、少しだけ目を覚ました様だが、お互いに猫の様な可愛いらしい声を上げると、また眠り続けている。

『本当に可愛いよね』

幸四郎は肩を竦めて微笑み、自分にかかっていたシートを二人にかけると、周りに脱ぎ散らかされた衣服の中から自分の物を探し出してそれを着た。

2

「二人とも店にまだ居るんですか？」

「ええ……まあ、高音さんが出ていった後、起きた二人にタクシーでも呼ぼうか、って話をしたらどうやら二人とも、これから泊まるところを探さないといけないって話をしてきたから、それなら、いっそ店で寝ていっちゃいな、って話したんです……二人とも、あんまりお金を持ってないらしくて……」

翌日の昼。

新大空町の商店街を歩く高音と幸四郎。

「まったく……もしかしたら例の練習の続き、なんてしていないで
しょうね？」

高音は細目になるが、

「しようにも、出来ない状態だったのは高音さんも知ってるでしょ？」

幸四郎は眉をしかめて答える。

「フフッ、そうでした」

高音はクスツと、意味深な笑いを見せると、商店街のパン屋に足を向けた。

「お昼ですか？」

幸四郎が訊くと、

「それもありますが、まあ、ついてきてください」

高音は先に店内に入っていく。

店内は広くはないが、小綺麗だった。
手書きの値札の付いたトレイに、種類ごとのパンが乗せられている。

かなりの種類だ。

「高音ちゃん、いらっしやい！」

小太りで愛嬌のある感じの中年女性が笑顔を向けてくる。

「どうも、ヨーグルトパンはまだありますか？」

「あと二つ！」

高音が訊くと、中年女性は指でVサイン。

「では二つとも頂きます」

満足気な笑顔で、高音は入口近くのトレイを手取る。

そして、

「お婆様、こちらは幸四郎坊っちゃんです、新しく近くで、また店をするので宜しくお願いします」

と、中年女性に幸四郎を紹介する。

「おやまあ……懐かしいね、坊っちゃんも昔は高音ちゃんに連れられて、よくうちに来ていたんだよ」

「覚えてます」

中年女性に、幸四郎は愛想笑いを浮かべる。

覚えていると言っても、言われてみて、そう言えばそんな記憶も頭の片隅にあるぞ、という程度。

幸四郎は長年、この街に住んでいたが、風俗街と呼ばれる街と父親が街の有力者で、歩けば注目されてしまうという状態を小学校の高学年の辺りで嫌い始め、遊びに行くのも、買い物に行くのも、大きな隣街に出かけていたので商店街などは殆ど記憶がなかった。

「高音さん、良かったねえ、会長さんが具合が悪くなった、と聞いた時には本当に心配になったけど、これで安泰だよ！」

中年女性は嬉しそうに言いながら、重い腰を上げ、トレイを取って、

「坊っちゃんが久方ぶりに帰ってきた祝いだ！　うちのパンをたくさん食べてもらおうよ！」

と、豪快に笑った。

「たくさん貰えたのは良いですけど、あのおばさんに気を使わせちゃった気がして……」

紙袋一杯の様々なパンを抱えて歩く幸四郎。

「美味しいですよ、それにあの二人にあげれば喜びます、お金がないなら、尚更でしょう？」

「そりゃそうですね、何だか気が引けます、俺はハッキリ言えば、高音さんに連れられて行った事もほ

とんど覚えてません、それなのにこんなに貰って」

「良いでしょ!？ 別に催促した訳じゃありませんしね」

好物らしいヨーグルトパンが入った紙袋を持ち、高音はフフツと笑う。

「俺が何をしたらじゃありませんよね!？ 親父が街の人に何か色々としてあげていたからでしょ」

「嫌ですか？」

「前にも言いましたが……俺としては……」

「前にも言いましたが、生意気です」

高音の鋭い口調が幸四郎を遮る。

「高音さん……」

「坊っちゃん、それを言うなら店を立派に盛りたててからです、この街で会長の息子以上にならなくては、それに……」

「それに!？」

言葉に間が空く、高音は軽く息をつき、

「会長がここまでこの街で頑張ってこられたのは必ずしも、街の人や自らの為だけではないのかもしれないのですからね」

と、見つめてくる。

「……微妙ですが、反論できません」

そんな答えしか出来なかった幸四郎に、高音は口元を少しだけ緩め、呆れた様にも取れる笑顔を見せたのであった。

第6話に続く

第6話「百合乃の事情・前編」

1

「嘘でしょう!？」

「ですよね!？」

高音と幸四郎はそう言って、顔を見合せてから、応接用のソファ
ーで苦笑する女性を見つめた。

彼女の名前は、織田^{おだ}百合乃^{ゆりの}。

腰の辺りまで伸ばし、そこでリボンで留められた黒髪と首筋の横
できつちりと切り揃えられた両方のもみあげがまるで、温室育ちの
お嬢様か神社の巫女か、といった感じた。

みなみや恋音とは異なり、幼くは見えないが可愛らしさを残しな
がらも、大人の女の綺麗さのある顔立ち。

身長は百六十?の半ばくらいで、女性らしいふくよかな体付き、
異性を引き付けてきたであろう、ボリユームのある胸元。

言ってしまうえば、キレイで可愛いお嬢様。

「すごい美人ですね」

「そうだね、なんで女優にならないの? グラビアアイドルでも良
いじゃないのよ!」

そんな不満を言いながら、許可もなく事務所を覗き込んでくる恋
音とみなみがいるのは承知だが、履歴書と免許証を持った幸四郎と
高音は、それを注意する方に気が回らない程に驚いている。

「何をあんなに二人は驚いてるんですかね？」

「胸がおつきすぎるとか、じゃないよね？」

あんまり覗いているのも高音に怒られそうなので、みなみと恋音はホールに出て話す。

店舗内は大体のレイアウトも終えていて、やる気になればすぐにも営業できそうだ。

ホールには幾つかテーブルが置かれていて、まるで立食パーティーの会場を思わせる。

舞台がホールの中央まで細く伸びているのは、ファッションショーの様でよくあるキャットウォークと呼ばれる部分だ。

「でも何があるにしても、あれだけの美人さんなら採用ですよね？ 私なんかでもよかったんだから……でも私、本当にやっていけるか不安ですう」

恋音は自信無げな苦笑を浮かべながら、肩にかかる髪を指ですいた、ストレートに下ろしているのではなく、ほわっとさせた少し茶がかった髪。

「もう……恋音ちゃんも凄く可愛いってば！ 自身持ちなよ、やると決めたんだからさ！」

舞台に腰を下ろして、みなみは笑いかける。

「それに恋音ちゃんは、男子を悦ばせる技も凄かったじゃない、オーナーもすっかり立場忘れて男の子になっちゃって声を上げてたも

ん！ きつと売れっ子間違いなしだって」

「みなみさん！ そ、そんな事、言っちゃだめですよ……ほ、本来は人前でするような事じゃないんですからあ！」

恋音が顔面を真っ赤にして首を振ると、

「失礼します」

事務室から先程まで面接を受けていた織田百合乃がバックを肩から下げ、二人にペコリと会釈をしながら通り過ぎていく。

「こんにちわ」

二人も頭を下げて答えると、百合乃は少しはかなげな笑顔を見せて、出口のドアに歩いていく。

「ち、ちょっと待ってください！」

呼び止めるみなみ。

「はい？」

百合乃は振り返る。

「もちろん、採用されたんですよね？」

みなみが訊くと、百合乃は首をかしげ、

「うーん、どうなんでしょうか？ お返事を待つ事になりましたけど……無理みたいな感じですが、やっぱり難しいのかなあ、じゃ」

と、ため息をついてから、また会釈をして歩き出す。

本人の手応えはかなり悪いのだろう。

やや俯き加減の百合乃が出ていき、パタンと閉じるドア。

「あんな美人なのに不採用なの！？」

恋音とみなみは見合い、声を合わせた。

幸四郎と高音は、まだ事務室から出て来ない。

「訊いてみましょうか？」

「無理じゃない！？ あのお堅い高音さんが採用するにもしないにも、そういうの答えてくれるとは思えないけど」

事務所のドアを指差す恋音に、みなみは首を振る。

「ですよね……でもさっきの人、不採用だったらかわいそうですね」

「そうだね……店はとにかく女の子が居なくちゃ始まらないし、始まらなくちゃ私達もお金を稼げないんだからね、やっぱり訊いてみようか！」

不安げな恋音に、みなみはそう言って事務室のドアをノックする。

「みなみちゃん、どうしたの!？」

ドアを開けると、幸四郎が顔を上げて見てくる。

高音と並んで応接ソファに座っているのは、さっきまで面接をしていたからだ、他にも面接や紹介所からの応募があった様子で何枚かの履歴書等が机の上には乗っていた。

「あのさ、さっきまで面接していたあの人さ、凄い美人で可愛くてプロポーションも凄かったでしょ? もちろん採用だよね!？」

みなみが切り出すと、

「答えられませんね」

冷たく即答したのは高音であった。
顔も上げずに書類を見ながらである。

「なっ……別に高音さんには訊いてないんだけど?」

ムツと、目を細めるみなみ。

「あなたの立場から人事についてオーナーに気やすく尋ねる権利なんてあると思ってますか!？」

高音はやっと顔を上げ、一瞥した。

「いや、みなみちゃんに高音さん、一緒に働く仲間なんだしさ、実はすぐに採用したいのは山々なんだけど引っ掛かる部分が……」

「坊っちゃん！」

雰囲気の雲行きを案じた幸四郎がそこまで答えかけたが、それを高音が一喝に近い調子で名前を呼び制した後で、

「まだ採用もしていない人の情報を店の女の子に話すなんて軽率です！」

と、幸四郎を睨む。

「そ、それもそうだ、と言う訳だからさ、みなみちゃん、悪いけどまだあの人については話せないよ」

「な……私はただ採用になるか気になっただけで、なれば仲間になるんだからさ、と思ったただけのに！」

高音に圧された形で、苦笑して後ろ頭を掻く幸四郎を、みなみは睨み付けて、事務所のドアを強く閉めたのだった。

2

「なに！？ オーナーの癖に秘書に怒鳴られてんじゃないわよ！」

「……うーん、高音さんが実質的な仕切りをしますからね」

不愉快そうな声を上げるみなみと、返答できない幸四郎の心中を

察した様な複雑な笑みを見せる恋音。

二人は昼食をとる為、店を出て商店街を歩いていた、風俗街として栄える新大空町では夜には働く女の子や客を目当てに朝までやっている飲食店が結構開いているが、その分昼間に営業している店が少ない。

「またハンバーガーにしようか？ 恋音ちゃん大好きだもんね」

「はい、大好きですっ！ ハンバーガーでいきましょう！」

怒りはひとまず抑えて、昼食を提案したみなみに恋音は嬉しそうに頷いた。

「ハンバーガー三個に照り焼きバーガー三個、タマゴバーガー三個にビッグバーガー二個、そしてコーラの一番大きなサイズを二つ下さい！」

「か、かしこまりました、少々お待ちください」

普段の控え目な美少女の殻を躊躇なく突き破り、怒濤の注文をする恋音、店員は明らかに一瞬引いた表情を見せてから番号札を差し出した。

「人が変わるわね」

ハンバーガーセットを乗せたトレイを持ってみなみは二階に上がる。

店の自分専用の部屋に転がり込んで三日。

すでに初日で恋音の異常な大食いは思い知っているのだ、まさか厨房を借りて料理までするのは抵抗を覚えた、みなみが近くのコンビニに行くと、弁当類が棚から消え去っていた。

時間が悪かったかと思い、カップヌードルを買って店に戻り、恋音と一緒に食事をしようと部屋を尋ね、たくさん積まれた弁当を平らげる彼女を見て、その理由を知ったのである。

それからは色々と話しながら、一緒に昼と夜は食べているが、彼女の食欲には驚くや呆れるを通り越して、何か畏敬の念すら覚えはじめていた。

「いただきます!」

山ほどに積まれたハンバーガーは非常に目立ち、注目され、普段の彼女の性格ならオドオドしそうな物だが、食が絡むと大胆になれるようで、嬉しそうに手を合わせると一つずつモクモクと可愛らしい素振りで食べていく。

食べるスピードは早くない、普通の女の子のペースであるが、それが永久機関の如く、いつまでも続くのである。

「ポテトは? この間もポテトは頼んでなかったわよね?」

さしたる興味が沸いた訳ではないが、ふと気づいたので訊くと、

「ポテトはたくさん食べると胸やけしちゃいますね」

恋音は答えて笑う。

「そんだけ食べりゃ、何を食べても胸やけすると思うけどね……別に誰の迷惑でもないから止めないけど、太らないのは本当にうらやましいよ」

ため息まじりで、みなみは首を振った。

「でも……あの人、やっぱり採用されないんですかね？　どうしてなんでしょうね!？」

みなみがハンバーガーセットを片付けた頃に、恋音はやっと三個目になる照り焼きバーガーをモフモフと食べながら呟く。

「わかんない、条件で揉めたかと……って、タイプにも見えないしねえ」

セットのスプライトの容器から抜いたストローをくわえてピョコピョコ動かし、みなみは外を見ながら頬杖をつく。

「ご、ごめんなさい、早く食べちゃいますからっ、スイマセン、スイマセン」

「気にしないでよ、どうせ仕事が始まるまではお互いに暇なんだしね、せかしてなんかかないよ」

頭を下げながらもハンバーガーを離さない恋音、みなみはそのままの姿勢で答えた。

「何だかみなみさんが退屈になっちゃってますう、どれか食べます！？」

「平気だって……第一、食べらんないし、ここから外を觀てるのも面白いのよ」

みなみは笑った。

「田舎じゃあね、こんなに客觀的にたくさんの知らない人が歩いてるのを、ゆったりと眺めていた事なんてなかったからさ」

「どういう事ですか？」

恋音はそう訊き、ビッグバーガーにハムツと噛み付いた。

「田舎はみんな知り合い、ジッと觀てれば向こうから氣がついて寄ってくるし、たくさん集まった時は何かしら自分にもやらなきゃいけない役目があつて、とても客觀的にみんなを觀るなんて出来なかったしね」

「なるほど……都会は他人に無關心でいるのが面倒にならない、って感じですからね」

「そっか、無關心か……無關心が面倒にならないか」

恋音の答えにみなみは肩を竦めた。

「早く食べますね、でも早食いは苦手で友達に無理やりに出さされた女子大食い選手権でも、バツサリ予選で落ちたくらいですが」

「ホントにいいってば、楽しみなんですよ！？」 ゆっくりと食べな

……」

逆に恋音に気を使うようになってしまい、複雑な笑みを浮かべる
みなみの返事が途中で止まる。

「みなみさん!？」

可愛らしく子首を傾げる恋音。

「早く食べてっ!」

「へっ!？」

いきなりのみなみの言葉に、恋音はビクッと背筋を伸ばした。

「って、無理ね! でも買ったんだからお持ち帰りにしても文句は
ないわね、行くわよ恋音ちゃん」

みなみはまだ紙包みに包まれたハンバーガーを持って立ち上がる。

「ど、どうしたんですかぁ、せ……説明を……ごほ、うえゝ」

慌てて、咽喉にハンバーガーが詰まったのか、むせながらコーラ
をストローで必死に吸う恋音に、

「今、話していたあの女の人がいたような気がしたのよ、なんで採
用されないかを気にならない!？」 場合によってはオーナーに頼み
込めるかも」

と、みなみは告げたのである。

「そ、そうなんですか！？　でも追いかけてどうにかなるんですか？　オーナーも問題がある、って話していたじゃないですか、そっとしてあげた方が良いんじゃないですか？」

「そっとしてどうなるのよ、なるようにしかならないじゃないのよ」
「でも……」

「行くわよ」

躊躇する恋音だが、みなみはハンバーガーを持って歩き出してしまふ。

「ああっ……はい」

恋音はせめてジュースは飲みきろうとストローを吸ったが、それがまだかなり残っているのを見ると、

「これから仲間になってくれる人かもしれない……無関心ではないけませんよね、だからごめんなさいコーラさん！」

そう言って、残ったコーラの容器に手を合わせ、席を立ち上がったのだった。

第7話に続く

第7話「百合乃の事情・中編」

1

「おかしいなあ……確かにあの人だったんだよな」

ファーストフード店を駆け足で出て、みなみは周りを見渡すが、百合乃（みなみ達は名前すら知らないのだが）の姿は見当たらなかった。

新大空町駅前。

それほど大きくはないが、一応駅ビルもある駅だけに、なりに人通りもあり、見失った人間を見つけるのは容易ではない。

その上、田舎出身のみなみは人混みが慣れていないのである。

「えーっと……」

「あ……あの人じゃないですか!？」

迷うみなみよりも、先に百合乃の後ろ姿を見つけた恋音が指差す。かなり遠くだが、視力の良いみなみは、その後ろ姿の黒髪のロングヘアの先を結ぶ赤いリボンを確認できた。

「間違いないね、追いかけるわよ」

そう恋音に告げて、みなみは走り出した。

「はあっ、はあっ、ちえっ……どこかに入っちゃったかな？」

三十秒程全力で駆けつけた息の乱れを整え、みなみは表通りから一本入った道で立ち止まる。

「こっちに入っただけと思うんだけどなあ……」

周囲を見渡していると、

「はあ、はあ、はあ……いられ……ましたかあ？」

かなり遅れ、息たえだえで、恋音が追いついてくる。

「いないね、こっちの道だと思ったんだけどなあ、どこかに入ったのかなあ？」

首を振るみなみ。

「ふう……へえ……ど、どこかです、かあ？」

必死に息を整えつつ、周りを恋音は見回す。

そこはさすがは新大空町といった様子であった、表通りから一本入ればもう風俗店が目に入る。

「安心の大王チェーン!? 泡の天国大王!? ええっと、妄想コスプレ大王!? ロリッ娘大王? ニューハーフさん大王?」

恋音が疑問符をつけて周りの店の名前を読む。

「大王ばかり……なんなのここは!？」

「安心の大王チェーンって書いてありますから……やっぱり風俗のチェーン展開している店なんじゃないでしょうか？」

「ここがそうなんだ、まったくコンビニじゃあるまいし……」

みなみが声を上げると、

「君達、ちょっと可愛過ぎないかあ!？」

背後から路地に響き渡るハイテンションな男の声が聞こえてきたのである。

みなみと恋音が振り返ると、そこにはノーネクタイでスーツを着た男がニタニタ笑って立っていた。

二十代半ばで髪を染めた三枚目風の男。

「なに!？ 忙しいんだから、詐欺とか騙しには乗らないけど」

みなみが目を細めると、男はオーバーアクションに手を振りながら、

「違うよ、君達みたいな可愛らしい娘がこんな界限を歩いてるからさ、てっきり職探しかと思ってね……俺はそこに見えるいくつかの店のスカウトマネージャー、大王チェーンって言って、この街で最大の風俗グループなんだよ」

と、立ち並ぶ風俗店を指差した。

「だ……いおう!？」

おそろおそろ返答する恋音に、男は自慢げに胸を張ってみせる。

「そう大王チェーン！　そこもそこも大王チェーンなんだぜ」
「でも……私達はもう、うぐぐつ」

そこまで返答しかけた恋音の口を塞ぐみなみ。

「ん、私達はもう？」

「なんでもないわよ、私達はもうこの街で働くしか道がなくて来たのよ!」

不思議がる男、みなみは恋音の口を抑えたまま、ごまかし笑いを浮かべた。

「おおっ、やっぱり！　君達みたいな女の子なら、すぐにまともに働くのが馬鹿らしいくらいに稼げるよ、可愛いつて財産だよね!」

男は嬉しそうに手を打って、

「だったら大王チェーン系列の店で稼ごうよ、君はロリッ娘、君はコスプレ」

と、勝手に店の振り分けまで始めた。

「ちょ、もう少し考えたいのよ、それに紹介所では大王チェーンなんて聞かなかったけどな？ 騙して変な事させるつもり？」

怪訝な表情をみなみが見せると、男は、

「紹介所！？ あんなのは大王チェーンに店の質で負けて、どうしようも無くなった三流店が集まって作った雑魚組合が何とか女の子を集めようと作ったのさ、あんな所の紹介で入ったら損するぜ」

と、せせら笑う。

「ま……とにかく考えさせてもらうわ、それよりも今髪が長くて先をリボンで束ねた女の人来なかった？ 胸が大きい綺麗な人」

「んー、いないなあ、今日は声をかけたのは君達ただけだぜ、選りすぐりの可愛い娘にしか声はかけないよ」

みなみが訊くと、男は首を振り、

「じゃ、その気になってくれたらここに来るか、この番号に電話しようだい、うちのグループでスカウトされて働けるなんて運がいいんだぜ」

と、言いながら男は名前と携帯番号の書かれた名刺をみなみと恋音に差し出していった。

「行っちゃいましたね」

あっという間に去っていった男を見送る恋音。

「ふん、他人を貶めて自分を持ち上げる様な話し方をする男なんてロクなもんじゃないわよ、一番聞きたかった事は知らなかったくせにさ！」

みなみは、不愉快そうな顔をして歩き出す。

「驚いちゃいました、話を聞き始めたからみなみさん、大王チェーソンの方にも興味があるのかと……」

「んな訳ないよ、この間、高音さんに聞いたんだ、詳しくは話してはもらえなかったけど、どうやらかなり強引な手口でこの街で手を広げているらしいよ、だから試しに話をしてみたんだよね」

「そうだったんですか、強引な手口ですか……風俗店街の組合にも登録してないのも、そういう背景があるのかもしれないですね」

まわりの大王チェーソンの店を不安げに見る恋音に、みなみは、

「まあいいわよ、あの女の人くらい美人でグラマーさんならあの男に声をかけられたかな？　とも思ってたから話をしてみたんだけど違ったわね、さあ、あの女の人を探しましょう」

と、更にもう一本奥に入った路地に歩き始めたのであった。

「あっ、みなみさん！」

それから三十分もウロウロとしたらどうか、二人があの人、織田百合乃を見つけたのは新大空町公園というかなり広めの緑地公園であった。

彼女は噴水の外周を囲う低いコンクリート塀に腰を下ろしていたのである。

「あの……」

「みなみさんっ！」

歩み寄ろうとするみなみを恋音が呼び止めた。

「なに！？　なに！？」

「いえ……オーナーも言っていた事情をいきなり訊くのはまずいかな、と思ひまして」

「どうして！？」

ここまで来て、といった顔をするみなみだが、

「いや、もしかしたら凄くあの人の人にコンプレックスになってる事だったりしたら、ほぼ初対面の私達の訊いていい事じゃないし、それにまだ面接の結果が出てないんですから……」

そう恋音に言われると、

「考えてみればそれもそうよね、無関心ではいたくないけど無節操も相手が困るか」

と、顎に手を当てて、数秒間考えると顔を上げた。

「じゃ、さり気なく会話して元気づけると、その中で相手が話してくれたりって感じで！」

「はい、それならいいと思います！」

みなみの提案に恋音は頷いた。

「こんにちは、さつき店に面接に来られていた方ですね」

みなみが話しかけると、百合乃はあっ、といった表情を見せ、

「こんにちは」

と、丁寧に頭を下げてくる。

「こ、こんにちは」

みなみと並んで緊張気味に挨拶しながら恋音は百合乃を見る。

『幾つか歳上みたいですけど、日本風お嬢様みたいで可愛いですう、それにみなみさんもプロポーション抜群に見えましたけど、この人は凄いです……いったい何カップなんでしょう』

恋音は思わず百合乃の胸元に注視してしまう。

「私は崎原みなみ、っていいます……こっちが」

「……………凄いですう」

「恋音ちゃん!？」

「え!？ あう、いや、な……何カップですか？」

「何言ってるのよっ!」

ゴスッ!

みなみはから竹割りを恋音の脳天に見舞う。

「はう、あっ」

珍妙な声を発し、頭を抑える恋音を、

「ご、ごめんなさい、こっちがBカップの斑鳩恋音ちゃんです」

「酷いですう、当たってますけれど」

みなみが苦笑いを浮かべて紹介し、恋音が情けない声を上げる。

「うふふふっ、面白いですね……私は織田百合乃といいます」

二人の掛け合いに百合乃は微笑む。

『ううっ……百合乃、名前も姿もお嬢様』

『可愛いですう、く乃っってお嬢様の名前ですう』

みなみも恋音もその控え目で可憐な笑みに、偏見込みで感心して

しまう。

「いかん、いかん……織田さん、隣に座ってもいいですか？」

ブンブンと首を振り、みなみが訊くと、

「どうぞ、あの……百合乃で良いですよ」

百合乃はそう言って頷いたので、みなみと恋音は百合乃の隣に腰を下ろす。

「お二人は……あのお店あの……」

「ええ……一応は所属してますがまだお店が開いてませんしね」

百合乃の問いに、みなみは肩を竦めた。

「えと……百合乃さんみたいな綺麗な人が来てくれると嬉しいですよ」

「ありがとうございます、でもどうですかね!？」

恋音の言葉に百合乃は首をかしげる。

「いやあ、大丈夫ですっ! 百合乃さんが採用されなかったらオーナーを私と恋音ちゃんできじめちゃいますから! あの人の弱点知ってますんで!」

みなみが胸を張ると、

「まあ……」

と、驚く百合乃。

「でも百合乃さんなら平気ですよ」

恋音も笑顔を向けると、

「二人とも優しいですね」

そう百合乃は呟いてから大きく息を吐いた。

「いいですよね……女の子って」

「……………!?!」

百合乃の言葉に瞳を細める恋音。

「そう言えば百合乃さん、お腹空きませんか!」

そんな恋音の様子には、気付かないみなみはニツコリ笑って尋ねる。

「ちょっと空いてます」

百合乃が少し恥ずかしそうに答えると、

「じゃ、少し冷めてますけど、ハンバーガーありますから食べましょう！」

みなみはいつの間にか大きめのハンカチに包んでいたハンバーガーを百合乃に差し出した。

「まあ、ハンバーガーですか！？ あんまり食べた事ないです！」

手を顔の前で合わせて喜ぶ百合乃。

「それは私のじゃないですかぁ」

「恋音ちゃんはまだもう三個食べたでしょ？ 過食は美少女の最大の敵だからね」

泣き声を上げた恋音にそう注意するみなみに、

「いえ、四個ですう……そうですね、残り七個仲良く分けましょうね」

と、赤面して恋音が答えたので、みなみと百合乃は顔を見合せ笑い、恋音もそれに続いた。

「ご馳走になりました、本当に久方ぶりにハンバーガーを頂きました、外で食べるのも滅多にしなかったので何だか新鮮でした」

手を合わせる百合乃。

食べたのはタマゴバーガーひとつ。

食事を済ましたみなみもハンバーガーを一個もらっただけだったので結局、恋音には五個のハンバーガーが残り、恋音も一つ食べて残りは持ち帰る様子だ。

食べている間も色々雑誌をしたが、まだ面接の結果が出ていないのでその辺りの話は結局はしないままだった。

「じゃ……本当に気を遣って声をかけて貰って嬉しかったです、そろそろホテルに帰りますね」

百合乃は腰を上げて、ポンポンとスカートを払うと頭を下げる。

「はい、じゃまた」

「また」

手を振るみなみと、ぺこりと頭を下げ返す恋音。

「はい……また会えるといいですね」

はかなげな笑顔を見せつつ、百合乃はこう呟き、肩を竦めたのだ。
つた。

「悲しがっても、そう生まれたのは仕方がないですからね」

百合乃の後ろ姿を見送るみなみと恋音。

「帰ろっか!？」

「ええ……」

促す、みなみに恋音はコクリと頷く。

「さっきの大王チェーンの店が密集してた道は通りたくないな……
なんで同じチェーン店の店を並べてんのよ、バカじゃないの!？」

口を尖らせるみなみに、

「駅の近くはたくさん人通りもありますからね、それに男の人はいろいろ趣味が個人で変わりますからね……えっ!？」

と、恋音は途中まで答えかけ、ハッと何かに気がついた様に、驚きの表情で自分の口元に手を当てた。

「どうしたの!？」

不思議そうな顔をするみなみに恋音は振り返る。

「……わかりました……なんで百合乃さんが採用が難しいかが」

第8話に続く

第8話「百合乃の事情・後編」

1

「えええっ！？　嘘でしょ、そんな訳ないない！」

ラーメンチェーン店の店内に声が響く。

みなみは自分の上げた声が、予想以上に大きかった事に周りをキョロキョロしてから、正面に座り中華そば大盛りをすすする恋音に、

「そりゃない、そりゃないよ、飛躍しすぎだよ」

と、周りを気にしながら、口元に手を当て言った。

「そうですかね？　私はかなりありうろと思うんですけどお、いや、そうじゃない方が良いのは私もそうなんですが……」

箸を止めて顔を上げた恋音は、

「だって……あの人、百合乃さん、女の子っていいですね、なんて言っていましたし帰りぎわにも生まれてきちゃったみたいない方しっていましたよ」

と、続けた。

「……確かに言っていた様な気がする」

みなみが店の高い天井を見上げて呟くと、

「そうですね、でもあれだけの美人さんです、採用されないのならそれ位の理由じゃないと有り得ないんじゃないですか？　まあ、私も百合乃さんの外見や態度からは全くイメージしにくいんですけど」

恋音も複雑な表情。

「うーん」

みなみも思わず唸ってしまい、

「でも胸がすごく……」

と、疑問を呈するが恋音は首を振る。

「手術で自由自在です、お金さえかければ、逆にそういう人の方がやたら大きくしたがるらしいですね、最近には本当に綺麗な人が多いんですから、凄いですよ、それにこの街は様々な人が働きに来ますからね」

「そうだよね……何だかそんな気がするよ」

恋音の言葉にみなみは半信半疑ながらも頷くと、頬杖をついてぼやく。

「百合乃さんがニューハーフさんかぁ……色々あるんだなあ」

帰り道。

夜も更けだして、周りにはこれから出勤なのだろう、なんとなくそれと判りやすい綺麗な女性達が沢山歩いている。

「どうやら、これからお仕事みたいですネ」

「そうだね……私達もお店の開店準備が固まれば、この街で働く女の子になる訳だからね」

「うちのお店……これからどんな女の子があつまるんでしょうね」

期待半分不安半分の感じの恋音に、

「うーん、それは分からないけどさ……恋音ちゃんみたいに仲良くやりやすい相手だといいな」

そうみなみが答える。

「あ、ありがとうございます、私も初めての同じお店の人がみなみさんみたいな人で良かったです」

赤面して頭をペコリと下げる恋音。

「ねえ……恋音ちゃん」

「なんですか!？」

美少女らしい控え目な笑顔で顔を覗かせる恋音に、みなみはニツといった感じの笑顔を浮かべ、

「私は百合乃さんとも上手くやっていけそう」

と、告げる。

「みなみさん……」

「恋音ちゃんはどう!？」

みなみの問いに、

「はい、私も百合乃さんの印象、すごく好きです」

恋音は答える。

みなみはよし、といった風に恋音の肩に手を置く。

「だってさ、オーナーも高音さんも、私や恋音ちゃんに言ってたよね!？ プリンセスオークションでは決まったサービスはない、お客様の求められている事を優しさで感じ取ればいい、ってさ……」

「はい、言っていました」

恋音がコクリと首を縦に振ると、

「なら……百合乃さんがダメな理由なんて何も無いじゃない、お客様に喜んでもらえるならさ」

みなみは自信満々にそう言い放つ。

「……そうですよね、私も百合乃さんと一緒に働きたいです！」
「決まりだね」

明るい声で頷いた恋音にみなみはウインクした。

「あれっ!？ オーナーはどこにいったの？」
「坊っちゃんなら、町内会の宴会に連れていかれましたよ、今日は夜遅くになると思います」

幸四郎を探して事務所のドアを開けたみなみに事務机に座り、何かの書類を書きながら高音が答えた。

「そうかあ」

「何かの言伝があれば言っておきますが……」
「いやあ……言伝っていう程じゃないけど、ほらさっき面接してた人の事、雇ってもらえたらなく、とか思ってる」

みなみが苦笑しながら頬を掻くと、高音は万年筆で書類を書く手を止めずに、

「どちらともあなたに答える必要はありませんが、気になるなら答えてあげます、現時点では落とすつもりです」

と、酷く事務的で、冷たく感じる口調で答えたのである。

「なっ……」

みなみは唇を噛む。

落とすつもりのお答えはある程度予想していた、それを何とか説得してみようとも思ってた、やってきたのだが、カチン来たのは高音の返事の仕方であった。

「何で！？ 理由教えてくれませんか？」

「個人的な情報に関する事なので教える訳にはいきませんし、一契約者に過ぎないあなたに、これ以上答える必要ありません」

震える声のみなみの問いに対する高音のスタンスは一切変わらない。

「な、何よ……そんな事務的にっ！ 人だって集まらなきゃいつまでも営業できないし、百合乃さんの何処がいけないかくらい教えてよっ！ だいたい、こっち観て返事なさいよ！」

怒鳴るみなみ。

高音は椅子を少し引いて椅子ごとクルリと回り、足をスツと組むと顔を上げて言った。

「いいですか、崎原みなみさん、雇用契約した人、または契約検討中の人の事をペラペラ喋る様な経営者の仕事場にはこの先、何があっても働かない事です、この業界ではプライバシーが他業種よりもひとときわ大切に扱われるべきだ、と私は学んできましたから、それに人事について一部の契約者の意見を聞くような経営者も私はお勧めしませんね、わかりましたか？」

締まった表情と締まった口調だった。

みなみは、この業界で長く働いてきた高音の大切なポリシーを侵そうとしていた事に気付き、

「……確かにそうだけど」

と、いう捨て台詞を残し、事務所を去るのが精一杯だったのである。

3

「ダメでしたか……」

「うん……オーナーいなくて、高音さんに言ってみただけ」

直談判に出て帰ってきたみなみが恋音に頷く。

「今度は二人でオーナーに言ってみましょうか？」

「ダメよ、オーナーは高音さんを信頼してるみたいだから、結局は相談するだろうし、一契約者に過ぎない私達がオーナーに対して雇用に出すのが問題がある、って言い方だったからね……そんな事をしたら余計に拗れそうだよ」

恋音の提案にみなみは首を振った。

「そうですかあ……」

「多分ね」

しゅんとする彼女にみなみも倣ってしまう。

会話の無い間が空く。

十数秒の間を終わらせたのは、恋音の部屋を叩くノックの音だった。

「は、はいっ!？」

店の二階の部屋だ、来客で思い付くのは、みなみを覗くと二人だけだ。

恋音がドアを開けるとそこには顔を赤くして、笑顔を浮かべる幸四郎が立っていたのである。

「あははは……恋音ちゃん、宴会で残ったお寿司をこんなに貰っちゃったんだよ、みなみちゃん呼んで食べるといいよ、ってみなみちゃんいるし……」

ろれつが回らない程に酔っている訳でもなく、自分で自分に突っ込む幸四郎の腕を、

「あんたも付き合いなさいよ!」

と、みなみは引いて部屋に引きずり込んだ。

「美味しそうです」

恋音が手を合わせてニッコリ笑う。

「みんなが食べなかった奴を集めたただだよ、喜んでもらえてよかったよ……ところで俺はもう食べたからいらないんだけど……みなみちゃんは、何か？」

嬉しそうに寿司を食べ始めた恋音と、だが寿司には目もくれずにジーツと注視してくる、みなみを幸四郎は見た。

「別に私もお腹いっぱいだからいらない、全部、恋音ちゃんにあげる」

「そ、そうかあ……で、なんでそんな目で俺を見てる訳!？」

目を細めて、訝しげなみなみの視線に幸四郎はたじろいた様子だ。

「織田百合乃さん……知ってるわよね？」

その名前に幸四郎はあっ、といった表情。

「ああ……面接に来てた人だろ!？」

「ええ……」

みなみはズイツと幸四郎に顔を近付ける。

「その百合乃さん、高音さんに聞いたら採用しない意向らしいのよねー、私達、百合乃さんとちょっと仲良くなつてさ……性格もいいし、綺麗だしプロポーションも凄い……」

そこまで言ってみなみは間を空けて、更に幸四郎に顔を近づけた。

「ちょっとみなみちゃん、顔が近いってば」

焦る幸四郎。

「何で雇わないかの理由を高音さんに聞いたら、答えられないの一点張りだしさ……どうせオーナーに訊いても答えてくれないし、答えてもらっても高音さんが黙ってない」

「みなみさん!？」

傍らの恋音が少しみなみの真意を計りかねた様な声を上げる。
てっきり不採用の理由を訊くのだと思っていたのだろう。

「わかってるね……多分、俺も答えられないよ」

少しみなみに引きながらも幸四郎が言うと、

「じゃあ……代わりにひとつ教えてよ、百合乃さんのそれは、本当にこの店でお客さんの心や身体の疲れを癒してあげるのにそんなに致命的な事なの!？」
あなたの考えだけで答えてくれていいわ、頼

むからそれだけ教えてくれる？　お願いだから」

そう訊きながら、みなみは微笑む。

「……もう、可愛い女の子は得だね、かわりに、って笑われると参るよ」

ため息をついて苦笑してから、幸四郎は、

「俺は違うと思うよ、それは仕方ないといえば仕方ない事だからね、それに彼女の事について言えば、すぐに結果を出せないでいるのは、俺と高音さんの意見に相違が生まれてるからでもあるんだ」

と、笑う。

「意見の相違が！？　ああ……なるほど」

「そういう事、理由はもちろん話せないけど、みなみちゃんと恋音ちゃんが百合乃さんを後押ししてくれるなら俺は歓迎するよ……なるべく早くしないと今回の件は高音さんがかなり強硬で、明日にも俺が押し切られそうなんだよ」

微笑み合うみなみと幸四郎。

「話してくれてありがと、協力するわ」

みなみは幸四郎に軽くキスをして立ち上がる。

「恋音ちゃん行くわよ」

「ええっ!?! もう夜ですよ、どこにですかあ!?!」

驚く恋音に、

「もちろん、百合乃さんのいる場所に決まってる、明日までなんて待てるわけではないでしょ」

即答するみなみ。

「百合乃さんの泊まってる場所知らないですよ」

「探すわっ、こちとら暇人、夜中までかかってもいいわよ!」

みなみの簡単には引きそうもない表情に、

「……そうですね、探せばいいんですよ、恋音も百合乃さんを応援したいですからっ」

恋音も立ち上がる。

すると幸四郎は、

「美人が一人で安心して泊まれるホテルと言えば、駅前サンシャインホテルが思い付くかな〜!?!」

と、わざとらしく後ろ頭を掻いたのだった。

「みなみさんに恋音さん、こんな時間に一体どうしたんですか!？」

駅前のサンシャインホテル。

フロントに呼び出してもらうと、驚いた表情で百合乃は寝間着に白いカーディガンを羽織り、ホールに降りてくる。

「百合乃さん」

みなみは百合乃に駆け寄り、

「百合乃さん……もしかしたら採用してもらえるかもしれない!」

と、告げる。

「えっ!?! 採用してもらえますか?」

「うん、でもオーナーは賛成してくれてるけど……もう一人、面接にいた高音さんって、女の人を説得しないといけない、それも急がないといけないの!」

みなみが百合乃を見つめると、彼女も一瞬は喜びの顔を見せたが、

「もう……いいんです、私は無理ですよ」

と、俯いた。

「何ですか!？」

問い質す恋音。

百合乃はみなみと恋音を見ながら呟く。

「私は貴女達とは違うんですよ、私みたいなのは私みたいなので働く場所もあるそうだからそちらで……」

「バカッ! 私は百合乃さんと働きたいのよ、オーナーだってそんなの問題じゃない、って言ってくれてるのよ!」

みなみはホールに響くような声で怒鳴り、

「確かに……確かに……百合乃さんは私達とは違うかもしれない、違うかもしれませんが心の優しい可愛い女の子だと恋音は思います、きつとそうです!」

恋音も声を上げる。

「みなみさん、恋音さん……」

涙目でみなみと恋音を見る百合乃。

「さあ、行こうよ! 私達も一緒にお願いにいく……だから……だからさ」

「生まれがどうか……どうか女の子を諦めないで下さい、百合乃さんはとても素敵です!」

みなみと恋音も百合乃にすが付くように嘆願する。

「なんですか、今日会ったばかりの私になんでこんなに優しくしてくれるんですか……」

涙を拭き、顔を上げた百合乃に、

「わかんない、わかんないけど優しくしたい、それにこの街に一人で行ってきて不安になる気持ちにはよく解るんだ……それだけ」

みなみは照れ臭そうに答えたのだった。

ホテルからタクシーを使い3人は急いでプリンセスオークションに向かう、高音はいつも遅くまで書類などの仕事をしているし、幸四郎も待っていてくれる手筈になっている。

駅前から車に乗ってしまえば店までは十分もかからない、車内では緊張からかあまり会話が出来ないでいると、あっという間に店に着いてしまう。

「……頑張ろう、百合乃さん！」

「はい、私もこの街で働くと決めました、もう一度お願いしてみます」

みなみの声援に百合乃は頷いてタクシーを降りた。

「なるほど……もう一度お願いにね……」

「はい……」

事務所に幸四郎といた高音は別段驚く様子もなく、頭を下げる百合乃を机に座ったまま見た。

「まだ面接の結果は出てないんですがね」

高音はそう頬杖をついてから幸四郎を見る。

「坊っちゃん、困りましたね……そういう事に加担されては」

「えっ!？」

焦りの表情の幸四郎。

「彼女にはあなたがオーナーで、私はあくまでもマネージャーと説明してあったのに、何で私に彼女は頭を下げてるんですか？ みなさんからオーナーは契約に前向きで私が反対している、って聞いていたからでしょう、それをみなさんに話したのは坊っちゃん本人ですよね？」

高音の問いに幸四郎は罰の悪い表情を隠さず、

「ばれましたか、でも俺は百合乃さんの採用には前向きですから、だから加担するのはある程度仕方ない事だと……」

と、開き直る。

「まったく……」

高音はつまらなそうに呟くと、

「織田百合乃さん、私があなただの採用に反対する理由はわかりますね!？」

そう言っただけ席を立つ。

「はい……面接の時にも難しいと答えられた理由に挙げられました」

唇を結ぶ百合乃。

「それを克服する自信がありますか!？　それも初めて働く風俗の場で？」

鋭く追い詰める様な高音の口調。

百合乃はその迫力に俯きそうになるが、ふと横に並んだみなみと恋音に視線をやると、

「やります!　私は頑張ります、みなみさんや恋音ちゃんのように人をやさしく慰めて勇気をあげられるような……そんな人になりたいですっ!」

そう言い放ち高音を直視したのである。

おしとやかで物静かなお嬢様という印象の百合乃の強い口調と眼差しに事務室は一瞬、時が止まる。

「……今日の昼の面接とはえらい違いです、あなたは私がその事と風俗未経験の部分を指摘されると、自信無げに俯き、それは自分にはどうにもならない事ですから……と、お答えになりました、どっちが本当の答えなんだか？」

高音は苦笑するが、その苦笑の表情には嘲笑はまったく感じられない、いい意味でのやれやれ、といった風であった。

「申し訳ありません……でも両方ともに嘘ではありません、素直な今の気持ちを答えました……そう生まれてしまった事は変えられませんが、今は逆にそれを活かせないかな？　とか考えています」

高音に深々と頭を下げる百合乃。

「はぁ、私は綺麗でも自分に自信が持てない方がお客様の癒しになれる訳が無いと思い、未経験という部分も危惧して不採用の意見でしたが……」

高音は大きく息を吐いてから、

「そういう事みたいですし、オーナーの意見もありますからね……でも知りませんよ、素人さんばかりでは教育に手間がかかりすぎますよ」

と、幸四郎を見る。

それに対して、幸四郎はニツコリ笑い、

「まあ、それは高音さんにもご教授願うとして……百合乃さんも焦らずにやっていきましようよ、宜しく願います」

と、百合乃に手を差し出す。

「ハイッ！」

百合乃は可憐な微笑みを浮かべ、両手を添えてその手を握ったのだった。

「やった！」

「やりましたねっ！ 百合乃さんも一緒です」

「みなみさん、恋音ちゃん、本当にありがとうございました！」

喜ぶみなみと恋音に、百合乃が抱きつく。

「もう生まれなんて気にしちゃダメだよ！？」

「ハイッ、気にしません、みなみさんや恋音ちゃんと同じつもりで！」

みなみの言葉に百合乃は頷いた。

「よかったですう、恋音は百合乃さんは、本当の女の人以上に女の人だと思えますです、笑顔なんてもう素敵ですっ!」

「そうよね! 生まれが男なんて何だっていうのよ! 崎原みなみが百合乃さんは女の子って花丸も二重丸も付けて……にんてゝい!」

「はぁ!?!」

明らかに語尾に何言ってるんだ的な響きの声を幸四郎と高音は上げて、百合乃は口元に手を当てて驚いている。

「何よ!?! 私は百合乃さんは立派な女性として扱うわよ! なんだったら一緒にお風呂に入る」

「生まれてきた事は仕方がないですよ、もう気にしない事にしたんじゃないですか!?!」

一瞬にして空気が変わった三人をみなみと恋音は訝しげに見る。
チョンチョン。

百合乃が何とも言えない表情でみなみの肩を指でつついて言った。

「あのお、私は生まれてきた時から正真正銘の女ですが……」

「はあゝ!？」

先程の幸四郎と高音の様な声を、今度はみなみと恋音がピッタリのタイミングで上げたのであった。

5

「すいませんですっ」

「ごめんなさい!」

平身低頭で深々と頭を下げる、恋音とみなみ。

「私こそすいませんでした、そんな思い違いをさせるような事を言っていたなんて……どうか気にしないでね」

百合乃はあわわ、といった表情で二人を宥める。

「女の子っていいな、みたいな事を言われてましたし、しきりに生まれてしまった事は……とか言われてましたのでえ、それに百合乃さんみたいな美人がウチで働けない理由なんて相当な物だと、勝手に勘違いしちゃいましたあゝ」

泣きだしそうになる恋音、傍で腕を組んだ高音が、

「まあ、百合乃さんはもう女の子と呼ぶにはですし……生まれてしまったというのは、それも性別の事でなくて生まれた年代の事でしょうね、私が風俗未経験で危惧したのは百合乃さんの年齢の事なんです」

と、告げる。

「年齢いいっ!？」

みなみは眉をしかめて百合乃を見定める。

白い肌。

腰の辺りまで伸ばし、そこでリボンで結んだ黒髪。切りそろえた前髪。

切れ長でも、何処か優しげな瞳。

高いわけではないが、整った鼻筋からの薄い唇。

綺麗な輪郭。

ほんのわずかに太めに見えるがグラマーさが遥かに上回り、抜群の色香を感じさせるプロポーシヨン。

可憐な微笑み。

「恋音ちゃん!？」

隣でその値踏みの本気で入った恋音に回答権を振るが、

「……」

彼女は黙って首を振るだけだった。

「お姉さまーっ! 大変失礼に存じますが、いったいあなたはお幾つなのですかぁー!

妙なテンションになり、回答権を放棄したみなみに百合乃は可愛らしい苦笑を見せながら、頬を赤らめて答えた。

「はい、織田百合乃……今年で三十四歳です」

「私より年上ですね、これから宜しく願います、百合乃さん」

高音がペコリと頭を下げ、みなみは店内に響くような声を上げる。

「う、嘘だあゝ！ 可愛すぎる、可愛すぎるだろう！？」
三十四歳
っ！」

第9話に続く

第9話「私達は共同体」

1

「あっ……幸四郎さん」

百合乃の艶のある声。

「くっ……ゆ、百合乃さん……す、すみませんっ……も、もうっ」

その声に反応するように、幸四郎は重ねた身体を細かく動かすと、百合乃も激しく身体をくねらせる。

「あふふううう」

「ゆ……百合乃さんっ……くっ……はあああっ」

百合乃に胸元に抱き締められた幸四郎は声を上げ、ビクッビクッと身体を震わせると、一気に脱力して豊かな両方の胸の谷間に顔をうずめて、大きく息を吐いた。

「百合乃さん……凄く、凄く可愛かったです」

「はい、幸四郎さんも、とても素敵でした」

「大満足です、ホントに可愛くて……」

「はい、私も夢中になっちゃいました」

笑い合いシーツに包まった二人は、そっと唇を交わした。

「はい、ここまでです、百合乃さん、練習ご苦労様でしたね」
「……!!」

唐突にスーツ姿の高音が入ってくると、幸四郎と百合乃は真っ赤になり二人で一枚のシートに包まりながら上半身を起こす。

「どうですか？ 坊っちゃん、お客様として百合乃さんはどうですか？」

一部始終を見ていたのだが、まったく気にしていない様子の高音は、幸四郎を見下ろしながら事の感想を訊いてくる。

「な、何がです!？」

「何がって、今訊くことなんて決まってますよ、きちんと熟した大人の女は違うでしょ!？」 特に百合乃さんみたいな滅多にいない特別上等な女性は？」

「……そんな、特別上等だなんて……」

幸四郎と一枚のシートに包まり恥ずかしがる百合乃。

「そういう事なら、凄く気持ちよかったし最高でした、めちゃくちゃ可愛くて癖になりそうです」

幸四郎がそう素直に高音に答え、隣の百合乃に微笑むと、

「いえ、幸四郎さんも本当に素敵でした」

百合乃も微笑み、再び互いに唇を近付ける……が、その間にスッ

とファイルが挟み込みこまれる。

「坊っちゃん……練習の時間は終わりと云った筈です、早く服を来て下さい、互いに盛り上がったのは結構ですが、契約者とはあくまでも公平にお願いします」

ファイル片手の高音の目つきにはまるで冗談や茶化した雰囲気になかった。

「あ……すいません、百合乃さんも俺、つい調子に乗っちゃって」
「私こそごめんなさい」

幸四郎と百合乃は互いに苦笑して謝り合い、そそくさと脱いだ服を着るのであった。

「じゃあ、この部屋は百合乃さんが好きに使ってください、落札者のお客様も入るから掃除はキッチンとしてもらいたいけど、汚なくならなければ個人の好きに部屋のレイアウトは任せますよ、百合乃さんのお部屋を再現するつもりでお願いします」

「わかりました」

高音と部屋を出ていく前に幸四郎が告げる。

すると、百合乃は丁寧なペコリと頭を下げてから言いにくそうに、

「それと……あの、実は無いわけでは無いんですが、所持金に余裕があるとも言えないのでホテルを出て、良ければ、みなみさん達み

たいにここに泊まりたいのですけれど……」

と、両手を合わせてきたのである。

幸四郎としてはお給料を出せるまでは相手の経済状況も鑑みて、オッケーしたいが一人で決めてはいけないと思い、高音を見る。

「俺は仕方ないと思うけど高音さんは……？」

「私も構いませんが本当は店舗に泊まるのはダメなんですよ、今は仕方ないですが早急に何か対策を講じますよ」

腕を組んだ高音は言葉通り仕方がなそうな顔でそう答えた。

2

「いいアパートがあるんですか!？」

二日後の朝、事務所で百合乃の契約後に面接をした女の子達の履歴書を見ていると、出勤してきた高音がそう報告してきたのである。

「ええ、先代にはとても世話になったから、と大家さんが信じられない程の格安で一棟丸ごと貸してくれるらしいです、知り合いの不動産屋さんに声をかけておいたのが幸いしました……その大家さん本人も私が知ってますので信用はできます」

「なるほど……親父に世話になったからか、一体何人俺の顔も知らないそういう人が出てくるんだろ？」

嬉しくない訳ではないが、複雑な表情が出てしまう幸四郎。

そんな幸四郎の態度に高音は腰に手を当てる。

「坊っちゃん……どうでもいいじゃないですか、今は会長の御威光に素直に感謝しましょう、みんなに格安のアパートを貸せるとなれば……」

「そう、みんなが喜ぶからね……ごめんなさい、また生意気言つたよ、これも働くみんなに良い事だから素直に感謝しなきゃ」

途中で言葉を遮り、皮肉った態度を取った事を謝り苦笑する幸四郎。

「そういう事です、経営者はプライドよりも、働く人達を取れなければそれをする資格はないと私は思いますよ……互いに支え合う共同体ですからね、さて連絡はしてありますしみんなでそのアパートを見に行きますか」

そんな幸四郎に高音は腰に当てた手を離し、眼鏡をスツと直す仕草を見せて微笑んだのだった。

「住所からすると歩いていけるんですがね」

三十分後、メモを片手に歩く高音を先頭に幸四郎とみなみ、百合乃、恋音の五人は新大空町の通りを歩いている。

「どんなアパートなんですかあ！？ 出来るだけ新しくてネットワーク環境が始めからあれば良いんですけれど……」

「ダメよ恋音ちゃん、それよりも家賃が気になるのよ、家賃が!?!? だいたいアパートの価値なんて家賃聞けば判断つくの!」

「そうなんですかあ? でも、お家賃は立地でもかわりますよ」

「うーん、そうかあ」

まるで女子高生の様に会話が弾むみなみと恋音の会話に高音が振り返った。

「お家賃はオーナーが決められます、まずはお部屋を見てからです」「そうなの? じゃあオーナー安くしてよお」

みなみに肩をよせて、ウインクをされた幸四郎は笑顔を見せる。

「そうだね、お家賃がやっぱりみんなの生活に影響がおつきいからなるべく負担にならないようにするよ……君達から家賃をとって儲けようなんて思わないから、だからみなみちゃんは変な色気遣わなくてもいいってば」

「変な色気とは何よ、変な色気とは……この健康美溢れるあたしに對して! 今の言葉傷ついた、家賃一ヵ月分くらい傷ついた、賠償請求するからね、家賃一ヵ月分!」

「おいおい、堪忍してよ、みなみちゃん」

「雇った女の子に変な色気なんて言ったんだから罪は深いわよ!」

困った顔を浮かべる幸四郎に背を向けたみなみはペロリと舌を出す。

「みなみちゃん、本当にたくましいですよね……見習わないと、お客様からああやって色々な物をおねだりしていくんですね」

「いや……ちよつとあれは強請りに近いかと」

本音で感心する百合乃に恋音は苦笑した。

3

「……これ!？」

「ここですか!？」

「こちらですか？」

みなみ、恋音、百合乃の声に幸四郎は何も答えずに高音を見た。

「そうですね、住所もあっていそうです」

高音は住所を書いたメモに目を落として答えた。

目の前にあるのは二階建のアパート。

部屋数は一階と二階合わせれば十二部屋。

「かなり広そうでしょう？　これだけのアパートをあなた方に格安で貸してあげられるんです……何か文句ありますか？」

眼鏡を直す仕草の高音にみなみは眉をしかめた。

「このアパート……なんかぼろいんだけど」

「ストレート過ぎますよっ……みなみさん」

「じゃあ恋音ちゃんが上手く言ってよ!」

「いや、その……年季が入っているというか、ネットワーク環境どころか電気が通っているのかすら怪しいというか……」

ストレートな、みなみの言い回しを注意した恋音もかなりキツい事をさり気なく言いつつ、不安げに古いアパートを見上げる。

そう、商店街から裏通りに入った場所にあったそのアパートは広さや店への立地は申し分無かったのであるが、単純にかなり古い建物だったのだ。

「でも、みなみちゃんも恋音ちゃんもいつまでも店には泊まらないし、かと言ってもこの辺りのアパートはなりには高いよ」

不満げな態度が見えるみなみと不安そうな恋音に幸四郎が口を開く。

「うっ、それもそうか」

「ですよね……」

二人は顔を合わせる。

「とりあえず中を見てみませんか!？」

「そうですよね」

そう言った百合乃に幸四郎が頷く、と一行は一階の目の前の部屋に立ち、高音が借りてきていた鍵でドアを開けた。

「あ……案外までも」

部屋を見渡した、みなみの言葉は的確に一行の感想を現していた。八畳と六畳の和室が二部屋で立派とは言えないが、室内は小綺麗だ。

そして、八畳の部屋には申し訳程度だがキッチンがついている。

「トイレは協同ですけど、管理人室と一階の二ヶ所に洋式のがあります」

「協同ですか……でも仕方ないか」

何かのメモを見ながら説明する高音に恋音が呟く。

「お風呂が見えません」

百合乃が手を上げると高音が、

「ああ……お風呂ですか、お風呂はありませんね」

と、眼鏡を直しながらメモを見て言った。

「お風呂ないなんてムリ、絶対に無理！」

両手を広げるみなみ。

「流石に……おトイレはどうにかなりますが、お風呂が無いのは……」

「いやいや、おトイレひとつようだろう」

同意しつつのボケか本気が判断しかねる百合乃に、みなみはツツコミを入れ、

「とにかくお風呂が無いのは辛いわよ！　高音さんも判るでしょうに！」

と、高音を見た。

「この建物にはないですが、ご安心ください」

笑みを浮かべる高音。

「実は近所にはこのアパートの大家さんの経営するお風呂屋さんがありまして、ここ利用者は半額で利用させてくれるとの事、それにみなさんは店舗の自分の部屋にそれぞれ立派なお風呂があるじゃないですか、出勤してきた時、退勤する時に入られても構いません、もちろんお仕事にも入るでしょうけど……」

「うーん」

高音の返答にわずかに唸って、数秒間腕を組んでから顔を上げたみなみは、

「出勤してきた時は店のお風呂に入るって事ね……それに近くにお風呂屋さんがあるんだ？ 私は家賃が安ければ構わないかな？ と思う、正直言えば、なんだけとお金持っていないから贅沢は言えないし」

と、恋音と百合乃の意見を聞く。

「ええ……値段にしたいと思いますよ」

「私もそう思います」

恋音に百合乃も頷き、三人は幸四郎に視線を集めてきた。

『要するに、多少の不自由は家賃の安さで我慢してくれる……って事か』

三人からの視線。

なるべく安くしてあげたい気持ちがある。

事情は訊いていないが、彼女達もお金が必要な生活の為にここにやってきたのだろう、それに余計な負担はかけたくない。

三人の魅力ある異性からの期待の込められた視線。働いてくれる女性の為だ、多少の事はこちらでも我慢しようと思う。

思い切って……

「じゃあ……い、」

そこまで声が出かけた時、もう一人の女性のわずかに冷たい視線が視界の端に映り、

「いやいや……」

ブンブンと何度か首を振ってから、

「やっぱ今すぐは無理だね、俺がここを見るのも初めてだし、ここを借り入れる値段も高音さんに聞いたばかりだし、正式な借り入れ契約をしてそれから後で検討した家賃は伝えるよ、なるべく互いに負担のない線を決めていこう」

幸四郎は早口でそう答えていたのだった。

「よく言い止まりましたね、坊っちゃん」

店舗に帰った後で事務室で二人になると、高音は言った。

「正直、あの場でみなみちゃん達を喜ばせたい気持ちがありました、こちらが多少の支出をしてもと思いましたが、やっぱりお金の事ですからね、どう転ぶにせよ安易には……」

頭を掻きながら幸四郎は答える、視界の隅に入った彼女の視線が気になったのは多分、白状しなくても解っているだろう。

「ええ……私は自分の為に働く人間を切れる経営者は失格だと思いますが、働く人間の為に自分を切る経営者も失格だと思います」

自分の机の椅子を引いて座る高音。

「難しいですね」

息を吐きながら狭い事務所だが一応、一番奥に用意されたオーナー用の机に幸四郎も座る。

「いえいえ、ごくごく簡単な事……」

「そうですか？」

「ええ……結局は起業する人間は、他人を雇いたいと起業する変り者はそうはいません」

高音は口元をわずかに緩める。

「誰しも自分がやりたい事を実現する、多くの例で例えるなら、お金が欲しいと起業する訳です……そこで身銭を切ったら本末転倒じゃないですか」

「でも会社の経営は苦しい時もありますよね？」

「その通りです」

幸四郎の疑問に高音は頷く。

「何かの犠牲が必要な場合があります、その時は経営者は被雇用者に犠牲を求めるなら、自分もその責任に応じて傷つくのが当然です、被雇用者の給料をカットするなら自らの給料もカットする、リストラするなら自らの進退も定めなければいけないと思います」

「なるほど」

「職場という者は働く人間全てで形成されるのです、経営不振ならばその責任はその立場に応じて背負わなければいけない、自分はペーデーだから関係ないなどのたまたま人間はそこで働く資格はありませんし、現場の営業がいけないからと言うトップもその資格は互いに無いのです」

少し口調が強くなってきた自分に気が付いたのだろう、

「まあ、少し協道に話が逸れましたが……私の言いたい事は……」

コホンと咳払いをする高音に幸四郎は答える。

「楽な時も辛い時も働く職場はみんな運命共同体って感じですかね？
だから一方が利益を得て一方が不利を被る事はない、得る時も

失う時も立場による大小はありえど一緒ですか」

「そうです、そしてそういう意識を皆が持った会社は例外なく、強健なのです」

「そうだと思います、わかりました」

幸四郎は頷く。

「彼女達の住居の問題は切実で大変です、しかしあの娘達と私達はいまや共同体と考えるなら、適切な互いの妥協点を探さなければ経営者ではありません、あの場で道徳かつ賛同も呼べ魅力的な決定は経営者なら誰しも採算度外視するなら、口にしてみたい安易かつ素人的な事、ですが大抵は後で状況が苦しくなった時にその安易さに自らが悔いてしまうのです……ですから私は今回は坊っちゃんをほめます、さて……これから大家さんを訪ねませんか？ 中は平気でしだか思ったよりも外観はくたびれてましたし補修も必要でしょう、うちのお姫様達の要望もありましょうから大家さんともよく話しておかないと」

高音はそう言って再び席を立った。

誠実な人だ。

幸四郎は思う。

物心ついた時から、原高音という女性を見てきた幸四郎。

頭が良い人だ。

厳しくもあり、優しくもあり、強くもあり弱くもある、時には間

違えるし感情が先走る時もある。

今、言った事にだって言わせる人間によれば非現実的という人間もいるだろうし、理想論と罵る者もいるだろう。

だが、彼女は自分の信じる経営哲学に誠実なのだ。

そして、それに手を抜かない努力をして彼女は自分に手を貸してくれているのである。

意見の衝突は将来あるかも知れないが、彼女の誠実さだけは疑う事はしたくないと思う。

「そうですね、親父からの関係があるから、安いかたと安易に話を進めずにきちんと俺たちで話し合いましたよ！」

立ち上がる幸四郎に、彼女は幼い頃に自分を誉めてくれた頃の様な優しい笑みを見せてくれたのだった。

第10話に続く

第10話「ボクっ娘乙女まゆりと恋音」

1

「ボク、小寺まゆりっこでらていいいます！」

黒髪のショートカットの女の子はニッコリ笑って、頭を下げた。
パッチリした一重の瞳に明るい笑顔、色白ではないが特に黒くもない。

髪型はボーイッシュで、その顔立ちは可愛らしく整った立派な美少女。

「スリーサイズを教えてください」

「健康少女体型……って返事じゃダメ!？」

高音の問いに、まゆりは頭を掻きながら上目遣いをするが、どうにも目の前の女史には通用しない事がわかったのだろう、

「身長は154?で上から……76、58、78だよっ」

と、恥ずかしそうに白状する。

「だいたい恋音さんにみたいな感じですね」

「身長も同じくらいですしねえ」

高音に話を振られた幸四郎は頷く。

「年齢は……これも恋音ちゃんと同じですか、この年齢では風俗店

で働いた経験はなさそうだね」

幸四郎が言うと、

「でもボク、頑張るよ！」

まゆりはウインクする。

恋音の守ってほしいな美少女オーラはまゆりには感じない、むしろ対極的な健康元氣な美少女だ。

「わかりました、結果は明日にでも連絡します、今日はご苦労様でした」

高音は穏やかな様子で、書類をトントンと応接机で整えた。

「オーナーいる!？」

まゆりが帰ってほどなくして、事務所をみなみが覗き込んでくる。

「どうしたのさ？」

幸四郎が答えるとみなみは不思議そうな顔をしながら首を傾げた。

「さっきの面接の娘がさあ……なんか恋音ちゃんをジロジロ見ながら帰っていくもんだからね、何だか氣になったの」

「そうなんです……会ったことない人にあんなに見られると、何

だか緊張しちゃいますう」

みなみの背後から恋音がひょっこりと不安げな表情を見せてくる。

「ああ……まゆりちゃんに面接の時に身長や体型が恋音ちゃんとは一緒だ、って言ったから気にしたんじゃないかな！？ 年齢も一緒なんだよ、性格は全然違いそうだけど」

「へえ、じゃあ私も同じ歳だ、恋音ちゃんとはまた違う感じで可愛かったし、採用されたら、いいライバルになるかもよ」

幸四郎の返事にみなみはふーん、といった感じで頷いてから恋音に笑うが、当の恋音が、

「まだお仕事もしてないうちにライバルなんて人に言えないですう……」

と、首を振る。

「それもそうだ」

その答えに、みなみも苦笑し、腕を組んだ。

「開店は近々しますよ、あと数人の女の子を入れたら開店です」

事務所の自分の机に座っていた高音が何か書き物をしながら言った。

「あと数人！？　だつてさ、今いるの私と恋音ちゃんと百合乃さんと採用したとしても、さっきの女の子の4人じゃない、どうやってお店やるの！？」

「そうですね……とても私は一度に何人もお相手は無理ですう、せいぜい3人くらい……」

大仰な声を上げたみなみに、何だか聞き逃せない事を言った恋音。

「それについては心配いりません、開店といってもプレ開店みたいな感じです、前のお店の常連さんに声をかけておきました、だからお客様はほんの少数ですし、事情が解っている上ですから、多少の不始末はご理解願えます」

高音はようやく顔を上げる。

「プレ開店、ですか！？」

目を丸くする恋音に、

「そう、まずは試しにお客様を相手してもらって、このやり方の問題点などをハッキリさせて、本格開店の前に修正したりするんだ、君達もお客様を相手する場合の経験も少しはないと困るだろうしね」

高音と話も通っている幸四郎が説明すると、

「なるほどね、私達もその方がいいな……正直、お客って初めてだし」

「そうですよね、いきなりまったく知らないお客様相手だと緊張します」

みなみも頷き、恋音も同意したのだった。

2

「お世話になります、ボク……頑張るからねっ」

「うん、宜しく頼むよ、まゆりちゃん」

店の事務所。

ぐっと拳を握るまゆりに幸四郎が微笑む。

結局、まゆりの採用はすんなり決まり、幸四郎が電話でそれを伝えると彼女はさっそく挨拶に店を訪れてきたのである。

「えっとオーナー、説明では格安の寮があるんだよね、ボクもそこに入りたんだ……いいかな!？」

「もちろん、格安だけど古いアパートだよ」

幸四郎が答えるとまゆりは少しバツが悪そうな顔を浮かべた。

「うん、それには文句はないけど実は同居してるのがいて……あれっ、いないっ!？　いなくなってる」

「ちょ……同居って!？　同居ってどういう事？　いなくなっただって、連れてきたの?」

いきなりのまゆりの同居の話に驚く幸四郎だが、まゆりはキョロキョロと周りを見渡している。

「あゝん、タツノリ!　出てきなよ!」

「タツノリ!？」

嘆き気味のまゆりに幸四郎が眉をしかめると、廊下から黄色い恋音の声が聞こえてきたのである。

「恋音ちゃん!？」

廊下に出るとそこには恋音と百合乃が立っていた。

「ああ、オーナー見てください、かわいいですう」

そう幸四郎に笑いかけてくる恋音の胸元に抱かれていたのは、一匹のまだ小さなイノシシの子供、いわゆるウリ坊だ。

「野生の子が山を降りてきたのね」

にこやかに恋音の胸元に抱かれたウリ坊を見て、笑顔を浮かべる百合乃。

「ち、違うよっ、それはボクが飼ってるの! だいたい山を降りて風俗店に行くイノシシなんていないっ」

まゆりはツツコミを入れてから、

「タツノリ! 何やってんだよ、知らない人に抱かれてんじゃない、おいで」

と、両手を広げるがタツノリと呼ばれたウリ坊はまったく反応せず、気持ちよさそうに恋音の胸元に納まっている。

「あれが同居人!？」

「そうだよ、タツノリって名前……ボクに懐いてるんだ」

「恋音ちゃんにもなついてますけどね」

幸四郎とまゆりのやり取りに百合乃がニコニコして口を挟むと、

「タツノリ、誰がご主人様か忘れたのかっ、この恩知らずっ」

まゆりは恋音の胸元に抱かれたタツノリの頭をペチリと叩く。

「かわいいそうです」

クルリとまゆりに恋音が背中を向けると、抱かれたタツノリが彼女に甘える様に鳴きながら胸元に擦り寄る。

「タツノリ……それに君ッ、恋音ちゃんだっけ!？　それは

ボクの飼ってるウリ坊なんだっ」

「でも怖がってますう、小さい子に怒るのはいけないと思います」

「ムーッ」

まゆりは自分の飼いイノシシを取るなどばかりに恋音をジーツと睨んだが、恋音が言い返されて頬を膨らませた。

「やれやれ……」

「何だか少しずつ騒がしくなって、いい感じになってきましたね」

頭を掻いた幸四郎に微笑む百合乃。

「まあ、仲良くやってくれたら良いですけどね、正直いって女の子同士のいざこざだけはね」

そんな彼女にさりげなく本音を吐いて、幸四郎は肩を竦めたのだ。
った。

第11話に続く

第11話「高音の推薦」

1

「今度の方は坊っちゃん一人で面接して頂けないでしょうか？」

不意の申し出に応接ソファに座り、コンビニのたらこスパゲツティを昼食にしていた幸四郎はデスクワークをしている高音に視線を移した。

「俺が一人で！？ 何か都合が悪いんですか？」

「違いますよ」

幸四郎の問いに対し、高音は首を横に振り眼鏡をツイと上げ、

「今度の方は私の推薦だからです……まあ、素人ばかりでもこまりますからね、いわゆるプロです、今日の夕方にも顔を出すように言っております、是非宜しくお願いします」

と、何か意味ありげに微笑んだのだった。

「そっちもやろうか!？」

「そうですね」

「まゆりさん、こっちは掃いたのでモップをかけてください」

「はいはい、いいよ」

店舗内のまだ使われた事のない舞台、みなみと恋音は雑巾がけをしていた、舞台を降りたフロアには箒を持った百合乃に、モップを持ったまゆり。

四人はプレオープンもある事だし、特にやる事もない、遊びに行くにも先立つ物もないという共通認識のもと、自主的に店舗内の掃除に来ていたのである。

「ここの何もない壁が気になるよね、落書きしちゃうか、ボク、結構絵が上手いんだよ」

「止めましょうよ、高音さんに怒られますよ」

ホールの壁を見て悪さを思いついた子供のように笑うまゆりを、苦笑混じりで百合乃が止める。

「まゆりちゃんに百合乃さん、この舞台はそんなに高くないけど、どう！？ここに立った私は！？」

そこにファッションショーの様に、ホールにせり出したキャットウォークに立ったみなみが下の二人に向け、腰に手を当てたそれらしいポーズを決めてみせる。

「おーっ、いいねえ、いいねえ、みなみちゃん！まるで巴里のファッションモデルだよ！」

「隣で雑巾をかけている恋音さんも一緒にポーズお願いします、カメラマンも待ってますよ」

ヤンヤと手を叩くまゆり、百合乃は両手でフレームの四角を指で作ри、ニッコリ笑顔を浮かべた。

「カ……カメラですかぁー!? 当店ではホール内での許可カメラや映像録画機器の使用は禁じてますう、もちろんお部屋内では女の子の許可があればですけど、原則は禁止ですう」

「おっつ、さすが恋音ちゃん、オークション開演前の萌えナレーション!」

ポーズだけのカメラに恋音が首をフルフル振るとみなみが感心する。

「じゃあ、恋音ちゃん、お客様がきゅんとして、お部屋で一緒に過ごしたくなっちゃうような可愛らしいとポーズとって!」

「じゃあ……恋音とお部屋で楽しく遊びませんか?」

まゆりのリクエストに、恋音は舞台に可愛らしくペタンを座り込み、首をかしげる。

「うわ、可愛い」

「アイドルですね、きつとオークションも盛り上がりますよ」

「そーゆーのはボクにも出来ないっ! くやしいいいっ」

みなみが声を上げ、百合乃も絶賛し、飼いイノシシのタツノリ的事件から何かと恋音を気にしている様子のまゆりはリクエストしたくせに悔しがっている。

「やっぱりそういう決めポーズ欲しいかなあ?」

みなみが腕を組むと、

「舞台の上で魅せないとオークションも盛り上がらない、ボクは絶対に必要なと思うな……よっと」

恋音への対抗心に火が点いたまゆりはモップを床に放り出し、舞台によじ登る。

「じゃあさ、恋音ちゃんみたいな男の子を誘っちゃう、やらしいオーラの出せるポーズを研究しちゃう」

「了解ッ！ ボクも異性を罠に嵌めて値を釣り上げちゃうような、やらしいオーラを出せる様に頑張る」

そう盛り上がる、みなまとまゆり。

「あのお、ポーズ要求しておいて余りにも散々な言われようだと……」

そんな二人に可愛らしいポーズのまま、恋音は顔だけしかめたのだった。

「こんな感じ！？ モデルさんの歩き方」

「こうだよ、こう」

「腰をくねらせすぎじゃないですかあ？」

「みなさん、可愛らしいですよ、まるで集団下校みたいです」

舞台の上を歩くみなまとまゆり、恋音を舞台下から百合乃が拍手する。

「集団下校……って」

「誉め言葉になってないです」

「そうだよ、ボクはまだ学生にみえる？」

「そうですね、もう、オトナですよ」

文句を言う資格があるのか微妙な見かけで、抗議する恋音とまゆりだが、

「ああ……そうでしたか！？ 私は素直に集団下校する中学生みたいで可愛らしいと思いますよ」

百合乃はおっとりマイペースでそれに答え、

「それも中学生かい！」

みなみがツツコミをいれると、四人はお互いに笑いあった。

「今のウォーキングで人より高い舞台に立ちますの！？ あんまりお客様に魅せる商売を舐めると、痛い目に遭いましてよ」

「えっ……」

不意に聞こえてきた声に、全員がホールの隅に視線を移す。
一人の女がいつの間にか背中を壁につけて、腕を組んでいた。
赤茶色に染めた腰の近くまで届く位のボリュームのあるポニーテール。

黒地のハイネックに、ノースリーブに薄手のカーディガン、短め

のスカートにロングブーツ。

服装で判る身体のラインは、胸元がほどよく出て、キチンと腰が締まり、スカートから見える脚は細く長い。

輪郭線は無駄がなく綺麗に通っており、鼻は細く整ってやや高め、薄いピンク色の唇、だが瞳は黒いサングラスをかけている為に判らない。

目元が判らなくても、相当な美人と判断できてしまうような女性だ。

「何よ、いきなり来て失礼じゃない!？」

唇を噛んで、舞台から飛び降りるみなみ。

「みなみさん……」

降りた先の百合乃が止めようとするが、みなみはツカツカとポニ―テールの女に近づいていく。

「あら!？ わたくしは別に失礼な事を言ったつもりは無くても、そのみずぼらしい歩き方じゃ舞台で人に観せて価値を決めていたかどうかのような事には難しい、と素直に評価しただけですわ」

「へえ、余計なご評価ありがとうございます！ そんなあなたは一体どなたですかね!？」

壁に背をかけたままのサングラスの女に腰に手を当て顔を近づけるみなみ、女が口を開きかけたが、その答えはまったく違う舞台袖から聞こえてくる。

「その方は御堂楓さんといいます、私がスカウトしてこのお店にと

オーナーに推薦しました」

舞台袖から、そう言ってるで新たな登場人物の様に高音が姿を現したのであった。

ちなみと言ってはなんだが、幸四郎も後ろにいる。

「えっ……」

「高音さんの推薦!？」

驚く恋音に百合乃。

「あんたが高音さんの推薦で……」

御堂楓と紹介された女を、みなみは睨む。

そんなみなみを嘲笑うように笑い、楓は、

「ご紹介に預かりました御堂楓です、宜しくお願いしますわ……でも高音さん、心配ですわね、女の子もオーナーも素人ばかりでやっていけますの？」

と、サングラスを外して高音の後ろにいる幸四郎を見て、ため息をつく。

「な、私達だけじゃなく、オーナーまで馬鹿にしてっ!」

さらにムツとするみなみ、幸四郎は舞台から飛び降りて楓に歩み寄る。

「なんですよ」

幸四郎を睨む楓。

一触即発と思われたが、幸四郎は肩をすくめて楓に笑いかける。

「高音さんに聞いたよ楓ちゃん、俺がオーナーの御神本幸四郎だよ……見た時は美人タイプと思ったけど、サングラス外すと可愛らしいね、まだみなみちゃんとかと歳は変わらないかな！？ 確かに俺は素人だから、楓ちゃんから見えて気がつく事があれば遠慮なく言つてね、でもやっぱり流石に高音さんの推薦だよねえ、可愛いなあ……採用しない理由ないよね」

右手を差し出す幸四郎。

幸四郎の言う通りサングラスを外すと、楓の瞳は可愛い丸みのあり、その印象を美人から美少女に変えてしまう。

「あ、当たり前ですわよ、わたくしをあなたが採用、不採用なんて決められる訳ないでしょうに！ と……とにかく宜しくお願いしますわ」

開けっ広げな幸四郎の挨拶に楓は、赤面してフイと横を向きながらも、組んでいた腕を解き、差し出された右手を握ったのだった。

第12話「楓とみなみとクレイジーテレフォン」

1

「ふん……何よ、高音さんからの推薦だからって」

幸四郎と握手を交わした楓から、みなみが腕を組んで背を向けると、態度の差はあれ恋音もまゆりも俯く。

楓のルックスやプロポーションはまるでファッション雑誌のモデルだ、細い所は細く、出る所はしっかりと出て、みなみと年端が変わらないというのに、そこから感じさせる魅力は異性なら引き付けられない方がおかしい程で高音の推薦も頷ける。

しかし、それぞれのベクトルは色々だが、みなみや恋音達も決してその外見的な異性を惹き付ける魅力において大きく劣るとは思えない、あくまでも幸四郎の推察であるが、みなみや恋音、まゆりや百合乃も自分の魅力には内心、自信が無い訳がない程のルックスなのだ、それだけに楓の美貌を認めながらも態度や言動から受け入れにくいのかも知れなかった。

何かと評価の辛い高音の推薦。

その真意を見せてもらおうという態度がみなみからはありありと見える。

「宜しいですわ、では私が舞台に上がりましょう」

それを察知したのだろう、楓は不敵な笑みを浮かべると舞台に歩み寄り、脇の階段から舞台に登ると黒いノースリーブの上に着てい

たカーディガンを脱いでから幸四郎に投げ、腰に手を当てて直立する。

楓は腰に手を当てて舞台に立ったただけだ。

しかし……彼女は一層に輝きを増した、まるで写真家に要求されたポーズを一度でバシッと決めたモデルの様である。

自信満々の表情。

さっきまで、のどかに舞台上がって、照れ笑いなどを浮かべていた少女達とは明らかに御堂楓は一線を画していたのだ。

黒のノースリーブから判る身体の隆起はひどく魅惑的で、幸四郎は息を呑む。

くびれた腰からスツと膨らんだヒップライン、そして引き締まった腿。

足先はロングブーツの為に判らないがここまで来て完璧でない筈がないと勝手に想像させてしまう。

「うわ……」

同じ舞台上にいた恋音が声を上げる、理由は幸四郎と同じだろう。

「あなた、一緒にウォーキングしてみますか？」

「い……いえっ、見させてもらいますっ！」

楓は余裕の笑みに、恋音はビクツと背筋を震わせ舞台から飛び降りて、幸四郎の横にいそいそ並んでくる。

「そう？」

誘ったくせに恋音の反応は解ってたかのような返事をしてから、

楓はうなじに両手を回してからバツと薄い赤茶色のポニーテールを宙に舞わせると、ホールに突き出したキャットウォークを歩きだしたのだった。

「違いますう……やっぱり違います」

「……くっ」

恋音は眩き、みなみはそれを認めたくない様に顔を舞台から逸らした。

「見事でしょ!？ あなた達も舞台上でお客様に見せる為に練習していたのだろうけれど、人に女の魅力を一目で魅せてしまう事に関しては、プロの楓とは素人が見てもハッキリと差がついてしまうのよ」

高音はまるで結果が知れていた様に腕を組む。

「高音さん……彼女はファッションモデルか何かをしてるんですか？ それでプロだと!？」

「その辺りは彼女に聞いたらいいいでしょう？」

幸四郎が訊くと高音は腕を組んだまま意味深な笑みを浮かべた。

「こんな感じですね、どうですか!？」

キャットウォークの先端でUターンして舞台に戻り、振り返る楓。

「……まあ、私達とは違うわね、プロのモデル出身かしらね」

無然とした表情だが、歩いただけで素人の練習中の舞台を本物のファッションショーに変えてしまったのは認めざる得ないみなみが楓を見る。

「まあ、モデルもやりましたけれども……オーナーありがとうございました」

楓は舞台を降りると幸四郎に歩み寄り、投げ渡していたカーディガンを受け取って、肩から羽織り感心する全員を見渡してから、

「わたくしは超のつくVIPの方専門のその手のご相手を最近までしてましたわ、誰を相手にしたかはわたくしもプロでしたから名前は言いませんけど、あなた方も知っているような著名な方々ですよ、じゃあ、また後日」

と、サラリと大胆な告白しクルリと踵を返し歩き去ってしまったのであった。

楓の歩き去った後を見つめる幸四郎。

「そうです、彼女はモデルでもかなりの売れっ子だったのですが、本業といった所は様々な業界のVIPの男性の相手を契約でしていたんです、男性の方は可愛くて見事なプロポーションの女性なんて何人も知っていて、どうにでもなる様な身分の方々にもかかわらず彼女は拔群の人気でした、当然報酬の方も桁外れで、確度の高い噂によると彼女の魅力の虜になった大御所男性ミュージシャンなどは八千万円のマンションを彼女に与えて自分だけの愛人にしようとして断られた事もあるらしいです」

「は……八千万円！？　ボクなんて八千万も奢ってもらった事もないよ！」

腕を組んだ高音が頷くと、まゆりがどうしようもない対比をする。

「そんな人がなんでまたウチみたいになまだ開店もしてない店に！？　即戦力が欲しいのはそうですが、そんな桁外れな報酬なんて出せないでしょう！？」

当然の疑問を幸四郎が口にとすると高音は、

「それなんです、まあ経験者扱いで素人からのみなみさん達よりは少しは上のお給料で始まりますが、基本はそんなに変わりません……それに私から推薦はしましたが、元はと言えば彼女の方からこのお店の募集を聞きつけて知り合いだった私に連絡をしてきたんですからね、あちらの普段の収入を考えればとてもこちらからなんて話は出来ませんよ」

と、自分でも解りませんよ、そう言いたげに口元を緩め、首を振った。

「……む」

難しい顔をしているのは、みなみである。

「まあまあ、みなみちゃん、同じお店の仲間同士仲良くしようよ……初対面からキツイ事を言われたとは思うけどさ」

幸四郎が苦笑して声をかけるとみなみは幸四郎を睨んで、

「何よ、そんな美人で凄い娘が店に入ってくれてラッキー、とか思った癖に、そうなんでしょ!？」

と、頬を膨らませ人差し指を指してくる。

「確かに……」

後ろ頭を掻いて素直に笑う幸四郎。

素直な気持ちだ。

楓の持つ異性を惹きつける華は新規開店する店に客を惹きつける即戦力となる公算が高いからだ。

みなみも素材としては十分であるし、プロポーションももう少し意識して造れば楓に劣らないと幸四郎は思うが、磨かれた美貌の経験値が桁違いに違いなかった。

「あのさ……みなみちゃん、俺は……」

その事をみなみの機嫌を損ねずに説明しなければならない。

ある一定のレベルを越えた女の子同士の美しさに対するプライドの高さは幸四郎もある程度は理解しているつもりで言葉を頭の中で選んでいると、

「今はどうにもなんないでしょうよ、相手は超一流芸能人すら虜にしちゃうんだからさ、舞台に上がってポーズとって歩いただけで私との差は凄くあるのはわかったわよ」

そうみなみは唇を噛んだのである。

「みなみちゃん!？」

「でもね!」

意気消沈したと思い、声をかけたのだが、みなみは不意に顔を上げ、

「でもね……私はいつまでもあいつに大きな顔はさせないわよ、私にだって頑張らないといけない訳がありますし、女の子の意地もあるからね!」

力強くそう言い放つと、グッと握りこぶしを幸四郎に向けて笑顔を浮かべてきたのである。

楓の凄さは認めつつも、いつかは追い抜く。

そんな気持ちの表れた勝ち気な少女らしい強気な笑顔。

「応援してる、みなみちゃんは楓ちゃんに負けない物をきつと持つ

てる、これも正直な気持ちだよ」

幸四郎も笑い、突き出された握りこぶしに自分のこぶしをコツンと当てた。

「ありがと……ねえみんな、いい目標が出来てこれ幸いよね!？」

みなみは幸四郎に頷いて恋音達に振り返る。

「はいっ! わ、私も頑張りますっ、せめて同じくらいの歳と判ってもらえるくらいには!」

「そうだね、ボクも八千万円のマンション貰えるくらいになるっ!」

「そうですね、私もみなみさんを見倣って今度、楓さんをジーツと睨んでみますよ!」

楓の話に圧倒されていた様子だった恋音、まゆり、百合乃も三人揃って活気づいたのであった。

その日の夜。

「楓ちゃん、いい刺激になってくれますよね?」

事務所で幸四郎は書類を整理しながら、そう高音に話を振ると、

「さあ……まだどうだかはわかりませんが、彼女のプライドと美貌は諸刃の剣ですからね、きちんと坊っちゃんがその辺りを調整してあげないといけないと大変な事になりますよ、行き過ぎたナンバーワンは店には良くないですからね」

高音は顎に手を当てながら答えた。

「行き過ぎたナンバーワンか、いくら楓ちゃんでも俺はそこまではならないと思いますよ」

「みなみさん達ですか？ 随分、かっってますね!？」

高音が笑みまじりに肩を竦める。

「ええ……もちろん」

幸四郎は強く頷いた。

プルルルルッ

その時、事務所の備え付けの電話が鳴った。

「女の子の面接希望でしょうか!？」

「だと良いですね」

時間は遅いが、こちらは夜の仕事だし、そういう業界に勤めている女の子ならば夜にかけてくるのもあり得る事だ。

「はい、もしもしプリンセスオークションですが」

幸四郎は受話器をとらずにハンズフリーボタンを押した、面接希

望なら高音にも初めの会話の印象が解るようにである。
だがその電話は予想外の物だった。

「フフフツ、明日……面接にお昼頃に訪れる美少女は将来、新大空町の風俗の神と呼ばれる女の子なのです、いや、なのだから、絶対に採用するのですなのだから……そして採用した暁には厚遇をも……ゴホツコホツ、むせたのですっ、さらばなのですっ」

非常に可愛らしい声を無理矢理にかすれさせた声、途中で無理がたたった様でむせ返るとその電話は勝手に切れたのであった。

「……」

無言で高音を見る。

彼女はぽつりと言った。

「この娘、正気ですか？」

第13話に続く

第13話「巫女服、幼なじみ」

1

「どうも遅くなりましたのです、ボクは天城佐久耶あまぎ さくやと申しますので
す」

「はあ……」

「お待ちしました」

応接室。

入ってくるなり、ペコリと丁寧に頭を下げ、名乗った佐久耶とい
う少女に幸四郎も高音も一瞬、思考が止まりかけた。

「じゃ……私はもういきますね」

「ありがとうございます」

微妙な様子で案内してきた恋音に笑顔で礼を述べ、手を振った佐
久耶は再び幸四郎と高音に振り返り、

「宜しく願いますなのです」

と、ニツコリと笑顔を見せたのだった。

「天城さん……いつもその格好で!?!」

正面に女の子を置いて、幸四郎と並ぶいつもの態勢でソファーに
座った高音は眼鏡を直しながら訊く。

「はい、ボクは巫女なので当然の如く、巫女服となります」

「巫女さん……って他で仕事してるのか？」

「いえいえ、ボクは神洋島という辺鄙な島の出身です、巫女さんは精神的な事なのです」

佐久耶は笑う。

巫女服を着ているくせに、染めたセミロングがよく似合う笑顔で、他の女の子達と遜色ない可愛らしさだし、プロポーションにしても、みなみ位のグラマーさが有りそうで、目立ちにくい巫女服の割には胸元はしっかりと豊かな膨らみを主張している。

「どうかお願いしますのです、島では仕事が無く、有り金をはたいて新大空町にやってきたのです」

有り金をはたくとは穏やかではないが、明るさを崩さずに佐久耶はまた頭を下げた。

「それで……あんな……いちいち……風俗の神になるとかなんとか」

「あ……あ？ イヤイヤイヤ……ボクは知りません、電話なんてしてません」

高音の言葉を慌てて否定する佐久耶。

「私……電話なんて言ってませんよ」

「はうあっ」

しかし、案の定、簡単な罠に引っ掛かる。

「まあ……電話の件はいいとして」

高音は幸四郎に視線を向けてくる。

人事の最終決定権は当然オーナーに在るのだ。

「まあ……普段着が巫女服でも構わないか……かえって人気が出るかも、ルックス、プロポーションは申し分ないし……」

幸四郎がそう呟きながら見つめると、

「恥ずかしいのです!」

昨夜はキャー、と頬を押さえて身体を振る。

「参考までに……この業界以外で面接の時、これを訊かれたら、その会社はオススメしないですけど、佐久耶さん、男性経験はどうですか?」

高音が訊くと、佐久耶は更に激しく身体を振り、

「うわぁっ、凄い質問がきたのです! 結構、たくさんとしか答えようがないのですっ!」

目をつぶりながら、答えたのだった。

「見かけもプロポジションも抜群ですし、あの性格も面白いですからね、僕は雇おうと考えてますよ」

「ですね、彼女はやる気もあるようですし、雇う価値は十分にあります」

天城佐久耶の採用について話す幸四郎と高音、採用はすんなりと決まる。

「さてと……では彼女には後日、連絡するとして、他に探さないといけない人材もいますね」

「他……ですか？」

「ええ、バックアップスタッフですよ、当面は坊っちゃんも私もやるとして、もう二人くらいは雇わないといけませんね」

「そうかあ、ホールに出す料理や女の子の部屋からの注文に対応しないといけないですよね？」

幸四郎は手を叩く。

「他にも、女の子のお部屋のメイキングとかもあるんで、なかなか大変な事になりますけどね、始めのうちは知り合いにヘルプに来てもらいますよ」

「お願いします」

「じゃあ、調理兼雑用スタッフは一人、心当たりがあるので声をかけておきますよ、任せてくれますか？」

「ええ、もちろん」

異論などあろう筈はない、高音はこの業界のプロだ、彼女の連れてくるスタッフならば間違いはないだろう、幸四郎は素直に頷いた。

「じゃあ、紹介します……わが店の新しいプリンセスとして入店していただく、天城佐久耶さん、スタッフとして皆さんを支えてくださる、入来るみさんのお二人です」

翌日の夜。

プレオープンの打ち合せという事で、店に集合した面々に高音は二人を紹介した。

「よろしくお願いします、二人とも可愛いですう」

「ホント、よろしくね」

恋音とみなみが挨拶すると、

「宜しくなのです！」

「てへへ……よろしくね」

佐久耶とくるみはそれぞれ笑顔で挨拶を返す。

「くるみちゃんは可愛いのにスタッフなんだ！？　ボクはもったいない、と思うな」

ウリ坊を抱いたまゆりが言うと、

「そうですよね、でも支えてくださる方もいないといけませんから」

同意して笑う百合乃。

「スタッフにしては可愛いのは同意ですわ……」

楓も腕を組んで素直にはないが、くるみの容姿は認めている。

「いやぁ……くるみは無理だよ、そりゃあ顔は幼いしアイドルっぽいし、胸とかもおっきくなったけど、男と経験が……」

幸四郎は苦笑いを浮かべて、みんなに言うが、

「……ってなんで、くるみなんだよ!？」

と、ノリツツコミをしてから高音とくるみを見る。

「だって、坊っちゃんには私に任すって言ったじゃないですか？」

「くるみ、料理も出来るんだよ! 幸四郎ちゃん、くるみの胸とか興味あるんだ、恥ずかしいな」

高音はごく冷静に答え、くるみは恥ずかしがる。

「くるみっ! おまえな、ここがどういう……」

くるみに顔を近づける幸四郎、だが唇にピッと人差し指を当てられてしまう。

「んっ……」

「くるみは幸四郎ちゃんを手伝いたいもんね」

ペロツと舌を出すくるみ。

『か……かわいいっ!?!』

思わず浮かんでしまった感情を押し殺しながら、

「か、勝手にしろって! でも幼なじみだからって容赦はしないかな!」

と、幸四郎はくるみに背を向け叫んだのだった。

続く

第14話「くるみ、お手伝いに来る」

1

「よっつっ！」

軽快なかけ声と共にフライパンの上で、チキンライスが踊る。

「はい、できたぁ！」

会心の笑顔を浮かべながら、くるみは皿に盛ったチキンライスを幸四郎の前に出した。

「お前……そんなに料理出来たっけか!？」

「てへへ……調理師免許取ったんだ」

驚く幸四郎に照れ笑いのくるみ。

「見かけは合格ですよね、問題は味……ですよね？」　くるみと並んでいる高音がどうぞ、と挑発的に促してくる。

「もちろん！　いくら料理がメインじゃないとはいえ、女の子との楽しい時間に料理はアリ！　それが不味かったら……あら？」

幸四郎が手に取ろうとしたスプーンが無くなっている。

「ん……いけますわね、あくまでも、チキンライスが持つ、素朴なケチャップベースの味わいを失わせずにチキンの量、柔かみもいいですわ」

「楓ちゃん!？」

そこには幸四郎のスプーンを奪って先に試食し、感想までも終える楓。

「美味しい!？」

褒められた子供のように目を輝かすくるみに、

「ええ……わたくしも身体の管理もあって、美食を尽くす、という訳ではありませんが、高級レストランには慣れっこ、いくらか舌には自信がございます、そのわたくしが合格と言ってるんだから合格ですわ」

楓は微笑む。

「楓ちゃん、俺が試食しよう……」

「はい、どうぞ」

「んぐ……」

しょうがないな、といった風に抗議をしようとした幸四郎の口に、すかさず楓はチキンライスをとったスプーンを入れてくる。

「むぐ……むぐ……ん、美味しい！」

「でしょう!？」

パアッ、と顔を輝かす幸四郎にも、楓は肩をすくめて微笑んだ。

「やだ、幸四郎ちゃんったら、間接キッス！」

そう声をあげて勝手に盛り上がるくるみを横目に、幸四郎は案外にフランクな楓に内心、意外さを感じていたのだった

結局、くるみはメニューに載せようと思っていた料理はすべてこなしみせた、すべてがチキンライス程の出来ではなかったが、料理をメインにする訳ではない営業形態の店の味としては上等だったので、主には調理係としての採用が決まる。

ふつうは家があるので自宅通いだ、当人は専用のアパートに来たが、しかし高くはないが家賃もかかるわけだし、これから採用する女の子の部屋も確保したい幸四郎が説得し、どうにか納得させる。

佐久耶の方は、なんとか島とかいう辺鄙な島の出身らしいので、部屋を見るなり、

「いい部屋なのです」

と、スナナリ入居が決まったのであった。

「住ませてもらえないから、遊びに来たよ」

「早っ、採用したの昨日の話だろ!？」

翌日、アパートの軒先でニッコリ笑うくるみ。

幸四郎は呆れ顔で眉をしかめると、

「えへへ……だって、みんなと早く知り合いになりたかったんだもん、くるみはスタッフだけど、みんなの仲間なのは変わらないんだしね!」

くるみは短いツインテールの後ろ頭を掻く。

「じゃあないな……引っ越ししてる娘でも手伝ってあげなよ、二階のまゆりちゃんや百合乃さんは、まだ引っ越し終わってないらしいからな」

「はい! 後で幸四郎ちゃんの部屋でも、くるみを遊ばしてね!」
幸四郎が二階を親指を立てて差すと、くるみは手を上げて走りだす。

「二階への階段は走るなよ、今度直してもらうけど、古いからな!」

「あいあい」

二階への階段を上がる年下の幼なじみの後ろ姿。

「……まったく」

一見、変わっていないが、くるみも子供っぽさが前面に出ていた昔とは上手く言えないが、何かが違う。「可愛く……なったよな」

幸四郎はもちろん、直接聞こえない声で呟いた。

「手伝うよっ！」

くるみは元気良くそう言いながら、ドアが開けられたままの一室を覗き込む。「ああ……ええと、入来さんでしたっけ!？」

そこは百合乃の部屋。

狭い玄関、たくさんの段ボールの置かれた部屋に彼女は座っていた。

「百合乃さん、段ボールすげっ！ 部屋が埋まってるよ!？」

「ええ……そうなの、八畳と六畳で何とかなるかな、って思ったんだけど、何だか持ってきすぎたみたいで、何処から手をつけていいかもわからないの」

声を上げたくるみに百合乃は苦笑する。

「よし、じゃあ手伝うからさ、先ずはどっちかの部屋に段ボールを集めてから、残った部屋のレイアウトを決めようか!？ 入って手伝ってもいいよね!？」

くるみはトレーナーの袖を捲る。

「えっ!？ いいんですか、悪いですよ」

「いいから、いいから……入ってもいいよね!？」

屈託のない笑顔を見せ、スニーカーを脱ぐくるみに、いったんは遠慮した百合乃も、

「ありがとうございます、お願いしますね」

と、笑顔を浮かべた。

「百合乃さん、大事っぽいね、手伝おうか？」

そこに姿を見せたのは、みなみだ。

「あっ、みなみちゃん、幸四郎ちゃんがいつもお世話になってるね」

「あっ……くるみちゃんだね？ 百合乃さんを手伝ってくれてん

の!？」

挨拶をするくるみに、みなみが明るい顔を見せる。「そうなんだ!」

「へえ、じゃあさ、恋音ちゃんや、まゆりも連れてくるから皆でやろうか?」「やった、みんなと一度に知り合いになれるよ、早く終わるしいね」

みなみの提案にくるみは嬉しそうに笑った。

百合乃の部屋から時折、笑い声や何かに驚く声が、階下の幸四郎の部屋にも聞こえてくる。

安普請のせいもあるが、どうやら皆で百合乃の部屋の片付けの手伝いをしながら、色々としている話が盛り上がっている様だ。

「まったく、話ばかりではかどってるのかよ?」

プレオープンへの様々な資料を読み書きしながら、幸四郎は苦笑する。

「でも、これでくるみも慣れてくれそうだな、元々人懐っこいしな」くるみが自分の元で働くつもりでいたのは、正直に驚いたが、上手くやっていけそうなのに安心する。

「さて……先ずはオーナーの俺がしっかり勉強して、店をきちんとなしないと、みんなに逆に迷惑をかけかねないな」

幸四郎は一人呟き、再び資料に目を落とすが……自分の部屋のドアが軽くノックされた。

「くるみか!？」 いや、降りてくる気配はなかったもんな……はい、

はーい」

上はまだ騒がしい。

立ち上がり、ドアを開ける幸四郎。

「あ……」

意外な人物に幸四郎は一瞬、対応に迷う。

「今日はオーナー、失礼しますわ」

そこに立っていたのは、この安普請のアパートが全然、似合わない御堂楓だったのである。

続く

第15話「アメトモニキタル」

1

「一体……どうし」

楓に突然の来訪の訳を尋ねようとした幸四郎は、楓の足元に視線を下げていき、言葉を止める。

黒のブーツの足元には、明らかにキャパシティーを越えて膨れたキャスター付きの旅行鞆。

「何しに来たか、わかります？ 私には説明頂けませんでしたわよね？」

楓は後ろ頭にアップにした、赤茶色の髪をスツと掻き上げる。

「説明って……まさか、このボロアパートの事？」

「そうですわ」

「いや……楓ちゃんに説明する必要は無いんじゃないかと……」

「職務の怠慢です」

苦笑いを浮かべる幸四郎に対し、楓はビシッと言い放った。

確かにそうだ。

福利厚生の一環（なのだろうか？）である寮を新しく雇い入れた使用資格のある人間に説明しなかったのは、楓の言う通り、幸四郎の職務の怠慢だ。

それは正論。

しかし、超のつく有名人達を相手に人気を得て、さらにウン千万のマンションのプレゼントを断るような楓に、この内装は外観ほどくたびれてはいないのが、幸いなだけのアパートを紹介できようか、と思うのも正論ではないだろうか、などと幸四郎は自己弁護してしまう。

「いや、ゴメンね、だってさ、楓ちゃんみたいな娘にこのアパートは……」

「紹介できない？ 勝手に決めますわね、わたくしはこんな感じのアパート、好きですわよ」

「え！？ まさか……」

「遊びに来たように見えます？ このカバン一杯にオモチャでも入れているとでも？」

判らない人ね？ 楓の瞳はそう言っている。

「いや……もちろん、そうは思わないけど」

「なら、部屋を案内して下さる？ ところで部屋は一階がいいですわね」

「わかった、二階はあんまり好きじゃない？」

「いゝえ」

楓は肩を竦めてから、自分の足元を指差す。

「気を使ったつもりなんですわ、結構重たいですわよ、あとそこに停めたレンタカーの荷台にも、荷物が載っていましてよ」

「あんたが何でくるのよ？　どこかの有名人に買ってもらった高級マンションにでも、住まわせてもらってるんじゃないの？」

「そんな事、言いませんでしたわ……それに、後が拗れる不動産は貰わない方が吉ですわ、あとその段ボール割れ物ですので、お気を付けあそばせ！」

段ボールを抱えたみなみに、楓が腰に手を当てて答えた。

「何よつ、偉そうに！　まだ百合乃さんの所も片付け終わってないんだから、生意気言うと、そっち優先するわよ！？」

「そちらで役に立たないから、追い出されたんじゃないやありませんの？」

「んな訳あるかつ！？」

「まあまあ……楓ちゃんもせっかく、みなみちゃんが手伝いに来てくれたんだからさ」

そんな二人のやり取りを仲裁する幸四郎。

結局、楓の荷物は表に停めていたレンタカーの荷台一杯にあり、百合乃の部屋を片付けていた面々のうちで、重い荷物に対応できそうな、みなみを幸四郎が呼んだのだが、どうにも二人は相性が合わないようなのである。

『喧嘩するレベルじゃないにしても、恋音ちゃんとまゆりちゃんも微妙だし、やっぱり可愛い女の子っていうのはみんな仲良し、って訳にはいかないよなあ……でも、それを上手く妥協してやっていくのもオーナーの仕事かもな……』

車の荷台から段ボールを降ろす手を止めて、幸四郎は二人を見る。何やら言い合いを続けながらも、段ボールを運び込む楓とみなみ。

『でも陰険にならないだけまだマシか……開店したらライバル心がみなみちゃんを上手く刺激してくれるといいけど……』

そう考えていると、

「何、ボサツと……」

「してますのよっ！」

と、幸四郎は二人に同時に怒鳴られてしまうのであった。

2

「崎原みなみ」

「斑鳩恋音」

「織田百合乃」

「御堂楓」

「小寺まゆり」

「天城佐久耶」

事務所の応接机の上に一人一人の名前を呼びながら、写真を並べる高音。

「非常に高いレベルのルックスの女の子達です、素人の割合が気になります……かなりの物です、それぞれの女の子が、一流店でもルックスだけに限って評価させて頂ければ、トップクラスです……」

だが、」

正面に座る幸四郎を、見据える高音。

「風俗は数です」

「……」

それに幸四郎は何も答えなかった。

「募集広告や知り合いに声をかけて、面接した女の子はかなりいるのに、契約に至った娘は……まだ六人ですよ、数が足りません」

「高音さんなら、十分に合格なんだけどなあ」

「ふざけないで下さい、面接で切り過ぎだと言ってるんです！」

プレオープンは人数はそうはいらないですが、本開店ともなれば数が必要です、少しは妥協して下さい！」

高音は机を強く叩き、幸四郎に顔を近づけた。

「しません」

幸四郎は笑う。

「少なくとも、女の子の質では絶対に譲りません、お客様も馬鹿じゃない、万単位のお金を出して、部屋で一緒に過ごす女の子は可愛くて、お客様を大切にする娘が良いに決まっています、そうじゃないや、この街のレベルでは他の店に流れていく、満足しなきゃ二度とは来てくれない」

「坊っちゃん……」

「高音さん……」

幸四郎はソファから立ち上がる。

「もちろん、商売だから赤字にするつもりは無いけど、俺は大王チエーンを逆に潰してやろうとは思ってないんですよ、親父は出来たかもしれないけど……俺は親父じゃないし、大王チエーンと戦う為に、お客様や女の子を利用するつもりはありませんからね」

そう言うと、幸四郎は頬を掻き、

「高音さんの意見を聞かなくて、申し訳ないですけど……俺は俺なりの精一杯、理想を叶えるためにやるだけです、じゃ今日は先に上がります」

と、事務所を出ていく。

事務所に一人残る高音。

「理想か……」

歓楽街の灯りが星空の様に見える窓際に立つ。

いつの間にか、ガラスに水滴が付いていた。

弱い霧の様な雨。

「理想……それは容されるか、容されないか……」

高音は呟いた。

「雨かよ……」

暗い空を見上げた。

「だめだ……」

力尽きたように少女は、降りたシャッターの前に座り込む。
閑散とした裏通り。

「金もない、雨宿りする場所もない……そして」

頼る者がいない……

遠藤知世は膝を抱えた。 華やかな芸能界時代の友人はみんな留守番電話。

一番、迷惑をかけた少女には連絡を取りたくない、相手からの電話にも出ていない。

「結局はあの世界は……私には……ただの蜃気楼みたいなもんだっただ」

アイドル時代のトレードマークだった、両方の側頭部から短く伸ばしたツインテールに手を触れる。

「濡れた方がいいか……なんせ、四日風呂に入っていないから……」

飯は何日……三日食べてないな……電池切れてら……」

日にちを確認しようとした携帯電話はバッテリー切れをしていた。

「死ぬかぁ……いや……死んじまうくらいなら」

空腹と疲れでつぶりかけた瞳を薄く開けた。

次に通った男でいいや。誰でもいいや。

……どうでもいいや。

男が通りかかった。

シャッターに座り込む知世の前で、足音が止まる。

「よう、兄ちゃん……」

知世は顔を上げた。

若い男だ。

「タダでいいよ、ホテル連れてって、風呂に入れてくれて……最近
はラブホだって、カラオケレストランくらいのはあるから……飯を
喰わせてくれたら、後は一晩中、好きにして、多少変態プレイも相
手してあげるから」

知世は薄笑いを浮かべて、そう告げる。

「わかった」

男は頷き、シャッターに座り込む知世をそっと、抱き上げたのだ
った。

第16話に続く

第16話「知らないベッドで瞳を閉じる」

1

「気になるんなら、まずはお風呂だね」
「えっ!？」

耳元で囁く声で、知世は目覚めた。

行き倒れかけて、通りかかった男に声をかけ、抱き上げられた所で、空腹と緊張の糸が切れて気を失ったのかもしれない。

どこかのホテルのバスルームっぽい。

まだ、男は知世を抱きかかえていた。

「あたし臭い!？」

「平気だよ、服はどうしようか?……洗濯しておこうか? 一応、代えはあるけど……」

「全部洗濯して! 上がったら、食べ物だからな、くれないとしな
いっ!」

「はいはい、中華は嫌いじゃないよね?」

男は苦笑する。

「なんでもいいっ、何!? 一緒に風呂入るの? 観たいなら、観
せて上げるけど食べ物くんないと……」

「一人で入ってね、上がるまでには御飯、用意しておくからさ……
じゃあ服はその籠に入れておいてね」 知世は小さめの脱衣場に
降ろされ、男は出ていく。

「なんか、掴み所のない奴だなあ!？」

知世はため息をつき、服を脱いで籠に全部放り込み、浴室に入る。
真新しい浴室だ。

あくまでなりにだが、湯の張られたバスタブもなかなか広い。

「また何日、入れるか分かんないんだ」

知世は念入りに身体と髪を洗い、バスタブに身を沈める。

「ふい」

生き返る感覚。

「脱衣場に少し入るよ」

そこを見計らったのか、脱衣場から、さっきの男の声が聞こえる。

「着替え……下着が無いんだ、服はちょっと変わったデザインばかりで……それでも君の服洗う？」

「変わった服でもいいよ、洗ってくれっ、下着なんかどうせ……」

知世が返答すると、

「じゃ……置いておくからね」

男は知世の服を入れた籠を持って、外に出ていく。

「変な奴……でも、悪い奴じゃなさそうだ」

知世は鼻で笑うと、湯を両手ですくい、バシャツと顔を洗った。

「待たせたな……って、なんじゃこりゃ〜!？」

脱衣場から出た知世は、思わずノリツツコミ。

「だからさ、変わった服しかない、って……」

脱衣場を出ると、そこはベッドルームだ。

ダブルベッドが置いてあり、男はそこに座って苦笑している。

「変わったって、これはセーラー服ではないかい？」

知世は男を睨む。

「多分……でも、スカート短くない服で君のサイズに合いそうなのが、今は無くてさ……チャイナドレスあったけど、スリットが入ってたし、君はノーパンだしさ」

男は頭を掻いた。

「それでセーラーかい！」

知世は怒鳴るが、鼻腔をくすぐる匂いに、その勢いは衰える。

「ああ……近くの中華料理店から出前取ったよ、ラーメンはさっき来たばかりだけど、麺が伸びないうちに食べた方が……」

知世の興味がそちらに移ったのが、わかったのだろう、男は小さなテーブルに置かれたラーメンとチャーハンを指差した。

「いただきます！」

とりあえず、格好なんてどうでもいい、知世はテーブルに向かい膝立ちになり、箸を手にとり、ラーメンを啜る。

煮干しの風味の強い醤油ラーメンだ。

麺はちぢれ細麺。

空腹に染みる。

「うううう……旨い」

セーラー服姿の自分が、ホテルの部屋で小さなテーブルに向かい、膝立ちでラーメンを啜る。

ラーメンに浸かっていたレンゲで、チャーハンをすくい口に入れる。

チャーハンの塩気に混じる、煮干しスープの味。

「くううつ」

ラーメンとチャーハンを交互に口に運ぶ。

知世の手は止まらなかった、自分でも意地汚い食べ方だと思う。
良いんだ、これくらい貪るくらいで。

『なにせ……私は風呂とこのメシで、これから……この男に一晩中
好きに抱かれるのを自らの選んだ女なんだから……』

風呂上がりの汗でない物が知世の頬を伝った。

2

「ご馳走様ッ！」

知世は両手を合わせると男を見て、

「あと5分……いや、7分我慢して！」

と、断り脱衣場にかえり、洗面台の鏡に自分の姿を映す。

まずは髪だ。

少し栗色に染めたセミロングの両方の側頭部をリボンで縛り、短
めのツインテールにする。

顔には薄い化粧。

口紅は付けない。

髪の毛にブラシをかけながら、顔の向きを変えて、あらゆる方向
から自分をチェックする。

可愛いかな？

うん、カワイイ！

ベスト！？

ベストだっ！

ハミガキもする。

そして、知世はもう一度、鏡をよく見てから、脱衣場を出る。

「ハイ、おまたせ」

知世は笑顔で、男にウィンクした。

「可愛いよ……えっと、名前は!？」

「ち……せ」

男の座るベッドに、寄り添う。

「好きにしているよ」

「知世ちゃんか……」

男は知世の両肩を掴み、見つめてくる。

「じゃあ……好きにさせてもらうよ」

「う……ん」

知世は目を閉じる。

「じゃあさ、話を聞いてもらうよ……俺は御神本幸四郎って言うんだけど……この店のオーナーなんだよ、知世ちゃんがもし行く所無くて、行き倒れてたのならウチで働かない!？」

「い!？」

知世は片目を開いた。

「お風呂と出前で、君みたいなカワイイ娘を好きになんて勿体ないよ、だけどこの話を朝まで真面目に考えてみてくれる？ 嫌だったら朝まで寝て、出ていってくれていいよ……これがお風呂と御飯の分」

幸四郎は知世に笑いかけた。

「じゃあさ、お店って事は？ もしかして、ここは風俗店!？」
「オープン前だけどね……じゃあさ、出るなら一階の裏のドアから頼むね」

驚く知世に頷いて、幸四郎は部屋を出ていく。

「何なんだ……」

一人になった部屋で、知世はポツリ呟く。

何だか脱力感。

ダブルベッドに身体を投げ出す。

柔らかい。

久しぶりの感触。

「寝ちまおう……」

知世は身体の欲求に逆らわずに目を閉じた。

続く

第17話「参上、遠藤知世！」

1

「遠藤知世」

翌朝。

セーラー服姿で、事務所のソファに座った知世は、対面する幸四郎と高音に名乗った。

「遠藤知世!？」

「そう、遠藤知世以上でも、以下でもない」

目を細める高音を、知世は少し睨んでから頷く。

「高音さん……何か？」

高音と知世のやり取りに首を傾げる幸四郎。

「ちょっと待ってくださいね」

立ち上がり、高音はデスクの上のノートパソコンを持ってきて座り、膝の上で少し操作してから、幸四郎にも知世にも、画面が見える様に応接机の上に置く。

「えっ!？」

そこには、まさにアイドルといったステージ衣裳に身を包んだ知世が、舞台上で歌う姿が映し出されていたのだ。

「まさか知世ちゃんはアイドル歌手!？」

「まあね……ほとんど世には出なかったけど」

驚く幸四郎、知世はつまらなそうに答え、脚を組み頬杖をつく。

「どうりで……可愛いからなあ」

「首になったよ、半年も前に……」

「なるほど……」

高音はいつの間にか、ノートパソコンを膝の上に戻していた。

「ネットじゃ、妊娠したとか、相方や事務所に内緒で借金した、とかあるけど、ウソっぱち! 借金した覚えはないし、妊娠もした覚えはないっ!」

知世は怒鳴った。

「あなたの名前で検索した記事も、ほとんどがその手の記事です」

高音が検索した記事には、アイドルデュオを組んでいた少女が、ソロで躍進すると、取り残された孤独と悩みから乱れた知世の素行が事務所の逆鱗に触れ、デュオを解散、解雇されたとある。

「この記事は!？」

幸四郎がノートパソコンの画面を指差すと、

「それはマジ、相方の才能が凄くてさ、着いていけなくて自暴自棄、相方の稼ぎで遊びまくって……本当に悪かったと思う、首になったのは当然だよ」

知世は俯き、罰の悪そうに答える。

「そうかぁ……解雇されたのかぁ」

息をつく幸四郎。

知世は顔を完全に伏せてしまうが、

「顔上げて」

「えっ!？」

そう幸四郎から声をかけられて、再び顔を上げる。

幸四郎はジッと、セーラー服の知世を見据えて、言った。

「素性は聞いたよ、知世ちゃん……では改めて頼むよ、君がその気になったのなら、ウチの店で働いてみない？」

「オーナー……」

高音が声をかけるが、それは戒めの響きではなかった。

「な……なんで!？」

自暴自棄に遊びまくり、事務所をクビになった素性がばれたのに

……知世は驚く。

「……知世ちゃんのした事は良くないし、反省すべきだと思う、けど……知世ちゃんの可愛さが、十分な合格点にあるのはもちろんだし、ウチに来るお客様の中には、精神的に疲れ果てて、何か慰めや叱咤激励されたい人もきつという……その年齢で競争社会の芸能界を生きて、苦勞して、失敗したかも知れないけど、キチンと後悔して反省したなら、君はそんな人達のチカラになれるかもしれないと思うんだ」

幸四郎は笑う。

「もちろん風俗だからね……芸能界にいた知世ちゃんには抵抗があるのも解るから……あくまでも君が良ければ、って事」

「あんたさぁ……変わってるよ」

知世が苦笑すると、

「結構、言われる」

幸四郎は肩を竦め、二人は微笑み合った。

2

「ウチの新しいプリンセス遠藤知世さんです、店では知世ちゃんです」

高音が紹介すると、

「宜しく」

知世は腕を組みながら、軽く挨拶する。

結局は、知世がアイドルであった事は隠す訳ではないが、幸四郎と高音の胸の内にしまう事にする。

当人は気づかれたら、気づかれたらだよ、と知世は言っている。

「仲間だ！ 胸が無い」

「で、ですね！ 幼い方でよかったです」

顔を見合わせるまゆりと恋音に、

「おいおいおい」

と、知世は目を細めたのだった。

知世は挨拶の後、二階の部屋に案内される。

プリンセスオークションでは、この部屋は汚くしない、ダブルベッドを置く等の条件を守り、自分で自由にレイアウトする事になっている。

「迷うなあ……あたしは部屋は殺風景なんだよ」

知世は案内した幸四郎の前で、ベッドに寝転ぶ。

「じゃあ、そうすればいいよ、知世ちゃん的生活感があれば良いんだ、住んでた部屋を思い浮べて」

「えー!? テレビにゲーム機が二種類あったなあ、結構ゲームはやった」

「じゃあ、それでいいよ、ゲーム機置いて、知世ちゃんの部屋らしく、してくれればいいよ」

「置くのにゲーム機買うのかよ？」

知世が眉をしかめると、幸四郎は頷く。

「買っていいよ、領収書を切ってくれていい、ある程度までなら、経費で出せるからさ、とにかく知世ちゃんらしい部屋にして！」

その答えに、

「お前、本当に変わってんなあ……」

知世は寝転んだままで、幸四郎に笑った。

「まあ、とにかく宜しく……知世ちゃん、お店のエース期待してるから！」

「期待してもらえるのは嬉しいよ」

知世は寝転んだままで、幸四郎を見つめる。
意味ありげな瞳。

「知世ちゃん!?」

ベッドに座る幸四郎が首を傾げると、知世は、

「オーナー、あたしのあっちも試さないと、いけないんじゃないの

「？」

クスリと笑って、両手を広げる。

「知世ちゃん……」

「き……て……」

優しい囁き。

思わず息を呑む。

幸四郎の知らなかった知世の色気が本能を鷲掴みした。

続く

第18話「ホームページを作ろう!」

1

「はぁ……はぁ、知世ちゃん……やっぱ知世ちゃん、もの凄く可愛かった、最高だったよ……んっ」

「ふう……ふう、幸四郎……んんっ」

裸の幸四郎と知世は、互いの荒い息を整える間もなく、キスをする。

既に、時間は夜の10時を過ぎている。

「知世ちゃんが、可愛くて時間忘れちゃったよ」

「三回もするから……あんなに激しく……」

身体を起こしてベッドに座る幸四郎に、知世はシーツを手元に寄せて上半身を起こし、乱れた両サイドのツインテールを気にしながら、苦笑する。

「知世ちゃん、お風呂入れば？」

「お前もね」

「一緒に入ろうか？ この間、入れそびれちゃったしね」

バスルームを指差す幸四郎。

「つたく、でも一緒にお風呂に入るのも練習？」

知世が首をかしげて訊ねる。

「ん、個人的なお願い……だね」
「お願いなら、しゃあないかな？」

幸四郎が頬を掻きながら答えると、知世は笑顔でベッドから降り立ち、胸元から巻いたシーツをストンと落としたのだった。

「事務所でアパートの部屋の鍵を渡すから」
「うん」

風呂から上がった二人は店内の廊下を歩く。

知世は髪の毛をバスタオルで拭きながら、幸四郎についてきていた。

「知世ちゃん、もう十二時近いから、今日はここに泊まっていたら？」

「風呂でも、誰かさんが我慢できない、とか言い出すから、こんな時間になったんだと思うけど！」

「ごめんね……」

知世に眉をしかめられると、笑いながらドアを開けた幸四郎。

「こんばんわ、幸四郎ちゃん！」

予想外の笑顔。

そこには、高音と一緒に応接机の上のノートパソコンに向かう、くるみがいたのである。

「な……なんで、こんな時間に？　高音さんも帰ってないんですか？」

驚く幸四郎。

「坊っちゃん、ご苦勞様でしたね……知世さんに部屋を案内するのに、随分と時間をかけられた様で」

高音の目は細い。
後ろにいた知世もバスタオルをパッと隠すが、時すでに遅し。

「幸四郎ちゃん、くるみは今日は高音さんとお店のホームページを立ち上げようってね、色々アイデア出しながら、頑張っていたんだよ」

くるみも流石に、知世との事が解らない訳では無いだろうが、それには触れずノートパソコンの画面を指差した。

「悪いな……遅くまで」

「平気、平気、だから画面を見て！」

覗き込みながら謝る幸四郎に、くるみは屈託のない笑顔を浮かべる。

「プリンセスオークションの公式サイトか、お店の場所に……女の子の情報、イベントのお知らせか、アイドルみたい、結構上手く出

来てるな」

ほう、といった感じで幸四郎が感心すると、

「そういうイメージで造りました、まだまだですが、女の子の情報等は、お客様が最も知りたい情報だと思いますから、充実させたいですね」

高音が答え、

「くるみと高音さんも裏方日記書こう、って話してたんだ！」

と、くるみは声を弾ませる。

「女の子の情報は綺麗に画像をアップさせて、それぞれの女の子に、つぶやきとか日記とか書かせると良くない？」

知世も画面を覗き込むと、

「そうだねえ！ メイン画面も週ごとに女の子を表紙みたいにしたいね、知世ちゃんメイン画面飾る？ 近くに写真館あるから、撮ってもらおうよ」

くるみは知世に笑顔で振り返る。

「え……初っぱなから真打ちが出ちゃうと、後に悪いからなあ」
「じゃあ、くるみが表紙やろうかな？」

「あんたがやってどうする、他にも女の子はいるだろうがよ？」

「いやあ、可愛すぎる裏方とか……」

「自分で言うなっ!」

「てへへ……知世ちゃんより、明らかに胸はおっきいんだよ?」

「見りゃ判るわっ、女は胸じゃないっ!」

軽妙にやり合う、知世とくるみ。

何となく、二人は合いそうな気が幸四郎にはした。

結局、四人は明け方までノートパソコンの画面に向かい、ああでもない、こうでもないを繰り返していたのだった。

2

「まあ、正解ですわね……極めて正確な判断力をオーナーが持っていられたのには、安心しましたわ」

「あ、ありがとう」

楓の言葉に頭を掻く幸四郎。

昼下がり、二人はアパートを出て、商店街を並んで歩いていた。向かう先は写真館だ。

紹介してくれた、くるみも先に行って、待っていてくれる予定である。

楓を連れているのは、公式ホームページの扉のモデルとしてだ。くるみや高音と話し合った結果である。

月替わりなどにするにしても、やはり始めはルックスを魅せる事に関して他から抜けてる、知世か楓か、という話になり、その場にいた知世が、乗り気でない様子だったので、楓に頼む事になったのだ。

翌日、幸四郎がそれを楓に話すと、彼女は非常に乗り気で、顔馴染みであるくるみに写真館に事情を話して、協力してもらう事になったのである。

「おい」

岡林写真館と書かれた商店街の一角にあるフォトスタジオの前で、待っていたくるみが幸四郎と楓に手を振ってきた。

「悪いなくなるみ、じゃあ、入ろうか？」

「ダメだよ、まだ来てないもん」

幸四郎が声をかけるが、くるみは首を振る。

「来てない？ 高音さんは今日は役所に用事があって来ないぜ」

「違うもん」

幸四郎が怪訝な顔を見ると、くるみはまた首を振った。

「カメラマンですわね？ わたくしを撮るには、一流のカメラマンが必要だと、手配されたのですか？」

「違うって」

「じゃあ、なんで……ふあああっ!？」

少し自信過剰気味な問いかけを否定されて、怒りかけた楓だが、突如、妙な声を上げた。

「んっ、良い尻だ」

「な、なんなんですよっ？ いきなり人のお尻を触るなんてっ！」

そこには、一人のスッカリ白くなった髪をかんざしで後頭部に纏めた老婆が立っていたのである。

「な……ま、まるで、角のタバコ屋さんのお婆ちゃんみたいな、あなたは何で、わたくしにこんな事を突如、しますのよっ？」

「ふえ、ふえ、ふえ」

楓が、妙に的確な言い回しで老婆を指差すと、老婆は愉快そうに笑い、くるみが声を上げる。

「待ってたよ、コスプレ婆ちゃん！」

「コスプレ婆ちゃん!？」

くるみの口から出た驚愕の言葉を、楓と幸四郎は互いの顔を見合、声を合わせて、思わず復唱してしまうのであった。

続く

第19話「たまたまじゃないの？」

1

「よう、あんたが御神本の後継ぎかい？」

老婆がジトリと、幸四郎を見る。

「え？ はい、御神本幸四郎です、はじめまして宜しくお願いします」

「おうさ、ワシは……」

「コスプレ婆ちゃん！」

くるみが割り込む。

「おい、くるみつ」

「ええ、ええ……コスプレ婆でええよ」

幸四郎がくるみを睨むが老婆は笑った。

「コスプレ……するお婆ちゃんですよ！？」

何だか憐れみの視線を送る楓に、

「違うッ！ ワシは様々な衣裳の貸し出しをこの街で仕切るババアだ」

と、コスプレ婆さんは怒鳴り返したのだった。

「そうなんだ」

くるみは両手を後ろ手に組み笑う。

「なるほど……風俗の貸衣装屋さんですか？」

「平たく言えばな、様々な衣裳を用意できる！」

頷く幸四郎に自信満々に答えるコスプレ婆。

「それに……長年、貸衣装屋をやっておると……」

コスプレ婆は、ジーツとくるみを見つめる。

「なに？」

「身長156？、バスト89、ウエスト61……」

「うあああつ、やめてっ、やめてよお」

いきなり口走ったコスプレ婆に赤面する、くるみ。

「当たってるの？」

幸四郎が訊くと、

「……うん」

くるみは恥ずかしそうにコクリと頷いたのだった。

「っ……それより、今日のモデルは楓ちゃん、そっち、そっちの女の子!」

「おう、そっちか!」

くるみが楓を指差すと、コスプレ婆は楓に振り返り、ジトリと見る。

「宜しく願いますわ」

楓は腰に右手を当て、軽く挨拶して直立。
くるみと違い、まるで照れがない、身体を注視されるのに躊躇が無いのだ。

「ほう……」

コスプレ婆はニヤリと笑い、

「オーナー、いいオンナじゃのう……」

と、しみじみと呟く。

「でしょう? 衣裳の方、宜しく願います」

幸四郎がニツコリ微笑むと、

「まかせいつ、格安で引き立つ衣裳を用意してやるわい!」

コスプレ婆は親指を立てたのだった。

「うんうん、色っぽい、可愛いねっ」

パシャ……パシャ

フラッシュが煌めく。

五十代前半の白髪混じりの紳士風の男が楓にカメラを向ける。

岡林写真館の主人、岡林武雄だ。

まるでグラビア雑誌のカメラマンである。

楓の格好は胸元の開いたドレスにティアラをつけた中世のお姫様。アップにした髪をストレートに下ろすと、イメージはまた変わり、高貴な姫の雰囲気漂う。

「プリンセスオークションという店名じゃからの、始めはベタじゃが、お姫様じゃろ？ 着こなすには拔群のプロポーションが必要だが、あの娘なら問題は無いわい」

「可愛いですね、店のイメージにも合います、ホームページだけでなく、宣伝用のポスターとかにも使いたいですよ」

満足気なコスプレ婆、それは幸四郎も同じだ。

「そうじゃろ？」

「ええ、いい衣裳を選んでくれました」

「わしの店の服は特殊な加工で、不自然な光沢など出さずに汚れに強い、ミルクをこぼしても拭けば、平気じゃ！」

「ミルクをね……」

苦笑する幸四郎。

「先代にも世話になったからな、サービス価格で貸し出すから、コスプレフェアとかをせい！」

ニンマリ笑い、提案をしてくるコスプレ婆に、

「良いですね、開店して店がこなれてきたら、コスプレフェア……是非とも、ご協力を」

と、幸四郎は笑顔を浮かべた。

2

「はい、終わりっ！ 楓ちゃん、ホントに最強」

岡林は力強く頷き、撮影が終了する。

「岡林さんもご苦労様ですわ」

愛想よくニツコリ笑い、ポーズを解く楓。

「今の撮影データ届けますから、お気に入りのを坊っちゃんを選んで、ホームページにお使い下さい」

「はい、ありがとうございました」

岡林に幸四郎は、丁寧に頭を下げた。

「今はこういうのもデジカメかあ」

「ホームページに載せるならデータがある方がいいからね」

妙に感心するくるみに岡林は笑った。

「楓ちゃん、ご苦労様」

幸四郎は一旦、コスプレ婆と一緒に裏に下がり、ドレスから着替えてきた楓に声をかける。

「ええ……ああいう服は人を選びますわね」

「似合ってたよ、本当にお姫様みたいだった、楓ちゃんを連れてきて、大正解」

そう言って、幸四郎はジュースを差し出す。

パックの小さなサイズのオレンジジュース。

撮影はスポットもあったし、汗もかいていた様子だったので、合間を見て買ってきた物だ。

「……」

それを見つめる楓。

「オレンジジュース、嫌いだった!？」

「そ、そんな事ありませんわ……いただきますわ」

幸四郎がその様子に首を傾げると、楓はそう答えてから、ジュースにストローをさして飲み始めた。

「岡林さんにコスプレ婆さん、じゃあ……お世話になりました」

「また、今度」

「コスプレフェアを忘れるなよ」

「また、じゃーね、幸四郎ちゃん」

「くるみも世話になったな、ありがとう」

帰り支度をした楓と並んで、幸四郎は岡林やコスプレ婆さん、くるみに挨拶をして歩き出すが……

「待てい……」

コスプレ婆さんに幸四郎だけ、呼び戻され、耳打ちされる。

「くるみもええ女になっとるけど……楓もいい女じやのう」

「そんな事を言うのに、呼び戻したんですか？」

幸四郎が怪訝な表情を見せる。

すると、コスプレ婆はニヤリと笑い、

「あの娘……撮影が終わった時に、裏で岡林に差し出されたジュースを、自分は身体の管理があるからジュース類は飲まない、と断ってたんじゃぞ」

と、告げてくる。

「え……でも……」

「おぬし……脈があるんじゃないかの？ 職業上のシバリもあるが、

しよせんは男と女、あんな美人に脈があるなら……男ならいつてしまえっ！」

コスプレ婆は幸四郎の背中をバシッと叩いた。

「何をコソコソしてますのよっ？ オーナー、早く帰りますわよ」
「ああ……うん」

つまらない事だ、たまたまじゃないか？
そうは思いながらも、幸四郎は悪くない気分で、楓に返事をした。

続く

第20話「幼馴染み」

1

「こんな感じだけど、どうかな？」

事務所の隅に新たに設けられた、デスクトップパソコンのスペース。

その隅に集まる、みなもと恋音、知世に向かって完成まじかのホームページを開き、くるみは笑顔で振り返る。

「うわあっ、楓さん、可愛いですう！」

「ふむ、まあ……トップページを飾るのを譲ってやったんだから、これくらいはしてもらわんと」

「恋音ちゃん、そんなに驚かなくてもいいわよ、恋音ちゃんだって、こんな可愛いお姫様衣装着れば、楓なんかに負けないし、パソコンの画像は修正できるから、って誰かに聞いた事あるもの」

トップページの楓のお姫様姿にそれぞれが素直に、また勝手な感想を述べているが、不評はない。

何か突っ込んで、藪を突くのも得策では無いと、幸四郎は、自分のデスクで仕事をしている。

「オーナー」

妙に抑揚のない、みなみの呼び声。

無視してしまいたい、それは出来ない。

「何だい？」

「なんで……楓？」

やはり、幸四郎の予感は的中した。

「それは……やっぱ楓ちゃんが、写り方とか撮影とかにも慣れてるからね、それにトップページは週替わりにしてもいいと、高音さんとも話したから、近いうちに恋音ちゃんや、みなみちゃんの番もあるよ」

「そうなんだあ」

目を細める、みなみ。

絶対に訊かれると、踏んでいただけに用意していた答えだ。

「まあ……そういうなら、仕方ないか……」

みなみも出来上がった物の良さを認めていない訳では無かったのだ、それ以上は突っ込めないのだろう。 案外、素直に引いてくれたので幸四郎は一安心したのだった。

「ほらあ、みなみちゃんも幸四郎ちゃんに絡んでないで、話を聞いて！ それでね、それでね、女の子みんなのコーナーもあるから、そこにつぶやいたり、日記を書き込んだりすると、ファンのお客さんが喜ぶかもしれない！」

くるみが楽しそうに説明して、マウスを操作すると、みなみ達の名前が並んだ画面が映る。

「携帯の写真とかも添付出来ますよね？」

「もちろん！」

恋音の質問に、くるみはウインクを返す。

「まるで、芸能事務所のファンサイトだな、細部はこれからだろうけど、よく出来てるよ」

知世も感心するが、

「でも……携帯もロクに扱えないし、ましてパソコンなんて無理」

と、みなみは難しそうに眉をしかめる。

しかし、くるみはそんな、みなみに対しても、

「くるみが教えてあげるし、携帯からでも簡単にアップ出来るから平気、」

と、笑顔を絶やさずガッツポーズを見せるのであった。

2

「後は……高音さんがもらってくる書類があればオッケーだな……」

みなみ達が帰宅した後も仕事を続けていた幸四郎は、一段落が着いた事を確認すると、目をしばたき、オフィスチェアで背筋を伸ばす。

新大空町での風俗営業は、特別に規制が緩く、自由度は高いが、お役所の管理があるだけに、申請や許可など書類が多い、この街での経験の長い高音がいなければ、とっくに挫折していただろう。しかし、いつまでも高音に頼る訳にはいけない、と幸四郎自身もかなりの量の書類とこれまで、格闘してきたのである。

「何か……出前でもとるかな？ 何でもいい屋に頼むかなあ……」

幸四郎は近くの店の名前を呟くが、ドアが開き、空腹をくすぐる匂いが漂ってきたのである。

「幸四郎ちゃん、お腹すいてるよねっ？」

笑顔のくるみ。

手に持ったトレイの上には、スパゲッティが乗せられている。

「くるみ……何で？ 帰ったんじゃないのか？」

「帰ってほしかったのお……厨房でメニューを研究したら、まだ幸四郎ちゃんが残ってるから、お腹空いてるかな、と思って作ったのにい！ この明太子スパゲッティは、くるみが自分で食べちゃうっ！」

「待った、待ったあ……わるい、わるいっ！」

背中を向けるくるみを慌てて、幸四郎は止める。

「いーや！」

「ごめん、ごめん……食べたい、くるみの作ったアルデンテ食べたーい！」

頼み込む幸四郎に、

「仕方ないなあ、じゃ……くるみが食べさせてあげるから、感謝して食べるんだぞ？」

と、くるみはニツコリ笑った。

「はい、あ〜ん」

「あ、うん……」

応接用のソファアーに座る、幸四郎の口にフォークに巻かれたスパゲッティが運ばれる。

明太子スパゲッティ。

程よい辛味。

「美味しい？」

「うん、凄くな」

「うれしい」

隣に座るくるみは、素直に喜ぶ。

「客にも出せるな」

そう幸四郎が褒めるが、

「う〜ん、お客さんに出すのは無理かな？」

と、笑う。

「何で？　そこまでコストかかってないだろ？」

幸四郎が首を傾げると、くるみは悪戯っぽくウインクしながら、

「お腹すかした幸四郎ちゃんへの、くるみの愛が入ってますから！
お客さんにも出せないんです」

そう、エッヘンといった感じで答える。

「くるみ……」

無性に嬉しくなり、微笑む幸四郎。

「色々ありがとな……」

愛しい幼なじみへの素直な感謝。

その言葉にくるみは、何も言わず、ただ嬉しそうに口元を緩め、
コクリと頷いたのであった。

続く

第21話「休業中」

1

「いよいよ、プレオープン真近ですね」

「ええ……女の子にも、ざっと基本的な作法は教えました、お客様にお酒も作って上げられないのも情けないですから……」

高音は風俗雑誌を応接机を隔て、向かい合う幸四郎に見せる。

「これは!？」

風俗雑誌を覗き込む幸四郎に、

「月刊トップガール、新大空町の風俗情報ならば、ダントツの読者からの信頼度と言われて、これを読まずに新大空町には来るな、とまで巷のファンに言われている、風俗雑誌です、載っている情報はほぼ新大空町の物です」

と、高音は答える。

月刊トップガール。

大きさも薄さも、雑誌と言うよりはテレビ情報誌のようだ。カラー表紙は可愛い系の女の子が笑顔を浮かべている。

「一見、アイドル雑誌だ」
「ですね」

幸四郎の素直な感想に高音は同意した。

「ちょっと失礼します」

手に取り、ページをめくると、表紙に出ていた女の子が、「今月のトップガール」として、数ページのカラーで特集されていた。

写真は何かのコスプレした物から、ほとんど全裸の物まで様々だ。店の名前も明記され、女の子が紹介されている。

「月一の特集を組まれた女の子は、指名もうなぎ登りらしいです」

「可愛い女の子ですもんね、こんな風に雑誌に載ってたら、指名しなくなっちゃいますよね、一躍売れっ子って感じで」

「しかし、この街で働く女の子はたくさんいます、月刊の雑誌の特集ページどころか、この雑誌のオススメの女の子コーナーに載る事態が大変なんです、お店で人気があるのはもちろん、雑誌記者のお眼鏡にかなわないといけません」

「なるほど……」

高音の言葉に頷いて、ページをペラペラめくってから、

「じゃ……プレオープンに、その雑誌記者を招待しちゃいます?」

と、顔を上げる幸四郎。

「察しが良くて、助かりますね」

高音はフツと笑った。

「お風呂いきましよう」

胸元に洗面器を持った百合乃に部屋を訪ねられ、

「ちょっと待ってて」

みなみはそう答え、ドアを一旦閉めてから、大急ぎで支度を整える。

「恋音ちゃんは？」

「まゆりちゃん達と先に行ってますよ」

「酷いなあ……あたしを置いていくとは、いつもより早い気がするんだけど」

「そうですか？」

安普請のアパートだ、鏡を覗て、色々とチェックをしながら、ドアの向こうで待つ百合乃と会話できるのが、少ない長所の一つかもしれない。

「お待たせ」

「はい」

みなみが外に出ると、百合乃が壁に背をかけて待っていた。切り揃えた前髪。

長い黒髪を腰の辺りで束ねている。

優しい顔立ちの美人で若々しく、言われなければ彼女の事を三十四歳と思う物はいないだろう。

気にならない程度にふくよかな体つき。
豊か、という表現では足りない胸。

「どうしました？」

「いやあ……百合乃さんと銭湯行くと、みんなが百合乃さんの身体
視てるから、面白いんだよね、女の子同士でも見ちゃうよ」

みなみが笑うと、

「もう……同性でも視線があると、結構恥ずかしいんですよ」

百合乃は困った様に首をかしげた。

すっかり陽の落ち、街灯の点く商店街を、みなみと百合乃は歩く。
商店街の店のシャッターは閉まり始め、それと入れ替わる様に出
勤を始める女性達。

新大空町、夜の部の開演と言っていいだろう。

「プレオープン……近づきましたね」

「そうだね……」

女性達を見て呟く百合乃、みなみはそう答えて、

「やるからには……売れっ子になってやる」

と、下唇を噛んだ。

「本日……ボイラー故障の為、休業させていただきます」

店頭に張り出された、それはスーパーのチラシの裏に書かれ、セロハンテープ一枚で張られたにもかかわらず、毛筆で達筆だ。

「なああああつ！」

絶句するみなみ。

プリンセスオークションの女性寮となっているアパートは風呂が無いので、この銭湯を皆が利用しているのである。

「ごめんね、いつもみてくれる業者さんがたまたま休みで……旅行先から明日帰ってくるんだって」

既に馴染みとなっている、みなみと歳の変わらない銭湯の娘がひよい、と顔を出して謝ってくる。

「タイミングわる……恋音ちゃんとか来た？」

みなみがうなだれながら訊く。

「あのね、恋音ちゃん達はお店のお風呂入るからいいよ、って……本当にごめんなさい」

「まあ、しょうがないよ」

謝る銭湯の娘に、みなみはそう答えて、ジューパンのポケットから携帯を出す。

見れば、恋音から件名、銭湯休みです、と書かれたメールが着ており、内容には仕方がないから、店舗の自分の部屋に備え付けのお風呂を借ります、と締め括られている。

「気づかなかったあ、どうにも携帯には慣れない、メール着信音くらい鳴っても気づかないな」

頭を掻くみなみに、

「私達もそうしますか？」

百合乃が肩を竦める。

だが、みなみは首を縦に振りながらも、

「そうだね……でも、今日はオーナー、アパートにいたんだよねあ」

と、呟き……慣れない手つきで携帯を操作して、電話をかける。

「あー、オーナー？　今、家にいるの？　実はね、ご指定の銭湯が今日は臨時休業なんだ、だからさ、今からオーナーも店にお風呂入りに来たら？　え？　店には自分の風呂なんかない？　平気だから！　裏から入って百合乃さんの部屋に来てよね！」

そう言って電話を切ると、黙って見ていた百合乃に、みなみは、

「三人で入ろうね」

と、ニツコリ笑ったのであった。

続く

第22話「巫女と大型モニター」

1

「みなみちゃん、いきなり……」

「いいでしょ？ まったくお互いを知らないわけじゃないんだし、この際、お客さんとお風呂に入った時の練習がしたいの！ だいたい、こそこそと言われたとおりに、百合乃さんの部屋に来たんだから！ 期待してなかったとは言わさないわよ！」

「まあ、充分な期待をしてきたよ……だいたい、二人と一緒にお風呂に入ろうと、言われて断る男がいるとは思えないけど」

小奇麗な店舗の百合乃の部屋。

バスタオル姿のみなみに、バツの悪そうに答える幸四郎。

「じゃあ、私達の練習相手になってくれるわよね？」

「わかった、じゃあ、みなみちゃんと百合乃さんのお客さんになったつもりで、素直になるよ……実は我慢できないしね」

素直に白状し、幸四郎が笑うと、

「ええ、よろしくね」

「幸四郎さん、お願いしますね」

男子ならば、何も思わずにはいられない程に魅力的なバスタオル姿で、みなみと百合乃は幸四郎に微笑を返したのだった。

「はあ、はあ……幸四郎」

「幸四郎さん……」

「二人とも可愛過ぎるよっ……」

白い泡にまみれて、交わる三人。

みなみとも百合乃とも、何度もでたらめに交わる。

「ゆ、百合乃さんっ！ も、もう……やばいっ！」

歯を食い縛る幸四郎。

「はふう……じゃあ、最後はみなみさんと私の……胸で……ふふっ」

普段の清楚さを一瞬、忘れさせる妖艶な笑みをみせ、百合乃は幸四郎にキスをして、一旦離れる。

「じゃあ、幸四郎……最後、おもいきりね」

そして、みなみが入れ替わりに幸四郎にキスをし、百合乃と身体を寄せ合い、幸四郎を激しく攻め立てると、

「うわああああっ、き、気持ち良過ぎ、だめだっ……うっ！」

あまりもの快感に幸四郎は声を上げて、果てた。

「帰ろうかあ」

「そうだね……」

「ですよね？」

並んでベッドに寝転がる三人。

服なんて、もちろん着ていない。

時計の針は、午前二時。

「幸四郎がそのままベッドの方も、なんて言うから……」

「みなみさんじゃ、ありませんでしたっけ？」

「そうだよ、みなみちゃんだよ」

「……そうだったっけ？ どうでもいい、したのは幸四郎だし」

「面目ない、二人が相手なんて贅沢すぎてね、最高だよ」

幸四郎が、自分の左右で寄り添ってくる、みなみと百合乃を優しく引き寄せると、

「もう、こういうシチュと滅多に無いからね」

「そうですよ、次の練習は二人つきりで……」

二人はそう笑みを浮かべながら、幸四郎の両頬にそれぞれキスをしてきたのだった。

「落とすんじゃねえぞ、もっとゆっくり慎重に運べ！ 高音ちゃん、どの辺りだっけ？」

家電屋の親父の声がホールに響く、若い二人の従業員に怒鳴りつけてから、傍らで見守る高音に振り返る。

「そこです、少し高めの場所、印をつけてます」

「ああ、あそこね、あいわかった！」

高音が答えホールの壁を指差すと、家電屋の親父は頷き、脚立を用意して、

「よおし、ゆっくりな、ゆっくりな！」

と、手招きながら、大型モニターを壁に掛ける作業を始めた。

「なるほどなのです、殺風景に空いた壁の、あの部分はモニターを置く事にしていたのですね！」

モニターに興味津々で、取り付けを見守っていた巫女服姿の天城佐久耶は、手の平を打って妙に感心している。

「そうなんだ、ここにはオークションの時に女の子ごとに撮った映像を、ミュージッククリップみたいにして流そうと思ってるんだ」

「ミュージッククリップ……ハイカラなのです！」

「ハイカラ……」

幸四郎は佐久耶の言葉に苦笑してしまう。

どこか不思議だが、それが和ませる可愛い娘だ。

「あの、大型モニター高そうなのです、時価にして、数億円は下らないのです」

「んな、わけないだろ？ 新品では数百万の品の中古、閉鎖したコンサートホールのを頼んで、安くレンタルしてもらってるんだよ」

冗談か、本気が解らない佐久耶のボケに突っ込む。

「でもボクはあそこまでのテレビは観た事ないので、島にあったのは、せいぜいボクが両手を広げたくらいだったのです！」

「あそこに佐久耶ちゃんが映るんだからね、プレオープンには間に合わないけど、本オープンまではみんなの魅力を伝えられるような映像を撮らないとな」

「はいなのです！ ボクも頑張って映るのです！」

「頼むね」

幸四郎は配線を繋ぎ、取り付けられていくモニターを見ながら、グッと拳を握る佐久耶の頭を軽く撫でたのだった。

「んん、ありがとうなのです……あ、ボク、あの人達にお茶と菓子を買ってくるのです、作業をしてもらって悪いのです！」

しばらく嬉しそうに撫でられていた佐久耶だったが、作業が終わりに差しかった所で、思い出したように幸四郎に告げて、いきなり表に走り出す。

「あ……佐久耶ちゃん、お茶菓子は高音さんが準備を……」

「美味しいのを買ってくるのです！」

そう呼び止めようとするが、テケテケと走り去る佐久耶。

「あゝ、いっちゃった」

走り去る巫女服を見送りながら、幸四郎は頭を掻いて、

「高音さん、申し訳ありませんが、用意したお茶菓子を取って置いて、佐久耶ちゃんが買って来るお茶菓子を出して下さい」

と、高音に申し入れるのであった。

続く

第23話「花の微笑み」

1

新大空町では、朝日が一日の終わりを告げる。

幸四郎が店の前を掃いていると、勤務の終わった女の子達が通り過ぎていく。普段は店にいる時間ではないが、昨夜は迫ったプレオープンの作業をしているうち、いつの間にか寝てしまい、朝になってしまったのである。

「坊っちゃん、元気かい？ 開店近いね！」

「おはようございます」

仕入れから帰ってきたのか、軽トラックに乗った八百屋の親父が車を止め、話しかけてきたので、挨拶を返す。

「そろそろ開店だろ？ そうしたら、果物贈らせてもらうよ！」

「ありがとうございます、お店でも、お待ちしてますからね」

近所の気配りに頭を下げ、さり気ない営業トークをする幸四郎。

「母ちゃんにバレたら殺されるな、この間、恋音ちゃんに挨拶されたけど、可愛いよなあ、ああいう娘を美少女って言うのかな」

親父はニヤける。

「それを聞けば……恋音ちゃんもきっと喜びます、親父さんが来たら、スゴいサービスしてくれるかもしれませんね？」

「セールストークと分かっているけど、嬉しいし、期待しちゃうねえ、

母ちゃんのタンスのヘソクリを持ち出すかあ！」

親父の冗談。

周囲ではおしどり夫婦で通っている。

「家庭内不和になられたら、果物好きの恋音ちゃんを悲しみますから、あくまでもご自分の楽しめる範囲で……」

「ヘヘヘっ、ちげえねえや……じゃ、坊っちゃん、またな」
「ええ、また」

幸四郎の返事に、親父は頭を掻き、軽トラックを発進させていく。朝焼けに照らされる、仕入れた野菜や果物を載せた軽トラックの走り去るのを見送り呟く。

「そろそろ……」

「なんですよね？ オープンするの」

女の子の綺麗で透き通った声。

「えっ!？」

急に独り言に割り込まれてしまい、幸四郎はビックリして振り返る。

「ふふふっ」

そこには、一人の女の子が笑っていた。

白いパーカー、碧いロングパンツにスニーカー。

背中くらいまでの黒髪のアート。

黄色いカチューシャで留め、前髪は上げており、そこからおでこに幾筋かの髪を垂らしている。

パッチリとした一重の瞳に聡明な印象を与える、細いフレームの眼鏡。

鼻筋から唇は、特に強い個性は無いが、綺麗にまとまっている。

それは輪郭にもいえ、細過ぎるでもなく、太くもない。

どこでなく、全体で高いレベルの顔立ちで、女の子と少女が混在した可愛らしさだ。

パーカーの下のカジュアルシャツの三番目まで開けられたボタン。程よい膨らみの胸元。

脚もピッチリしたロングパンツをキチンと着こなせている。

「……ごめんっ」

幸四郎は数秒間で、彼女を見定めた行為を素直に謝った。

開店準備に入ってから、一体何人の女の子を面接で、紹介所で、見定めた事だろうか？

その中で、幸四郎はいつの間にか数秒間で、女の子の容姿から雰囲気を見定めるようになってしまったのである。

職業病の一種と言って間違いないが、ある程度観られるのを許容する面接でもない限り、女の子にそれをしてしまうのはセクシャルハラスメントに取られても仕方がない。

「いいですよ、もっと観てもらって」

「えっ？」

意外な答えに、幸四郎は一度は背けた視線を、彼女に引き戻す。彼女の笑顔を止んでいなかった。

さっきも感じたが、その声は透き通り、まるで一流演劇女優のそれだ。

そして、彼女は一度、幸四郎をジッと、真顔で見つめた後、

「このお店で私を雇ってくださいませんか？」

そう言って微笑んだのである。

2

「近衛菜ノ花このえ なのはなです」

事務所の応接ソファーに座った彼女は頭を下げて、名乗る。

「俺は御神本幸四郎、この店のオーナーだよ」

「話は紹介所で聞いたので、さっきは何となくそうかな？ と、思っ
て声をかけましたが、やっぱりお若いですね……私と変わらない
かもしれない」

菜ノ花はクスリと、控え目に笑いながらバックから履歴書、財布
から免許証を出して応接机に置いた。

「ああ、近衛さんは俺より、一つ下だね？」

「近いですね、ほぼ同級生扱い」

幸四郎が年齢を確認すると、菜ノ花は肩を竦める。
みなみや恋音達よりも年上。

「みんながオーナーを同級生扱いだよ」

「フレンドリーなんですね、みんな若いんですか？」

「ははは……フレンドリーか」

その言葉に乾いた笑いを返してしまうと、

「苦労してるみたいですね？」

菜ノ花は眼だけ笑わせて、口元を手で押さえる。

百合乃に感じるような世間知らずのお嬢様の風ではない、楓の様なプライドと自信が支える風でもない、気性からの落ち着きが彼女からは感じる。

ブルルルルッ、ブルルルルッ

採用の条件などを話していると、幸四郎の胸ポケットが震える。

「ごめんね、ちょっと出るね」

幸四郎が携帯を取ると、それは高音だ。

菜ノ花の面接が急だったので、高音を呼出していたのだった。

「ああ、高音さん……メール見ました？　急なんです、面接希望の女の子が来まして」

「見ました、身分の照会をきちんとして、採用の判断はお任せします」

「え、来ないんですか、何か用事でも？」

意外な高音の返事に、幸四郎は理由を聞く。

「プレオープンのお客様の方々に会う約束なんです、グループの馴染みのお客様なので、予定の変更はなかなか出来ないのです……」

「苦勞をかけます、わかりました、採用の判断は僕がします」

高音を労うと、

「ええ、坊ちゃんこそ……」

電話の向こうで彼女が少しわらった気がした。

「？　それじゃあ……」

僅かな違和感を感じて、幸四郎が電話を切ろうとすると、高音は、

「採用と決めたなら、あちらの方も試して下さいね」

と、言い残し電話を切ったのだった。

「えっと……」

幸四郎が携帯をしまいながら、次の言葉に迷うと、菜ノ花はその名前の通りの可愛らしい笑顔を浮かべ、こう言った。

「受話音量高いですね、で？ 私は採用ですか？」

続く

第24話「メモの裏」

1

「うううっ……ううっ、はうううんっ！」

「か、可愛いよっ……な、菜ノ花ちゃん」

よく響く、情熱的な声を上げる菜ノ花、幸四郎は昂ぶりを増し、更に激しく彼女を求める。

「ふはあああつ、オ……オーナーああ」

「な、いっ……いくよっ、いくよっ……ううっ！」

汗だくの抱き合い。

菜ノ花の豊かな胸に顔を埋め、彼女から香る柑橘系の香りに包まれながら、幸四郎は幾度目かの絶頂を迎えたのだった。

「はあはあ……か、可愛かった……さ、最高だよ」

「ま、満足して貰えたなら……ふう、オーナーも……凄かったですっ……んっ」「んんっ……」

幸四郎と菜ノ花は、互いに荒い息を整えながら微笑み合っていると、少し長めのキスを交わすのだった。

「蜜柑かな？」

「柚子ですよ……」

胸板に抱き付いた状態の菜ノ花に聞くと、それだけで質問の意味が解った様で、彼女は答えた。

「柚子かぁ、柑橘系の香りだとは思ってたんだけど」

「香水というより、手作りの美肌液みたいな物なんです、貰ったんですけど、気に入っちゃって……お嫌いですか？」

「いや……いい匂いだなく、って思いながら……ね、してたんだ」
「もう……」

幸四郎を胸元から、見上げ笑う菜ノ花。

「あ……菜ノ花ちゃんって、眼鏡に度が入ってないんだね？」

「ばれちゃいましたか」

ひよんな事に気が付いた幸四郎に、菜ノ花はペロツと舌を出して、細いフレームの眼鏡を外した。

「へえ、眼鏡してると知的で可愛いかったけど、してないと、またイメージ変わっていいよ」

「そうですか？ 気分転換になるんです、別の自分に変身できたみたいで」

「凄く可愛いよ、何だか、違う女の子みたい……ちょっと我慢できない」

幸四郎は菜ノ花の身体を抱き寄せる。

「え？ あんっ……」

「だから……もう一回だけ……ね」

「あ……も、もうっ……二回したのにつ……あっ、あああんっ、いきなり、そんな……だめえ」

菜ノ花は抗議の声を出したが、幸四郎は再び菜ノ花の身体をむさぼり始めてしまう。

「まだ菜ノ花ちゃんになりたい……いいよね？」

「もう、これで不採用だったらキレますからね……なんちゃって……いいですよ、菜ノ花を満足いくまで抱いてください」

懇願する幸四郎、菜ノ花は、妖しさと純朴さの入り混じった笑顔で頷いた。

「あっ！」

幸四郎は起き上がる。

一人だ。

「夢……の訳ないよな」

全裸の自分が店の空き部屋で寝ているのに気がつく、後ろ頭を搔く。

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

同じベッドで、抱き合いながら、激しく果てた彼女の姿は無かつ

た。

「あの後、また二回もしつこくしちゃったから……さすがに呆れて、帰っちゃったのかな……可愛いし、脱いだら凄かったし、声も色っぽくて……ちよつと興奮しすぎたなあ」

反省しながら、幸四郎がベッドから立ち上がると、テーブルの上に、幸四郎の携帯を重しに乗せたメモが一枚。

そこには……

『改めての採用のお知らせと説明にあった寮への入寮手続きの説明の電話をお待ちしています　菜ノ花』

と、丁寧な文字で書かれていたのだが、ふと見た裏には……

『調子に乗り過ぎです、採用祝いにお寿司を奢ってくださいね！』

そう走り書きされていたのである。

それを見た幸四郎は一旦、フウと息を付き、

「……菜ノ花ちゃんだって、あんなに可愛い声を上げてたじゃん、でもお寿司奢るくらいは全然、オッケーですとも……ホント、最高だったからね」

と、一人、口元を緩めるのだった。

続く

第25話「銭湯バスト会議録」

1

「何これ？」

「イノシシの赤ちゃん」

「可愛いっ」

「ここのかなあ？」

銭湯の入り口。

入店する客の邪魔にならない位置で、主人の帰りを待つウリ坊、タツノリはこの街で働く女性客の黄色い声を浴びていた。

騒がず、鳴かず、眼をつぶり、スフィンクスの様に泰然としたポーズで、彼はひたすらに行き交う女性客を無視し、自分の入浴を拒否した銭湯の娘を恨む事もせずに、ただ主人の帰りを待ちわびたのである。

227

「ふはぁ、いいお湯だねえ、ずっと入っていたいなあ！ ボク」

小寺まゆりは、沈めていた顔を湯船から一気に上げて、濡れた黒いショートカットの髪を掻き上げる。

一糸まとわぬ身体（風呂なんで当然だが……）は、スレンダーにキュツと全体が締まり、幼く明るい雰囲気で整った顔立ちも手伝い、彼女を健康的な美少女に見せている。

「タツノリが待ってるでしょうに？ 可愛いから誰かに持ち去られるわよ」

同じく湯船に浸かっていた、みなみが眉をしかめて注意をするが、
「平気、タツノリは本気になったらドーベルマン並みに強いから！」
と、まゆりは笑った。

「ところで……」

突如、まゆりが瞳を細め、みなみの湯船に浸かった身体を見つめながら、寄ってくる。

「な、何よ？」

みなみが訝しげに身体を少し引いて訊くと、まゆりは、

「みなみちゃん、いいプロポーションしてるよね？」

と、切り出してくる。

「どゆこと？」

「どうもこうもないよ、オッパイもお尻も、腰周りもいい感じだね、
って言ってるんだよ」

まゆりはしらばっくれるなよ、と言わんばかりに頬を膨らませた。

「ああ、ありがと……でも、まゆりもいかにもスポーツ少女って感じが可愛い、と思うけどね」

誉められたお返しのお世辞のつもりはないが、まゆりは、

「胸だよ……ボクにはみんなみたいな胸がないっ」

と、嘆く。

「でも、胸なら百合乃さんが今のメンバーなら……」

「あれは普通ではない、34歳ではない、ボクより一回り以上、歳をとってるなんて信じられない」

まゆりは何か自分を納得させる様に頷く。

「百合乃さんは本当に可愛いわよね……私もあんな34歳になりた
い」

みなみもぼやいた。

織田百合乃。

切り揃えた前髪に、腰の辺りで伸ばした黒髪をそこで束ねた髪型。
顔立ちは可愛らしく、ハッキリって34歳という年齢は、大半
の人間に信じてもらえないだろう。

身長は160?半ば、特に目を曳くのが、そのプロポーションだ。
全体的に気にならない程度のふくよかさ、どうしても気になるく
らいに大きなバスト。

「100以上？」

「惜しい99！」

「そこまでいったら三桁にいきたい」

「でも……ボクには羨ましい」

「ほら、恋音ちゃんとか、知世とか……仲間いるじゃない」

「嘸み付くぞっ！」

みなみの慰めにならない言葉に、まゆりは怒りをあらわにする。

「ゴメン、ゴメン」

「むかつくっ、みなみちゃんは百合乃さんまでじゃないけど、十分に巨乳だからそんな事言えるんだっ、ボクは……ボクは……」

「ほらぁ……立たない、立たない」

興奮して、湯槽から立ち上がり、みなみを指差すまゆり、みなみは苦笑して謝る。

「全く……」

周りの目もあるが、なりに騒がしい。

それほど注目された訳ではないが、まゆりは赤面しながら湯槽に浸かる。

「みなみちゃんはいいいよ、楓ちゃんとか佐久耶ちゃんくらい、胸があるからさ……ぶつぶつ」

「あの二人よりはないよ」

みなみが首を振ると、

「んな、ことない！　お店のホームページのデータみましたっ、バストサイズはみんな似たような感じ、カップも互角！」

まゆりは口を尖らせた。

「そうだったの？」

「ホームページのデータ見てないの？　ボクは全員チェック済み、この間、高音さんに聞かれたデータが載ってるんだよ？」

「ゴメン、インターネットとか苦手で……携帯もろくに使えないから」

恥ずかしそうにみなみが答えると、

「そうだったっけ？　じゃあ、教えて上げる！　バストサイズは、百合乃さん、楓ちゃん、佐久耶ちゃん、みなみちゃんの順かな？　昨日、入った菜ノ花ちゃんはデータ無いけど、みなみちゃんより、やや小さそうだね……でも十分な巨乳だよ……そしてね……」

「そして？」

みなみが首をかしげると、まゆりはワナワナと震えだし……

「ここから、越えられない幾十の壁があってえ！」

湯槽の湯面をまるで、机の様にビタンと叩き、

「恋音ちゃん……知世ちゃん……そしてっ……ボクがいるんだよっ！」

と、叫んだのだった。

「オーナーは巨乳マニアなんだあ、いや……むしろ」

「止めなさいって、世の中には言っではダメな事があるんだからね！
まゆりちゃん消されるわよ」

みなみは必死にまゆりを止める。

「ね？ 帰りに、なんでもいい屋に行って何か食べようか？ それとも、くるみがメニユーの試作をするって言っていたから、試食に行っちゃおう？」

「そう言えば……いたね……くるみちゃん……くるみちゃんはおっきいね……幼なじみまで、巨乳……」

そう呟きながら、湯槽に沈んでいく健康系美少女まゆり。

「なんなのよ……まあ、言われてみれば、そんな気もしてきた……今度、趣味かどうかは聞いてみるわ」

みなみはため息をつきながら、まゆりを見るのであった。

続く

第26話「オープン前日」

1

「こっちはもつとライトを絞ります、お客様同士は顔が見える必要ありませんからね……互いにぶつかからない程度で！」

「りょくかい！　こうかな？　こうすればいいのかな？」

「そうです、そうです」

指示に従い脚立に登った、くるみが壁のライトを調整すると、高音は頷き、

「坊っちゃん、舞台はもつとライトを中央とキャットウォークに向けて集めて下さい」

と、幸四郎にも指示を出した。

プレオープンはいよいよ明日に近付いていた。

「幸四郎ちゃん、とりあえずはフライドポテトをたくさん用意すればいいんだよね？」

「そうだよ、ホールではお酒は出さないけど、フライドポテトとオレンジジュースは無料で出すからね、そんなに食べる人も居ないだろうけど、足りなくなるのはよくないから」

「ジャガイモは、あとで八百屋さんに配達してもらえるように頼んであります」

ホールにやってきた、くるみに幸四郎が答えると、高音が付け加える。

「ありがとう高音さん、でも結構大変だなあ、相当作らないと…」

「後で手伝うよ」

「幸四郎ちゃんは忙しいでしょ？」

むう、と唸ったくるみだが、幸四郎の申し出は断った。

確かに幸四郎はてんてこ舞いだ、今の八百屋への手配のように、色々と慣れた高音がいるお陰で、何とかやっていけている。

「オーナー、何か手伝える事ありますか？」

百合乃がホールを覗き込んできた。

今日はプリンセスと店では呼ぶ、女の子達の打ち合わせがあるので、みんなが店に来ているのである。

「ああ、百合乃さん、助かります、くるみが……」

「いえ平気です、女の子は部屋のメイキングが終わったなら休んでいて下さい、最終打ち合わせに私とオーナーがいきますから」

幸四郎の返事を高音が強引に遮って、答える。

「え……と？」

幸四郎と高音を交互に見て、迷う百合乃。
だが、

「そう、そう！ 最終打ち合わせがあるんだ、部屋で待ってて下さい」

幸四郎が何かを思い出したように告げると、

「そうですか、なら皆でお待ちしてますね」

笑顔を見せ、百合乃はホールから出ていったのであった。

「すみませんでした」

「……よく解りました」

幸四郎が謝ると、高音はため息をつく。

「みんなは明日があるからねえ……ゆつくりと休んでもらおうよ、くるみが頑張るからさ」

「そうだな……じゃがいもの皮剥きなら、俺が手伝うよ」

高音が百合乃を帰した意味を察したくるみに、幸四郎は答えたのだった。

2

準備の済んだホールには、通常の蛍光灯の明かりが付けられて、舞台にプリンセス達が並ぶ。

崎原 みなみ。

斑鳩 恋音。

織田 百合乃。
小寺 まゆり。
御堂 楓。
天城 佐久耶。
遠藤 知世。
近衛 菜ノ花。

皆が厳しい眼で選んだ女の子達で、ルックスはもちろん、疲れた客を癒せるプリンスス達だと、幸四郎は信じていた。

正直、もう少し人数は欲しかったが、それで妥協する高音の提案はキッパリ拒否している。

新大空町風俗界の大物の父が倒れてから、幸四郎は自分の一つの答えを胸に、この世界に飛び込んだ。

未熟な素人なのは、言われなくても承知。

父が大王チェーンとの争いで失った地位や店を取り戻したいとは思わない、まるっきり無いかと問われたら、自信は無いが、それが答えとは思わない。

ならば自分ではなく、もっと経営に明るい者に、最後の砦を託せば良かったのである。

『目の前の殆ど素人の女の子達と……この店のやり方が俺の答え』

病に倒れた父親に、幸四郎はいまだ会っていない。 会おうと思えば、会えるのだろう。

しかし、風俗業に関わるのを拒否して、当てもなく家を出で、夢

もなく毎日を過ごしていた自分を敢えて、この店のオーナーに指名した相手に、自らの答えの正否を確かめる前に会おうとは、御神本幸四郎は思わなかったのである。

「じゃあ、みんな……明日がいよいよ、プリンセスオークションの始動の日になる……」

幸四郎は並ぶプリンセス達に口を開いた。

夜が明ける。

店の開店時間まではまだ12時間ほどあるにもかかわらず、原高音は店舗の屋上から朝陽を見た。

さっきまで事務所で仕事を一緒にしていた幸四郎は一段落して、昼まで仮眠を取っている。

「新店舗の開店なんて、何度でも関わってきたのに……それにまだプレオープンなのに……」

落ち着かない自分に気づきながらも、何か楽しみにしている感情も持ち合わせている。

「会長、あなたと坊っちゃんのこと……いよいよ、始まりますね」

高音は手摺りに背をかけて、大きく息を吐いた。

続く

第27話「プレオープン！」

1

「いらっしやいませ、プリンセスオークションにようこそ！」

カジノディーラーを思わせる制服に身を包んだ高音がドアを開き、客を招き入れて頭を下げる。

「何着てもかわいいね、高音ちゃん」

「いよいよだね」

「宜しく、高音ちゃん」

「高音ちゃんがお店に出てくれたら、俺は貯金はたくさんだけどね」

招き入れられた客達は笑顔で入店しながら、それぞれ高音に声をかける、プレオープンの為、高音の知り合いが多いのだろう。

それらの客と愛想よく何事か話を交わしてから、高音は舞台に上がり、マイクを持つ。

「皆さん、本日はプリンセスオークションのプレオープンにお越し頂き、本当に感謝いたします、この店はお客様が我が店が厳選し、契約した女の子と二人っきりでお部屋で過ごす権利をオークションして頂くのがルールです」

「そして……お部屋では、お客様と女の子は決まったサービスなどはありません、あくまでもお部屋で過ごす権利……でも、女の子はそれを競り落としてくれた貴方をきつと精一杯もてなしてくれるで

しょう、楽しい時間にしたいのは女の子も一緒です……可愛がって上げてください」

更に、高音はルールを説明していく。

落札金額の支払いや料理の注文などについての説明である。

落札価格は女の子と部屋に入室前、料理等は部屋に入ってから注文なので、部屋を出た後だ。

薄暗いホールに集まった客達は立食パーティーの様に、山盛りを用意されたフライドポテトや唐揚げ等を食べながら、それを聞いている。

「それでは……みなさん、オークションを開始する前に、手短にこの店のオーナーより挨拶があります」

高音に促され、スーツ姿のオーナー、幸四郎が舞台上上がった。

「みなさん……はじめまして、本店のオーナーの御神本幸四郎です、プリンセスオークション、プレオープンにお越し頂き、誠にありがとうございます」

幸四郎が頭を下げると、拍手が返ってくる。

「頑張れよ、坊っちゃん」

「親父さんを驚かせてやれよっ」

「オレ達の高音ちゃんを泣かせんなよ！」

かけられる声は上品では無いが、温かい。

プレオープンで昔の常連客が中心で、高音が声をかけてきたのだから、好意的なのは当然であるが、新規店舗開店の不安と期待が入

り混じる緊張状態の幸四郎には何よりだ。

「ありがとうございます、頑張ります」

幸四郎は再び頭を下げ、

「私の挨拶があまり長いのも、宜しくないので……早速、オークシヨニアの高音嬢にマイクを返しましょう、みなさん……我が店が厳選した女の子と楽しくお過ごし下さい！」

と、高音にマイクを渡して、舞台袖に下がった。

「ふう……ホールのお客さんはコッチからほとんど見えないのに、えらく緊張したなあ」

はあ、と息をつき、慣れないネクタイを緩める幸四郎だが、

「これからですわよ」

「え……！？ う……あ……うん」

不意に背後から声をかけられ振り返り、思わず息を吞んでしまう。

そこには、ホームページのトップに飾られたお姫様姿の楓が、ニツコリと微笑んでいたのである。

『か、可愛いっ！？ 写真館のあの時よりも！』

「二度目なら、更に着熟しますわ、さあて……一番始めのわたくしが最高落札価格を頂きましてよ」

幸四郎の思いを見透かした様に答え、楓は舞台に向かって不敵に笑う。

「さあ、一番目はホームページや宣伝ポスターで見られたでしょう！
あの美少女は一体誰？ プリンセス御堂楓嬢の登場です」

高音の誇らしげな声がマイクを通し、ホールに響いた。

続く

第28話「ファースト・ハンマープライス！」

1

「さあっ……勢いをつけていきますわよ」

幸四郎に向かって、強く頷き、暗い舞台袖から、光が充満して見える舞台上へ楓が歩き出す。

プリンセスらしく、厳かに、そして、あくまで淑やかに……

『楓ちゃん……本当になりきってる』

幸四郎はその姿に、今から風俗店のオープンである事を一瞬、忘れてしまいそうになる。

舞台という演出がそう思わせる部分があるのは否定できないが、まるで本気で演劇に取り組む女優にも見えてしまう。

「お客様、お待たせしました、わがプリンセスオークションのファーストプリンセス、御堂楓姫です！」

「宜しく願いますわ、わたくしの初舞台を誰に捧げましょう？」

高音に紹介を受けて、楓はドレスの裾をツイと両手で上げ、頭を下げて挨拶をする。

二十名くらいの客達の顔は見えないが、感嘆の声は聞こえた。素直に楓のルックスへの賞賛。

「可愛い、写真通りだ」

「かなり上のモデルより美少女だろ？」

彼女の顔立ちを誉め讃える声もすれば……

「胸あるよな」

「プロポーションが良すぎるよ、そそるね」

などと、ひそひそ囁く声もする。

「では……オークションに移らせて頂きますが、ルールは明解です、開始金額五千円からスタートする、プリンス御堂楓と彼女の部屋で過ごす権利を欲する方々同士、この会場の皆様に競り落として頂きたいのです」

高音はルール説明を始める。

「単位は基本的に千円単位以上でお願いします、皆様の手元に渡した無線ブザーを押してください、その楓さんが映る大画面モニターに、お客様毎の番号が出ますので、落札金額を宣言して下さい」

すると、舞台から左手の大型モニターにアップの楓が映され、画面に37番という番号が現れる。

「これは少し暗いホールのお客様を判別する手段です、オークションの間は僭越ですが、お客様を番号で呼ばせて頂きます、あまり一度に付けず、時間を置きますので、紳士らしく、落ち着いて番号を点けられて金額をご提示下さい」

客が入店時に受け取るのが、小さなブザー。

それぞれ番号が書かれており、押すとモニターに連動していて、その番号が画面に表示される。

それがオークションで言えば、競りの意思を表す合図であるのだ。そして、高音に向かい、金額を宣言するシステムである。

番号は先着順で常に一つしか、表示されない。

そこで落札金額を告げた者よりも、金額を上回って、権利をとりたくば、ブザーを押して自分の番号を表示して、より高い金額を宣言すれば良いのだ。

様々な問題はあるかもしれないが、落札者に何かの合図をさせるのも、金額だけ宣言させるのも、広くはないとはいえ、高音が暗いホール全体を気にしなければならず、宣言者を整理する為の手段である。

2

「さて……説明は以上です、オークションの開始といきますっ！
厳選された女の子と普段のしがらみや疲れを忘れて、至極の時間をお過ごし下さい！」

「先ずは五千元！」

「八千元！」

「一万元」

「一万三千元」

この間、数秒。

だが……当然、そこで終わらない。

「一万六千円」

「一万八千円！」

「二万っ！」

五千円から二万円に達するまで、十数秒である。
ここで間が空く。

「ハイ……現在は26番様です、ございませ……」

「二万五千！」

「二万七千！」

間を見計らい、マイクを入れた高音、だがその言葉が終わらない
うちに一気に金額が上昇する。

番号は21番と30番であった。

「凄いねえ！ 楓ちゃん、アツという間に」

舞台袖で腕を組んで、様子を見守る幸四郎の横にくるみがひよい
と顔を出す。

「くるみ、厨房居なくて、いいのかよ？」

「だって……気になるじゃん？ それにお客さんが部屋に入ってな
いんだから、注文あるわけないし……それに高音さんに来とけ、っ
て言われたんだもん」

「来とけ？ お前も出されるんじゃないだろうな？」 「かもね、幸
四郎ちゃんなら、幾らつける？」

高音がくるみを舞台袖に呼んだ理由はわからないが、冗談を振られた彼女がウインクを向けた時、

「三万八千！」

と、調度良く客の声が被ってくる。

話している間に、また上がっていた。

「うわぁ、凄い」

「まだまだ……」

「まだなの？ 幸四郎ちゃん、欲張りだねえ！」

「番号から見れば、まだ数人のお客さんが争っているし、このお客さん達は親父の店の常連客で、高音さんの知り合い……御祝儀の意味もあるからね」

くるみが金額と幸四郎の様子に驚くが、幸四郎は舞台上を見据えた。

「四万二千！」

一番。

今まで上がってない番号が、楓の映ったモニターに現れた。

「それに、楓ちゃんは今の時点では、ウチのエース候補ナンバーワンなんだからね……初日、これくらいは頑張ってもらわないと」

「五万三千円っ！」

「五万五千円！」

「五万六千」

幸四郎の言葉に後押しを受ける様に、落札金額は上がっていく。

そして、遂に……

「六万円」

1番の客の二回目のコールにホールはオオツと沸き上がり、他の客のコールが続かなくなる。

「ありませんか？ 六万円二千元ありませんか？ では……」

「六万二千元っ！」

「ハイ、21番の……」

「六万五千元」

ずっと競っていた21番の客が抵抗を見せるが、それを振り払う1番の高音の確認をも遮る即コール。

これで勝負あった。

「六万五千……これ以上ありませんか？ では、ファーストプリンセス御堂楓嬢のお部屋ご招待は1番のお客様が落札されました、ありがとうございます……では、お客様は楓嬢が迎えに参りますので、舞台下まで来られて下さい」

楓は舞台を降りて、舞台下で1番のブザーを持った客を確認して、

「素敵な時間を過ごしましょう」

と、微笑む。

ノーネクタイだが、ピシッとスーツを着た中肉中背の青年だ。

「感激ですっ、ホームページで一目惚れしました、絶対に落札するつもりでしたよ」

「画面よりも実物の方が貴男をもっと夢中にさせて上げますわ」

楓は少し興奮気味の青年の腕を取る。

「開店初の落札が成立した所で……お客様とプリンセスの時間を彩る、給仕を紹介致します、くるみちゃんです」

高音が目配せしてくる。

「そういう事かぁ、聞いてないよ」

「挨拶かぁ」

「そうだね……よいしょ」 「？ それは……」

「メイドキャップ」

「って、お前……何なんだ、その格好？ 全然、聞いてないって格好じゃねえ」 「行ってくるね、幸四郎ちゃん」

眉をしかめる幸四郎に、笑うくるみ。

暗い舞台袖で、楓のオークションに集中していたので気づかなかったが、くるみは黒を基調に白エプロンのベージュなメイドルックだったのだ。

「くるみでーす！」

「三万！」

「四万！」

くるみがピヨコンと舞台に上がると、客から拍手と冗談混じりのコールがかかる。

この辺りは、元常連客のノリの良さ。

「いけませんっ、いけませんっ、くるみ嬢はプリンセスの給仕、すなわちメイドさんです……プリンセスとの素敵な時間を彩る料理を作っているのです、お部屋には彼女が届けますので、ご注文の際には、宜しく願います」

「コールしてくれたお客さん、ゴメンね！でも美味しいフルーツスイーツやアイスもあるから、プリンセスと食べてね！」

高音の紹介に、くるみは笑顔で手を上げる。

「可愛いね」

「店に出てよ」

「バストいくつ？」

好意的な客の反応。

「てへへ……じゃあ、厨房でみんなの注文待ってるからね」

くるみは照れ笑いを浮かべ、短いツインテールの後ろ頭を掻いて、舞台袖に引き上げる。

「では、落札金額を精算してから、わたくしの部屋に参りましょう」
「は……はいっ」

楓は緊張気味の青年の腕を取り、ホールを出て歩き出す。

二階への階段に向かう途中の小さな部屋にカウンターがあり、舞台袖を抜けた幸四郎が落札金額を受け取るのである。

領収書には、プリンセス御堂楓のお部屋にご招待される権利と書く。

「では……素敵なお時間をお過ごし下さい」

「ありがとうございますわ、オーナー、さっ……お部屋に入ってから二時間、二人の時間はたっぷりありますわ」

「は……はいっ」

頭を下げた幸四郎に声をかけ、楓と青年は揃って階段を上がっていく。

ピピピッ……

店内使用専用の携帯が鳴る。

まだ、高音と幸四郎しか所持していないので、相手は高音だ。

「はい？」

「坊っちゃん、落札金額は受け取りましたか？」

「ええ……平気ですよ、落札金額は事務所に戻って金庫に入れます、このレジは千円札のお釣九枚しか入れなくていいですからね」

「そうですね、防犯上、それが面倒ですが好ましいですね……女の子の順番の変更は無しで、すぐに次のオークションにいいいですか？」

ホールの高音からの進行の確認だ。

幸四郎は数秒の間だけ考え、

「はい、予定通りの順番でお願いします……お金をしまったら、す

ぐに舞台袖につきます」

と、答えて事務所に向かって走る。
壁を隔てたホールから、マイクで拡声された高音の声が聞こえてきた、

「さあ……皆さん、まだまだプリンセス達は控えています……本日のセカンドプリンセスは……」

続く

第29話「流石というか」

1

「斑鳩恋音姫ですっ！」

「よ、宜しくお願いしますっ！」

高音のコールに応え、緊張気味に舞台に立つ恋音。
格好は白を基調とした飾りの無いワンピース。

「カワイイッ！」

「いいねえ！」

「ロリっ娘だ、レベル高いよなあ」

観客の受けは上々。

ほわっとした肩にかかる位の茶髪、幼児体型の可愛い童顔の恋音は、楓の登場からガラリと舞台の雰囲気を変える。

「恋音ちゃんはこう見えても、ご奉仕上手、きつとお客様に可愛がられるプリンセスになる事でしょう、さて……それでは、斑鳩恋音姫のオークションを開始いたしますっ！」

「七千円！」

「一万円！」

ポンポンと値段が跳ね上がり、壁の大型モニターの恋音の画面には19番の番号がつく。

だが、それも長くは続かない。

「一万二千!」

「一万五千円」

「あんなに可愛いロリっ娘は譲れん……二万」

金額は1分足らずで二万円に達した。

そこで更に一息ついてから、

「二万二千」

「二万四千」

連続して声上がる。

そして、千円単位の細かい応酬が続き……

「三万八千」

そこで場が静まった。

「三万八千……四万の一声ありませんか、では斑鳩恋音姫との一時を過ごすのは14番のお客様です、さあ恋音姫、迎えに行って上げてください!」

「ありがとうございますう、はじめまして」

恋音は舞台を降りて、14番のブザーを持った青年に駆け寄る。

「もろタイプだよ! 予算ギリギリだったんだあ」

「ありがとうございます、たくさん恋音と遊んでくださいね」

喜びを隠さない青年に、恋音は朗らかな笑みを浮かべ、二人は手を握りホールを出ていく。

二階への階段手前のレジで、オークション代金の精算をし、幸四

郎はホールに戻り、高音の横に並ぶ。

「坊っちゃん、次はどうしますか？ 恋音さんは楓さんより、少し落札金額が下がりましたが……」

「上々だよ、楓ちゃんはエース候補ナンバーワンなんだからね、タipesも恋音ちゃんとは違うしさ」

耳打ちしてくる高音に幸四郎は笑顔を浮かべ、

「次は……菜ノ花ちゃん、いってみましょう」

と、指示を出した。

2

「今度は近衛菜ノ花姫です、どうぞっ！」

黒髪のセミロング、前髪はカチューシャで留め、そこから額にいく筋か垂らし、細いフレームの眼鏡。

ぱっちりした一重の瞳に、尖った所が無く、可愛らしくまとまった顔立ち。

身長はわずかに160?に届かないが、しっかりとメリハリのある身体。

菜ノ花が恋音に続き、ワンピースで舞台に姿を現すと二十名足らずの観客が湧いた。

「可愛い」

「今度もレベル高い」

「腰のライン細え」

「眼鏡っ娘萌える！」

反応は上々だ。

高音は幸四郎に向かって笑顔で頷く。

「では……我が店のプリンセスの中でも、一番お淑やかで落ち着きがある」と評判の近衛菜ノ花姫と……」

「一万五千元！」

「いけませんっ、紳士の皆様、キッチンと私の開始の合図をお待ちください！」

フライングの客に高音が嗜めると、会場から笑いが起きた。

『いい空気だ、少なくとも楓ちゃんの落札金額まではお客さんは払ってもいいって、意志があるんだ……なら女の子の第一印象のルックスはこの店は質的には、風俗激戦区のこの街でもトップクラスなんだ！』

幸四郎は口を真一文字に結び、推移を見守った。

菜ノ花のオークションが始まる。

「一万五千」

「二万」

「二万二千」

「二万五千」

ポンポン調子で上がっていく落札金額。

「三万五千元！」

そこで一休止。

十秒程の沈黙の後で、

「三万八千」

と、声が出る。

「四万」

「四万二千」

「四万五千！」

そこで再び沈黙。

『恋音ちゃんの金額は越えたか、こういう所から少しだけど、お客さんの傾向も見えてくるな……』

幸四郎はそんな事を考えながら腕を組む。

今、主に争っていた客は四人、四万五千円を11番の客が出した時点でピタリと止まった。

「四万五千……では」

高音が口を開きかけた時に、

「皆さん、無理しないで下さいね……今回でなくてもまた、来て下されば私は嬉しいですから」

菜ノ花が誰に向けた訳でも無く、肩をすくめて微笑んだ。

「ご、五万!」

いかにも、思わず、といった風にかかる声。

「なるほど……だだ姿を觀せて立ってるのも勿体ないよね、菜ノ花……流石というか」

幸四郎は苦笑し、今日は色々勉強しなければ、と襟を正すのだった。

続く

第30話「巫女と新米オーナー」

1

「小寺まゆり姫、三万三千……三万五千ありませんかっ？　ハイ、では小寺まゆり姫のお部屋ご招待は6番のお客様ですっ、さあ……まゆり姫」

「ハイ、ハイ！」

高音の声がホールに響き、カジュアルファッションのまゆりは調子よく階段を降りて行く。

「じゃ……よろしく、小寺さん」

「うん、まゆりでいいからねっ」

落札者は小綺麗なスーツの中肉中背の中年。まゆりは笑顔で、彼の腕に甘える様に絡む。

「あの娘もすげえ可愛かったなあ」

「もう少し競れば良かったかな？」

競っていた客が舞台から降りてきた健康系美少女を見て、ぼやく。

「高音さん、ちょっと」

精算を済まし、幸四郎は舞台の高音を一旦、舞台袖に呼ぶ。

客はモニターの女の子の画像を観ながら、タダのフライドポテトをつまみ、これまた、タダのサイダーを口に運んでいる。

軽い打ち合わせ程度の中断は大して気にはしていない様子だ。

「どうしました？」

それでも、客が気になる様で、カジノディーラー姿の高音はホルを気にしながら、幸四郎の元にやってくる。

「次は佐久耶ちゃん、いつてみましょう」

「何か考えでも？ 予定と変わりますが……」

「まあ、まあ、少しお客様の様子が観たくて」

高音は怪訝な表情を見せるが、幸四郎はニツコリと笑った。

「失礼しました、今、画面では、当店自慢のプリンセス達の画像が流れています、現在、本オープンに向けて各人が気合いの入ったプロモーションビデオ撮影に入っています、本オープンの際には魅力一杯で、少しだけセクシーなVが流れますのでお楽しみに！」

高音が舞台に戻り、モニターを見ていた客にナレーションする。

「高音ちゃんも撮るんでしょう？」

「いいなあ……高音さんのが観たいなあ」

「高音さんのセクシーショット、キボンヌ！」

「待ってまーす」

ホールから声上がり、他の客もドンドンそれに乗る。

「な、な……何をっ!? そんなの必要ありませんっ、私はオークシヨニアなんですからっ!」

高音は赤面して、声を荒ら上げたが、

「了解しました、オープニング特典Vとして、高音さんにも参加してもらいましょう!」

舞台袖から、幸四郎がマイク片手に顔を出す。

「いよっ、さすがに二代目、改革派!」

「これで冥土に持っていく土産話が増えた」

「ヤター!!」

客も元常連だけにノリが良い。

初めての客層には、そうはいかないが、今は様々な状況を経験して、尚且つ、目の前の客を満足させるのが目的だ。

だが、少しだけノリが良すぎたのか、ヤンヤの喝采を浴びながら舞台袖を覗んだ高音に、

「坊っちゃん、引っ込んで下さい!」

と、一喝され、ホールの客に笑われてしまうのであった。

「さて、気を取り直し、続きますのは天城佐久耶姫です、東京遥か数百?の島、神洋島から来ました天然娘、癒されます」

「ボクなのです!」

ぴょんと登場した佐久耶に歓声が上がる。

「巫女さんだ」

「胸でけっ」

「カワイイッ!」

巫女服での登場に客達が沸く。

「今日はコスプレイベントではありません、佐久耶さんは普段から巫女服で過ごしてます」

「本当なのです」

司会もこなれてきた高音がマイクを向けると、佐久耶はピースサインをする。

「胸、おっきいね、バストいくつ?」

「それは自分で確かめるといいのです」

客からの言葉にも、佐久耶は前屈みになり、ペロツと舌を出す。巫女服の襟が少しだけ寄って、見事な谷間が覗き、おおっつ、と感嘆の声が上がった。

「ここまでっ! それでは天城佐久耶姫のお部屋ご招待のオークションを開始いたしますっ」

「よっしゃ、一万五千」

「二万っ」

客の盛り上がりを見計らい、高音がオークションを始めると、その開始の勢いは始めの楓すら上回るスピードで、金額はあつという間に二万円に跳ね上がる。

『うん……やっぱり、今日のお客さんは好みがあるな、それに菜ノ花ちゃんもそうだけど、佐久耶ちゃんにもお客さんを乗せちゃう上手さみたいな物があるんだな』

幸四郎は次々と上がっていく、金額を見ながら、舞台袖で腕を組む。

『……でも』

ホールは薄暗く、舞台から離れた客の顔はほとんど見えないが、幸四郎はモニターを睨む。

『月刊トップガールの記者は高音さんが6番だって、言っていたけど……まだ点いてない、佐久耶ちゃんで五人目……どうするつもりなんだ？』

今のところは順調な滑り出しだが、まだまだ安心とまではいかない新米オーナー幸四郎であった。

続く

第31話「現場にて、再び決意する」

1

「五万二千円で、19番のお客様が天城佐久耶姫のお部屋にご招待される権利を落札されました！」

「ご招待なのですっ」

佐久耶は高音のコールと共に舞台から、階段を使わずピョンと飛び降りて、19番の客の元へ向かい、満面の笑顔を見せ、腕を取りホールを後にした。

「佐久耶ちゃんもお客さんをうまく乗せたね、男にはあの魅力的な谷間が効いたかな？」

笑いながら幸四郎は精算のレジにつきつつ、確かな手応えを感じていた。

「それでは……残るプリンセス登場の前に15分程の休憩を入れさせて頂きます、モニターではプリンセス達の新たな画像が表示されますので、お楽しみください！」

高音がオークションを中断し休憩を告げて、舞台袖に帰ってくる。

先程は幸四郎から順番を変える為、中断を入れたのだが、今度は佐久耶のオークションが終わり、精算を終えたのを高音が見計らったのタイミングで、予定にはない物だ。

「高音さん、何かあったんですか？ みなみちゃんや知世ちゃん、百合乃さん達は準備オッケーみたいですけど……」
「まだです」

不思議に思った幸四郎が声をかけると、高音はそれだけ答え、タオルで襟元の汗を拭く。
スポットライトの熱気でよく見れば、高音はかなり汗をかいている。

オークションに出る女の子達と違い、彼女はずっとライトの当たる舞台に立ちっぱなしなのだ。

しかし、休憩を入れた理由はそれではないだろう、高音はまだだと返事をしたのである。

「まだ、ってどういう事ですか？ お客様もだいぶ乗ってきました、ここは一気に……」

「お客様も私も少し乗りすぎました」

高音は舞台袖のテーブルの上にあったペットボトルから、スポーツ飲料を紙コップに注ぎ、それを口に運んだ。

「どういう事です？」

「確かに……みなみさん達は準備OKなんですが、お客様のノリがよかったので進行が早くなり、楓さんはまだですね」

「あ……？」

高音の答えに、幸四郎は順調なオークション内容に自分の忘れていた事を思い出し、声を上げてしまう。

「……!？」

携帯の時計を見る。

一番始めにオークションが終わった楓が客と部屋に入ってから、1時間15分が経過していた。

「楓さんが二周目の舞台に立つのはどれくらいでしょうか、少なくともあと1時間15分か、30分は見て上げないと……」

「そうですね」

「その時間を三人のオークションで作ってあげないといけなくなっ
てしまいました……ここで15分の休憩が入るとしても、少なくとも1時間、私も初めての司会の緊張もあって、タイムテーブルは自分
なりに決めたのですが……」

高音は申し訳なさそうに言った。

あと、三人のオークションを終えたら、全員のプリンセスが入室
してしまい、始めの楓が戻ってくるまで、空白時間が生じてしまう
のである。

二周目が始まるまで、そう客を待たせる訳にもいかない。

「こういう事がわかれば、対策法はあります、毎日女の子も全員が
出勤出来る訳ではありませんし、この店の女の子は真面目な娘が多
いので、欠勤がそうそうは出るとは思えませんが、8人では……今
日のお客様が優しいプレオープンは乗り切れても、本オープンは苦
しいです」

「対策法っていうのは、在籍する女の子をもう少し増やす……ですよね」

幸四郎が答えると、高音はコップを持ったまま、腕を組む。

「もしくはお客様との部屋の時間を1時間30分くらいにする……」「んー、却下です……プリンセスオークションは確かに風俗店だというのは、否定しませんが、お客様とプリンセスの楽しい時間は削れません、お料理の注文も減っちゃいます」「フフッ、なるほど」

高音の提案をすぐに却下すると、彼女はまるでそれが楽しかったかの様に笑った。

何か試された様な気もするが、風俗のサービス時間としては長い2時間だが、素敵なプリンセスと過ごす時間としては長くはないだろう。

幸四郎はそう思っているのである。

「料理と言えば……くるみさんは平気ですかね？」

高音から話題を変える。　どうやら、女の子のローテーションを上手く回すには、本オープンまでに更に女の子を雇うしかないという結論だ。

「そう言えば様子を見てないです、行ってきます……じゃ、女の子の件はまた募集広告を出すなり、スカウトにいきましょう」

幸四郎はそう高音に告げて、厨房に向かって走りだした。

「風俗は数か……」

廊下を早足で歩きながら呟く。

前に面接で厳しく、採用希望者を切っていた時に高音が幸四郎を嗜め、言った言葉である。

確かにそういう部分もあるのは否めない。

理解しない訳ではない。だが、幸四郎が創っていききたい店はそうではなかった。

手っ取り早く、男の欲求を果たしたいなら他にも格安で、簡単にそれを済ませる店はたくさんある、そういう勝負なら、素人の幸四郎は出る幕ではないし、十年以上、父の右腕を務めた高音が全てを取り仕切れば済む話だ。

『そうじゃない……』

前から決めていた決意を口に出さず、想いを再び繰り返す。

『俺はルックスもとびきり抜群で、優しく思いやりがある女の子達と、この大変な時期に疲れ切った人に、何かしらを与えて上げられる店を作るんだ、効率が悪くても構わない、でも俺がやるなら、決意だけは変えないからな』

また何人も面接で厳しく希望者を切るだろう。

心苦しい事もあるし、ついこの女の子なら、多少は我慢できるかな？ と妥協してしまいうにもなる。でも、自分の妥協は客にそれを押し付ける結果にもなるのだ。

『また、厳しくやるしかないな、高音さんには呆れられるけど』

幸四郎はため息をつきながらも、彼なりには強い決意を決めて、
厨房に入ったのだった。

続く

第32話「みなみオークション！」

1

「幸四郎ちゃん！」

厨房といっても、レストランの様に広いわけではない、大きめの冷蔵庫にキッチンがあり、それらを置いて、余ったスペースでフライパンを振りながら、くるみがドアを開けた幸四郎に振り返る。

切り揃えた前髪に、短めのツインテール。

ドングリ眼の可愛い幼なじみは汗を顔中に浮かべ、笑っていた。

「平気か？」

「平気、平気！ さっきは楓ちゃんのお部屋にスパゲッティ届けて、まゆりちゃんの部屋に特製ハンバーガー届けたの、そして今から菜ノ花ちゃんの部屋にチキンライスを持っていく所だよ！」

「そうか……ご苦労様、あれ？ お前、なんで割烹着着てんの？」

様子を聞くと、くるみは元気良く返事をするが、メイド姿の筈の彼女がいつの間にか、小学生の給食当番が着るような白い割烹着に頭巾をしていたのだ。

「えー、だってえ、料理で油が飛んだりしてメイド服汚れたら大変、お客さんの所に行く時は脱ぐから平気だよ」

くるみは割烹着を少し上げて見せる。

下はメイド服。

上から割烹着を着ただけだ。

「何だか……違う気がするなあ、まあ汚れたら、コスプレ婆さんに頼むから気にすんなよ、いちいち面倒くさいだろ？」

「平気だよお」

歯を見せ、ニカッとした笑顔を浮かべて、ピースサインをするくるみ。

小さな頃から、今までもその笑顔はとても良く似合っていたのだった。

「じゃ、頼むな……伝票はレジにちゃんと置いておくんだぞ」

「……あつ、一枚も書いてないよ！」

「おいおい、楓ちゃんがスパゲッティとか言ってたろ？ 食べ物、飲み物は後で精算なんだから、お客さんが帰るまでにレジで把握しなきゃ、料金を貰えないだろう、それを届けたらみんなの分をレジに書いて置いとけよ、注文の度に書いてちゃんとレジに置くんだぞ、溜めるなよ」

料理の伝票の事を確認して、厨房を後にしようとしたが、くるみが素っ頓狂な声を上げたので、幸四郎は注意する。

「わかった、でも……思ったんだけどさあ」

「なに？」

「飲物はどうしてるんだっけえ？」

「一応、旅館みたいに女の子の部屋に小さな冷蔵庫を置いてある、酒までお前が用意したらかなり面倒くさいだろ？」

くるみの質問に幸四郎は答えた。

すると、くるみはフライパンのチキンライスを皿に盛り付け、

「だったら、料理も部屋の女の子が伝票つけて、幸四郎ちゃんに渡した方が良くないかな？　飲み物と食べ物が別なのは訳がわからなくなるかも」

と、言い、割烹着を脱いで、メイド姿になるとチキンライスをおか持ちに入れた。

「……そうかあ、やっぱりかあ、女の子が部屋であんまり伝票つけるのは、お客さんすれば抵抗あるかと思って……って、くるみっ！　おか持ちやめろっ！　メイド服におか持ちって、どんな層を狙ってんだよ！？　ラーメン屋か蕎麦屋かよ？　少しは雰囲気みたいなのを大切にしろよ」

一旦は考え込んだ幸四郎が、くるみの格好に気がつき突っ込む。メイドがラーメン屋の出前の様に、おか持ちを持つのは何かシュールだ。

「えへへ……実用重視って事で……」

「ダメ、雰囲気を大切にしろ、って……」

くるみは笑って誤魔化そうとするが、幸四郎は首を振った。

「とにかく、お客さんはけっして安くない金額を払ってるんだ、だから細かい所までこっちが気にするのは当然なんだよ」

「じゃあ……伝票は？」

おか持ちを諦めて、トレイにチキンライスをのせ、ラップをかけながら、訊いてくる幼なじみに幸四郎は少し間を置き、

「やっぱ、部屋にいる間は女の子には伝票はなるべく手にしてもら

いたくはないから、料理はくるみが責任持って、伝票をちゃんと付けるんだ、頼むな」

そう告げると、

「幸四郎ちゃんは昔っから、スゴくこだわる所は絶対に譲らないからねえ、わかったよ、了解、了解」

くるみは笑顔を浮かべ、案外スナリと、自分の提案を取り下げたのだった。

2

「皆さん、お待たせしました！ それではオークションを再開します！ 第六番目のプリンスは崎原みなみちゃんです！」

「よ、宜しくっ！」

みなみが緊張気味に舞台上上がる。
服は楓とお揃いの姫様衣裳だ。

「カワイイッ」

「いいね」

「プロポーションも楓ちゃんに負けてねえ！」

「美少女だっ！」

この衣裳はみなみ本人の希望で、おそらく楓への対抗心からなのだろうが、客からの受けもいい。

「わ、私と楽しい時間を過ごそうね……」

赤面しながら、みなみがホールに向かって言うと、客からはその初々しさに、ほおーと声が上がった。

楓の堂に入った立ち振舞いとは、また別に客に対する素のみなみのアピールになったようだ。

「さあ、崎原みなみちゃんのお部屋ご招待、オークション開始ですっ！」

「八千円！」

「一万円」

「一万五千円！」

ハイペースで競りあがる落札希望価格。

崎原みなみはそれを舞台上から見つめていた。

3

心臓が高鳴る。

もっと……もっと。

少しでも……高く。

みなみは祈った。

「二万四千！」

「二万八千……」

たくさん……いっぱい良くしてあげるから……もっと……高く。

「三万二千円！」

「三万五千」

そこで自分の映されたモニターの番号の競り合いが止まる。

三万五千！？

まだまだでしょ？

唇を噛む。

『こっちは覚悟決めてるのっ……だからっ』

「四万！」

少女の心に応える様に、声が上がる。

お願い……もっと。

願う。

私を待っている大切な子達がいるから。

「みなみさん、もっと落ち着いてください、それじゃお客様が気にします」

「ゴメンね、楓と同じ服だからね、あれよりは上に行かないと……なんてね」

高音に声をかけられると、みなみは今は思ってもいなかった事を返事して、舌を出したのだった。

続く

第33話「ファーストコール」

1

「五万二千円……五万三千ありませんかっ？ はい、ではプリンセスみなみとお部屋で過ごすのは、15番のお客様です」

コールする高音。

みなみは頷き、ドレスの裾を掴み、舞台を降りていくと、15番の客を見つけて、緊張気味に笑う。

「ありがとう、宜しくね」

相手は幸四郎とあまり年の変わらない青年だ。

「こちらこそ……」

「じゃあ、こっちに精算を済まして二階に行こ」

相手の青年もあまり風俗に行き慣れた様子でなく、みなみと互いにぎこちなく腕を組み、レジで待機していた幸四郎に支払いを済ませて、二人は二階に上がっていく。

『みなみちゃん、緊張するな、と言うのも難しいけど……頑張れ』

そんな事を思いながら、階段を昇るみなみを幸四郎が見つめると、それに気付いたのか彼女は幸四郎に明るい表情でウインクしてきたのだった。

「やっぱり、まだトップガールの記者は一回もコールに入ってきてないですね、まさか気に入った女の子がいない、って訳じゃないですよね？」

幸四郎はレジから戻ると、舞台の端で次のオークションを始めようと、マイクを持っていた高音に小声で話しかける。

「さて……だんまりですね、一通り女の子を観ている可能性もありますね」

「なるほど……8人しかいないのはマイナスになりますかね？」

「記者の印象では、なるでしょう、風俗は数というのは決して嘘ではありませんから、数が揃えば下手な時間稼ぎで、お客様を待たせる必要もなくなりますし、女の子のローテーションにも余裕が出ます」

腕時計を見ながら答える高音。

一番最初にオークションが成立した楓が客と部屋に向かってから1時間45分が経過したが、時間を終えた楓もすぐに帰れる訳ではない、シャワーを浴びたり、身仕度を整える手間もあるから、あと45分は帰っては来ないだろう。

その45分を残る知世と百合乃のオークションで消化しないと、時間の空白が生じるのだ。

「もう、時間稼ぎの休憩は無理だし、あとは高音さんのトークテクニクしかないかな？」

「私も司会なんて初めてなんです、トークテクニクなんてある訳がありませんよ、とにかく女の子のスカウトは本オープンに向けての急務ですからね」

この状況を楽しむには女の子を増やすしか手段は無いが、今すぐには出来ない、幸四郎が首を傾げて見せると高音はまったく、といった様子でため息をついた。

ローテーションの時間の余裕の無さが問題点として浮上した形だが、今はプレオープン。

本オープンに向けて、問題点を一つでも多く洗い出し、修正をするのが重要な目的なのである。

「わかりました、待たせる場合は素直にお客様に僕が謝ろうかな？」

「謝るなら私が出ますよ、もちろんそうはならないように、さり気なく引き延ばす努力はしますが……」

「すいません」

「あなたには滅多に頭を下げさせられないですよ、それにここは可愛い女の子の園なんです、自分以外の殿方の登場なんてお客様は誰も待ってません」

そう言うと、幸四郎に向かって肩をすくめ、高音は身を翻し、再びスポットライトの光が集まる舞台中央に立つのだった。

2

「さて……次はいよいよプリンセスオークション一番のグラマー美女の参上です、なんとIカップのお姉さん、胸もおっきいですが思いやりもおっきいです、癒してもらって下さい、織田百合乃姫の登場です！」

「ど……どうも」

高音の紹介と共に舞台に現れた百合乃、その姿に客達から感嘆の

声が漏れる。肩の露に出た赤いパーティードレスに、ピンクの大きめなパレオ。

豊かなでは陳腐過ぎる表現であろう膨らみの胸元に、パレオから覗かせる官能的な脚線美。

今までの少女達とは明らかに違う魅力。

『ゆ……百合乃さんっ、あまりにも可愛くて、あまりにもセクシー過ぎる!』

極上の大人のオンナが醸し出すセクシーさに幸四郎までが、思わず息を吞んでしまった。

「さて、こちらの百合乃さんは皆さん……何歳に見えますか？ 当たった方には百合乃さんのセクシープロマイド進呈!」

スポットライトを浴びて恥ずかしそうに立つ百合乃を指差し、高音がすぐにはオークションを開始せずにクイズを出題する。

予定には全く無かった行動だ。

「ええっと……22!」

「26!」

「案外……19!」

「24だろ!」

客達はノリがよく、何人かが答える。それらの答えに高音は満足気に頷き、

「ハズレです……実は……34歳」

と、ウインクする。

ドツと沸く歓声。

絶対にそうは見えないという類の驚きだ。

「こ、このお店で一番のおばさんです……ご、ごめんなさいっ!」

赤面してペコリと頭を下げる百合乃。

……ホールにいた大半の男達がその謙虚な態度といじらしさ、年齢とギャップのある容姿と魅惑的な身体に異性への保護欲をくすぐられる。

そして、続けての高音の言葉が百合乃を巡っての争いの号砲となつたのだ。

「百合乃さんは風俗は今回がデビューです、貴方の色を初めての白紙に染めて上げてください! それでは……織田百合乃姫のオークション、五千円からスタートになります!」

「五万!」

スタートと同時にきた! コール一回目からの十倍アップだ。オークション参加を決意した他の客は争いの相手の奇襲に声を上げ、高音は笑み、その対象である百合乃は口元に手を当て驚く。

『遂に点いた!』

舞台袖の幸四郎は高音と頷き合う。

6番。

それは新大空町風俗情報を独占している、と言っても過言ではない月刊トップガールの記者の持ったブザーの番号であった。

続く

第34話「メイド走り回る」

1

「来ましたっ！ いきなり6番さんの五万円のハイアップコール！
続く方、五万二千いますか？ いきなりの決着ですかっ」

「五万五千円！」

反撃は案外早く来た。

大型モニターに映された百合乃の画像の下に11番の番号が灯る。

「五万七千！」

次は23番。

6番からのコールでは無かったが、舞台上では百合乃自身がビツクリして目をキョロキョロさせている。その仕草もまた可愛らしい。

「六万！」

今度は14番。

遂に始めの楓しか達成してなかった大台。

それも楓よりもはるかに短時間で達している。

『これは……楓ちゃんの金額を上回るかな？ 俺は嬉しいけど、楓ちゃん知ったらどうなるかな？』

少なくともプライドの高い楓の事だ、上機嫌になる訳はない。
そんな事を幸四郎が考えているうちに……

「六万五千！」

あっという間に楓についた落札価格に百合乃のそれが追い付いたのである。

「出ました六万五千、本日のプリンセスオークション最高落札価格！ファーストプリンセス楓の記録に百合乃姫が並ぶ……」

「六万八千！」

「ぬ、抜いたあゝ！」

言葉が終わらないうちに、新記録のコールがかかり、高音は大仰にそれを言い直した。

「百合乃さん凄いな」

「そうだね……スゴいね、やっぱりあのミラクルナイスバディに、可愛い大人の魅力かな？」

舞台袖の独り言のつもりが、いつの間にか横でウンウンと相づちをうつメイド姿のくるみ。

「くるみっ！？　オイオイ、厨房は平気かよ？」

「今、佐久耶ちゃんのところに特製ビック焼そばとシュークリームを届けた所だよ……幸四郎ちゃんに言っておきたい事があって来たんだよ」

「なんかあったか？」

ただ単に舞台をのぞき見に来た訳ではなさそうなので、幸四郎はくるみに振り返る。

『……メイド姿のくるみ、可愛いな』

真面目にやっていない訳ではないが、幼なじみの可愛らしさを再確認する。

揃えた前髪、短めのツインテール。

ぱっちりした瞳が印象的な可愛い顔立ち。

そして、背は高くないが、案外と自己主張をした胸元にメイド姿が似合うふっくら目の体つき。

『もし……くるみが幼なじみじゃなくて、この街で仕事を探している女の子だったら、間違いなくスカウトしてるだろうな』

「幸四郎ちゃん？」

「いや、いや、なんでもないっ、で？ 言いたい事って何だよ？」

自分で作った物のつまみ食いは重罪だからな」

余計な事を考えてしまった所に、首をかしげられた幸四郎は必死にそれを誤魔化した。

「ちがうよお……くるみにもそれ、欲しい」

「それ？」

「内線用の携帯電話、ちょうど部屋に料理を配達に行った時に厨房に連絡があっても分かんないし、幸四郎ちゃんや高音さんに何か聞きたい時もあるし……」

「なるほどな、それはそうだな、高音さんに相談して用意できるように頼んでみるよ」

幸四郎は納得する。

このプレオープンで改善すべき問題点としては、至極妥当だろう。幸四郎個人的にも賛成だし、くるみもスタッフであるからには、

持たせるのに高音が反対するとも思えなかった。

「ありがとうね……幸四郎ちゃん、あつ、百合乃さん決まったみたいだよ」

くるみは頷いてから、舞台を指差す。

「では……織田百合乃姫のお部屋ご招待権は七万二千元で9番のお客様が落札されました!」

高音が興奮気味にナレーションする。

「うわぁ……百合乃さん、七万円かぁ」

「楓さん複雑〜! 一番高い金額目指してたのに、抜かれちゃったよぉ」

「そうでもないさ、楓ちゃんはそりゃホームページのトップだったり有利な所もあったけど、オークションも一番始めだったからね、始めはお客さんも空気が分からないし、楓ちゃんがいいスタートを切ってくれたからこそ、後が高い落札水準になったんだからね」

苦笑するくるみに幸四郎は説明する。

「そういう事かぁ……」

「それに今日のお客さんは常連さんでホームページも確認済み」

「どういう事?」

「だから、うちのプリンスは今のところ8人、百合乃さんを入れてもあと2人って、知ってるんだ」

「意味わかんない」

くるみは腕を組む。

「お客さんにも好みがあるんだよ、今日の落札金額の傾向でいけば……高いお金をコールしてもらえたのは楓ちゃんやみなみちゃん、菜ノ花ちゃん、佐久耶ちゃんに……百合乃さん、対してあまり高い金額で伸びなかったのは、恋音ちゃんとまゆりちゃん」

「ロリが伸びない！」

「あのなあ……まあ、間違っちゃいないよ、傾向として高音さんの連れてきてくれた常連さんは、恋音ちゃんとか、まゆりちゃんの幼い感じの女の子は好みが合っていないかも、って推測できるんだよ」

くるみのストレートな反応に肩をすくめて、

「だからさ……百合乃さんはナイスバディ好きからは始めっからマクされていたんだろうね、それに楓ちゃんやみなみちゃん達のオークションで競り負けた人達がここで！　っと頑張ったんだと思うよ」

と、幸四郎は説明をし終えてレジに歩き出すのだった。

「そっかあ、今日はナイスバディが人気なあ」

幸四郎を見送り、くるみは廊下を厨房に戻りながら呟く。

「……だとすると？　アンカーの……知世ちゃんはかなりピンチ！？」

そう顔を上げた時、厨房の中から内線の呼び出し音が聞こえた。

「はいはーい！ あっ、楓ちゃん？」

内線の呼び出しはトップバッターの楓だ。

「くるみさん……もう私はお客様と部屋を出ますわ、ベッドメイクの直しをお願いしますわよ」

「ええっ！？ それって、くるみの仕事？」

「メイドでしょうに！ それともオーナーの仕事ですか？」

「自分の部屋じゃん、自分でやれば……」

くるみはブツブツと反論するが、

「お客様をお送りするのもこちらの仕事ですわよ！ サポートはして下さいませっ！」

と、怒鳴られ、

「わかったよお、新しいシートもっていくよお」

そう渋々と答え、内線電話の受話器を置く。

「忙しい、まったく楓ちゃんも人使いが荒いなあ……大変だよ」

パタパタと廊下を走って一階隅の洗濯室からシートを取り出しぼやきながらも、くるみはそれを笑顔でするのだった。

続く

第35話「光の森へ再び」

1

舞台袖から見るスポットライトの光は異様に明るかった。
まるで目が眩む。

『……あの時と同じだ、まったく同じだ』

数年前の記憶。

遠藤知世は瞳を細め、それを封じようとする。
だが、それは更に鮮明に強く蘇ってきた。
期待のアイドルデュオとして、一人の美少女とデビューしようとした自分がまさか……今、ここで出番を待つ身になるとは。

「……この歳で言うのもなんだけど……」

誰に言う訳でもない一人言。

知世はセミロングの茶髪を首の後ろで指ですき、後頭部の短いツインテールを軽く整える。

「さぁ……皆さん、第一部はラストプリンセス知世ちゃんです！
その可愛さを後堪能ください！」

高音の声に客からの拍手が起こる。

知世は数年前にそうした様にゆっくりと自分を落ち着かせる様に
舞台へと歩みながら、先程中断した一人言を続けた。

「この歳で言うのもなんだけど……人生って……わかんねえなあ」

「どうぞ……知世ちゃんです」

「ハイハイ！　どうも知世だよ！」

高音の紹介に舞台に立った知世はフリルの付いた派手なピンクのドレス。

そのまるでコンサートのアイドルを思わせる衣装は知世の希望であつた。

「知世ちゃん！　かわいいなあ」

「下手なアイドルより遥かに上だよ！」

「この店、本当にレベル高いよな」

反応は上々だ。

知世は暗いホールに向けて投げキッスをする。

相手が顔が見えない程に暗いのはコンサートも一緒だ。

「はい、知世ちゃん、お客様に自己紹介をしてから挨拶してくださいね」

高音に促され、

「宜しく知世だよ、身長は152？、スリーサイズは視りゃ判るだろ！！　今日のお客様さんは巨乳党が多そうだけど、あたしは脱いだら凄いつてタイプ……まあ凄い幼児体型ってオチなんだけどさ！　プリンセスオークションのそういうところ担当って訳」

知世が明るく冗談も交えて挨拶すると、ホールから好意的な笑い声と拍手が返ってくる。

『なんかファンイベントみたいだ……』

覚えのある気分。

だがそんな気分にも包まれながらも、知世は自分の第二のステージはまだこれからが本番で事は忘れてはいなかった。

「さあっ、みんなっ！ あたしと極上時間を過ごす権利、ドンドン参加してほしいぞお！ あたしも気合い入り過ぎて際限なく、メチャクチャになるかも！ 宜しくな」

アイドル時代の様に飛び跳ねるように身体を伸ばして声を出し、知世が再び暗闇に向かい投げキッスをすると、暗闇の向こうのホールの客達は少し大仰なくらいの大きな歓声を上げた。

2

「それでは……また、私と一緒に過ごして下さるかしら……」

沸き上がるホールの歓声が遠くに聞こえる裏口。

楓は先程まで一緒に部屋で過ごしていた青年の背中に持っていた彼のスーツをかける。

「あ、ありがとうございます楓さん……スゴく、スゴく可愛くて綺麗で……」

「貴方も素敵でしたわ」

楓は人差し指で彼の唇に手を当て言葉を遮る。

「また……必ず、絶対に楓さんと部屋で過ごす権利を競り落とします」

「あまり無理はしなくて結構ですわ、初めてオークションしてくれた方はきちんと覚えてますわ……じゃあ、それでは」

楓が優しく手を振ると、青年は満足気な顔で手を何度も振りながら、夜の新大空町に消えていく。

「楓ちゃん……」

そこを見計らい幸四郎が声をかけると、

「部屋を出る前にシャワーは浴びましたわ、お客様と一緒にですけど……次の舞台いけますわよ」

楓はアップにした赤茶色の髪を掻き上げて、幸四郎に歩み寄ってきた。

幸四郎の鼻に彼女の使っている高級ボディークリームソープの心地よい匂いが香る。

「休まないでいける？」

「次は問題ありませんわ、またその次と言われるのならば、少し間を入れて下さいまし」

「いや……今日は二巡までだよ」

幸四郎が答える。

8人の二巡は16。

今日呼んだ客は二十数名だから、全員が女の子と過ごせる訳でないが、オークションという方式を採っている以上は当然に生じてしまう問題点だ。

「全員、お客様に廻らなかつたら不満出ませんか？ 風俗に来て、何も出来ないなんて、わたくしは殿方ではありませんので理解は出来ませんが、憤懣やるかたないんじゃないですか？」

楓の問題提起は正論で、間違いはない。

勿論、それはオークション方式を取ると決め、打合せの時点で高音にも指摘されていた。

だが、この問題についての答えは幸四郎は既に決まっている。

「うちのお店はとびっきりの女の子と素敵な時間を過ごす権利を競り合うお店なんだよ、競り合う以上は何も得れないリスクはあるのが当然だよ……それでもオークションに参加したくなるような、可愛くて素敵な女の子をこちらが揃えれば良い事、うちの店はハッキリ言えば女の子を安売りはしないからね」

幸四郎が答えると、楓はなりには納得した様に笑って、

「当然ですわ、安売りなんて冗談じゃありません」

そう肩を竦め、舞台袖に続く廊下を颯爽と歩いていく。

そんな彼女に幸四郎は百合乃に、オークション落札金額最高金額を更新されたとは何となく言いづらかったのだった。

続く

第36話「プレオープン終了」

1

「今日はここまで！ プレオープンの営業、お疲れ様でした！」

明かりを点けたホールで祐一が手を叩くと、プリンセスと呼ばれていた女子達はそれぞれリラックスした顔を見せ、隣の娘と話をしたり、ミーティングに使った各プリンセスの落札価格が書かれたキヤスター付きのホワイトボードを見たりし始めた。

「最終的に本日一番の招待落札価格は百合乃さんの一回目かぁ」

楓に対抗したプリンセスから、白いTシャツにジーンズの着慣れた格好に戻ったみなみが腕を組んで、むゝっ、と唸る。

結局、プレオープンの最終落札価格の最高額は一回目の百合乃についた七万二千円。

それに次ぐのは六万五千円の一回目の楓。

更に二回目の楓が六万三千円が続き、トップは百合乃に譲ったが面目躍如といった所である。

「やっぱり百合乃さんはスゴい、可愛いし、お淑やかだし……プロポーションがもうたまらないし」

「ですよねえ……二回目でも五万を越えてましたもんね」

みなみは、悔しがりながらも素直に百合乃の魅力を認め、恋音はとてもかなわないと言った風に同意している。

「私は二回目は少し下がっちゃったからなあ……四万五千だったか

な？」

「私の少し上がった二回目が四万四千ですから、凄いです……」

みなみが二回目が下がったのを悔やむと、恋音が首を振る。

「今回はそういう好みだったって事、たまたま、たまたまだって！それに二回目は上がった子は少なかったから、お客は二回目で恋音ちゃんの可愛さに気づいたって事じゃないの？」

落ち込み気味になる恋音を優しい先輩の様に、みなみは励ます。結局、二巡目はみなみの言う通りに8人中で一回目よりも値段を上げたのは、恋音とまゆりの2人だけであった。

その二人にしても一回目が周りに比べ、低めの三万円代だったのが四万円代に乗せて来たという事なので全体的には下がったのは間違いない。

いわゆる一周目は常連だけにご祝儀の意味もあるのだろう。

「まあまあ……みなみちゃん、今から金額ばかりに仏頂面しちゃダメだよ、さあ今日はプレオープン成功の打ち上げにみんなで御飯と行こうか！」

ホワイトボードを見つめる二人に笑いかけてくる幸四郎。

「御飯？ そりゃ嬉しいけどさ、売り上げとかに仏頂面するのはオナーもそうなんじゃない？」

「そうだよ」

みなみが振り返って訊くと幸四郎は頷く。

「だからさ……気にするな、とまでは言わないけど、売り上げに仏

頂面するのは止めてほしいんだ、それは俺や高音さんがする仕事だしね、プリンセス達はらしく、可愛く美しく居て欲しいんだ」

その言葉に8人のプリンセス達は幸四郎を見る。

「俺がね、このオークション形式の落とし穴の一つだと怖いのは、落札金額を気にするあまりに女の子がお客を金額で判別してしまわないかなんだ……確かに高い落札金額を出してくれたお客に特別にサービスしたい気持ちは出るだろうし、それはいい……でも、低めの金額を出してくれたお客さんにも、君達の可愛くて素敵な所を十二分に見せて上げてほしい」

「幸四郎……」

笑みを浮かべ、穏やかだが真剣な眼差し。

売り上げから収益が決まるプリンセスに、それを完璧に平等に出るかどうかの難しさもキチンと理解した幸四郎の嘘を感じない言葉に、みなみは幸四郎を名前で呼んでしまう。「良い事をいつてくれたね、オーナー！　ボクも今日は金額伸びなかったけど、もう気にしないで本オープン頑張るよっ！」

まゆりはそう言って幸四郎に駆け寄り、腕を取ると笑顔を見せる。

「期待してるよ、お客様にきちんと向かい合っていければ……成績は後から付いてくるから焦らなくても大丈夫」

まゆりに幸四郎は笑いかけた。

気にするなと言っても落札金額で女の子達に差は出てしまうのだ、競争は風俗業界では少なからずある事で、時には業績を伸ばす原動力となり、時には店を揺るがすトラブルの素にもなってしまう。

幸四郎は経営は素人であるが、幼い時から女の子達に気を使う父

親や高音の努力を知らない訳ではなく、自分も女の子同士の関係には気をつけるつもりでいたのである。

2

「どうでしたか？」

店の外。

裏口でメモをとっている男に高音は話しかけた。

「これは高音さん、御苦労様でした、あのカジノディーラーの格好、俺は萌えちゃいましたね」

男は書いていたメモから顔を上げる。

彼は今日の招待客の一人で月刊トップガールの記者の大西という青年だ。

年齢は三十代前半で高音と同じくらいだが、中肉中背で若々しく、高音の後輩に見える。

彼と高音はかなり前から面識があった、幸四郎の父親の秘書を本格的に始めた時、大西も風俗雑誌の取材をこの街で始め、御神本グループにも出入りをちよくちよくしていたからだ。

「どうでしたか？ って、百合乃さん最高でしたよ……スゴく可愛らしくて優しくてね」

「それは、それは」

大西が返事をする、高音は笑みを浮かべた。

彼は一度目の百合乃のオークションに参加したが、一度目の五万円をつけたが、その後はコールせずに見送り、二回目の百合乃のオークションに参加して、競り勝ったのである。

「一度目で貴方がコールした時は驚きました、よっぽど好みですか？」

「いやいや……見事なプロポーションについて、コールした時に、しまった！最後の娘まではとりあえず観ないと！　って、黙ってましたよ」

「慌て者ですね、そんなに気に入ってくれたのならトップガールの表紙も近いですかね？」

高音は笑いかける。

勿論、冗談でそんな簡単ではない。

風俗規制解除の新大空町は激戦区であり、一日に回る金に比例して女の子に求められる物も当然、ハイレベルだ。

そして、新大空町の情報で成り立っていると言っても過言でない月刊トップガールの表紙やカラー特集ページに載るのは、ひょっとすれば芸能雑誌のそれと遜色の無い難易度かもしれない。

「表紙も特集もボクだけじゃなく、編集部で決める事ですけど……個人的には流石、御神本会長の息子さん、面白い方向から攻めてきたと思いますし、集めた女の子も素人が多いですけど、それでも成り立つ形態だし、ルックスも非常に点数の高い娘ばかり集めてきたと感心してます……編集部も御神本グループの動向は気にしていますし、まったく記事にならない事は無いですよ」

大西は答える。

「……でも」

「でも？」

高音は眼鏡の向こうの瞳を細める。

「大王チェーンも決して無視しない……この店が御神本グループの最後の砦という限り、この店が上手くいけばいくほどに彼らはこの店を見逃さないでしょう」

大西の顔は百合乃の事を話した時と違い、引き締まった物となっている。

「わかってます」

頷き、高音は明け始めた空からの光を手で遮る。

「でも必ずや、必ずや、坊っちゃんにはこのお店を成功させて頂きます、そして……強引な手段で勢力を伸ばす彼等を駆逐する反撃の象徴として貰わなければいけません」

「……高音さん」

高音の視線には強く、そして悲壮にも見える使命感があった。

大西はそんな彼女を見つめ、

「やけにお喋りですね」

と、苦笑するのだった。

続く

第37話「色々な人がいますから」

「うわぁ、スゲェ太陽が眩しいぜ」

商店街の道を照らす太陽の光に眩しそうに手で遮る知世。

「五時半かぁ、少し眠いけど幸四郎ちゃんがお寿司を奢ってくれなんてチャンスは無いからね！」

くるみは眠いと言った割には皆の先頭を跳ねる様に歩く。

朝焼けの道。

幸四郎はくるみと店のプリンセス8人を連れて、プレオープンの打ち上げの場所の寿司屋に向かって歩いていった。

「こんな朝からお寿司屋さんがやってるなんて、ビックリだね」

「なのです、ボクのいた神洋島では朝にお魚を食べたければ、朝市に行って自分で捌くしかないのです」

「私も来た時は驚きましたけど、この街の飲食店には夜から朝に開いてて、昼に閉まってる所が案外に多いんですよ」

この朝に寿司屋が営業している事に驚いている菜ノ花と佐久耶に恋音が説明する。

風俗街ゆえの変則的な営業時間なのだろう、この街でお金を持っている働く女の子達の帰宅時間を考えれば不自然ではない。

朝方に疲れて家に帰る途中、食事を外食で済ませる女の子達が多く、需要はあるのである。

「まったく……朝から寿司なんて、わたくしは寝る前に食事は控えてますのよ」「まあまあ、今日はプレオープンの打ち上げなんですし、せっかくオーナーが氣を使ってくださってるんですから」

端整な眉をしかめる楓に百合乃が笑顔を向ける。

「そういう所も気にしなきゃいけないよね、昼夜逆転したからって素直に食べるのも良くないか……楓ちゃんみたいな見事な身体のラインを維持するのもすごく氣をつかってるんだね」

二人のやり取りを見ていた幸四郎が言うと、

「そうですね、まあ、でも今日は百合乃さんの言う通りオーナーの氣遣いもあるのでからお付き合いたしますけどね」

そう答えながらも、身体への氣遣いを誉められた楓はまんざらでもなさそうに口元を緩めたのだった。

やってきたのは商店街の一角にある回転寿司店。

「いらっしゃいませ」

威勢の良い挨拶をしてくる数名の男性店員。

朝の六時にもなっていないのだが、同業者であろう女の子がかなりいる。

「えっと……予約していた御神本ですけど、11人の予定が10人

になっちゃったんですけど」

「そうですか、どうぞどうぞ、こちらへ」

幸四郎が告げると、店員は笑顔で一行を席に案内する。

高音が来ていないのは彼女が今日、来てくれた常連客に色々と思いを聞きたいからと、その内の数名と別に食事に行ったからだ。

「こちらへ」

案内されたのは向かい合わせで3人ずつ、計6人が座れる席が2つ。

寿司を回しているコンベアを横に見る良くあるタイプの席。

「どうも……じゃあ、適当に別れてよ」

幸四郎が言うと、

「恋音ちゃん、めちやくちや食べるからお寿司が直ぐに取れる奥ね」
「恋音さん、めちやくちや食べるのですか？ それは意外なんです」
「すいませんう」

「くるみは手前がいい、ジュース取りにいくから」

「わたくしもそんなに食べないから手前で良いですわよ、それに奥に行ったら人様を取らないといけなくて面倒ですわ」

などと各人が自由に座り始め、幸四郎は菜ノ花とくるみに挟まれ、向かいに佐久耶、知世、楓が並ぶ席にいつの間にもやら座らされていたのだった。

「じゃ遠慮なく食べてよ、朝じゃ入らないかもしれないけど」

「そんな事はないのです、ボクは特製大盛焼きそばをお客さんと平らげてから、シュークリームも食べましたが、お寿司ならまだまだ入るのです、さあさあ知世さんに楓さんも佐久耶が取るのでドンドン言ってください」

「じゃあ……そこ、そこに流れてきた赤身マグロ」

幸四郎が勧めると、巫女服の袖をたくし上げる佐久耶、そこに知世がコンベアを指差す。

「お待ちっ！」

佐久耶は軽快に返事をするが、その行動は同じテーブルの皆を仰天させる。

なんと彼女は皿ごとではなく、二貫あった寿司をひょいとつまみ上げ、知世の前にポンと置いたのだ。

「な、な……何やってんだあ!？」

「え? 知世さんが赤身マグロを取れ、ってボクに言ったのです」

「お前……皿ごと取るんだよ! 何なんだ? ギャグやってんのか?」

「あっ……そうなのですか? 分からなかったのです、お寿司は知ってるのですが、島では回転はしてなかったのです」

驚く知世。

佐久耶はあっけらかんに舌を出し、苦笑する。

「か……変わった娘ですわね」

「そ、そうだね」

引きつる楓に、幸四郎が素直に同意すると、

「でも……お仕事だけじゃ、分からない顔がこれからみんな見えてくるんじゃないでしょうか？ みんな色々な事情で様々な場所から集まっているんでしょうから……私はとても面白いと思います」

そう隣の菜ノ花に微笑まれて、

「それもそうだ」

と、妙に納得してしまうのであった。

続く

第38話「今、うろたえましたか？」

「いただきます」

「ボクもなのです、ちなみにこれはボクが直接つまんで、テーブルに置いてしまったお寿司なのです、無駄にせずにきちんと頂いてい
るのです」

知世はマグロの赤身を頬張って嬉しそうな声を出し、佐久耶も誰
得な説明口調でマグロの赤身に舌鼓を打つ。

「もう、朝からよく食べれますわね、それも箸も使わないで……」

「ふふっ、楓さんはお寿司はお箸を使いますか？」

ため息を付きながら割り箸を割る楓に菜ノ花が笑いかける。

「ですわよ、素手は少し抵抗がありますわ……えと、菜ノ花さん、
そこの鯛を取ってくださいる？」

「そうなんですか、はいはい……オーナー、前を失礼します、どう
ぞ」

幸四郎の隣、コンベア側に座っていた菜ノ花は頷き、一貫の鯛の
寿司が乗った皿を取ると、丁寧に断ってから幸四郎の前を通して楓
に渡す。

『何気ない事だけど、菜ノ花ちゃんは落ち着いて礼儀正しいなあ……
それで可愛いんだから、男としては得点高いよ』

細かい気遣いの出来る菜ノ花に幸四郎がそんな事を感じてると、

「一貫物だぁ……流石は楓ちゃん、鯛とかは一貫しかないのに値段が一緒、すなわち高いんだよ」

楓の頼んだ鯛の寿司に妙に感心するくるみ。

「一貫で構いませんわ、わたくしはたくさん食べるつもりはないですわ」

楓はそう答えながら、箸で鯛の寿司を皿の上でコロんと横にしてしから、ネタとシャリを挟むようにつまんで醤油につけ口に運ぶ。

「ほお、変わった食べ方してるう」

「別段、変わってないですわ、こうすれば箸を使っても醤油をつける時に良くやるネタとご飯をバラバラにしないでしょ？」

「なるほど、くるみなんて箸を使うとネタが落ちちゃうから、醤油を下のご飯にしかつけられない」

「ご飯にお醤油を付けてしまっっては台無しですわ」

くるみは対面している楓に興味津々の様だし、楓の方も案外と邪険にしている様子は無い。

「手で食べれば関係ないじゃん」

「なのです……お寿司は職人さんの手から、ボクの手には直接触れる、ふれあいの料理なのです」

知世は箸を使うなんて面倒くさいと言った感じ、佐久耶は何やらこだわりを述べて、パクパクと素手で食べる。

「ご勝手に……ふれあいと言われてもこんなお店の裏に職人さんなんていないでしょ？ ご飯を握る機械にアルバイトさんがネタを乗せてるだけですわ、オーナーはどう食べられますか？ 箸をお使いになれますか？」

楓は佐久耶のこだわりにチクリと釘を刺して、自分の箸を置くと、割箸の入った箱から幸四郎に割箸を差し出す。

「そうだね、ありがとう」

幸四郎自身にはその辺りのこだわりは特になく、箸でも素手でも意識なく食べていたので、楓の親切を素直に受ける。

「楓さん、私にも箸を」

「どうぞ」

「ありがとう」

菜ノ花も箸を使うように楓から割箸を受け取ると、綺麗にそれを割る。

くるみは楓のやっていた箸で寿司を横に転がしてからつまむのを真似しはじめていた。

『女の子の仕草って、色々だな……どれが良いか、とかじゃなくて、それぞれの女の子の個性が出て来てるよな』

たかが寿司の食べ方一つなのだが、女の子の個性を感じてしまい、幸四郎は先ほど菜ノ花に言われた様に些細な所からお互いが見えてくる事に気がつきながら、何だかそれを楽しんでしまうのだった。

「おっ……そろそろ30皿だぞ、あたしは8皿だから結構だな、あと2、3皿で止めとくかあ」

皿を投入口に入れながらカウンターされる表示を見て、知世は言う。

「ボクと知世さんでかなり食べているのです……でもまだボクの挑戦は続くのです」

「くるみもまだまだイケるよ！」

「わたくしはもう遠慮しますわ」

「私はもう少し食べたいな、って感じです」

くるみや佐久耶はまだまだ食べれそう、楓は幸四郎の見た所、三皿しか食べていないのだが次の皿は取っていない。

知世と菜ノ花はあと少し食べたそうだし、くるみと佐久耶はまだまだ入りそうだ。

「ところで菜ノ花さんってさあ……あつ、今来てるタコも取ってください」

くるみはモグモグと甘エビを頬張りながら、幸四郎越しに菜ノ花に視線を向ける。

「はいはい、ところでってなんですか？ オーナー、前失礼しますね」

口元に笑みを浮かべながら、コンベアに流れてきた皿を取り、幸四郎の前を通そうとするが、

「えっとね……菜ノ花さんって、声がスゴくアニメ声だね」

「……えっ!？」

突然のくるみの言葉に、菜ノ花は一瞬、息を呑むような声を上げて、タコの乗った皿をくるみの手に渡す前に幸四郎の目の前に落としてしまうのだった。

続く

第39話「柚子と石鹸」

「うわっ」

「ご、ごめんなさいっ」

目の前で皿ごと寿司を落とされた幸四郎が声を上げると、菜ノ花は慌てて謝りそれを取る。

「おいおいっ、大丈夫かよ!？」

「うわぁ、オーナーのお醤油皿にタコのお寿司が直接落下なのです、これは大惨事なのです」

驚く知世と佐久耶。

菜ノ花が皿を落とした場所にはちょうど幸四郎の醤油皿があり、醤油がテーブルにぶちまけられた形になってしまったのだ。

「平気、平気、大したことないよ……楓ちゃん、ちょっとそこのおしぼり取ってくれる？」

飛び跳ねた醤油がシャツを汚したが、幸四郎は努めて笑顔を浮かべ、楓におしぼりを取るように頼む。

「ええ……ちょっと、くるみさん、席を立て下さります？」

「え!？ う、うん」

おしぼりを手に取ると楓はくるみを立たせ、

「くるみさんは私の席で食べててくださいな」

そう告げると、くるみの今まで座っていた席、幸四郎の隣に座り、テーブルの上に飛び散った醤油を拭き始めたのである。

「楓ちゃん、ごめんなさい……使わせちゃって」

楓に謝りながら、菜ノ花もハンカチを取り出して幸四郎のシャツを拭く。

「楓ちゃんも菜ノ花ちゃんも、いいよ、いいよ……自分でやるから」

そう幸四郎は言うが、

「オーナーは服に醤油がかかってますわ、動いて拡がったら、クリーニング代がかさみますわよ」

「私の不注意ですから、すいません……あの、楓さんの言う通りあまり動かないでくださいね、醤油がしみこんじゃいますから」

と、それぞれに答えられてしまい、結局は動けなくなってしまふ。

「悪いね……あつ」

ふと、柚子と高級石鹸の香りが幸四郎に身体を近づけた二人から薫る。

良い匂いだ。

自分に身を寄せ、目の前のテーブルを楓が、シャツを菜ノ花が、それぞれ拭いている状態に顔を赤らめしてしまう幸四郎。

それを誤魔化そうと顔を上げると、立ったままのくるみが頬をあらさまに膨らませ、つまらなそうな顔をしていたので、正面を向き直すが、そこには頬杖をついて、目を細める知世がいたのであつ

た。

「本当にすみませんでした、シャツは明日にでも弁償させて下さい」
「良いって、どうせ安いシャツなんだから気にしないでいいよ」

頭を下げる菜ノ花に幸四郎は後ろ頭を掻きながら答える。

テーブルの上は楓が拭いてすっかり綺麗になったが、幸四郎のシャツに付いた醤油はハンカチで拭いた位では落ちなかったのだ。

「でも、やっぱり私の不注意だから弁償しないと」

「いいから、いいから、本当に気にしないで……くるみに渡す時に間にいた俺が中継してれば、良かったんだからさ、菜ノ花ちゃんだけが悪いんじゃないよ」

気にする菜ノ花に幸四郎が笑い、

「菜ノ花さん、不注意の責任をとりたい気持ちは解りますが、もうオーナーも許して下さってるんだから良いんじゃないやありませんか？
それ以上はこの場の雰囲気壊れてしまいましてよ」

そう楓に言われると、菜ノ花は少し複雑な表情を浮かべながらも、わかりました、本当にすみませんでした、と答えて頷いた。

それから20分程して一行は寿司屋を出る。

会計は予想以上にはならなかった、寿司が好物で相当食べるだろうと覚悟していた恋音が遠慮をしたらしい。

「恋音ちゃん、遠慮は要らなかったんだよ？」

「そんな、遠慮なんて……二十五皿食べちゃったんですよ、本当に満足してます」

幸四郎が声をかけると、恋音は赤面して首をフルフルと振った。すると、恋音と一緒にいたみなみが笑う。

「オーナー、滅多な事言わない方が良いわよ、恋音ちゃんが本気になれば百皿は食べれるんだから」

「酷いですう……せつかく、食べるの我慢したのに、みなみさんにそんな事言われるなんてえ」

不本意そうな声を上げる恋音。

「やっぱり我慢したんじゃないか……お持ち帰り用のお寿司で良かったら、すぐに出来るらしいし、買ってあげるよ？ 部屋に帰ったら食べなよ、ほら何貫入りが良いか選んで？」

「あ？ あう？」

みなみによって思わず出てしまった言葉を逃さずに幸四郎がツツコミを入れて、お持ち帰り用の寿司の表示パネルを指差すと、変な声を上げて、数秒間の間を置いた恋音は何かを観念した様にため息をついて、

「……………はい、お願いしますう……………出来れば二十貫入りの方で、本当にすいませんですう」

と、素直な欲求を遠慮なく吐露した。

「良いよ……………じゃあ、少し待ってて」

それに笑顔で答え、レジの店員に持ち帰りの寿司を注文する幸四郎。

「すげえな、店で上手くやってお客に奢らせたら、店の食べ物の売上が上がるんじゃない？ 恋音が食べたいって言えば、お客さんはかなりの確率で奢ってくれるよ、きっと」

その様子を見ていた知世が言って、軽くヒューと口笛を吹く。

だが、何処か悟った様な寂しい笑みを浮かべた恋音に、

「いえ……………多分、次からオークションしてくれなくなるだけです、昔から食事に連れていってくれた人は皆が遠慮しないで、って言うてくれますけど……………それから二度と私を誘ってはくれませんでしたから」

と、トーンの落ちた口調で答えられてしまい、知世は苦笑いしながら、

「ご、ごめんな」

と、沈殿したあまりいい思い出ではない過去を浮き上がらせてしまった事を、素直に謝る。

『みんな話してみると、可愛いだけじゃなくて本当に色々だなあ……きつと苦労もしてるんだよなあ』

幸四郎は持ち帰り用の寿司の代金を払いながら、そんな事を思うのだった。

続く

第40話「トップアイドル」

「ハイ、ハイ……コッチはみんな帰ってきました、そちらはまだ？
なら俺も行きましょうか？ 大丈夫ですか……スタッフミーティ
ングは明日にしましょう、今日はみんな疲れているでしょうから、
ええ……ハイ、ではお疲れ様です」

幸四郎は携帯電話を閉じると自分の部屋のドアを開いた。
アパートの一階。

プリンセスオークションの寮であり、古い割には二部屋に小さな
キッチンの2Kのそれは小綺麗でしっかりしており、評判はそう悪
くない。

欠点と言えば、二ヶ所あるにはあるのだが、トイレが女の子と共
同なのと風呂が無いので、話の通っている近くの銭湯に安く入らせ
てもらうか、店舗の女の子の部屋のお風呂を使うかになる所だ。

トイレは一階トイレを男子用という案もあるが、現在でも男女比
率を考えればそうはいかなかった。

「高音さんもまだ常連さんといえるのかあ……大変だなあ」

欠伸をして幸四郎は畳の上に布団を敷き、スーツを脱ぐ。

先程の携帯の相手は高音だ。

彼女はこちらの打ち上げではなく、プレオープンに来てくれた常
連客に意見を聞く為に別に食事会をしたのだが、更に何故か二次会
に突入したらしく、もう少し遅くなるので、今日の夜に予定してい
た幸四郎と高音、くるみの3人で予定していたスタッフミーティン
グを明日に伸ばしたのである。

「とりあえず、くるみにメールして……寝よう」

素早くメールを打つと、幸四郎はスーツを適当に壁に架けて、Tシャツにトランクスで布団に倒れ込むのであった。

泥のように眠る。

そういう言葉があるが、今日の幸四郎はまさにそれであった。

高音がいてくれたとはいえ、素人の起業。

プレオープンまでの疲れがドツと身体にのしかかってきた様で布団の感触を意識する前に幸四郎は深い眠りに落ちていたのである。

「1時半か……」

いつの間にか被っていた布団から顔を上げる。

布団に入ったのは朝の七時くらいだったので、かなりの時間眠った計算だ。

目を擦りながら立ち上がり、伸びをする。

「これからは昼夜逆転生活だもんなあ……慣れないといけないな」

テレビをつける。

やっているのは昼のワイドショー。

別段、視たい訳でもないが、起きたばかりの意識がハッキリする

まで、ぼんやりと眺めている。

今日の特集は人気急上昇中の美少女シンガーソングライターの草くさ薙なぎ愛菜あいなに一日密着という物だった。

「確かに可愛いよな……プロポーションも良さそうだし、この街に来てたら即座にスカウト……って、人気のアイドルに何を言ってるだよ？ オレ」

女の子を観る時に観察してしまうのが、職業病になってしまってる事に苦笑しながら、後ろ頭を掻く。

「昼過ぎてるんだよな、何か食べるか」

部屋にはコンロと流しのある申し訳程度のキッチンと小さな冷蔵庫があり、幸四郎も一人暮らしの経験から自分が満足出来るだけの料理はこなす。

だが朝に寿司を食べたせいか、舌がおごってしまい買い置きのカップヌードルがある事を思い出し、ヤカンに水を入れ、コンロにかけ、それを待つ間、壁に背をかけテレビを眺める。

「仕事にこだわりはある方だと思います、才能とか言われても解らないけど……どれだけ一生懸命やったかは自分が自覚できますし、嘘も通用しないから」

栗色のセミロングに黄色いリボンで結んだツートールの美少女、草薙愛菜が何かのインタビューにそう答えている。

少女の丸みを残しながらも強い意志を感じる瞳。

程よい鼻筋から薄い唇。 整った輪郭。

一見細身に観せるが、豊かな胸元から見事なくびれのヒップライ
ン。

歌と音楽の才能溢れる紛れもない美少女。

草薙愛菜はそういう評価を大多数から受けている。

「言う事も大人びて、立派なもんだなあ……芸能オンチの俺でもこ
の娘は知ってるもんな、大した娘なんだろうな」

腕を組む幸四郎。

「いや、ホント……こんな娘がいたら」

勿論、草薙愛菜の美貌に対してプリンセスオークションの女の子
が一方的に劣るなんて思わないし、好みによっては楓の方がとか、
知世の方が、という人間はいるだろうが、店のエースクラスになる
のは確実だろう。

「……なんて、あり得ない事を言ってる場合じゃないよ、本オー
プンまでに何とか女の子をスカウトしなきゃいけないんだ」

美少女アイドルに目移りしている場合じゃない。

今の8人の女の子達に劣らない娘をスカウトしなければならな
いのだ。

草薙愛菜がギターを片手に歌う姿を見ながら、紹介所にまた直接、
顔を出して出そうか、などと考えていると……

玄関の方向から木製のドアを2回、軽くノックする音が聞こえて
きたのであった。

続く

第41話「ヤキモチ!？」

「え? はあい……」

ノックに答えて幸四郎はドアを開ける。

「菜ノ花ですけど、いきなり来て、すいませんけど……きゃあああ
あっ!」

そこに立っていた菜ノ花は幸四郎を見るなり顔を手で隠して、背中を向けてしまう。

「え……」

その理由はすぐに理解できた。

それは自分の格好。

上がTシャツに、下がトランクス。

寝て起きたばかりの格好でいたのである。

「な、菜ノ花ちゃん! ゴメンツ、本当にゴメンツ……今、何か着るからっ」

「お願いしますっ」

幸四郎は慌ててドアを一旦閉めると、部屋の隅に畳まれていた短パンを見つけると、素早く履き再びドアを開ける。

「ゴメンね……もう短パン履いたから平気だよ」

「は、はい……」

菜ノ花は顔を手で隠したまま振り返り、少しずつ閉じた指を開く。

「今の今まで寝てたからさ、でも女の子ばかりのここで不注意だったね」

「いえ……そんな、私こそまだ寝てたかもしれない時間にゴメンなさい」

顔に当てていた両手を謝るように合わせ、菜ノ花は赤面したまま苦笑する。

『カワイイ……』

自分の不注意で菜ノ花を赤面させたのだが、その仕草に幸四郎はそんな事を思ってしまう。

「えっと……オーナーはお昼ご飯はまだですか？」

「まだだよ……一応、料理中かな？」

菜ノ花の問いに、幸四郎はドアのすぐ横にあるキッチンのコンロを指差す。

「ヤカン……カップラーメンですか？」

「まあね」

幸四郎が肩をすくめて見せると、

「オーナー、朝のシャツのお詫びにお昼のカップラーメンを諦めて、奢りますから一緒にお昼に行きませんか？」

菜ノ花はそう言って幸四郎を覗き込んでくる。

「え？ シャツの事なら気にしてないよ、本当に安い物だから」

「私の奢りだって大したこと無いです」

「いや……でも」

「嫌ですか？ 2人でお食事いくの」

「イヤイヤイヤ、菜ノ花ちゃんみたいな女の子とご飯行くの嫌な訳ない……ほら、たいした事ないのに気を使わせたみたいで」

「使いたいんだから良いじゃないですか？ 使われたくないなら、

ハッキリ言ってくれて構いません」

「いやいや……そんな事無いってば」

わずかに不機嫌な様子を見せた菜ノ花の問答、それに幸四郎は慌てて手を振ってしまう。

「じゃあ、私の奢りを受けてくれますよね？」

「だから菜ノ花ちゃんに誘われて嬉しくない奴なんていないよ、ありがたくゴチになります」

厚意に変な気を使い過ぎるのも逆効果だと判断し、ペコリと頭を下げると、菜ノ花は、

「はい、じゃあ、あと30分したら、また着ますから……ね」

そう告げてから、小首を傾げて肩をすくめ、微笑みを浮かべてドアを閉めたのであった。

「せっかくの厚意なんだから、すぐに受けるべきだったかな、でもちよっとキレてなかった？ ああいうところもあるんだな」

落ち着いた印象の菜ノ花が一言、二言のやり取りで少し不機嫌な表情を見せたのは意外だった。

女性の微妙な心理という奴だろうか……

幸四郎が頭を掻きながら、ドアの鍵を閉めようとする、閉まっていたドアがスッと開き、

「別にキレてませんよ、そんなに気が短くはありませんから……それにキレたら普通じゃ済みません」

そこには意味深な笑みを浮かべた菜ノ花が立っていたのだった。

「オーナー」

「ああ……うん、それじゃ行こうか」

ちょうど30分が経ったのを見計らった様にドアがノックされたので、カジュアルシャツにジーパン姿に着替えた幸四郎はドアを開ける。

「二時過ぎか……お昼にはちょっと遅いですね」

黒髪のセミロング。

留めた黄色いカチューシャから、額に幾筋か垂らした前髪。

パッチリとした一重の瞳に細いフレームの眼鏡。

黒の長袖

シャツにショートジーンズパンツルックは菜ノ花のバランスのとれたボディーラインを引き立たせる。

何度か見ているが、菜ノ花はスカート系はあまり履かない様だし、足元もスニーカーが多く、案外にボーイッシュだ。

「そうだね、歩く？ それとも」

「とりあえず駅前まで歩きましょう」

「わかった」

とりあえずと言ったからには、駅前から電車に乗るのかもしれないが、あえて聞かずに幸四郎は彼女と歩き出すが……

「ありゃ？」

アパートの一階に並んだ部屋のドアが開き、パジャマを着た知世が目を擦りながら出てきたのである。

普段は茶髪セミロングに両側頭部からテールを伸ばす知世だが、寝起きなのでただのセミロングだ。

「知世ちゃん、今起きたばかりですか？」

「まあね、そっちはなんだよ、オーナーを連れてデート？」

笑顔を浮かべる菜ノ花に知世は頷いて尋ねる。

「まあ、そうですよ」

「へえ」

菜ノ花の答えに知世は幸四郎の方を見て、つまらなそうな声を上げながら瞳を細める。

「あ、その……」

菜ノ花がデートと問われて、否定しなかった事は嬉しくもあるが、明らかに不機嫌な瞳を向けてきた、知世にはどう答えていいかは迷ってしまう。

「じゃあ、あんまり遅くなれないから……行きましょう、オーナー」
菜ノ花は知世に軽く手を上げて、再び歩き出す。

「ああ……いつてらっしゃい」

菜ノ花に手を振り返す知世。

「それじゃあ……行ってくるね」

後ろ姿の菜ノ花に続き、知世の横を幸四郎も通り過ぎようとするが、

「ああ、オーナーもいつて……らっしゃい！」

と、知世に逆水平チョップをお見舞いされてしまうのであった。

駅前への道のり。

菜ノ花と並んで商店街を歩く。

『知世ちゃんもキツいなあ、でもヤキモチだったら、知世ちゃんみ

たいなカワイイ娘にそう思われてるのは悪い気はしないけど』

幸四郎がそんな事を思っていると、歩きながら菜ノ花が後ろ手を組み、覗き込んでくる。

「知世ちゃんも随分、子供さんですね、ヤキモチ焼いて八つ当たりなんて、今度オーナーから誘ってあげたらどうですか？」

「そ、そうかなあ？」

「でも、その時は私に見つからないように……」

「ははは……」

笑顔の菜ノ花。

幸四郎は乾いた笑いを浮かべるしか出来なかったのだった。

続く

第42話「突撃、昼下がり寝起きコーナー」

「やつほう、知世ちゃん！ 幸四郎ちゃんは？」

「ああん？」

知世は幸四郎と菜ノ花を見送った後、アパートの前で日向ぼっこをしていたウリ坊のタツノリを見つけ、座り込んでツンツンと突いていたのだが、いきなり声をかけられ、不機嫌な声を隠さず顔を上げた。

「タツノリとパジャマ知世ちゃんのツーショットだね、二人とも可愛いね」

そこに立っていたのはタンクトップにショートパンツ姿のくるみだ。

座り込んだ知世に向かってハンディカメラを構えている。

「くるみかあ……幸四郎なら菜ノ花のヤツとデートだってさ、ところで何だよ、そのカメラは？」

「菜ノ花ちゃんとデート？ そっかあ……ちなみにこのカメラはみんなの紹介画像を撮っちゃうハンディカメラでえゝす、知世ちゃん、スマイルスマイル」

「お前、アイツがデート行っても平気なのかよ？ 昨日の寿司屋で楓に立たされて、席に座らされた時に膨れてたろ？」

「知世ちゃんは？ スゴい怖い目してたじゃん」

「あ……あたしはアイツが楓とか、菜ノ花とかにデレデレし過ぎなのが気に入らないだけだよ」

質問返しに知世が赤面すると、

「おゝ、知世ちゃんの照れるのカワイイ……撮ってますよお！」

くるみは笑う。

「おいっ……こらっ、話をごまかすなっ、昨日膨れてたのは何なんだよ」

「どうだろうね、まあこんなお店をやるのなら、幸四郎ちゃんが全くもてないよりはもてる方がマシかもしれないね……でも、知世ちゃんの気持ちもくるみは解るよ」

「答えになってねえ」

「あははは……カワイイ知世ちゃんを撮るよ」

「パジャマだっ！　ったく……もう、お前もアイツもよくわかんねーよ」

答えをはぐらかされた知世だが、それ以上は追求しようとはせず、タツノリの頭をポンポン叩き、ため息をつくのだった。

「はぁゝい、撮影会ですよお！」

「はぁい？」

くるみの奇襲を受けた百合乃は眠そうな目を擦りながら、布団から身体をゆっくり起こす。

ピンク色のパジャマ。

「おゝ、百合乃さんネグリジェかと思いきやパジャマかぁ？　胸元のボタン2つも外して、デッカイ胸が見えちゃうぞお」

くるみに付いてきた知世が声を上げる。

「99? Iカップの胸チラ、これは朝から、ごつつぁんです」

「ん……? なんですか、なんなんですかぁ?」

くるみがボタンが開けられ覗かせる、魅惑的な深い谷間にカメラを近付けるが、当の本人の百合乃は事態が飲み込めていない様に首をかしげ、まだ眠そうな声を出した。

「お宝映像です、百合乃さんの寝起きアード、パジャマからはみ出っちゃう位のIカップのバースト!」 「さらにサービス!」

何だかんだでこういうお騒ぎが好きな知世が、百合乃の胸元に手を伸ばす。

「はい?」

「それっ……もう二つボタン外しい!」

「うおおおっ、すっすっげえええ!」

ボケる百合乃のパジャマのボタンを知世が二つ外すと、百合乃の白い肌より更に色白の胸元の隆起が露になり、くるみがカメラを近づけて叫ぶ。

「これは何ですかぁ、止めてくださいっ」

ようやく意識が覚醒したのか、百合乃は胸元に毛布をかけてしまう。

「あゝ、もう少しで百合パイが全部、見えそうだったのに……いや、それとも見えた?」

「チラッと見たかも、見たかも！」

「一体、お二人は何しにきたんですかぁ!？」

妙なやり取りをする二人に、百合乃はいかにも迫力のない怒鳴り声を出す。

「撮影だよ、ほら……昨日の会場はデッカイモニターに静止画だったでしょ？ だから動画を撮りに来たんだよ」

「そ、そうなんですか？ で……あの幸四郎さん、いえオーナーは？」

百合乃がそう言って、キョロキョロすると、

「幸四郎さんなら……菜ノ花さんとデートだよっ」

知世が百合乃の後ろに素早く周り、背後から胸を鷲掴みする。

「あ……ああんっ、や、やめてくださあい！」

「色っぺえ声を上げるじゃねえか、おばちゃん！ ほらほらあ、うわぁ……手に収まんねえ！」

「お、おばちゃん!？ ひ、ひどいです……止めてください……あ、あふう」

「ほらほらほら、このデカパイで幸四郎を誘惑しないと、菜ノ花に持っていかれちゃうぞお」

「そ、そういうつもりは……ああんっ、ありませえくんっ……んんっ」

知世に背後から胸をまさぐられ、抗議の声の中にも声を上げる百合乃。

「しゅ……しゅごすぎる、頑張れ知世ちゃん！ 禁断のパジャマ格闘技！ IカップとAカップの格差おっぱい絡み！」

「うるせえ！」

「おはあっ……」

くるみはそんな状態を興奮気味にカメラに収めるが、余計な煽り言葉が知世から蹴りを呼んでしまい、絡む二人にカメラを持ったまま倒れこんでしまう。

「く、くるみさん……平気ですかあ？」

百合乃は倒れてきたくるみを慌てて、胸元に抱き留めながら、

「菜ノ花さんですかあ」

と、ポツリと呟くのだった。

続く

第43話「デパートに来ました」

「神女デパートかんなぎかあ……久しぶりにきたかも」

新大空町駅より各駅停車でふたつ目の駅前。

そこに立つ十階建てのデパートを幸四郎は見上げて言った。

関東で有数の老舗百貨店グループのデパートで、古くからあり、学生時代から幸四郎も知っているが足繁く通った訳でもなく、ここ数年は家を出ていたので行った覚えはない。

「はい……ここならお食事もグルメフロアに結構、お店が入ってるし……色々な階を観てても飽きないんですよ」

「デカイもんな」

菜ノ花の言葉に頷く。

最近の不況で百貨店の苦戦は良く語られる所だが、神女デパートには新大空町よりも大きく、利用者も多い駅があり、そこから人が流れる様に入っている。

「直接行ける通路も出来てるんだ」

「オーナーの知っている頃は無かったですか？」

「ああ……本当に久しぶりなんだ、学生時代から来てないかも」

「ふふっ、オーナーの学生時代かあ」

笑う菜ノ花。

「な、なに？」

「いゝえ、別に学生服着たオーナー、見てみたい……なんて」

「いやあ、今とたいして変わってないよ、それより制服姿の菜ノ花

ちゃんの方が見たいなあ」

幸四郎が意識しておどけると、

「じゃあ……今度、実家に行って取ってきますね、ブレザーですよ、二人っきりの時に着ますから」

菜ノ花は冗談か、本気か判別しかねる事を言いながら笑った。

「まずはお食事から」

エレベーターの前に立った菜ノ花はフロア表を見上げる。
最上階の十階だ。

二人は並んだエレベーターで、一階に降りていたうちの一つに乗る。

買い物客などがかなりいるが、一緒に乗ってきた客はいない。

「十階と……」

幸四郎がフロアボタンを押すと、菜ノ花はエレベーター内の壁に貼られたポスターを見た。

「あっ……これ、草薙愛菜ですね」
「そうだね」

そこに貼られていたポスターには、

『草薙愛菜ライブ、当デパート前特設広場で開催決定……』

と、書かれ、セミロングヘアをツートールにした美少女がギターを手に歌っている姿が大きく写真になっている。

「今朝、テレビでも見たんだよ、流行ってるね」

「ええ……可愛いし歌も上手いし、今度は主題歌を歌って映画の主演もするそうですよ」

「へえ、プロポーションも良さそうだなあ、カップもありそうだし」

「オーナー……」

そう感心しながら呟く幸四郎に、ため息をつく菜ノ花。

「ゴメンゴメン……つい仕事柄、可愛い女の子は観察しちゃうんだ、そういうば菜ノ花ちゃんの時もそうだったでしょ？」

「もう……オーナーったら巧いですね」

幸四郎が初めて出会った時の事を例えに出すと、菜ノ花はその意図を解りながらも微笑む。

「本当だって……でも大丈夫なのかな？　ここの駅前広場にこんなアイドルが来たらファンで一杯になっちゃわないかな？」

「駅前広場は最近、拡張されてイベントホールになってますよ、それでも一杯になるでしょうけど、彼女はストリート時代に、この辺りで歌っていたらしいから思い入れもあるんじゃないですかね？」

「そうなんだ、この辺りの出身なのかな？」

「らしいですよ……あつ、着きましたよ」

話しているうちにエレベーターは最上階に着く。

「結構、店の数があるなあ……スゴいね」

神女デパート最上階のグルメフロア。

ここまでは学生時代には来た事がない。

「中華やイタリアン、和食からラーメン屋さんやカレー屋さんまであるんですよ、どれにします？」

「初めて来たからね、ちよつと迷うなあ」

「ですよね？」

「来た事あるんだったら、菜ノ花ちゃんのお薦めはあるかな？」

初めてで迷った幸四郎が振ると、

「じゃあ……とびっきり美味しいお店があるんですけど、でも食べる前に二人でショッピングしないといけなくなります……お腹はまだ我慢できます？」

菜ノ花はそんな事を言いながら頬笑んだのだった。

続く

第44話「唐突アプローチ」

「へえ……この時計いいなあ、光るんだ、ホールに置こうかな」

「カワイイですけど、少し小さいです、お客さんがみえますかね」

「そうかあ、ところでまだかな？」

「もう少しですかね、今頃は焼きに入ってるかもしれませんね」

雑貨コーナーを見ながら菜ノ花と幸四郎はそんな会話を交わす。

二人で見上げる蛍光時計は午後三時五十分を差している。

カップラーメンを断念しての昼食はいまだに幸四郎の胃には入っていない。

それには一時間ほど前のやり取りがあった。

菜ノ花お薦めの食事を食べようという事になり、入ったのは鰻の専門店。

だが、菜ノ花は席にもつかずに入口で店員と二、三話すと幸四郎に振り返り、

「そこの生け簀で生きてる鰻を出して、きちんと捌く所から始めるので、時間かかるらしいですから、席は予約したので四時くらいまで他の階を見てから戻りましょう」

と、告げてきたのだ。

「あ……そうなんだ、そりゃ凄いな、本格的だ」

待つといっても二十分くらいと勝手に踏んでいた幸四郎は、店の店員が小さな生け簀の鰻を捕まえようとしているのを見て苦笑しな

がら頷き、この数十分は空腹は最高の調味料という言葉を実感しつつ、菜ノ花と神女デパートの中をブラブラしていたのであった。

「いただきます！」

手を合わせる幸四郎の前で湯気を上げる鰻丼。
匂いもかぐわしい。

「炭火で焼いてるらしいですよ、いい匂いですね」

「そうだよね、コンビニ弁当とかで食べるのとは見かけから違うよ……ううーん、美味しい！」

正直言えば、ここ最近まで家を出て、暮らしていた幸四郎はアパートにバイト暮らして、少しでも食費を浮かす為に自炊をしていたので、手軽だがコスト的にはキツイコンビニ弁当等は滅多に食べた記憶がなく、その中でも割高な土用の丑の日に店頭に並ぶ、鰻蒲焼き弁当など食べた覚えは無かったが、目の前のそれは鰻が大きく見た目が違うのは判った。

そして、味も気のせいかも知れないし、お預けをくらったせいもあるのだろうが格別を感じる。

「いやあ……美味しい」

「オーナーったら、そんなに早く食べなくても、ご飯粒ついてます」

菜ノ花は丼を置き、幸四郎の頬に付いた米粒を人差し指の先にとりと、

「あゝん、マニキュアはしてないから平気ですよ」

そう言って、指先を幸四郎の口の中に入れた。

「あ、ありがと……」

赤面する幸四郎。

店はこのグルメフロアでも高級店に位置するらしく、午後四時という中途半端な時間もあるので客が沢山いる訳ではないのだが、照れてしまう。

「ふふっ、何、赤くなってるんですか？」

菜ノ花は口元に手を当てて笑う。

「いやあ……ほら菜ノ花ちゃんみたいな美人にそんな事されたら、照れるのが普通だよ」

「上手いですね」

「上手くないよ、菜ノ花ちゃんの方がどうだかは知らないけど、俺はハッキリ言って経験不足なんだからさ、そういう弄り方されたら勘違いしちゃうよ」

幸四郎は眉をしかめながら笑う。

異性を退屈させない会話も上手くも何とも無いのは自分が一番解るのだが、気の聞いた台詞がすぐには出て来ない。

年下の菜ノ花の方が異性への対応と経験が遥かに上手に違いないのだ。

彼女みたいな容姿に性格の女の子を放っておく程、この世の男は草食ばかりでは無いのだから。

「あっ……オーナー、私が経験豊富って言いたいんですか？」

「いや、少なくとも俺よりはあるよね？ 菜ノ花ちゃんを周りの男が放っておく訳ないでしょ？ 付き合って、って男の子がいなかった筈がないよ」

「まあ……結構、付き合ってくれとは言われた事がありますし、実際に付き合った事もありますけど」

菜ノ花は素直にそれは認めつつも、

「結構、私って性格が強いんです……だから長続きしなくて、最近 は独りぼっちです」

と、罰の悪そうな顔をして笑った。

「そうなんだ、いやあ菜ノ花ちゃんがフリーなのは世の男性には朗報だよ、もちろん俺にもね……それにしてもこの鰻は柔らかくって美味しいよ」

幸四郎は軽口を混じえ、返事をする、おもむろに鰻丼をかきこむ。

だが、そんな態度をとりながらも少し反省する。

『失敗したな、あんまり男女関係は深く聞いちゃダメだよな』

風俗関係の女の子には店や周りの女の子に迷惑がかからない限りは、あまり突っ込んだ人間関係や家庭事情を聞くのは良くないとさ
れているのを思い出し、この話題を変えようとわざと素っ気ない返事をしたのであった。

「朗報ですか……」

明るい表情で菜ノ花は顔を上げた。

「え……まあ」

その表情の意図が掴めずに幸四郎が井を持ったまま頷くと、菜ノ花は身を乗り出し、幸四郎の耳元に口を近づけた。

「な、菜ノ花ちゃん？」

「オーナー……今日はお店には誰もいませんよね？」

「え……うん、高音さんもいないと思う」

問いの意図はまたもや解らないままで、返事をする幸四郎。

菜ノ花はポツリとよかった、と呟いてから言った。

「実は昨日、お客さんに下手だって言われた事があって、本オープンまでに練習したい事があるんです……身体を貸してくださいませんか？」

「そ、それって……」

「聞くんですか？ やった方がよくわかりますよ」

「いや……でも」

突然の申し出に驚き、躊躇する幸四郎に、

「鰻井……早く食べちゃって下さいね、私の分も食べちゃって下さい、たっぷり栄養つけて頑張ってもらいますから……」

菜ノ花は今まで彼女から聞いた事も無いような、まるでもう少し若い別の美少女の様な声で囁いたのである。

「うん……わかった」

いきなりの菜ノ花からのアプローチ。

躊躇はしたが、結局は拒む理由もなく、そのつもりにもならない。
当然の男の性。

幸四郎は山椒の効いたタレのよく染みたご飯を素早くかきこんだのだった。

続く

第45話「呼び出せっ！」

「お腹すいた……」

「何だお前、まだ居たのかよ？ 帰ったのかと思ったぜ、勝手に部屋を開けるんじゃないやねえっ」

突如、部屋に現れたくるみに知世は怒鳴る。

「まゆりちゃんの部屋でタツノリと遊んで、恋音ちゃんの部屋でパソコン弄らせて貰ってたんだ、そしたらお腹すいた」

「随分遊んでたんだな、もう6時半かあ……あたしもお腹すいたぞ」

知世も自分のお腹を擦った。

「そう言えば、お前はアタシ達の動画を撮りに来たんじゃないのか？ 百合乃お婆ちゃんのオッパイ動画以外に何か撮れたのか？」

「えっとね……タツノリは結構撮った、後はあんまり撮ってないや」「あのな……真面目にやってんのか？」

あっけらかんに返事をするカメラマンに知世は呆れるが、

「だって……幸四郎ちゃんは居ないしさ、楓ちゃんには撮影拒否されるし、百合乃お婆ちゃんは恥ずかしがってもう撮らせてくれないしさ、恋音ちゃんはパソコンながら食べてるだけだし、みなみちゃんとか佐久耶ちゃんは出かけてるみたいだしさ」

くるみはそう言って膨れっ面で反論する。

「それで、もう撮影は止めて、まゆりちゃんや恋音ちゃんと遊んで

た」

「そうですか……次はちゃんとモニター用の動画を撮ると言えば、みんなも協力してくれると思うぞ」

「そうだね、幸四郎ちゃんに言ってみるけど、今日はもうヤメ、お腹すいた」

予め連絡もしないでプレオープンの日曜日にやってきた大胆さに目をつぶりながら知世はため息をつく。

楓の撮影拒否などは知世には何となく解る。

プライベートの無防備な所を撮られるのを嫌ったに違いない。

その辺りの注意をしたのだが、くるみはもう撮影モードではなく、食事モードのようだ。

「じゃあさ、プレイルームに皆を集めるからお前が作れよ、そうすれば撮影の事を話せるし、材料はみんなが持つてくるのを調理すれば相伴にあずかれるんじゃないか？」

「え〜」

知世は提案するが、くるみはまるで子供の様な不満そうな声を出す。

「私が作るの？ 知世ちゃんなら作ってくれと思って恋音ちゃんの部屋から出て来たのに」

「お前は仮にも店で厨房はいつてんだろ！」

くるみの台詞に知世は思わずツツコミを入れてしまうのだった。

「う〜ん、しょうがないなあ……くるみが作るのは良いけど、ところでプレイルームって何？」

くるみが不思議そうに首をかしげると、後頭部の短めのツインテールもそれに倣う。

「ああ……そうか、くるみはここに住んでないんだよな、プレイルームっていうのは共通の居間代わりに管理人用の広めの部屋をフスマなしにぶち抜いた部屋だよ、エアコンもテレビもあるし、DVDとかも共通で使っていいって、幸四郎が作ったんだよ」

「へえーすごい！そこはキッチンと料理もできるのですか？」

くるみは知世の説明に妙に感心して、まるで小学生の様に手を上げて、更に質問してくる。

なぜか敬語。

「ああ……それぞれの部屋にあるような小さなコンロじゃなくて、結構高そうなコンロがあるよ、料理はそこの方が美味しくできるよ」

「そうかあ……」

「まったく、広めの管理人用の部屋だったらそのまま自分で使えばいいのに、近くの業者入れてプレイルームにしたらしいよ、アイツも変わってるよなあ」

知世が両手を後ろ頭に回す。

ちなみに知世はセミロング、くるみはミディアムの髪の長さの違いはあるが、2人は後頭部の髪をチアガールのボンボンを小さくした様な短いツインテールにしている。

「バカッ！」

バシーン！

くるみの手の平が唐突に知世の頬を捉えた。

「な、な、な……」

頬を押さえて、知世は啞然としてしまう。

「知世ちゃんは幸四郎ちゃんの事を解ってない、幸四郎ちゃんは別個に籠もりがちになる皆に集まってもらいたくて、このプレイルームを作ったんだよ！　よし来た、幸四郎ちゃんの気持ちを受け入れたっ！　今日はくるみが皆にご飯を振るまうっ」

「いや……だから、あたしはそうしろって言ったじゃんか、えーとか言ったのお前だし、それと……なんで叩いた？　叩かれなきゃいけない程かい？」

頬を押さえながら、ジト目を向ける知世。

「それほど悪くはない、ゴメンツ、ノリだよ」

くるみはビシッと手を立て謝罪すると、拳を力を込め振り上げた。

「みんな呼べっ！　幸四郎ちゃんと菜ノ花の奴も、百合乃おぼちゃんも、楓ちゃんもみなみちゃんも、引きこもりパソコンで食い溜めの恋音ちゃんも、みんなみんな呼ぶんだよ！」

プレイルームの話で何かに火の付いた様子の幸四郎の幼なじみを見つつ、携帯電話を取り出し、

「さりげなく、菜ノ花の奴って、怒りを表すなよ……幸四郎と菜ノ花には電話するか、まあモニター用の動画についての食事会議って言えば、断れないだろうしな……さ、菜ノ花ちゃん、楽しいデー

トの時間は終わり……だ、ぜ！」

知世は幸四郎の携帯の番号に表示を合わせると、発信ボタンを押す。

「あゝ、くるみ……あとなあ」

呼び出し音が鳴り続ける携帯。

「どしたの？ 幸四郎ちゃん出ない？」

「今、呼んでる、この電話には関係ないけど、お互い百合乃おばちゃんっての、もう止めような、泣いちゃうから……」
「ラジャです」

くるみはビシツとした敬礼をした。
その会話中もコールは続いている。

「おゝい、早く出ろゝ、緊急ミーティングだぞお、無視しても無駄だぞお」

知世は不敵にもとれる笑みを浮かべて、十数度目の呼び出し音を聞く、もちろん出るまで続けるつもりであった。

続く

第46話「知世VS菜ノ花!？」

「はぁはぁはぁ……」

「ん……はぁ……ふう、可愛いですね」

胸元に顔を埋めて、荒い息を吐く幸四郎に菜ノ花は自らも息を整えつつ、笑顔を見せる。

プリンセスオークションの店舗内、菜ノ花用の部屋のベッドで二人は生まれたままの姿でいた。

「可愛いって言われるのは珍しいよ……でも菜ノ花ちゃん、柚子の匂い……いい香りだ」

「ふふっ……あんっ、くすぐったいですよ」

「もう少し特訓しようか……菜ノ花ちゃん」

「いいですよ……んむ」

ピリリリリ……

「あむ……んむ、オーナーキス上手く……んむ」

「菜ノ花ちゃん……」

ピリリリリリ……

「あんっ……くうう」

「菜ノ花ちゃんの高い声って、スゴく可愛い」

ピリリリリリ……

「誰からですか？」

菜ノ花は胸元の幸四郎の顔を肩から上げる。

「わかんないよ……でも、放っておけば……」

「名前見てください」

「いいよ……そのうち切れるからさ」

再び胸元に顔を埋めようとする幸四郎だが、菜ノ花は肩を離さない。
い。

「いいから見てください」

「うん……菜ノ花ちゃんの低い声って怖いね」

幸四郎は苦笑を浮かべて、菜ノ花から離れると、ベッドに座り、下に脱ぎ捨てられたポケットの上着から呼び出し音を鳴らし続ける携帯電話を取り出す。

「誰ですか？」

目を細める菜ノ花。

呼び出し音はまだ続いている。

「……この人」

「……んっ」

幸四郎に携帯の画面を見せられた菜ノ花は明らかに不快な表情で唇を噛む。

「このまま置いて……」

「出てください」

「いや、そ……」

「出てください」

「はい……」

鋭い声と視線に幸四郎は怒られた子供の様に頷くと、携帯を耳に付けようとするが菜ノ花は裸のまま、幸四郎の肩に両手をかけて後ろから、しなだれかかってくる。

「な、菜ノ花ちゃん!？」

「いいですよ、早く取って下さい」

背中に伝わる肌の感触に赤面する幸四郎だが、耳元で囁く声にしなだれかかってきた理由が何となく判ってしまい、後ろの菜ノ花には解らないように複雑な表情で電話を取った。

「はあい……幸四郎、知世だよ!」

「ああ……どうしたの? 知世ちゃん?」

知世の明るい声。

対する幸四郎は背中の菜ノ花が気になって、声がわずかに引きつる。

「菜ノ花も聞いてるか、聞こえてますか」

「一緒にいるけど聞こえる訳ないだろ?」

知世の声に菜ノ花がピクリと動いたのがわかったが、幸四郎が気にしない事にして答えると、

「じゃあさ、今日ね、くるみが来てモニターに映す動画の事でさ、みんなで集まったの会議が行なわれる事となった……集合場所はプ

レイルーム、時間は7時からだ、早く来いっ、みんな来るからなっ
！　じゃ〜ね〜、菜ノ花ちゃん」

知世はそう言い放ち、返答も聞かずに電話を切ってしまったので
ある。

ツーツーツー。

何を言い返そうにももう電話は切れていた。

「菜ノ花ちゃん？　……ううっ……っあっ」

菜ノ花に振り返ろうとした幸四郎は思わず、声を上げてしまう。

「七時ですか……まだまだここはスゴく元気ですからね、ちょっと
遅刻しちゃいましょうね」

後ろから幸四郎のそれをいじり、菜ノ花は呟いていた。

「た、ただいま……」

「遅いよ」

七時半。

プレイルームに顔を出した幸四郎をジト目で知世が睨む。

「ごめ……」

「いきなり呼ばれても困るから、こっちだって急ぎました」

謝ろうとする幸四郎の言葉を制して、菜ノ花は髪型を整えながら答えた。

「ヘイヘイ……お熱い所に呼び出してすみません」

「まったく、みなみちゃんや高音さんがまだいいですけど」

ニタニタ笑う知世の横に菜ノ花は座り、周りを見渡す。

机を2つ繋げた卓にそれとなく決まった席順で座るのだが、みなみの場所と上座の幸四郎の横に座布団が置いただけになっている。

普段は上座は幸四郎だけだが、今日は撮影についての会議という事で高音の場所も用意されていた。

「少し遅れるって、それにくるみの料理ももう少しかかるから待とうぜ」

「な……じゃあ、なんで七時になって……」

菜ノ花が言葉に詰まるが知世は気にせずに頭の後ろに手を回してすます。

「だって、始めはそういう予定だったんだもん……お昼美味しかったあ？」

横目の知世。

菜ノ花は女の子がいやらしい目をしないで下さい、と告げ、

「まあ……お気遣いなくともきっちり二人で堪能しました」

と、返事をする。

「……」

意味深な返事に卓を囲んだ他の女子の視線を浴び、幸四郎は辛うじて愛想笑いを浮かべるのが精一杯であった。

続く

第47話「めっ」

「みんなで集まったならコレだね、くるみの特製お好み焼きのタネ！ 具は豚とミックスを作ったんだよ、ホットプレートは二つあるからみんなで仲良く焼こうね」

みなみと高音が到着しプリンセスオークションの関係者が全員揃った形になると、くるみはホットプレートの前にボールに入ったお好み焼きのタネを置く。

「お好み焼きだね、ボクは大好き、さっそく焼いちゃうからね」
「私もやります」

まゆりと恋音が喜び勇み、くるみお手製のお好み焼きのタネを油をしいたホットプレートにオタマで垂らすと、タネはいかにもという音を立てて、焼かれはじめる。

「もう適当にやってくださいな、わたくしはお好み焼きなんてなかなか食べないので任せますわ」

「あたしはブター、ブタにして、ミックスってそんなに好きじゃないだ」

「ボクはミックスを焼きたいのです」

「私はどちらでも良いですよ」

「誰かの部屋の冷蔵庫に余ってる食材ないかな？ お好み焼きは何でも出来るからね、イカとかない？」

「イカかあ……イカの塩辛ならあった気が」

三人よれば何とやらとはよく言うが、十人の女性がお好み焼きを焼き始めてしまうと、何の話題もないのにプレイルームは狭く騒が

しくなる。

ただ一人の男子である幸四郎はホットプレート二つでは自分の焼くスペースもなく、上座に鎮座して見つめ、あわよくば好み焼きにありつける事を期待して待っている……

「はい、幸四郎さん……ミックスですよ」

百合乃が焼き上がったお好み焼きを皿に乗せて差し出してくる。

「あつ、ありがとうございます、気にせず先に食べちゃってもいいですよ」

「いえいえ……幸四郎さんが先にどうぞ、ちょっと大きく作っちゃったし……上手く焼けてなかったらゴメンなさい」

皿を持ちながら、肩をすくめて百合乃は微笑む。

「いやいや、百合乃さんが焼いたのならボクは生でも美味しく頂きます」

「まあ……」

下手な言葉にも百合乃は頬を赤らめる。

『やっぱり百合乃さんは可愛くて……優しいなあ』

とても一回り近く上の女性とは思えない可愛らしい百合乃の仕草に鼻を伸ばす幸四郎。

「百合乃さん、オーナーと言えども甘やかしちゃいけないよ、自分の分は自分で作らなきゃ」

「え……でも、やっぱりこういうのは男の子から食べてもらわない

と」

「そうです、がさつな貴女と違って百合乃さんは男性をキチンと立てる事が出来るのですわよ、下手な忠告はお里が知れますわよ」

みなみが鼻を伸ばした幸四郎を横目で見ながら百合乃に告げるが、百合乃の返答に楓が同意して、みなみに呆れ顔を見せる。

「な……何であんたにそんな事言われなきゃいけないのよ、ウチの実家は兄弟多かったから食事は戦争で男子優先なんて悠長な事を言ったら、食べらんなかったんだから!」

「あら? わたくしは貴女のがさつな性格を形成した家庭環境には興味は無くてよ、貴女の主義をお淑やかな百合乃さんに薦めるのはどうかと忠告しただけですわ」

「な……ななっ、がさつな性格を形成した家庭環境って何よ!?!」

「そのままの意味ですわ」

「まあまあ……みなみさんにも、楓さんにもミックスを焼きますから、男の子の前での女の子同士のケンカは……めっ、ですよ」

些細な事で一触即発になる二人に百合乃が笑顔を見せ、まるで悪戯をした小学生を叱る優しいお姉さんの様に言った。

「あ、いや、別にミックスを欲しかった訳じゃないんだけど……まあ、百合乃さんをダシに口ケンカしても良くないか……」

「ま、まあまあ、百合乃さんの言う通り、殿方の前でケンカするのは確かに淑女とはいえませんわ」

百合乃の言葉に素直に戟を収める二人の様子と、ちょっと世間ずれしているが、百合乃がその性格で年齢の違う女の子の輪の中でもうまくやっていけている事に幸四郎は少し安心し、

『女の子は男の子の前でケンカしちゃ、ダメか……みんな気に入ってスカウトしているだけに見たくないもんな……でも、女の子って難しいよなあ』

そう真面目に思うのであった。

続く

第48話「PVを撮りましょう！」

「はあい、じゃあさ……みんな食べながらで良いから店内の大型モニターで流すPVの撮影について希望や意見があれば出して」

「はーい」

みんながいくらかお好み焼きを食べたのを見計らい、幸四郎が切り出すと知世がすぐに手を上げる。

「早いね、知世ちゃん、じゃあどうぞ」

知世を差す幸四郎。

「グアム」

「はい、ご苦労様、次の意見ある方……」

「おいっ！　なんであたしの意見を、グアムなら水着とか、海とか美味しい場面が撮れるぞ！」

「予算も時間もないよ、その辺りも考慮して」
「ぐううっ」

当たり前と言えば、当たり前の対応を幸四郎に受けて唸る知世。

「ならば！」

すかさず手を挙げる佐久耶。

「はい、佐久耶ちゃん」

「水着と海は良いのです、PVの定番なのです……撮影するなら国内ですが、まだまだ寒い」

「そうだよね」

まゆりが頷く。

そういう意見は承知とばかりに、佐久耶は得意げに笑った。

「ならば……国内でボクの故郷、神洋島ならば気候は南洋で、島の人達も優しく綺麗なビーチに豊かな自然が出迎えるのです、東京都で南洋気分なのです！」

「で？ その島にはどうやっていくの？」

力説する佐久耶に頬杖をついて知世が訊く。

「それにはフェリーなのです、イーグレット号が港湾都市横浜から28時間の快適な旅を……」

「グアムよりかかっちゃうだろうが！ コッチは飛行機出てんだよ、国際空港があんだよ！」

「国内なのです」

「だだの孤島だろうが！」

「うぬぬ……よく言ったのです、米軍基地のあるグアムを勧めるなど知世さんはとんだ売国奴なのです、南洋諸島は元といえば我が国の……」

「ヤメヤメヤメ！ 二人とも止めっ、どっちも却下だよっ」

ヤバイ事を言い始める二人を止める幸四郎。

「何だよ、グアムいいだろうが、PVならグアムかサイパンだって！」

「いや……神洋島には日本一可愛い海女さんとか実在するのです」

「あ……あの、良いでしょうか？」

不満をいう二人、それを気にしたように遠慮がちに手を挙げたのは恋音だ。

「はい、恋音ちゃん！」

幸四郎は建設的な意見が聞けそうな恋音を指名し、前の二人は却下という事で流す事にする。

「えっと……こういう撮影をしていいかは解らないんですけど、隣の三原町にウォーターパークっていうお天気に関係なく遊べる屋内アミューズメント施設が出来たんですよ、そこなら色々なプールがあるし水着の撮影も出来るかも……」

恋音はそう言って皆の反応を伺う様に、自信無げに周囲を見回す。

「面白そうだね、私は田舎にはそういうの無かったから行ってみたい！」

「私も出来たのは聞いていたんですけど、行く機会が無くて……撮影できるならいいと思います」

みなみと菜ノ花が早速賛成すると、恋音は安心した様子で笑みを浮かべる。

『こういう意見1つ言うのも恋音ちゃんにはドキドキ物なんだろうな、ホント気弱な美少女の王道って感じだね……まあ、これは美少女の王道とは言えないかもしれないけど』

幸四郎はそんな恋音を微笑ましく思いながらも、彼女の前に置かれた大判のお好み焼きを見て、口元を緩めてしまうのだった。

「じゃあ、P Vの撮影はそのウォーターパークって所で撮ります、各自は水着を用意するように、高音さんはそちらに撮影が許可されるか聞いてもらいたいんですが……」

「良いですけど、店で使うP V、それも高性能とはいえ撮るのはハ
ンディですよ、そこまで気を使う必要ありますか？ 見咎められる
とは思いませんが……」

一応、撮影場所は暫定で決まり、許可を撮ってもらうように高音
に頼むと、彼女は承諾しながらもそう答えた。

「いえ、P Vはホームページにも未公開集とか観れる様にしたいし、
問題があるといけませんから」

「それもそうですね、問題が起きてからでは遅いですからね、わか
りました」

店だけなら問題ないかもしれないが、ホームページにもアップす
るとなると、一応の許可を取っておくに越した事はないだろう、幸
四郎の意見に高音はすぐに従い頷く。

許可が下りれば、すぐにでも撮影に行くから、とみんなに説明し
て、集まりはお開きになった。

「では、坊っちゃん、明日の午前中にでも先方に連絡を取って聞い
てみます、ダメだったら他を探してみましよう」

「ええ……お願いします」

アパートの前に止めた軽自動車に乗り込む高音を幸四郎は見送る。くるみはまだ遊んでいくらしく、誰かの部屋に入ってしまった。

「まあ、P Vの撮影はそれで良いとして、本オープンまで最重要事項がまだありますよ」

高音の顔はいかにも、わかってますよね？ とでも言いたそうだ。

「ええ……でも妥協はしませんから、俺も明日は紹介所に行きます」

幸四郎は真顔で頷く。

もちろん、高音の言っている事は解っている。

新たなプリンセスを最低でも二人、スカウト出来なければ、本オープン開店時の女の子のローテーションが苦しくなるのは明白。

明日はみなみや恋音をスカウトした様に、協会の紹介所に行ってみようと思っていたのだ。

「わかってるのなら結構です、では明日また電話しますから」

「ええ……お休みなさい、高音さん」

挨拶を交わして、高音が運転して走り去る軽自動車を見送る。時間はもう午後10時を回っていた。

「さて、本オープンまでに女の子を探さないといけないな……」

幸四郎は伸びをして、眩きながら、街の喧騒に耳を傾ける。

アパートは風俗店が集中する場所からは離れていたが、この街がこれから本番とばかりに騒つく音が聞こえてきた。

あと僅かでプリンセスオークションもその喧騒の中に本格的に乗り出していくのである。

そう思うと武者震いか怖気づいたのか、幸四郎は背中を震わせる自分に気付いたのだった。

続く

第49話「市営プールが五十円なら……」

「いやあ……快晴、快晴、絶好のPV撮り日和だよ、君達い！」

三原町。

電車に乗ってやってきた新大空町の隣町の駅前で、知世は調子のいい声を上げて腰に手を当てた。

「日和って、そこは屋内なんですよ？」

「まあ……でもそこは気分ってヤツでさ」

みなみのツツコミに知世は歯を見せて笑う。

「水着のサイズ頑張っちゃったからキツイかもしれないですね……」

「百合乃さんはワンサイズ小さいくらいがムチムチ感が出るかもなのです」

「水着のままで御飯も食べられるらしいよ、ボクは遠慮したいなあ……水着でポッコリお腹になるから、恋音ちゃんは食べたらお腹膨れる？」

「け、結構、大きくなります……ああ、あの……したらこんな感じかな、ってくらいに」

「ならば恋音さんは午前中に撮影を終えないといけませんわね」

駅前から目的地ウォーターパークまではそんな距離ではないので歩く事になり、女の子達は色々な話をしながら歩を進める。

「ともかく、撮影許可が下りたのは良かったです……他のお客さんには迷惑が掛からない様に、とは言われましたが今日は平日ですし、それほど周りは気にしないで良いでしょう」

「……ですね、カメラは岡林写真館で防水ハンディカメラを借りられましたから、くるみと俺の二人で撮れるし高音さんは昨日立てた撮影スケジュールの管理をお願いします」

「ええ……わかりました、このスケジュール表通りに撮れば、きつと会心の出来になります」

幸四郎と高音は一行の後ろを歩きながら、そんな会話を交わす。カメラマンは幸四郎とくるみ。

撮影スケジュールを管理するのは高音だ。

少し仰々しいかも知れないが、万事に几帳面な高音は遊びに行く訳ではないのだからと、PV撮りのスケジュールを昨日の夜に完成させていたのである。

「みんなが勝手にどこか遊びに行かない様にしないといけないけど、特に知世ちゃんとか、佐久耶ちゃんとか……」

「大丈夫です、仕事放棄はさせません」

幸四郎が起こりえる事態を憂いた苦笑いを浮かべると、高音はそれは分かっていますと言った様子で頷くのであった。

「想像してたよりおっきい……けどプールにこんなお金かかるのお！？」

ウォーターパークの入口に着いた途端、みなみは信じられないと言わんばかりの声を上げる。

「おつきいですね……でもこの入場料がそんなに高いですか？」

「ええっ、高くない？ 泳ぐだけだよ……私の田舎では市営プールとか五十円とかだったんだけどな、やっぱ比べるのがおかしいのかな？」

恋音が首を傾げると、みなみはその反応に驚いてから、そのギャップにショックを受けた様に呟く。

「それって、プールが一つですよ、ここはいくつも種類はあるし、水着のまま入れる温泉なんかもあるですよ、その分高いんじゃないでしょうか？」

「そっか、そうだね、25mプールが五十円で換算すれば、たくさん種類があれば高いよねえ」

みなみも新大空町に住み始めて間もないだけに、物価を始め色々とショックを受ける所があるのかもしれないが、そんな彼女に物を知らないとは笑わず、気を使って話をする恋音。

さり気ない気遣いにみなみも納得した様子だったのだが……

「そんな田舎の尺度で話をするなんて、実に貴女らしいですわね」

その会話を聞いていた楓が小馬鹿にしたような笑みを見せてしまい、彼女の努力は水泡に帰す。

「な、なんであんたなんか言われなきゃ、いけないのよっ!？」
「あら？ お気にならずにわたくしは貴女らしいと褒めたつもりですよ、五十円のプールがあなたにはらしいんじゃないかもしれませんか」

しら?」

その言葉に対し、みなみの頬が一瞬、明らかに怒りに吊り上がる。

「余計なお世話よ! その五十円だって……五十円だって……」

「……!?!? みなみちゃん、楓ちゃん!」

みなみと楓のいつもの口喧嘩かと、思いため息をつきかけた幸四郎だが、ワナワナと震えるみなみに異常を感じ、二人に向かって踏み出そうとするが……

「料金なんて一切、関係ありません!」

唐突に高音が二人を分けたのである。

「高音さん!?!」

みなみと楓は驚いてハモってしまい、互いに顔を合わせた後、フンとそっぽを向き合う。

「どういう事ですか?」

「入場料は私達が払うから気にするな、って意味で言いました」

不思議そうに尋ねる菜ノ花に高音は笑顔を見せて言った。

「店のPVの撮影だから、って事ですね? 入場料は必要経費と」

「そういう事です、同時にこの撮影が遊びではないという意味です」

「じゃ……時給が出るってこと?」

高音と菜ノ花のやり取りに、知世が混じる。

言っている事に間違いはない、仕事という拘束があるのならば、P V撮りに時給が発生するのは当然だろう。

「流石にそれは勘弁願います、まだプレオープンしかこなしてない店にそれは辛いですから……」

高音は眼鏡をツイと上げて、

「時給までは出せませんがお手当ては出しますし、お昼ご飯代金もある程度は出しましょう……撮影スケジュール外の時は自由に楽しんでいて構いませんから、みなさんそれでどうでしょうか？」

そう全員を見回して提案する。

「お手当てでるなんて、思ってたから……私もいいけど」

「まあ、構いませんわ」

「さんせーい！」

「あ、あの、お昼も食べちゃっていいんですか？」

「お手当てなんて、ありがとうございます」

「ボクも賛成」

高音の提案にみなみと楓がにらみ合いを中断し、賛成すると皆がそれに続く。

その様子にホッと胸を撫で下ろしながらも、幸四郎は、

『みなみちゃん……ちょっと怒り方が普段と違ったよな、平気かな？』

と視線をみなみに向けたのだった。

続く

第50話「撮影前にとびきりの笑顔を！」

「更衣室も綺麗ですね」

ロッカーの鍵をリストバンドに巻き付けた恋音は広々とした更衣室を見渡す。

「ですわね、流石にあんな高い入場料を取るだけありますわ」

楓が隣のロッカーを開けながら呟く。

ロッカーの場所はみんなまちまちで、恋音と楓が隣同士なのも偶然である。

「入場料……楓さんは高いとおもいましたか？」

恋音は楓に言った。

「ええ……少し、どういう意味ですか？」

「意味なんてないです、みなみさんも高い、って言ってましたね」

「恋音さんは何が仰りたいのかしら？」

「いや……高いと思ったのはお二人とも一緒だったのになんで……ケンカになっちゃっ……てるのかと」

楓が訝しげに目を細めると、恋音はビクッとわずかに身体を振るわせながらおずおずと答える。

「もう……恋音さんはおどおどした態度を取りながらも言う事は言うタイプですわね？」

「え、いや、そのお二人は……私はスゴくいコンビになれそうな

気が……」

「わたくしとあの田舎の山猿さんが!？」

「あゝ、ごめんなさい、ごめんなさい……で、でも、みなみさんは楓さんの事を嫌いというより……何か目指すというか、目標というか、あこがれというか……何というか」

楓に言葉を遮られると、ペコペコと頭を下げながらも小さな声になっっていく恋音。

「フン……あの娘が目標にしても、わたくしには追いつかせなくてよ」

楓はそう言いながら、上着を脱ぐ。

高級ブランドの黒い下着が包むのは、色白できめ細やかな肌。

無駄な肉付きは無く、それでいてグラマーな身体。

「綺麗……」

恋音は羨望の眼差しと呟きを漏らしてしまう。

「あの娘がわたくしを目標にしようが、憧れようが無駄よ、わたくしに追いつくわけがありませんわ」

「楓さん……」

「あの娘とわたくしでは女の性質が違いますもの、お互いに真似も追いつくも不可能ですわ」

楓はそう言い放つと下着を脱いだ。

「アイドルグループ？」

「モデルかな？」

「カッワイイ！」

「プロポーションがヤバイって！」

平日の昼間だということにも関わらずプールサイドには客がいくらかいて、水着姿の女子高生らしき集団が歩いてきた店の面々を見て黄色い声を上げた。

カメラを持つ幸四郎やくるみも水着は着ているが、傍らの高音はスーツ姿のままである。

この様子を一般の人間が見れば、マネージャーとカメラマンにアイドルグループといった所だ。

「あのカメラを持ってる娘もレベル高いし、プロポーションいい！」

「あの娘はよくグループの一人が撮影係とかの企画じゃないの？」

話し合う女子高生。

くるみはそんな風に見える様である。

「な、なんか勘違いされてない？ アイドルグループとか言ってるよ、緊張してきちゃったぞ、ボク」

「それならそれでいいさ、あながち間違いでもないんだしさ」

まゆりが罰の悪そうな顔を見せるが、幸四郎はカメラを向けながら笑う。

「えっ？」

「みんながアイドル並みにかわいいって事」

「……もう、ボクなんかみんなと比べたらプロポーションなんて悪いし……小さいし幼いし」

まゆりは赤面してモジモジする。

水着は紺色のスポーツタイプの上下。

健康的に引き締まった身体つきは、確かに百合乃や楓達に比べたら女性的な凹凸はない。

「俺は好きだけどね、まゆりちゃんって、確かに背も小さいし、幼いとは思うけど、スゴく元気なスポーツ美少女だと思うよ」

「び、び、美少女って、違う違う……小さな美少女ってのは恋音ちゃんみたいな子を言うんだよ」

幸四郎の言葉にさらに赤面し慌てるまゆり。

「確かに恋音ちゃんも美少女だよ、でもタイプが変わるだけで、まゆりちゃんも恋音ちゃんに負けない美少女だよ、俺の基準だけど正直いえば、店にはとびきりの美少女しか入れてないつもりなんだ」

幸四郎は構えたカメラを下ろした。

「オーナー……」

「でも、そのせいで面接で落とし過ぎだって高音さんにはかなり怒られるし、人が少なくて、みんなには苦勞をかけちゃってるんだけどね」

そして、少し恥ずかしさを隠すように後ろ頭を掻きながら、

「上手くは言えないけどさ、俺のお墨付きじゃ不安かもしれないけど、まゆりちゃんは自信もっていいよ、さあ……いつもの元気なま

ゆりちゃんを見せて！」

幸四郎はまゆりに不器用な笑みを見せる。

「オーナー、ボク……」

「じゃ……美少女まゆりちゃんを撮るよー！ え？ 何か言った？」

ハンディカメラを再び構える幸四郎にまゆりは赤面したまま、

「んんっ、なんでもないよ……オーナーったら……でも、ありがとう」

と、とびきりの笑顔をみせたのであった。

続く

第51話「素材だけじゃいけません」

「あらら……何だか、結構な人が来てしまいましたよ？　これはどういふ事なんでしょうか？」

百合乃はプールサイドでキョロキョロする。

白いビキニ。

腰に巻いたピンクのパレオ。

見事としか言いようのない豊かな胸元、きちんとくびれた腰、大きめなお尻から程よい太さの腿。

「すげえ胸……」

「美人だよね」

「かわいい」

「たままないプロポーションしてるなあ」

いつの間にか十数名はいるギャラリーの視線に百合乃はパタパタとカメラマンのくるみに駆け寄る。

「んにゃ？　どうかしたのかな？」

「ちよっと恥ずかしいです、カメラを……カメラを止めて、あの方達にどちらかに行ってももらえるように言ってくださいあい」

「それは無理です」

返事をしたのは、くるみではなく高音だ。

「撮影許可をもらう時の約束でフレームワークに割り入る等の極端な場合を除いては、他のお客様の行動の制限はしない様にしてくれ

との事です、フレームインするぐらい近くなければ、観られるのく
らいは我慢して下さい」

そう答えると、スツと眼鏡を左手の中指で上げる仕草をする高音。

「ダメですかあ？」

「プロでしょ？ カメラの前でそんな顔をしないで下さい」

「私達はカメラの前で見せちゃいけないプロだと思うんですけど…
…モデルさんじゃないんで」

「御託は聞きたくありませんよ」

「……わかりました」

百合乃が弱々しい抗議をするが、かなう筈もなくテクテクとプー
ルサイドに戻ると、

「では……百合乃さん、カメラをお客様……いや、恋人と思ってプ
ールサイドを笑顔で歩く」

高音は撮影スケジュール管理表を手に撮影監督の様に指示を出し
始めた。

「じゃあ……コッチも撮影開始といきますか」

くるみのカメラが百合乃を撮り始めたのを見ながら、幸四郎は近
くにいたメンバーを振り返る。

「誰から？」

みなみが訊く。

水着は肩紐のない赤いビキニだ。

プロポーションも良く、背丈も160?半ばある彼女にはよく似合っている。

「えっと……コッチのグループはみなみちゃん、知世ちゃん、楓ちゃんだね」

「恋音ちゃんとかは百合乃さん達と高音さんの方なんだ?」

撮影は二つのグループに別れている。

高音がカメラのくるみを連れて撮るのは百合乃、菜ノ花、恋音、佐久耶、まゆりの五人。

一方の幸四郎が撮るのは、みなみ、楓、知世の三人である。

みなみの口調は抗議まではいかないが、仲の良い恋音や百合乃、まゆりといった辺りと一緒にない多少の不満が混じっていた。

「まあまあ、こう撮った方が効率的だし、夕方になったら、みんなと一緒に撮る予定だからさ」

「ん……まあ、別に構わないよ、撮るなら撮るで高音さんみたいな指示が欲しいんだけど」

幸四郎が気を使ったのを感じた様子のみなみはそう答えて、手持ちぶたさに後ろ手を組み、周りをいるギャラリートを少しだけ恥ずかしそうに見た。

「コッチにもギャラリーはいるか、まあ、この絶世美女知世ちゃんがいるから仕方ないよな?」

黄色いワンピース水着の知世が笑う。

みなみと楓よりも10?以上、背が低く、幼児体型の彼女だが、そんな事は気にしていない様子だ。

実際、絶世美女という表現が適当であるかは判らないが、知世は非常に高いレベルの可愛らしさを持っていて、それは楓やみなみとはまた違うベクトルに特化している。

プロポーションや身長で張り合う必要はない。

そう幸四郎は思う。

「誰からでもいいよ」

「じゃ……知世さんが始めを切って下さる? みなみさんはギャラリーさんが気になるみたいで、落ち着きがありませんし」

「なっ……何を勝手な事を言ってくれてんのよ!? 別に平気、どいてよ、私が始めにやるから!」

「出来ますの? NGは時間の無駄ですわよ」

幸四郎がカメラを構えると、楓が知世に言った言葉にみなみが反応し、二人は睨み合うが、

「まあ、いいから……」

知世はそれを手で制してから、

「モデルをしてた楓なら、カメラで撮られる難しさは知ってんだろ? みなみはルックスの素質はアンタと互角だけど素人なんだから、お手柔らかにやれよ……始めはあたしがやる」

そう楓に向かって、瞳を細めて注意する。

「な……わたくしとみなみさんのルックスの素質がご、互角う!?!」

「違うかよ？　もちろん今は差はあるよ、あくまで素材だけの話をしてるぜ」

楓は聞き逃せないとばかりに声を上げる、しかし、知世は全く退かず真面目な表情で聞き返した。

「言うに事欠いて……よくもそんな出鱈目を！」

「そう？　私はそうは思わないな、身長は似たようなもんだし、顔立ちだってプロポーションだってかなり良いから、丹念に磨けば必ずイケるね、それが判別できない訳じゃないんだろ？　もっともその努力が辛いのもアンタも分かってるだろうけどさ」

口元に笑みを浮かべる知世。

「自分に必要な磨き方を判断して、努力する……それはある意味素材よりも大切ですわ」

一度は怒鳴った楓。

だが知世の言葉を聞くと、ため息を付き、それだけを答えるに留まった。

「あの……」

そこで話のダシにされていたみなみが困惑気味に口を開く。

「聞いてた？」

クルリと知世は彼女に振り返る。

「まあ……」

みなみが頷くと、

「楓はみなみにとっちゃ、いい先生になるよ……意地ばつか張つてないで盗む所は盗んで、聞ける事は聞くんだな……まあ、真似ばかりも何だけど、素人同然の今は真似が一番やりやすいからさ」

知世はニンマリと笑ってから、

「まずは自分の魅せ方……カメラ編ってトコか？ この辺りは簡単じゃないけど、プロポーションの造り上げ方と違って、私も共通出来るから良く見とくんだね、魅せる仕事は素材だけじゃ出来ないよ、女の魅力は努力と根性……そしてコンプレックスに泣いた涙に支えられてんだからさ」

と、カメラを構える幸四郎に向かって歩き出したのであった。

続く

第52話「知世、魅せる」

「……巧い」

「な、何が？」

撮影開始から数十秒で呟く楓。

みなみはその意味が解らずに彼女に振り返る。

「撮られ方……歩き方……間の取り方……笑顔の魅せ方……巧いですわ」

「知世が！？」

「それ以外に誰がいますのよ？」

幸四郎に撮られながらプールサイドを歩く知世を指差し驚くみなみに、腰に手を当てため息をついて、

「あの娘……ただの素人娘じゃありませんわね、まあ良いですわ、周りが素人ばかりで少し呆れていた所でしたから」

楓は口元を緩めた。

「こっち！」

「えっ！？」

知世はニツコリ笑顔を見せ、幸四郎の手を引く。
当然、画面には引かれる幸四郎の手がフレームインしてしまう。
注意したいが、目の前の知世の笑みはそれをさせない何かがあっ

た。

『こんな感じ……どこかであった事が……思い出した！ プレオーブンの一番始め、楓ちゃんがああのプリンセスファッションで舞台に上がる前だ』

全く違うシチュエーションだが、二人に共通する物は……

『なりきってる？ いや演じてるんだ』

あの時の楓はプリンセスを、今の知世は恋人の手を引き、プールサイドではしゃぐ少女、遠藤知世を。

手を引かれながら、幸四郎はまるで本当にデートしている錯覚に陥ってしまいそうになる。

カメラを構えてなければ、目の前の知世と二人っきりでデートにきた気になってしまいそうだ。

「足元、気をつけなよ」

知世に言われて、カメラを下に向けてしまう。

見えるのは知世の下半身、少しだけの凹凸のヒップからの細い脚。

『あっ……いけない、知世ちゃんに言われてカメラまで下を向けちゃった』

幸四郎はカメラを上げようとするが、手を伸ばしてきた知世にカメラごと頭をグッと抑えつけられる。

「……!？」

何とか声を出さない様にする幸四郎のカメラの視界は、見上げてくる知世のアップ。

「おいっ……ドサクサに紛れてどこ見てんだっよ」

細目の知世。

カメラが相手ではない、彼女の前には実際に恋人がいるかのようだ。

『す、すっげえ……かつ、かわいいっ!』

カメラ越しの知世の視線に間違いなく自分は赤面してる。
幸四郎はそんな自分が恥ずかしく、思わず身を引き気味になってしまう。

「今度、ジロジロ見たら……責任とってもらうからなあ」

意地悪い笑みを浮かべて再び手を引いて歩き出し、ピッと指を立てて、

「はい、ここでカット! カメラ止めて」

知世は言った。

幸四郎は反射的にカメラの録画ボタンを離す。

「幸四郎が光源無視して歩くから、即興で手を引いたけどさ、とりあえずはこんなもんでどう!？」

得意気に腰に手を当てる知世。

「あつ……そうだったんだ？ いや、でもスゴく可愛かった、良かったよ」

「そうだろう、そうだろう、あたしの可愛さは北半球を駆け巡るかな」

幸四郎が笑顔で答えると知世はウンウンと自画自賛して頷く。

「流石だね知世ちゃん」

小型とはいえ、本格的な撮影機器に慣れていない幸四郎をエスコートして、自らの可愛い表情をキチンと魅せる。

元アイドル知世のプロとしての凄さを見た気がして、オーナーとしては彼女が非常に頼もしく思えた。

「可愛かった」

「良かったよ」

いつの間にか増えたギャラリイからも拍手が起けると、知世は調子よく投げキッスをして、それに答えるのであった。

「1カット目、いい絵でしたわね」

「まあね、お次はあんただろ？ 幸四郎が待ってるぜ」

楓が声をかけると、知世は伸びをしながら、少し離れた所で慣れないカメラの調整に苦戦している幸四郎に視線を向けて近くの本棚に座る。

「ええ……でもその前に知世さん、少しだけ訊いてもいいかしら？」
「なに？」

「この店で働く前は何か芸能関係のお仕事をされていたのかしら？
少なくともカメラに映されるのが素人に見えませんでしたわ」
「……」

その質問に対し知世はベンチに座ったまま無言で楓を見上げた。

「あら？ 訊いてはいけなかった？」

「前なんてどうでもいいじゃない、やめなさいよ」

みなみが楓と知世の間に割りいる。

「いいよ……別に」

知世は首を振り、立ち上がって楓を正面から見据えて言った。

「あたしは……元々、アイドルだからさ」
「アイドル!？」

その答えに声を上げたのはみなみ。

「なるほど……それでキチンとしたルックスも振る舞いも納得がいきました、ありがとうございました」

楓は踵を返して、水着の上に着ていた白いパーカーを脱いで幸四郎に向かって歩き出す。

肩紐の無い紺色の水着。

見事なバランスのプロポーションに白い肌。

ギャラリーから漏れる感嘆のため息。

「こちらが始めますわよ、わたくしにも指示は無用です、自分のP
Vのイメージは自分の中にきちんとありますわ!」

楓は口元に薄い笑みをうかべ幸四郎に言った。

「知世!？ アイドルってのは……」
「嘘じゃないよ」

楓を見送って振り返るみなみに知世は再びベンチに座り頷く。

「アイドル業界なんて、毎年星の数ほどデビューして、星の数ほど
辞めさせられたり、辞めたりしてるんだよ、珍しくも無い」

「そうなんだ……」

「まあ、幸四郎も高音さんも知ってるし、バレるのは構わないけど
言い触らす気はないから」

「うん……」

「ところでさあ」

知世はベンチに両腕を広げて脚を組む。

「なに？」

アイドルらしくないポーズだが、知世らしいとは思ひ、みなみは
敢えて注意はしなかった。

「楓とお前の水着、色違いみたいに似てるな？ お前もいい身体し
てるけど、まだ楓と比べるのは手入れが足りないよ、まさかプレオ

ープンの時のプリンセスファッションみたいに張り合った訳？」

「こ、これは偶然だもん！ たまたま良いのがあってね、だいたい楓の着てくる水着なんて知る訳ないでしょうが！？」

張り合ったと言われ、赤面し、みなみが睨むと、

「悪かった、悪かった……じゃあ、偶然の一致と言う事か、張り合う相手がいて結構な事だよ」

知世はハハハッと笑ってから、

「あたしの場合は張り合う間も無かったからな……」

と、ポツリと呟いたのであった。

続く

第53話「アイドルと女優と素人娘」

「じゃあ、いきますわよ、オーナー、録画を開始して下さい」
「うん」

楓は波の流れるプールの隅に立つ。

波も緩やかで小さく、水の深さも足首より少し深い位の場所だ。
両手でアップにした赤茶色の髪を掻き上げ、笑みを浮かべる楓。
あくまでも笑み。

先程の知世のような明るさは無いが、美しさへの自負が感じられる。

綺麗でしょ？

そう問われているかの様だ。

足元に流れてくる波。

楓はそれに逆らい歩を進め始める。

『泳ぐのかな？』

カメラを構えてついていく幸四郎だが、足首より少し深い場所に
来ると、楓は足を止めて眼をつぶった。

真横からのアングル。

楓のバランスが良く、それでいて丰满な肢体が良く判ってしまう。
彼女は瞳を閉じ動きを止めている、動くのは波だけである。

『楓ちゃんって、お姫さまの高貴な清楚さと妖しい色気が同居する
んだよね……不思議だよな』

そんな事を思いながらカメラを回していると、瞳を開け、幸四郎
に向かって流し目をする楓。

『色っぽい……』

そして、楓は軽い波を受けながらゆっくりと脚を崩して座った。波があるが浅い場所なので座っても水は楓の腰ぐらいいまでだ。

紺のビキニに濡れた楓の身体。

クスリとだけ微笑み、彼女は水を手の平ですくうとカメラに向かってそれを放った。

撮影場所が場所なのでカメラは防水であるし、それほどかかった訳でもない。

まるで楓とプライベートビーチで戯れているような感覚だ。

「……」

まるでここにいてだけで楽しい、とでもいうような笑みを浮かべる楓。

ほんの数瞬の間。

『楓ちゃん……何かを待ってる？ アングルの切り替え？ 違うな、もしかしたらこれか？』

幸四郎はカメラを構えたまま、中腰になり空いた手で楓に向かって足元の水を飛ばした。

「もうっ……入る前に濡れちゃいましたわ」

座った状態で水を浴びた楓は言い、

「フフッ……」

と、意味深な笑みを浮かべて、スッと身体を横に倒した。

横になり、体全体を見せる水着撮影では良くあるポーズだ。

水が伝う豊かな胸元。

くびれた腰回り。

張りのあるヒップ。

綺麗な線を描く太もも。濡れたアップにした赤茶色の髪。

妖しげな瞳。

『か……楓ちゃんはヤッパリスゴいい色っぽい……楓ちゃんと一度でいいから……いい、いかん、いかん』

見事な身体がわずかな波が来ると半分ほど隠れ、引くと露になる。幸四郎はカメラを構えているにもかかわらず、思わず興奮してしまいそうになるがどうにか自制した。

『大物芸能人が眼も眩む様な大金を払っても自分の愛人にしたい、って思う気持ちに改めて解るよな』

「はい……こんな物ですわね、カットですわ」

「あっ……ああ」

楓にカメラに人差し指を向けられ、幸四郎は我に帰り、慌てて録画スイッチを離れた。

「まあ、ファーストショットにしては表情を見せ過ぎた気がします、悪くはなかったでしょう？」

「あっ……うん、良かった、綺麗だったよ」

「嬉しいですわ」

笑顔で立ち上がる楓。

水が身体を滴り落ちていく。

「……イケてるよな」

「見た事ない娘だけど、ファンになりそう」

「プロポーションも顔も文句なしじゃん」

「そのうち売れてくるんじゃないかな、いまのうちサイン貰いたいな」

そんな事を語り合うギャラリーの高校生らしき男子達。

バスタオルを幸四郎から受け取り、髪を拭きながらそれに気がついた楓がウインクすると、彼等は声を上げたり赤面したりとそれぞれに反応を見せる。

「楓ちゃん……あの子達にアピールするのはちょっと早いと思うよ」

幸四郎が何やら話し込む男子達を横目で見ると、

「そうですか？ 年下の男子を引き付けるのはなかなか難しいんですのよ、いい子してれば引っ掛かる年上のオジサマと違って……」

バスタオルを頭にかけたままの楓の余裕の笑み。

濡れた髪の間から覗く美女と美少女の微妙な比率を持つ強気そうな瞳。

わずかに緩んだピンク色の薄い唇。

決まっている。

まるでワンショットの為にポーズをとったような彼女に幸四郎は暫し見惚れてしまうが、

「ふふっ……オーナーも高校生さんと大して変わらない顔してます

わ」

と、告げられ、否定できず赤面してしまうのであった。

「やるなあ、やるなあ……二人とも、あたしも頑張んなきゃ」

最後の撮影の順番であるみなみは楓を睨み付けながら呟き、

「見ててよ、知世……あれっ？ 知世!？」

一緒に楓の撮影を観ていた知世を呼ぶが、彼女の姿は隣にはない。

「ん、なに？」

いつの間にか知世は少し離れた所で見学していた数人の男子に囲まれて、何やらやっていた様で、みなみの声に答えて走って戻ってくる。

「何やってたの？」

「ファンになったからサインくれって、後は写メでの撮影会」

知世は歯を見せて笑い、ピースサインをみなみに向けてきた。

「撮影会とかサインって、アイドルじゃないんだからさあ……」

みなみが呆れると、

「カメラも小さいけど、結構本格的な奴だし、大方グラビア撮影にでも間違えられたんだろ？」

知世はそう答えて、みなみに顔を近づける。

「な、何よ？」

「さあて、楓も受けてるみたいだぜ、みなみも観ている男を惹き付けるショットが出来るかな？」

「う……男子を惹き付けるショット……」

「自信ある？」

知世の問いに、みなみは嘘がつけなかった。

ほんの数分後に結果が出るのに嘘をついても仕方がない。

「無理……悔しいけど、知世や楓みたいにカメラの前で上手く演じられないよ」

素直に不安を吐露してしまう。

相手が楓なら強がりも出たが、知世ではそんな気にはならなかった。

「なら……」

「なら？」

「演じるなんて、あたし達みたいな不器用な真似すんなよ……みなみの素でやれよっ！ 目の前の幸四郎を恋人に見立てるんじゃないく恋人にしてさ！」

知世はそう言って、みなみを見据え、不敵な笑みを浮かべるのであった。

続く

第53話「アイドルと女優と素人娘」(後書き)

感想や日常シーンで見たい話があれば、ご気軽にリクエスト下さい。

第54話「奮い立たせる笑顔は美少女の必殺技の一つです」

「はい、菜ノ花ちゃんにまゆりちゃん、ここまでオッケー！ 二人ともスゴく可愛かったよ、今のはピンナップでもいける！」

「オーナー、ありがとうございました」

「ホントに？ ボクもスゴく嬉しいっ！」

カメラを構えた幸四郎が空いた手で親指を立てると、水着姿で仲良く抱き合うポーズでカメラに向き合っていた菜ノ花とまゆりは声を弾ませた。

周りのギャラリーからは拍手が起こる。

「もう……オーナーが堂に入り過ぎてるから、周りの方が本当に何かのPVの撮影かと勘違いしているみたいですよ」

「そうそう、ボクなんかサイン書いてゝって言われて困ったよ」

菜ノ花とまゆりは幸四郎に近づき、ギャラリーには聞こえない様に言う。

「オレがどうこうじゃなくて、みんなが可愛いから周りの人がそう思うんだよ、ご苦労様、少しフリーでくるみと撮ってもいいし、休んでも構わないよ、さあ次は佐久耶ちゃんと百合乃さんのコンビでいきましょうか？」

「もう……オーナーったら上手いですね、じゃあ、くるみちゃんにフリーで撮られてますね」

「ボクは少し休むね、オーナーになら、もっと撮ってもらいたいけどね」

「次はボク達なのですか？ いよいよ、プリンセスオークションの

モストデンジャラスコンビの破壊力をみせつけるのです!」

「モスト……? デンジャラスですか?」

幸四郎の返事に菜ノ花とまゆりは幸四郎にそれぞれ上機嫌で答え、出番を促された佐久耶と百合乃がカメラの前に立つ。

「さあさあ、オーナー! ボク達合計バストサイズ180?を越えるデンジャラスコンビの迫力をきっちりカメラに収めるのです、さあさあ……さあ!」

巫女の色合いをイメージしたのだろうか、赤いラインの入った白のワンピースを着た佐久耶は腰に手を当て胸を張った。
形のいい大きな隆起。

その佐久耶の姿にギャラリーの男子からは息を呑む音が聞こえる。

「あの……佐久耶ちゃん、女の子がそんなに胸の事ばかり言わない方がいいんじゃないですか……」

胸を張る佐久耶に対し、意識してしまったのだろう、Hカップを包むビキニの胸元を隠し恥ずかしがる百合乃の仕草はカメラマンを含め、彼女の半分の年齢くらいの高校生男子達に逆に視線を集中させてしまう効果を発揮していたのであった。

「も……ダメ……私、全然ダメ……」

プールサイドのベンチに水着に白いパーカーを羽織り寝転がるの

はみなみ。

「みなみさん、平気ですよ、私も全然ダメでしたです、カメラを向けられたら表情が固まっちゃって、高音さんに怒られました」

明らかにへこんでいるみなみを膝枕しているのは、ピンクで可愛いフリルの付いたワンピース水着姿の恋音である。

「だってえ……」

「みなみさんはあのお二人と一緒に撮ったから、そう思っちゃうんですよ、コッチのグループもビシッと決まったのは、菜ノ花さんくらいですよ」

「そっかあ……菜ノ花かあ、あの娘も器用そうだもんなあ」

恋音の励ましに膝枕の上でコロリと横になり、みなみはプールを見つめた。

「みなみさん……」

みなみの視線の先では佐久耶と百合乃が撮影をしている。

だが、ギャラリーやカメラに照れてしまう百合乃に、照れはまったく無いが走り過ぎ感のある佐久耶の撮影は素人の域だ。

「……だったら知世や楓とは菜ノ花が撮れば良かったんだよ、私は恋音ちゃん達と撮れば良かった」

「みなみさんはそれで良かったんですか？」

「え？」

恋音に訊かれ、みなみは視線を上げる。

「みなみさんは楓さんや知世さんになら負けちゃっても仕方ない、
って諦めてるんですか？」

「そ、そうじゃないけど」

膝の上のみなみを見下ろす恋音の視線。

その視線は厳しくはないが美少女特有の憂いがあり、みなみは罰
の悪そうにその視線から逃げる様に目を逸らしてしまう。

「みなみさん、プレオープンの時、楓さんと同じプリンセスファッ
ションをしたくらいに負けず嫌いじゃないですか？ ホームペー
ジとかでも、あの姿でお客さんにも知れていた楓さんに対して同じ姿
でなんて中々出来ませんよ」

「……ま、その……あれは楓が一番扱いみたいなのに少し逆らって
……」

「そこがみなみさんの良いところだと思います」

微笑む恋音。

「恋音ちゃん……」

「上手くは言えませんが、負けず嫌いな所、みなみさんの魅力だと思
います、恋音なら一流芸能人にも気に入られちゃう楓さんに……
って尻込みしちゃいます」

「いや、いや……正直言えば楓は可愛いし、プロポーションも抜群
だし……今日の撮影なら知世なんか、ひよっとしたら楓よりもスゴ
いかもって驚いた」

「でも……負けたくないんじゃないですか？」

「……うん、無理かも知れないんだけどさ、やるなら一番やりたい」

みなみは頷く。

「じゃ……諦めないで下さい、オーナーだって無意味に楓さんや知世さんとみなみさんを一緒のグループにして個人撮影した訳じゃないと思いますよ、きっと二人といたら、みなみさんが何かを掴めると思ったんじゃないでしょうか？ 魅せる事……今は差があっても、きつとそれに負けないで伸びる……そう思うからみなみさんを二人と撮影させたんだと思います」

「……」

恋音の言葉にみなみは個人撮影の前に知世に言われた言葉を思い出す。

女の魅力は努力と根性……そしてコンプレックスに泣いた涙に支えられてんだからさ。

考えてみれば、知世はこの年齢で夢破れている少女なのだ。自分で断ったのか、断たれたのかはわからないがアイドルを辞めているのである。

「よし……これくらいのコンプレックスには負けてらんない」

みなみは恋音の膝枕から立ち上がり、

「次、行こうよ……二人で撮ってもらおう、とびきり可愛く」

そう言ってパーカーを脱ぐと、

「ハイ……良かった、やっと私の大好きなみなみさんに戻ってくれました」

恋音はまさに美少女の微笑みというに相応しい顔を見せたのだった。

続く

第55話「スカウト空振り!？」

「これと……このカット……あつ、コレもスゴく可愛いな」

エアコンの冷気が心地よい事務所で幸四郎はブツブツと呟きながらパソコンを操作する。

端から見ればかなり危ない奴だが、今はれっきとした工作中。

昨日撮影した動画の編集作業に勤しんでいた。

「楓ちゃんはこんなものかな？ 決まってるのが多くて迷うけど、一人一人の時間もあるからな……今度は佐久耶ちゃんかあ、うわ……このアングルはグツときちやうなあ、うわあ、菜ノ花ちゃんもメチャクチャ可愛いよ」

カチカチとマウスを動かし続ける姿は念を押すが仕事なので、決して只の危ない奴ではないのである。

「終わったあ！ 疲れたけど何だかアイドルDVDの製作者になった感じで面白かったなあ」

数時間後。

すっかり登った朝陽の光が事務所に差し込む中で伸びをする幸四郎。

作業自体はそれ程難しい物ではないが、数時間分の女の子の動画を編集するのには徹夜だった。

後はくるみや高音にも細かい編集に参加してもらい音楽でもつければ、素人作品だがPVの完成だ。

「でも……自分が可愛いと思う女の子を見てるのは飽きないよな」

一人妙な満足感に浸ってしまう。

趣味と仕事が上手く合致したので嬉しくもあり、ここで今日一日休みともなれば幸せなのだが、オーナーとしては、まだしなければいけない事があるのだ。

「……少し寝たら紹介所に顔を出すか、とにかく本オープンまでに二人はなんとかしないと」

幸四郎は楽しい仕事を終えた満足感に長くは浸れずに応接用ソファーにゴロリと寝転がるのだった。

午後一時。

ほんの僅かな暑さを感じる日差し。

幸四郎は紹介所に向かう途中で、商店街の小さな電気店にクーラーの設置予約ののぼりが立っているのに目を止める。

「あと一月もすればクーラー全開かあ、店内の電気代もうなぎ登りだよ、でもクーラーはいれないと、お客さんやうちのお姫様達がうだっちゃうよな」

そんな事を思いながら紹介所に入る。

「これは、これは幸四郎さんじゃないですか？」

声をかけてきたのは何度か顔を出しているうちに知り合いになった紹介所の職員で相川という中肉中背の三十代半ばの男だ。

「こんにちは」

「お世話になってます、今日は直接に来てスカウトですか？ 何人か紹介で面接に行ってもらいましたがそっちはどうですか？」

「いやあ……なかなか条件が合わなくて、せっかくだくさん紹介してもらったのに申し訳ないです」

幸四郎は相川と申し訳なさに挨拶を交わした。

高音が知り合いという事もあり、紹介所からは今まで面接に何人も紹介されているのだが、採用確率はかなり低いからだ。

「いえいえ……流石は御神本さんの二代目、女の子に妥協が無いと、それに仕事ですからね、雇う側にも基準は当然ありますよ」

相川は気にしていない様に笑顔を見せる。

「そうなんですが、高音さんにも切り過ぎだ、って叱られていますからね、自分の場合はやり過ぎなのかも知れません」

「そうですか……あの高音さんが言うなら本物ですねえ、ところで坊っちゃん、この間のプレオープンの様子がネットに出ていてちょっとした話題になっているみたいですよ」

「そうなんですか？」

相川の切り出してきた話に幸四郎は声を上げる。

プレオープン規模は小さく、まだ日数も経っていないのでネット上で話題にはなっているなどとは思ってもなかったのだ。

「ええ……この街の風俗関係ルポでは有名な方のホームページで女の子のルックスのレベルの高さと対応が誉められていました、本当に美少女と至福の時間だったとあり、そこからお店のホームページを見た人の間で話が盛り上がってるらしいです」

「ネット上での風俗ルポの有名人がプレオープンに来てたって訳か、ありがたい事ですね……どの女の子と难道でしょう？」

ネットで話題の理由を納得した幸四郎が尋ねると、

「恋音ちゃんみたいですよ、一緒に写メール撮った写真がアップされてみたいです、室内では撮影禁止って本人に断られたから、終わりに裏の出口から見送られた時に撮ってもらったっていう写真が大きく載ってました」

「見送りの時かぁ、厳密に言えば注意したいけど室内では一応断りをいれているから大目にみようかな」

「それがいいですよ、今はネット全盛ですから上手く利用すれば、広告費をかけずに店の知名度アップに繋がりますよ」

相川の返事に幸四郎は後ろ頭を掻くと、彼も同意して頷く。

厳密に言えば室内ではなく、店内では撮影禁止なので出口も含まれるのだが、女の子に許可を得ているのなら、そこまでうるさく言わなくても良いだろうと思ったのだ。

それに相川の言う通り店の良い評判を広めてくれるならば、怖い部分もあるのは承知だがネットを利用しない手はないのである。

「では、いい娘が見つかるといいですね」

「ええ……じゃ、相川さん、しばらくここに座ってますけど通報し

ないで下さいよ、ここでスカウトした娘はちゃんところを通しますから」

「お願いしますね」

幸四郎は相川とそんな会話を交わし、室内が見渡せる場所にあるソファ―に座るのだった。

西日が窓から差し込む。

女性職員が窓のカーテンを閉めるのを合図にした様に立ち上がる幸四郎。

「坊っちゃん、今日はスカウト無しですか？」

そこには手に書類を持った相川が立っていた。

「いえいえ、声をかけた女の子がいなかった訳じゃないんですけど、話してみたらしっくり来なかったりとかで結局はゼロでした」

「なるほど……で、今日はお帰りですか？」

「ええ……明日も今日ほど時間が取れませんが来ると思います、大丈夫ですかね？」

「もちろんです、こちらこそ何も出来ませんで」

「いやいや……じゃあまた明日迷惑をかけます」

何か申し訳なさげに見送る相川に幸四郎は愛想笑いを浮かべ紹介所を出ていくのだった。

午後五時を知らせる音楽を商店街で聞きながら幸四郎はアパートではなく、店舗の事務所に帰る。

本オープンが迫り、早く出来る仕事は早く片付けてしまいたいからだ。

「さてと……まずは腹拵えだな」

途中、商店街の肉屋で買ってきたメンチカツにコロツケを応接机に出す。

これが夕食だ。

「しまったな、ご飯欲しいな……」

ソファアに座る前にポツリと呟き、厨房に歩いていく。

開店に向け、くるみも色々をやっているのでもしかしたらご飯くらしい残っているかも知れないと思ったのである。

厨房の電気をつける。

それほど広くはないので何があるかは一目瞭然。

「ないな……」

案外、くるみは料理に関しては几帳面な所があるのか厨房はきちんと片付き、電子ジャーの中にも何も残っていない。

冷蔵庫を開けるが、そこにも残念ながら大した物は無かったので、

「仕方ない……まあ、ご飯は諦めるか」

幸四郎は後ろ頭を搔いて中濃ソースを片手に事務所に戻り、コロツケとメンチカツの夕食をとる事にしたのである。

「では……」

ソファーに座り、中濃ソースをメンチカツとコロツケに回しかけ、それを少し行儀が悪いが手で掴もうとした時である。

ジリリリリリ……

事務所の電話が鳴った。

「なんだよ？」

基本的欲求を遮られるのは誰も怒る事だ。

ディスプレイを見ると覚えのない番号。

しかし、募集広告を見た女の子の可能性は否定できないので、受話器を取り店名を答えるといつい先ほど聞いたばかりの男性の弾んだ、というか多少興奮混じりの声が聞こえてきたのである。

「あっ……その声は坊っちゃんですか？ 相川です、当たりです、当たり！ もうナンバーワン候補です、店に居られるんですよね？ 自分はこれから帰るんで、車でナンバーワンを連れていきますからね！」

「あ……相川さん？」

「では！」

相川のイメージに合わないテンションと説明不足の話に戸惑う幸四郎。

だが、それをよそに電話は勢い良くガチャンと切れ幸四郎は暫し啞然としてから、悪い事は起きないだろうと思い直しメンチカツをつまみ上げ、口に運ぶのであった。

続く

第56話「9人目のプリンセス」

薄い茶色のセミロング、適当に切り揃えられた前髪は太い眉毛にかかる。

左側側頭部にだけ付けたピンク色のリボン。

瞳は少々つり目の形良く整った二重。

綺麗に通った鼻筋にちょうど良くあつらえた様な薄くもなく、太くもないピンク色の唇。

輪郭は柔らかさを感じさせる丸みがあるが、それはあくまでも適度な物で肥満を感じさせない。

『か、かわいい』

紹介所の職員、相川に連れられてきた美少女に幸四郎はそう思わざるを得なかった。

太い眉毛に好みがある知れないが、この少女を美少女と思わない男はごく少数に違いない。

そして、男として注視してしまうのは彼女の顔立ちだけではなかった。

『すごい身体……』

幸四郎は息を呑む。

身長は150?をやっと越えるくらい。

店のプリンセスで一番小さな知世と変わりないが、気にならない位のふっくらとした体を彼女は藍色のTシャツにジーンズというラフな格好で包んでいた。

目のやり所に迷う程にアンバランスな大きな胸の膨らみ。

『胸……デカいときかいようないな……それだけじゃない』

抜群というより、異性を意識させてしまうプロポーション。

ルックスもプリンセスの中でも、一番に上げる者がいても何ら異存のない文句なしの美少女。

相川が終業直前、紹介所に現れた彼女を一目見て、この娘なら！と連れてきたのも十二分に説得力を持つ。

「えっと……じゃあ、相川さんも帰ったけど、面接を始めようか？ソファアに座って楽にして」

相川から受け取った履歴書やその他の書類を手にした幸四郎が言う、彼女はスツと床に座り、幸四郎に向かって頭を下げた。

「私は久川愛日ひさかわ まなびと申します、紹介所の相川様に話を聞き是非とも、このお店で働きたいと思い連れてきて頂いた次第にございます、どうかご奉公させて頂きたく存じまする」

土下座。

「え……あ、ま……まなびちゃんね」

プロポーション、ルックスの高いレベルにも驚いたが、幸四郎はいきなりの愛日の行動に声が裏返ってしまうのだった。

「はい……その時間を希望いたしまする」

「じゃ……開店から閉店時間迄でいいね」

「お願い申し上げます」

久川愛日との面接。

彼女のまるで時代劇の登場人物の様な口調は気になったが、それはスムーズに進む。

変わってそうな娘だが、店の営業形態等の説明にもきちんと理解を示したので幸四郎はとりあえずは安心する。

「でさ……愛日ちゃん」

「なんでございますか」

「ちょっと聞きにくいから嫌だったら答えなくても良いけど、今まで風俗店で仕事した事あるかな？ あと男性経験とか……」

「風俗店でお仕事した事はありませんが、男性経験の方は……」

愛日は幸四郎を見る。

その目は今までどちらかと言えば、朗らかに感じられた彼女の瞳ではなかった。

色艶のある細めた瞳。

「……!？」

その瞳に男の部分が強く刺激される。

「愛日ちゃん？」

「ふふっ」

思わず名前を呼んでしまった幸四郎に、愛日は妖艶ささえ感じさせる様な笑みを浮かべ言った。

「お試しになられたらお分りになるのでは？」
「……いいの？」

幸四郎の確認に愛日は口元を緩めた。

「いい大人が男女の事に確認なんてするものではござりませぬよ」
「そうだね……」

幸四郎は歓喜ともに鎖が切れた猛獣になる。
立ち上がると、目の前の美少女を無言でソファ―に押し倒し、た
わわに膨らんだ胸を両手で強く鷺掴みにしたのだった。

「っ……あっ！ も……もうっ……くあっ！」
「ふはぁ」

幸四郎の絶頂。

全裸で抱き合い愛日はそれを抱き止めた。

もう何度もそれを互いに迎えていた。

「ふう……ふう……スゴい、スゴいよ、めっちゃくちゃ気持ち良い……
……もっとしたい、全然治まんない」

激しい息を整えながら、全裸で仰向けになる愛日の目の前にその証拠を曝け出す幸四郎。

「はぁ……はぁ……すっごおい……幸四郎様は……女子を虜に出来ますな」

愛日はその証拠に手を伸ばして握ると、激しくそれをしごき舌で舐めた。

「……くっ」

「どうですか？」

「ご、ごめんっ……手と舌もスゴく良いけど……オレッ、こっちでフィニッシュしたい」

幸四郎は謝るように叫ぶと、愛日の胸をグッと両手で掴み、それを沈み込ませる。

「あっ、あっ……っ」

「や、柔らかいっ……スゴいよっ！ ま……愛日ちゃん、何カップあるの？ 教えてっ！？」

「ふう……くっ……そんな強く掴んで……こすっちゃあ……あっあ……はぁ、はぁ、じ、Jカップだと、おもいまするっ」

「こ……な、なるほどね……こ、これはさ……最高だよおっ！ あっ！」

愛日の答えに叫びながら、幸四郎は全てを吐き出して果てた。

翌日。

結局、幸四郎は愛日と店の空き部屋で朝まで過ごして、事務仕事にやってきた高音に彼女を紹介する。

ルックス、プロポーション共に文句はない愛日に幾つかの簡単な事項を確認して、高音は異論なく愛日の雇用に賛成し、プリンセスオークション9人目のプリンセス久川愛日が誕生したのである。

続く

第57話「なえちゃんだぞ〜！」

「本オープンまで10日かあ……」

9人目のプリンセスである久川愛日を迎えた翌日、事務所で幸四郎はカレンダーを睨み呟く。

最低でもあと1人のプリンセスを雇い入れなければいけないし、その他にもやらなければいけない事、決めなければいけない事はたくさんあるのだ。

「やるしかないよな……昨日は愛日ちゃんの事もあって結局は顔を出さなかったけど、今日は事務仕事を早く終わらせて紹介所にもいかないとな、待ってても可愛い女の子が向こうから雇われに来てくれるなんていうのは超の付く一流店くらいだし……」

幸四郎は午前中にはいくつかの事務仕事を終えてしまおうと決めて、事務机に向かった。

クーラーの稼働音のみが聞こえる事務所、黙々と事務仕事を処理していく。

高音は食品などの仕入れ先の店に行って細かな打合せの後、街の商店街組合の会合にも出るらしく、朝には事務所には顔を出さない様子だった。

店の仕入れなどは店を通すよりも業者を通した方が安くなるかもしれないが、やはり近所の付き合いもあるし、新大空町に根付いて上手く周りとやってきた父親の店の食材の仕入れは周りの付き合いのある店に頼む事で地域に利益を回し合うやり方を幸四郎も踏襲し

た形だ。

しかし、馴れ合いではない双方の商売。

その互いの譲り合い、引っ張り合いは父親の右腕の高音は慣れた物なので、幸四郎は彼女に任せっきりになっている。

やはり経営のかんりの部分が高音の手腕だ。

その分、働く女の子探しと出来る限りの事務仕事はオーナー自らがこなさなければならない、と幸四郎は自覚しているのである。

「よし、終わった！　どうやら少しは紹介所に顔を出せそうだ！」

事務仕事を一段落つけ、椅子の背もたれに身体を預けて伸びをする。

時間は午後二時。

案外に時間がかかってしまったが、まだ平気な時間だろう。

「じゃ、いくか」

机から立ち上がり、身仕度を整えようすると、

「邪魔してるぞ」

「おわあっ!？」

やや低めの間延びした女の子の声が背後から聞こえ、振り返りながら声を上げてしまう幸四郎。

「よう？」

「……君は……何で君がここにいるんだよ？」

そこにはいつの間にか一人の女の子が立っていたのである。

黒髪のショートボブカット、白いシャツに紺色のスカートの可愛らしい娘。

幸四郎はこの女の子を知っていた、いや知っていたでは済まない女の子だ。

「募集広告を見た」

「募集広告！？」

あからさまに狼狽える幸四郎。

「そうだ、私は募集要項を満たしてるだろう？」

「まさか、まさか君は……この店で働くつもりなんじゃないだろうな？」

うわずり、震える幸四郎にショートボブカットの女は含み笑いをして答えた。

「その通り……さあオーナー、早く面接しろ」

「な……なえちゃん……本当に堪忍してくれよ、俺が君をこの店に雇える訳がないよ、勘弁してくれ」

思わずソファアにズリズリと身を沈め困惑の表情を見せる幸四郎に、なえと呼ばれた女は単純明快に即答した。

「ダメだ、さっさと、なえちゃんを面接しろ」

「小早川なえ……なえちゃんという」
「なるほど」

黒いショートボブカットの女が名乗ると高音は履歴書を見ながら頷く。

「かわいいですね」

高音は小早川なえのルックスを見る。

黒髪のショートボブカット。

やや横長の瞳。

鼻筋から唇もレベルが高く整い、輪郭も細くもなく、太くもない。プリンセス達に混じっても突出はしないが、十分に可愛らしい。

体付きはグラマーでもスレンダーでもなく、平均的に見えるがキチンと女性らしい膨らみはあり、身長も160前後。

全体的に見て、幸四郎と同じ年齢の割りに十代の匂いが強く可愛らしさが目立つ良いレベルの美女だと、高音は判断する。

「……あっ、なえさんは坊っちゃんと同じ年ですか？ 学校も同じ？」

「ちなみに高校三年間クラスも同じだぞ」

履歴書の卒業学校欄をみて高音が声を上げると、なえはピースサインを彼女に向ける。

「坊っちゃん！？ 同級生ですか？ なら何で自分で面接せずに？ 私は今日は忙しかったんで……」

「ごめんなさい、高音さん、まさかこの娘がうちの店の求人にくるなんて……俺ではなえちゃんの面接は出来ません、だから高音さんを無理を承知で呼んだんです」

心底困り果てた様に頭に手を当てる幸四郎。

「！？ それは一体どういう事ですか？」

「……それは」

目を細める高音から、視線を逸らす幸四郎。

一見すると気の強くない幸四郎だが、案外にハッキリとしている事は濁さない所を知っている彼女からすれば違和感のある行動である。

「坊っちゃんが言いにくいのなら……」

高音が視線を応接机の向かいにいるショートボブカットのもう一人の当事者に送ると、彼女は両手で高音にピースサインを向け、こう言い放ったのである。

「まあ、なえちゃんは簡単に言えば、幸四郎坊っちゃんの元カノだ、簡単に言わなければ高校時代に付き合ってた異性となる」

「な、な……な」

履歴書を手から落とす高音。

「驚いたか、坊っちゃんはこんな超絶美少女と高校時代に付きおう

てたいう衝撃の真実に？」

「ぼ、坊っちゃんの元カノ……で、ですか」

なえの言葉に高音は震えている。

「た……高音さん？」

驚くとは思ったが、まさかここまでとは思わなかった幸四郎が声をかけると、高音は、

「大丈夫です、こういうトラブルはこの業界には珍しくありません、対処方法も解ってます」

と、顔を上げて、ピースサインを続けるなえにプルプルと震える人差し指を向け、こう一言、告げたのだった。

「不採用」

続く

第58話 「微笑みと眼差しと後悔と ―10人目のプリンセス―」

「いらっしゃいませ！」

元気の良い店員の声に迎えられ、カウンター席に座った幸四郎は新鮮ネギ牛丼の大盛りを注文すると、差し出されていたコップの水を飲む。

今日は思ったよりも暑かった、喉を通る水の一口目は下手な清涼飲料を上回るだろう。

「なえちゃんを雇え」

渴きを癒した幸四郎はもうすでに出来上がり、店員が運んできた新鮮ネギ牛丼大盛りに視線を落として、箸立てから割り箸を取り出して割る。

「なえちゃん可愛いだろうが？」

辛めの味付けのされた油のかかったネギと牛肉、そして白米のトリオを口に運ぶ。

「陰謀だ、これは謀略だ、なえちゃんを雇え」

口に広がる脂の多めの肉に、ネギの爽やかさと食感が混ざり込む。何とも言えない味だ。

この店では幸四郎は最近はこのメニューばかり頼む常連になりつつある……これからも度々利用するつもりなので……

「なえちゃん、こういうのは迷惑だよ」

横の席に座り、注文もせずに呪咀の様な言葉を投げかけてくる小早川なえに幸四郎はそう告げる。

なえの不採用を高音が告げた翌日、幸四郎はなえのあからさまなストーカー行為にあっていたのである。

「なんであの女がなえちゃんの採用を決めるんだよ？ お前がなえちゃんを採用すればいいだろうが？」

新鮮ネギ牛丼を掻き込もうとする幸四郎をなえは覗き込む。

「別にウチは俺のワンマン経営じゃないの、どちらかと言えば高音さんに頼っている所が大きいんだから、彼女がダメと言ったら雇うのは難しいし、俺が私情で決められないから高音さんと呼んだんだよ」

「ふん」

牛丼の入った器を置いて幸四郎が説明すると、隣のカウンター席に座ったなえはいかにも納得していないような声を上げ、頬杖をついて見つめてくる。

「な、なに？」

「あの高音さんとやらも私情いっぱい私を不採用にしたみたいだけど？」

「……う」

反論が出来なかった。

なえが幸四郎の元カノと聞いた時の高音は明らかに何かにショッ

クを受けた様子だったからである。

「そ、そりゃ、俺の元カノが突然、現れて店に雇われたいと来たら驚くに決まってるさ、オーナーの元カノとかいう女の子が来れば他の女の子だってどう思うかわかんないしさ」

「それだけかねえ、それだけで絶世の美少女小早川なえちゃんを店に雇えるチャンスを逃す手はないと思うけどなあ」

なえは訝しげな細目の瞳を見せる。

言葉の後半は冗談混じりだ。

なえは高校時代からこういう冗談めかした事をいう女の子だった。

「なえちゃん……」

「なに？」

「なえちゃんは俺の同級生だったんだろ？」

「おう、私と過ごした至極の三年間を忘れたか？ この恩知らず」

「至極がたまに地獄になる事もあったけど……だったらさ、もう美少女はいい加減に卒業しようね」

「……やだ、なえちゃんは永遠の少女だ」

「……まったく、変わらないなあ」

幸四郎は苦笑する。

思えば、なえと付き合っていた時は、こんなやり取りばかりしていた。

あまりベタベタとしていた記憶はない。

「話を戻す……とにかくあの女は私情で私を不採用にした可能性が高い、お前が採用面接をやり直せ」

「あのねえ……多少、狼狽えたのは確かにあの人らしくなかったけど、なんで高音さんがなえちゃんを私情で不採用にしたかの理由が

わかんないよ」

そう答えてから、牛井を掻き込む幸四郎。

「わからんか？ あの女はお前の彼女だった私に嫉妬してんだぞ」
「ぶっ！ な……な、なえちゃんっ！？ な、そんな訳ないだろ！
あの人は親父の秘書なの、幾つ年上だと思ってんの！？」

幸四郎は思わず牛井を豪快に吹いてしまうが、

「年齢が関係あるか」

なえはため息をつきながら、備え付けの紙ナプキンを取り、幸四郎が汚してしまったテーブルの上をサッと拭く。

「ありがと……まあ、年齢は関係ないよね」

なえに礼を言いながら、幸四郎は同意する、高音のそれを肯定するつもりはないが、高音よりも年上の百合乃が自分にまんざらでもない接し方をしてくれているのを思い出したからだ。

「だろ？ だったら……」

「でもダメ、俺はなえちゃんには店では働いてもらいたくはないよ、わかるだろ？ 俺が面接しても私情で落としちゃうよ……それになえちゃん知らないだろうけど、大問題が一つあるからね」

幸四郎は井を置いて、なえを見つめた。

「……」

何も言わず見つめ返してくる小早川なえ。

黒髪のショートボブカットに少し細目の瞳。

均整の取れた体つき。

元々、学年でもトップレベルの可愛い娘であったが、今でもその頃の雰囲気をも十分に残しつつ、綺麗になっている。

ユニークで変わった雰囲気娘だった。

話していて退屈しない、そして、たまにこちらを焦らせる様な悪戯っぽい事を平気でいう所も変わっていない。

付き合っていた時は本当に愉しかった。

でも……彼女とは別れの時が来た。

別れたのには、幾つかの原因はあるかも知れないが、その大きな要因となった事が今回、なえが元カノという以外で彼女を雇うのを幸四郎に躊躇させているのである。

「店には……くるみがいるんだ」

幸四郎は白状した。

こう言えば彼女は諦めてくれるだろう。

「知ってるぞ、ホームページに出てた、お料理役メイドとか……気にしないから、お前が面接しろ、それで落ちたなら納得する」
なえは平然と答える。

その視線はいたって真面目で遊びがなかった。

「知ってた？ だったら何で？」

「くるみは関係ない……後は面接しなきゃ話すつもりはない」

驚く幸四郎の問いになえはキツパリと言いつ。

「……なえちゃん、相変わらずだなあ、なんだかんだで結局は言い出したワガママは通しちゃうんだもんな、じゃあダメ元かも知れないけど、俺が面接する」

後ろ頭を掻きながら苦笑する幸四郎。

「うん……今回のワガママは絶対通す」

そう言って、微笑んでくる彼女に、

「ワガママが通用するのは面接するまでだよ」

幸四郎はそう釘を刺しつつも、普段は斜に構えているクセに、たまに見せる素直な微笑みがたまらなく好きだった高校時代を思い出していたのだった。

「じゃあ、面接するよ」

午後七時。

誰もいない事務所。

応接机を挟んで、なえと向かい合う。

「……うん」

「じゃあさ……風俗店で働いた経験は？　あと男性経験とかは？
ある程度ないと辛いかも」

幸四郎がなえの履歴書を手にしながら質問する。

「風俗店で働いた経験はない、男性経験は……高校時代付き合った
彼氏の後、2人、すぐに別れたけど、それで人数も判るだろ？」
「……そう」

なえの返答になるべく平静であろうと努める幸四郎、なえとは高
校の終わりとともに別れてからは一切、会ってなかった。

『2人の男と付き合ったのか……俺以外に2人の男がなえちゃんを
……いやいや、いかん』

乱れそうになる心を落ち着かせ、手元にある履歴書を見つめる。
何となくだった。

小学、中学がどこであるか等はどうでもいいし、高校は同じ、そ
の後短大に進んだとは共通の友人から聞いていたので見なくても
いい所なのだ。

しかし、ふと職歴に目を止めると顔を上げ、

「なえちゃん……ここを辞めてきたの？」

幸四郎は思わず尋ねてしまう。

そこにはある超の付く一流のIT企業の名前が書いてあったので
ある。

「うん」

なえの返事はそれだけだった。
次の職が決まるまで前職を辞めないで就職活動をするのは普通だが、履歴書には既に退職とある。

「こんな時勢に……」

「お前が帰ってきて、風俗店を始めるって聞いて……辞めてきた……我慢できなかった」

なえの真っ直ぐな視線。

いつもどこかふざけていて、何を考えているか判らない娘である。でも、たまに見せる素直な微笑みと同じくらい幸四郎が好きだったのは彼女の真剣な眼差しだった。

やると決めた時、なえは必ずやる娘だった。

「あの時の事……後悔してる、あなたの傍にいたのを諦めた事を本当に後悔している」

なえは言った。

「もう元には戻らない、でもどんな形でも、幸四郎の近くで……そう思った」

「でも、ここは風俗で雇われるって事は……」

「それでいい」

「なら、くるみみたいに何かしらサポートの……」

「やだ……」

「なえちゃん……」

幸四郎は言葉に戸惑ってしまふ。

「でも俺はなえちゃんが風俗嬢として……」

「……プリンススなんでしょ？」

「……えっ」

「プリンスス……この女の子はプリンスス、ホームページに書いてあった」

なえは微笑む。

全てが吹き飛ぶ。

もう何を確認するつもりも無くなった。

「なえちゃん……わかった、もう余計な事は聞かないよ、じゃあ最終試験だから……おいで！」

幸四郎は我慢できずに立ち上がり、なえの手をグッと握りしめ、ソファアから立たせた。

「なえっ……なえっ」

「あっ……幸四郎、幸四郎っ」

二人は激しく身体を重ね、声を上げる。

「ん……んんっ」

「んぐっ……」

そして、何度も互いの口を塞ぐ。

「なえ……どう？ 気持ちいい？」

「いいよ……幸四郎、幸四郎がいっぱい……幸四郎がいいっ」

強く抱き合う。

その重ね合いは全てが強く情熱的だった。
既にお互いに何度も絶頂を迎えていた。

「なえ、なえ……すごくいいっ……もう俺、我慢できない、またいくっ」

「あっ……あっ……私もっ、幸四郎……もうっ、何回も感じちゃうっ」

なえの甘い声。

それが更に幸四郎を興奮させ、なえを激しく求めてしまう。

「ああっ……もうだめだ……なええええっ！ 最後いくよ、沢山いくよ！」

「こ、こうしろっう、いっぱいきて、いっぱいきてええっ！」

「なえっ！ うっ……うっ……うっうっ……た、たまんない……うくうっ！ ……くはああっ」

抱きしめ合う。

何度目かの絶頂を迎え、幸四郎は悦楽の声を上げて、なえの中に強く熱くそれを大量に吐き出し、果てたのであった。

翌朝。

激しさを越えた脱力感を感じながらも幸四郎が身体をベッドから起こすと、なえはまだ隣でスヤスヤ寝ている。

「かわいい……」

乱れたショートボブカットを指で触り、

「参ったね」

と、ため息をつく。

「結局は君のワガママを聞いちゃいそうだ……プリンセス採用だよ」

そう呟き、なえにそっとキスをする、

「参ったか？」

彼女は片目を開け、ニヤリと笑ってきたのだった。

こうして、十人目のプリンセス小早川なえがプリンセスオークションに誕生したのである。

第59話「それはおでこへのキス」

「変わった奴だったなあ……年上にこんな事を言うのも何だけど」

オレンジジュースを飲み干し、氷をガリガリと噛む知世。

午後二時、駅近くのファミレス。

混雑時を過ぎて客の姿はまばらだ。

強めのクーラーの効いた店内は外の強い日差しを避けブラインドが閉められ、電気はちゃんと付いているがどこか薄暗い。

「小早川なえ……さんでしたっけ？ オーナーと同じ歳なんですよね？」

「なえちゃんだぞ、幸四郎坊っちゃんの最終兵器、店のナンバーワン候補なんだぞ、ちなみに幸四郎坊っちゃんの元カノにあたるぞ！」……変な奴

テーブルの上の300gステーキを口に運ぶ恋音の横で、みなみはそう言って肩をすくめる。

「そう、そう……結構似てんじゃない！」

「似てる？ ありがと、これで幸四郎に電話かけちゃおうか？」

「面白いな……やるか」

笑い合う知世とみなみ。

「イタズラ電話は良くないですよお、オーナー困りますよ」

そんな二人を注意しつつも恋音はフォークに刺した肉を口に運ぶ。

「だってさ……急に昔の彼女って、しゃしゃり出て来られてもさあゝ、納得できると思うかよ!？」 少しは反省してもらわんと、元カノがいるなんて聞いてないしさ」
「そうそう」

口を尖らせる知世に、腕を組んで頷くみなみなのだが、

「だって……オーナーだって高校時代もあつたんですから、付き合いってた異性くらいいるんじゃないですか、知世さんやみなみさんもそのルックスで放って置かれた訳でも無いでしょう? そういう人は得てして順を負わずにいきなり出て来るか、二度と会わないかどちらかでしょう? それに……」

恋音はナイフとフォークを置いて顔を上げた。

「それに……?」

次の言葉を待つ知世とみなみ。

愚痴に対して案外、恋音が食事を中断し真剣に対応したので、その場の雰囲気は僅かに緊迫する。

「お二人はまだ、オーナーの過去に向き合う程のご関係ではないんじゃないですか? 私もちろんそうですけど……」

恋音はそのため息をついたのだった。

「恋音ちゃん……」

「アッハッハ……所詮は元カノ、合わないから別れたんだろ? ま

あ、私は気にしないぜ、トラブルは勘弁って事でさ！ でも菜ノ花の奴見た？ なえにあからさまに嫌悪感バリバリの顔をしてんの、思いつきり睨んでたぜ」

何か違和感のある空気を振り払う様に、知世が豪快に笑う。

「悪口はダメですう、仲間なんですから」

「悪口は言っていない、事実だって！ ホントにオデコから湯気出た」

恋音の注意に手を振る知世。

どうにも菜ノ花とはあまり相性が合わない様子なのは、みなみと恋音も知っている。

「悪口になっちゃってるじゃないのよ！」

みなみは苦笑した後、

「私は菜ノ花ちゃんは見てなかったけど……別にかなりコワイ顔してた娘を見ちゃった」

と、まるで秘密の怪談話をするようにテーブルから身を乗り出す。

「ウチの番長のみなみが恐れるようなコワイ顔してたって、誰だよ？」

「茶化さないでよ、誰が番長よ」

茶々をいれた知世にため息をつき、

「それが……くるみだったんだよ、スゴい目して、なえちゃんを睨

んできた」

ヒソヒソ声でみなみは告げた。

「睨む？ あのホエホエくるみがあ？」

「ホントに睨んでたんですか？」

睨み付ける。

普段のくるみからは想像しがたい行為に、知世と恋音はそれぞれ訝しげに疑問を投げかけたのだった。

「入るね……」

早いノックの後、くるみは返事も聞かずに事務所のドアを開けてきた。

夕方の事務所には幸四郎が一人。

おそらくそれが分かっているのだろう、幸四郎はそう感じた。

「どうした？」

事務仕事の手を休めて顔を上げた幸四郎。

「仕事中ゴメンね」

短いツインテールの幼なじみは笑みを见せて、デスクトップパソコンの椅子に座った。

「よいっしょ！」

明るい声を上げて、回転式の椅子を何周かさせた後で、回転の惰性でゆっくりと幸四郎に向いたくるみは目を細めた。

「意地悪、またくるみの嫌な所、幸四郎ちゃんに見せなきゃいけないの？」

「くるみ……」

「どうなの？」

威圧感。

似つかわしくない服をくるみは身にまとう。

だが……幸四郎は立ち上がり、

「違うと思うぜ」

くるみの頭に手を当てて笑った。

「あのさ、あの頃とはオレとなえちゃんはもう違うんだよ」

「幸四郎ちゃん……でも、そんな事言って、またなえちゃんと」

「付き合うよ」

「幸四郎ちゃ……」

「くるみともな……」

「え!？」

くるみは意外な答えにそうに顔を上げる。

「確かにあの時はオレはなえちゃんと付き合っていたよ、でも今は

なえちゃんも元カノって言ってるだろ？　これからの付き合い方がどうなってくるかはわからないけど……今は仲間、くるみやみんなと同じ仲間だと思う」

「なえちゃんはそうは思っていない……あの時別れたのは私のせいだって、きつと思ってる」

「実際、そうだろ？　くるみのなえちゃんへの突っかかり方は尋常じゃなかったんだぞ？　もう覚えてないか？」

「覚えてるっ、そこまで子供じゃないっ」

口元にわずかな笑みを見せた幸四郎に、くるみは頬を膨らませた。

「でもっ……あの時は、くるみも子供で、4つ上の2人が……もう私の追いつかない所まで行っちゃったんじゃないかと、もう仲良くできないって……」

「俺となえちゃんがハッキリ付き合うまでは、くるみとなえちゃんも仲良かったもん……懐かしいよ」

幸四郎は背もたれに身体を預け、伸びをする。
そうである。

高校時代、なえと幸四郎が知り合うと、くるみはすぐに幸四郎を通してなえと仲良くなったのだ。

3人で遊びに行ったり、幸四郎を抜いて、女の子同士の買い物に行ったりもしていた2人。

しかし、幸四郎となえが友人から彼氏、彼女の交際になるとくるみは次第に離れていき、ある日を境に激しい拒否反応すら見せるようになったのだ。

幸四郎は2人の関係を上手く取り持とうとしたが無駄だった。顔を合わせると、くるみはまるで別人の様になえに牙を剥くのだ。

幸四郎はなえと恋人の付き合いをし、くるみとは幼なじみの付き合いを続けた、いつか3人でまた一緒に……と思い続けたのであるが、それは長くは続かなかった。

ギクシヤクするなえとの恋人関係。そして、高校卒業間際。

なえから幸四郎に別れを告げてきたのだった。

「……なえちゃんが怖かった」

椅子に座ったくるみはポツリと呟いた。

「くるみ……」

「幸四郎ちゃんが誰かとどこかにいっちゃうのが怖くて仕方なかった」

くるみの瞳には大粒の涙が伝う。

「そんな私のワガママで……幸四郎ちゃんを……なえちゃんと……だから……くるみは幸四郎ちゃんに必要にされたくて、これからは……これからはなるべく我慢しようって……でも、またなえちゃんを見てたら、不安になっちゃって」

「いいよ……」

幸四郎は泣きじゃくる幼なじみの女の子を抱き締める。

「幸四郎ちゃん……」

「くるみはオレの大切な女の子だ、もちろんなえちゃんとの別れが辛かったのは確かだし、くるみに原因がないとは言わないよ、でもくるみがいつまでも傷ついちゃダメだ」

抱き締めた幼なじみの身体は柔らかい。

見飽きた位に会っているのに初めての感触。

「いや……くるみが傷つくのは俺が嫌だ」

その丸めの可愛い瞳を見つめる。

「わかった」

くるみは笑った。

「わかったよ、幸四郎ちゃん、なえちゃんもきつと幸四郎ちゃんの為に来たんだね、だから……くるみも前みたいじゃなくて、もっと頑張るね」

「くるみ……」

明らかに無理はしている、してはいるがそれが幸四郎の望んだ態度。

くるみはそれを叶えようとしているのだ。

「初めはきつと上手くいかない、でもなえちゃんもこのお店のプリンセスだからっ、幸四郎ちゃんの夢だからっ……くるみはプリンセスの世話をするのが役目だから！」

くるみはまるで子供の様に泣き出した。

何も解決していない。

元カノのなえとくるみの遣り切れない過去。

これからどうするのか？

何も解決はしていないが、幸四郎はくるみを抱き締めながら、

「いいんだ、俺はくるみがくるみらしくいてほしいんだよ」

と、ソツと幼なじみの額にキスをするのだった。

続く

第59話「それはおでこへのキス」(後書き)

次回からは第二部。

開店編となります。

ひとまず、ここまで御覧頂き感謝感謝です。

何かご要望、ご意見、ご批判あればお気軽に感想を頂けると幸いです。

活力になります。

第60話「主要登場人物紹介」

御神本幸四郎 みかもとこうしろう

23歳

176?、70?

・本編の主人公で見かけ草食系男子。

かつて新大空町風俗界でトップの経営者であった父を持つが、それを嫌い家を出てアルバイト生活を送っていたが、大王チェーンの強引な経営に父親が倒れたと聞くと、原高音の召喚に応じて新大空町に帰り、父の意志を継ぎながらもオークション方式による自分独自の店舗経営を実行しようと、プリンセスオークションを開店する。

原高音 はらたかね

33歳。

166?、54?

80—60—84

後頭部に団子に纏め、揉み上げを長く伸ばした黒髪、つり目切れ長の瞳に眼鏡に細身の身体。

・父の秘書、現在は幸四郎の経営の手助けをしている、風俗経営の経験豊かで手腕は周りから評価され、プリンセスオークションの實質的な経営の殆どは彼女の仕事の割合が大きい。

入来くるみ いりき

19歳。

154?、50?

89—59—86

黒髪に短めのツインテール、切り揃えた前髪、人懐っこい丸目の童顔だが、案外にグラマーな身体。

・幸四郎の幼なじみ、プリンセスオークションの調理兼雑用係。

普段からあまり物事を気にしないホエホエ娘と知世に言われている、その通りの人格だが、幸四郎の元カノのなえには異様な拒否反応を示していた。

崎原^{さきばら}みなみ。

163?、56?

88-58-88

黒髪を首を隠すくらいまで伸ばしたショートカット、大きめのどんぐり目に可愛らしさと微妙な美しさが出始めた顔立ち。

・幸四郎が一番始めにスカウトした少女。

田舎育ちでケータイの扱いにも慣れていないが、姐御気質で面倒見が良く、斑鳩恋音と仲が良い、ある理由から店でナンバーワンを目指しており、目下ファーストプリンセス候補筆頭の御堂楓をライバル視している。

斑鳩^{いかるが}恋音^{れいん}。

153?、41?

78-56-79

ほわっとした肩までかかる茶髪、二重の丸目に全体的に柔らかさを与える幼げな美少女。・みなみと同時に入店した少女、控え目な性格で守って下さいオーラが出た美少女だが、たまにキツめの言葉が出る。

身体は小さいが、無類の大食で普通の女の子が食べるようなスピードでモクモクと大量の食事を摂るが太らない。

男性経験は意外と豊富。

おだ ゆりの
織田百合乃。

34歳。

165?、60?

99-63-90

黒髪のロングヘアを腰の辺りで巫女さん風に束ねている、瞳は切れ長だが柔和な表情が多く、美人というより可愛らしい。

・プリンセスオークション最年長のお姉さんキャラ、推定Iカップのバストに年齢からは考えられない可愛らしさと若さでプレオープンではナンバーワンの座に輝く、性格は極めて温厚で幸四郎に対してはほのかな気持ちを持っている様子。

お-だ ゆ-りの
小寺まゆり。

154?、43?

76-58-78

黒髪のショートカット、パツチリした一重の瞳に明るい表情。

・一人称が僕の健康系少女、ハキハキした性格で気が強い面もあり、喜怒哀楽に感情表現がストレートである、タツノリというウリ坊を飼っている。

斑鳩恋音とはあまり気が合わない様子だが、みなみとは合うらしい。

み-ど-う か-え-で
御堂楓。

166?、54?

90-57-87

後頭部で大きくアップにした茶髪、瞳は大きめの二重瞼、高いレベルのパーツの揃った顔立ちにナイスボディーの美少女。

・高音が連れてきた店のナンバーワン候補。

元々、モデルをしながら有名芸能人を相手にして多額の報酬を得ていたが、彼女から高音にプリンセスオークション入りを志願したらしい。

プライドは高いが、意外と庶民的で親しみやすい一面も持つ。

仕事には厳しい。

遠藤知世^{えんどう ちせ}。

152?、42?

77-54-76

茶髪のセミロングに側頭部からリボンで縛ったツインテールを横に伸ばしている、丸い瞳に幼い顔立ちの美少女。

・元アイドル、パートナーの才能に負け放蕩しクビになった経歴を持つ。

お調子者の一面もあるが、基本的には頭も回り面倒見もいい。人に自分を魅せる技術は楓をも驚かせる。

幸四郎にもズバズバ物を言うが、案外に気に入ってるようだ。

天城佐久耶^{あまぎ さくや}。

159?、55?

92-59-89

黒髪にミディアムヘア、ドングリ眼のカワイイ系、巫女服が好き。

・神洋島という離島から出稼ぎに来た少女、あろう事かまゆりを危機に陥れる二人目のボクっ娘。

基本的には温厚ないい娘だが、たまに暴走気味になる。

自分のプロポーションには自信があり、巫女服の胸元を開けての罰当たりなアピールもする。

近衛菜ノ花。このえ　なのはな

22歳。

162?、52?

86-56-88

カチューシャで髪を上げて、額にさり気なく数筋垂らした黒髪セミロング、全体的にレベルの高い容姿にプロポーション。

・基本的には落ち着いたお淑やかな性格だが、時折気が強い面も見せ、知世と気が合わない、綺麗な高低の声色を持つ。

幸四郎にもかなりの好意を寄せ、個人的な関係を持った事もある。

ひさかわ　まなび
久川愛日。

151?、48?

95-55-87

薄い茶色のセミロング、適当に切り揃えられた前髪は太い眉毛、左側側頭部にだけ付けたピンク色のリボン、瞳は少々つり目の形良く整った二重。

綺麗に通った鼻筋にちょうど良くあつらえた様な薄くもなく、太くもないピンク色の唇。

・紹介所の職員相川が一目見て直ぐさま幸四郎に推薦してきた程の美少女、時代掛かった喋り方をする優しい性格とJカップの爆乳の持ち主。

小早川なえ

23歳

160?、53?

84-59-85

黒髪のショートボブカット、強気そうなやや切れ長の瞳、突出し

た所は無いが非常に整った容姿。

・幸四郎の高校時代の彼女、くるみとの強い確執もあり卒業時に別れたが、プリンセスオークション開店を聞きつけ、再び幸四郎に会う為にプリンセスになる。

普段はかなりの変わり者で飄々とした性格。

大西

・新大空町風俗情報誌「トップガール」の記者、高音の古くからの知り合い。

相川

・新大空町風俗店組合紹介所の職員、幸四郎と仲が良い。

第61話「出勤するよっ！」

「よくねたあゝ、いよいよ今日かあゝ」

パジャマ姿の彼女はベッドにあぐらをかき、両手を上に伸びをする。

午後2時。

部屋は心地よいクーラーの涼しさ。

それなしではそろそろ昼間に寝るのは寝苦しい季節になってきていた。

「確か6時に寝たよね、よし、きっちり8時間睡眠、この時間サイクルにもなれないと……」

彼女はそう言いながら、二階の自分の部屋から一階に降り、シャワールームに入った。

「ふうゝ」

ぬるめのシャワーを浴びて、脱衣場で白の下着姿で歯磨きを済まし、髪型を整える。

前髪をすいてから揃え、セミロングくらいの黒髪を後頭部左右にそれぞれ小さめのツインテールにピンクのゴムの髪留めで結ぶ。

「んゝ、よし！」

左右のバランスを見て、何度かの修正をしてニッコリ笑顔を浮か

べる。

そして、彼女は短めのキャミソールにショートジーンズに着替え居間に向かった。

「おはよう、って……もう3時近いんだけどね、くるみ」

「これからはこれくらい時間が基本ですよ、5時までに店に行くつもりなんで、あなたの娘にしてはえらい早起きなんですよ」

夕食の準備までの間、ひと休みをしていたのだろう、ソファアに座ってテレビを観ていた母親の**いりきしづき**が振り返ってきたので、くるみはそう答えて、ピースサイン。

「調子のもって、遅刻とかして幸四郎ちゃんを困らせたりしちゃダメよ」

紫月はクスリと笑う。

薄く緑がかったミディウムヘヤーが似合う落ち着いた美人。

くるみはバフツとお尻から、母親の隣に向かってソファアに座り込む。

「頑張るッ」

「ご飯いいの？ 今から簡単で良ければ……」

「平気、たくくさん、ポテトとかを仕込まないといけないし、味加減みるのでパクっていっちゃうから、食べていくと入んない」

「コラコラ……」

「エヘヘ、少しだよ、少しくらいなら幸四郎ちゃんもいいって……」

舌を出すくるみ。

「もう……くるみが役に立たなかったら、お母さんが幸四郎ちゃんに頼んで雇ってもらっちゃうから！　メイド服着るんでしょ？」

「ヤメレ、ヤメレ……おばちゃんヤメレ」

「だ、誰がおばちゃんよっ……これでもお母さんはまだ四十よっ！　この生意気娘っ」

紫月はソファアの隣に座る娘にゲシゲシと蹴りを放つ。

「やったな、年増……脚を出すとは無謀な、若い脚と比べるつもりかっ」

「やらいでか、そのポヨポヨ大根脚には負けんわ、これでもお母さんは胸から脚への曲線は自信があんのよ、あんたがお母さんになつてるのは脚の太さだけでしょに！」

「残念でした、胸のカップも追いついとります！　カップ一緒なら、張りがちやいますよ、張りが！」

「何を、生意気娘！」

調子よく言い合い、ソファアの上でゲシゲシと蹴り合う紫月とくるみ。

紫月は美人系で顔立ちはくるみとは親子でも普段は似ていないが、その互いを見合う笑顔はソックリであった。

「行って来まゝす」

「幸四郎ちゃんに宜しくね、くるみで足りなかったらすぐに紫月お

姉さんが助けに行く、って伝えて」

「うん、紫月オバチャンがそう言ってたって伝えておくね！」

「さっさといけっ！」

「あはははは……」

午後5時。

くるみは母に送り出されて、家の玄関を走り出る。

プリンセスオークションまでは歩いて30分位、開店時間の午後8時の前に料理の準備やミーティングなどもあるが、大分余裕を見た出勤だ。

「幸四郎ちゃんとか、高音さんはもっと早く来てるだろうなあ」

そんな事を呟きながら繁華街に出る。

新大空町に適用される特別風営法では、風俗店の営業時間には基本的な制限は無い。

プリンセスオークションでは午後8時から午前4時までの8時間が営業時間であり、他の店も多くが似たような時間なので……

「すごい、周りが綺麗なお姉さんだらけだ」

周りを歩く女の子達をキョロキョロと見渡してしまってくるみ。

「新大空町名物、綺麗なお姉さん達の大行列！ 雑誌やテレビにも出た事があるんだよね」

地元なのだから知らない訳では無かったが、実際にそんな時間に風俗街のメインストリートに来る事などなかったのだ。

「すごい……すごいよ」

興奮してギャラリー状態のくるみだが、ふと何かに気付いた様に、
「あっ……もう私もその中の一人じゃん」

と、眩くとそのお姉さん達に何となく付いて歩き始めるのだった。

「モタモタしちゃったかな？ でも、まだ平気か」

6時10分前。

お姉さん達の流れに乗って店舗の近くまでやって来て、携帯電話で時間を確認する。

開店前のミーティングは7時半からだが、調理担当のくるみには副次的な物で量は大したことはないとしても、簡単な料理の仕込みの仕事があるのだ。

「早く行って損はしないよね、仕込みはパツと済ましちゃって、みんなのルームメイキングの手伝いでもしよう！」

そんな独り言を言いながら、店の見える通りに入ったのだが……

「んー！？ な、な、な……なあー？」

くるみは目の前の予想外の異変に、ツインテール童顔案外巨乳美少女という自称？ にあるまじき声を上げてしまったのだ。

そこには……明らかに開いていない店の前に立っている十数名の男性の列があったのである。

続く

第62話「プレゼントプロマイド」

「うわあ、すでにお客様が待っているとは！」

くるみはそう呟き、一旦近くの路地にサッと身を隠して、様子を伺う。

並んでいるのは十数人。

スーツに身を包んだサラリーマン風の者もいれば、私服の者もある、全体的に年齢は二十代から三十代といった感じだ。

「……思わず隠れちゃったけど、でも何でオークション形式のウチにお客さんが並ぶんだろ？」

「先着順にプレゼントと書いてありました、おそらくそれでありましょうね」

「うわあっ!？」

路地裏から覗き込み行列を不思議がるが、独り言に背後から答えられ、くるみは驚き振り返る。

そこに立っていたのは久川愛日。

プレオープン後に入店したプリンセスだ。

薄い茶色の髪セミロング、切り揃えた前髪に左側頭部に付けたピンクのリボン。

太い眉毛にややつり目の瞳に綺麗に通った鼻筋から薄めの唇。

一見、田舎の純朴娘の雰囲気を感じるが、その顔立ちのレベルは高く、美女、美少女揃いが自慢のプリンセスオークションでも、ホームページで彼女を掲載するやいなや彼女のルックスを絶賛し、中には、

「プレオープンでは隠されていた最終美少女秘密兵器キター」
などと、書き込む者もいた程だ。

彼女が異性を引き付けるのはアイドル並みの顔立ちもそうだが、150? 少しの背に巨乳グラビアモデルも真っ青なJカップのバストを持つプロポーションも大きな一因だ。

「ああ、愛日ちゃんかぁ、おどろいたなぁ……行列だよ、行列……先着順プレゼントって何だっけ？」

「プレゼントは確か高音殿もくるみ殿も入れた十二人の生写真セットだったかと……それがあるにせよ、この暑い中、開店のこんな前に待っていてくれるのはうれしいかぎりです、隠れていてもかえって失礼、きちんと挨拶をしながら入店いたしませぬか？」

愛日が笑顔でそう提案してくる。

「写真セット……ああ、この間、幸四郎ちゃんがみんなの所をデジカメ持って回ってたな、後で恋音ちゃんにデジカメプリントしてもらって言ってた、くるみはそれだけの為にメイド服に着替えたんだよね」

愛日の答えに、くるみはブーツと頬を膨らませた微妙な顔をしてみせる。

正直、愛日とはあまり絡みがまだないのだが、そういう顔をみせてしまうのがくるみの人懐っこさだ。

「サービス精神に溢れたオーナーらしい仕事ではないですか」
「そうだね」

膨れっ面をすぐに笑顔に変えるくるみ。

愛日の言う通りである。

「じゃ……ここに隠れているのも何だし、愛日ちゃんが言う通りにちゃんと挨拶していこう！」

「御意！」

くるみが歩き出すと、愛日もそれに続いた。

「あれ？ あの娘」

「ええっと……ホームページにいたよね？」

「メイドのくるみ嬢に、新しく加わった愛日嬢だ、勉強不足だぞ、貴様」

「今から出勤かぁ」

くるみと愛日に気が付くと行列の男子達は口々に話す。

「ええっと……こんばんわぁ」

「こんばんわ、本日はこのような時間からかたじけのうございまする」

少しギクシャクしてしまうくるみに、スッと頭を下げる愛日。

「かわいい！ 断然、実物の方がイケてるっ」

「二人ともかわいい」

「くるみちゃんもプロポーションいいけど、愛日ちゃんがすげえ」

行列が沸く。

「またね」

「中で待っております」 「お仕事頑張ってね、くるみちゃんのお料理も頼むからね！」

「愛日ちゃん、絶対に競り落とすよ、ボクと楽しい時間過ごそう」

「愛日ちゃんはオレだよ、今日はもう決めてきたんだから！」

手を振りながら、店の裏に回っていく愛日とくるみは声援を受けながら店に入る。

「ふう、な、なんか……くるみの事まで知ってるし、すごい熱気だったね」

「そうですね、でも良さそうなお客様でござりましたね」

店内に入り息をつき、笑い合う二人。

「おっ、くるみに愛日ちゃん、早いな、お早う」

そこに声をかけてきたのは幸四郎だ、手には小さな段ボールを持っている。

「こん……って、お早う、幸四郎ちゃん！ お外見た？ 見たあ？」

「お外？」

「そうでございます、お客様が行列をつくっておられますよ」

くるみの言葉に首を傾げた幸四郎に、外を指で差す愛日。

「そうなんだ、こっちの準備で気が付かなかったよ、これが効いてるかな？」

「これ？」

「ああ……恋音ちゃんにプリントアウトしてもらったけど、枚数があるから結局は写真館の岡林さんに頼んだんだよ、そして凄くサービスしてくれたから十二枚一組が数えきれないくらいあるんだ」

「ああ……それがプレゼントのプロマイドなんだ、それだけあれば先着順とか関係ないよね」

「そうだなあ」

そう言い合うくると幸四郎。

「ならばオーナー、そのプロマイドなのですが……」

そんな様子のくるみと幸四郎に愛日は何かを思いついた様に手を叩いた。

続く

第63話「いらっしやいませ!」

「じゃあ……みんな、いよいよだよ」

午後7時45分。

幸四郎は高音と並び、ホールに並んだ女の子達を見渡した。

幸四郎は舞台から皆に檄を飛ばせば? と、くるみから提案を受けていたがそれはせずに皆と同じホールに立っている。

「伝えてある登場順番はハッキリ言って始めだし、オレは皆がメインだと思うから始めはくじ引きに近い形で決めたんだ、これからは色々見て変わっていくだろうけどね」

「プレオープンがあったじゃありませんか、それは参考になさらないの?」

幸四郎の言葉に赤いガウンにスリッパというかなりラフな格好の楓が質問をしてくる。

いつもならアップにしている茶髪もストレートに下ろし、それはそれで魅力的だ。

だがもちろん、その姿で舞台に立つ訳ではない、登場順が後半の彼女は登場までのタイムテーブルを計算して、これから入浴をするのだろう。

10人のオークションの後半のプリンセスはまだ舞台で魅せる服に着替えるには早いのだ。

「ああ……もちろん、全く無視するつもりはないけど、君達はこれから勝負なんだ、高音さんが好意的な常連さんを集めてきたプレオープンと今日のお客様は同じじゃない、それを覚えていてほしい

し、今日からが本当のスタートだとおもってほしいからね」

「なるほど……まあ、そのうち盛り上がるメインはわたくしが連続で努めさせて頂きますわ」

楓は笑みを浮かべる。

「頼もしいね、で……登場順番が4番より後ろの頼みがあるんだ」

足元に置いたプロマイドが入った段ボールを出しながら、

「先着順20人に配る君達のプロマイドセット……実は後の順番の女の子に開店何日か限定で入店してきたお客様に手渡してほしいんだよ」

と、幸四郎はプリンセス達に告げたのである。

「え!?! それは困りますわよ……こっちは準備にはかなり時間がかかるんですわよ!?!」

「良いんじゃない? 入店してきたお客さんに渡すだけなら何分もかかる事じゃないんだし」

楓は抗議するが、ピンクのワンピース姿の知世は後ろ頭に両手を回しながら言う。

彼女もまだ舞台上に上がる服は着ていない、登場順が遅い組だ。

「ち……知世さん? わたくし達はキッチンと魅せる時に魅せれば良いんじゃないませんか? 何でもかんでも出ればいいという物ではありませんわ、店ではプリンセスなんですのよ」

「何でもかんでもなんて言ってねえよ」

反論する楓に知世は答える。

「プリンセスだって言ったって、そういう付加価値はお客が決めてくれる物だ、ちゃんと出るところ出て、アピールしなきゃな、近い存在を好む客は多いよ」

「普段、近くない物を求めるから安くはないお金を払う方もいますわ」

楓と知世。

仕事への意識の高い2人の意見はどちらも頷ける部分があり、周りの者は簡単には口出しできない雰囲気があった。
静まるホール。

「そうだな……いいよ」

幸四郎は顎に手を当てて頷く。

「頼んでおいてなんだけどさ、楓ちゃんの言う事も知世ちゃん言う事も理解できる、プリンセスというだけあるからね、普段には手の届かない部分があってこそお客様が大切なお金を出すのだし、知世ちゃんが言うように親近感を感じるプリンセスに会いたいと思って、常連になってくれる人もいるだろうからね」

そこまで言うのと幸四郎はみんなを見渡して、

「4番より前のプリンセスには準備の関係で辞退してもらおうけど…

：4番より後のプリンセスは自由参加で入店してきたお客様先着20名にプロマイドプレゼントをして欲しい、ここはみんなに任せるよ、してもしなくてもオツケーって事、もちろん俺や高音さんは自由参加にした以上はこの活動でみんなを評価したりはしないから」

と、続けたのである。

「いらっしゃいませ！」

ホールに入ってきた客に頭を下げるタキシード姿の幸四郎。

胸には店長のバッジを付けている。

それに倣うのはカジノディーラーを思わせる格好の高音に、メイド服のくるみだ。

そして……

「いらっしゃいませ！」

黄色い声を合わせて、客達を出迎えるのは知世、愛日、佐久耶、みなみの4人である。

「かわいいな！」

「はい、早くから並んでくれてありがとうございますのです、ボクたちがかなりエロチックに頑張ったプロマイドをプレゼントするのです」

普段着のラフな格好のニヤける三十代の客に笑顔を見せて、プロマイドを差し出す巫女服の佐久耶。

「コレがほしかったんだよ、君達はそのらのアイドルグループ真っ青のルックスだからね、マジうれしいよお、価値あるよ！」

「ネットで売り払ったら叩き殺すのです」

「あははは……売る訳がないよお」

佐久耶と楽しげに会話を交わし、客は嬉しそうにホールに入った。

「君、カワイイね」

「ありがとうございますりまする、これは先着順の方に差し上げておりますプロマイドにごさりまする、どうかお納め下さい」

若い客に愛日は笑顔で両手でプロマイドを丁寧に差し出す。

「かわいいしさ、プレポーション……めちやくちやスゲェ！ オレは君に持ち金全部いくよ」

「ありがとうございますりまする、さあさあ、プロマイドをそちらの方もどうぞ」

別の客に声をかけられ、そっちにも愛日はプロマイドを差し出す。

また、知世は手慣れた感じで客にスマイルを見せてプロマイドを渡し、慣れない様子だが、みなみと恋音もそれぞれに客とコミュニケーションを取りながらプロマイドをプレゼントし、好評を得ている様子である。

「坊っちゃん……自由参加、構わないんですか？　女の子同士は何が溝になるか分かりませんよ」

プリンセス達に迎えられてホールに入っていく客を見ながら呟く
高音。

「多少は覚悟してますよ、競争してくれないと困る部分はありますしね」

幸四郎は答える。

「それに、プリンセスにはどう魅せれば良いかを自分で模索してほしいです、楓ちゃんみたいなやり方もあると思います、その正解は個々で違いますからね」

「自分のプロデュースは自分でしろと？」

高音の問いに幸四郎は頷く。

「ええ……もちろん出来る限りの手助けはしますが、そうなります……どにしろ最後はお客様と一対一、お客様と2時間過ごすのは自分なんですから」

「素人娘達に坊っちゃんは案外厳しい」

「その素人娘が本物のプリンセスになれるなら、採用面接もそうでしたが、俺は案外、彼女達に厳しいかもしれません」

そう言って複雑な笑みを浮かべる幸四郎。

少しの間だけ幸四郎を見つめた後、

「あなたはやはり会長に似ています」

高音は口元を緩めながら告げたのだった。

続く

第64話「予想してましたよ」

「皆さん……本日はようこそプリンセスオークションオープニングのめてたい日にお越し下さいました、これから登場する美姫達の登場前にむさ苦しい男の挨拶は済ませておきます、私はオーナーの御神本と申します」

幸四郎が舞台上から照明の暗いホールに挨拶を始める。

「本店の目指すのはお客様に至福の2時間を過ごしていただく事のみです、そして……その時間を一緒に共有する為、プリンセスはきつと素敵な笑顔を皆様に見せてくれると信じています、どうぞ存分に楽しまれて下さい！ それでは」

そう緊張気味に早口を抑えながら言うと、大きめの拍手が起こり、幸四郎はそれに対し、一礼して舞台を去ると入れ代わりに高音が現れた。

「高音さん！」

「かわいいっ」

「百万だよ！」

オークションニアの登場でオークションの開始を察した客が沸く。
ホームページで知ったのか高音の名前を呼ぶ声も聞こえる。

「声援ありがとうございます、初めまして私は当オークションのオークションニアに務めます高音といいますが、それでは早速ですが、プ

リンセスオークションの説明をさせていただきます、それぞれのお客様にお配りした番号の付いたブザーを確認ください……」

マイクを片手にオークションの説明を始める高音。

システム自体はプレオープンから変わらないシステムで、落札金額を告げてボタンを押し、それを高音が大型モニターを見ながら確認するのである。

客にもボタンを押してもらい、自分の番号がちゃんと表示されるか試す時間も取り、支払いのシステムも説明する。

「それでは……プリンセスオークション開店です、選りすぐりのプリンセスと素敵な時間を過ごされるお客様はどなたでしょうか？
いよいよ開店ファーストプリンセスの登場です！」

高音の声が響く。

「ご登場願いましょう！ プリンセスオークション、最初のプリンセスは……近衛菜ノ花姫ですっ！」

高音のコール。

舞台には白を基調にしたドレスに身を包んだ菜ノ花が現れる。
前髪を上げた銀のカチューシャには頭冠を模した飾りが付く。
手袋から靴も白のプリンセスルック、ダテ眼鏡も今日は外している。

オオッ、という歓声がホールに響く。

「それでは……皆さん、初登場なのでプリンセス菜ノ花ちゃんのマル秘データ付きプロフィールをモニターでご確認下さい！」

高音が大型モニターを指差す。

客の視点がそれを追う。

モニターには菜ノ花を撮った動画と共にスリーサイズ等、年齢その他もろもろのデータが表示される、マル秘データと言うには物足りないがアイドルの紹介Vみたいな物だ。

「皆さん……菜ノ花ちゃんのデータは観てもらえましたか？ 本データはプリンセスオークションが自信を持って送り出すプリンセス、一切の誇張、捏造はありません、見て下さい、このベストプロポーション！」

高音の派手な紹介と共にライトを浴びせられた菜ノ花は照れ笑い。

「菜ノ花ちゃん、巨乳で可愛いぞっ」

その仕草が妙に可愛らしく、客が拍手する。

「皆様、私みたいな素人にご声援、ありがとうございます……」

ペコリと頭を下げる菜ノ花。

実際に聞いてもマイクを通して響く良い声だ。

「菜ノ花といいます、自分でも大好きな名前です、ぜひ皆様に名前だけでも覚えてもらいたいですね……素敵な時間を一緒に過ごせますように、楽しみにしています」

白い手袋でマイクを持ち上品に挨拶する菜ノ花にやんやの喝采が浴びせられる、いい空気だ。

「さあ……では、プリンセスオークション開店、ファーストプリンセス菜ノ花ちゃんとお部屋で過ごす権利は誰の手に？　オークション開始です、まずは五千円からスタート！」

高音は高らかにオークションの開始を告げたのだった。

「では……3人目のプリンセス、まゆり姫と過ごす権利は21番のお客様が二万三千円で落札されましたっ、どうぞっ」

「えっと……どのお客様かな？　僕の方から行くからねえ」

高音がコールすると、赤のドレスのまゆりは舞台上から自分を落札してくれた客を探す。

「ダレ？　誰？」

暗めのホールだ。

キョロキョロするまゆりに、

「僕だよ！」

スーツ姿の青年が舞台の近くまでまゆりに向かい、手を降ると、

「わあ……ありがとう！　じゃあ、僕をしっかり受けとめて！」

まゆりは舞台上で赤いヒールを脱ぎ、彼に向かって身を躍らせたのだ。

「まゆりちゃん、元気いいなあ……じゃじゃ馬姫って感じだな」
「坊っちゃん……」

そんな様子を舞台袖から見ている幸四郎。
そこに高音が神妙な様子で声をかけてくる。

「どうしました？」

「菜ノ花さん、百合乃さん、まゆりさんの三人まで終わりましたが……落札金額がふるいません」

目を細める高音。

オークションが始まり、ここまで3人のプリンセスが登場しているが、落札金額が三万円を越えてこないのである。

ムードは悪くない、客も楽しそうであるし、ここまでのプリンセスの評判は上々だ。

金額だけが低迷しているのである。

「高音さん……」

心配を隠さない高音の幸四郎は微笑む。

「予想してました」
「えっ？」

予想外の答えに声を上げてしまった高音は慌てて舞台を振り返るが、まだ舞台下でまゆりと客が騒いでいるのを確認して、幸四郎に振り返る。

「まさか……順番？ あのと3人が伸びないのは織り込み済みと？」
「違う、違う……菜ノ花ちゃん達に随分と失礼だなあ、順番はミーティングで言った通り勘みたいなもんですよ」

幸四郎は苦笑してから、高音を見据えた。

「この間は高音さんの連れてきたお客様がグループの新しい門出を祝っての高音さんの知り合い、常連のお客様だったでしょ？ 今日とは違います、ホームページや情報誌、口コミなどのまだ少ない情報で来てるお客様なんですから……二人っきりの部屋で女の子が何をしてくれるか、自分が何が出来るかが解らないんですよ、それに大切なお金を競り合うんです」

「ええ……」

「それでこの金額を出させる決心をさせているここまでの3人は第一印象で男子にお金を出させているという点で十分な合格点なんです、御祝儀の落札金額は要りません……これから先にリピーターのお客様や評判を聞いた客に落札金額を伸ばしてもらえる店を目指します」

「そうですね、坊っちゃん……私とした事が開店始めに焦りました」

幸四郎の答えには頷く高音。

そこに……

「まだ？」

少しとぼけた声が割り入ってくる。

黒髪のショートボブカットの彼女、小早川なえだ。幸四郎は彼女の顔を見つめてしまう。

「なえちゃん……本当に……」

「それ以上は言わない方がいいぞ、せっかくオーナーらしい事、言っただけなんだからさ」

複雑な表情を隠さない幸四郎。

だが、なえは特に感慨もない声で、そう告げ、

「まあ……高音さん、いいコール頼むわ、あと早くして……この格好はかなりあちいからね……まあ、コレもプリンセスと言えればプリンセスか、それとも何かの罰ゲームかい？」

と、口元を緩めるのであった。

続く

第65話「気にした事もない」

「プリンセスなえちゃんの登場です、本オープンに先立ちプリンセスオークションに新しく加わってくれたプリンセスです」

「おまたせ皆の衆」

高音のマイクに応え、しずしずとなえが舞台に軽く右手を上げながら姿を現すと客達は声を上げる。

なえの格好は煌びやかな着物。

黒髪ショートボブカットの美しい彼女はその着物が驚く程に似合っていたのである。

「今日のなえちゃんは和のプリンセス、どうでしょうか？ 見事でしょう、似合ってますでしょう？」

「似合うと言え」

「こちら、お客様にプリンセスが何ですか」

「なえ姫はこういうキャラだ……でもベッドの上ではめっちゃめっちゃ従順……」

「こちらこちらこちら！」

マイクの高音と少し飄々として惚けたなえとの掛け合いに客が笑う。

「いかん？ なえちゃんは物事をコンドームで包むのが苦手で……」

「それを言うならオブラート！ それにコンドームは大切です、ちゃんと包んで下さい！」

「なにを？」

「えっ？」

「だからさ……なにをコンドームで包むんだい？」

「えつとお……そ、それはですねえ」

赤面する高音。

客からは笑いと高音にカワイイと叫ぶ声が飛ぶ。

「とっ、ともかく……コンドームは大切ですっ！」

「わかったよ、年頃のオバサンがコンドーム、コンドーム叫ぶんじゃないよ」

「うぐううう」

歯を食い縛る高音に再び起こる笑い。

「さて……高音ちゃんの乙女チックを見せるのは終わりにして……者ども、なえちゃんと素敵な時間を過ごす権利を争え」

なえは高音のマイクを取りホールを指差す。

「な……なえちゃん」

複雑な気持ちにならざる得ない状況なのは否定できないが、舞台袖の幸四郎は以前と変わらぬ彼女の性格に苦笑を禁じ得ないのであった。

「じゃあ」

なえと一緒に過ごす権利を競り落としたビジネスマン風の男から、

落札金額の精算を終えると彼女はレジの幸四郎に手を上げた。

「ああ……うん」

なんと答えていいか解らない。

元カノが自分のオーナーの店で客と二人っきりで2時間を過ごすのだ。

「な……」

「三万五千、今のところ最高落札金額だな」

名前を呼びかけた所になえが幸四郎に耳打ちをしてくる。

「……まあ」

確かにそうだが、迷いを見せる幸四郎。

「……だったら少しは嬉しがれ、せつかくお金を出してくれたお客に感謝してみせろ、私は店の大切なプリンセスじゃないのか？　これが知世とかでもそんなしょぼくれんのか？」

「なえ……ちゃん？」

あくまでも耳打ち。

後ろで幸四郎となえのやり取りを待つ客には聞こえない声だが、そのなえの声には力があつた。

「……その程度でおろつく覚悟なら……」

「なえちゃん！」

それを遮って、なえを見つめ、

「さあ……なえ姫、素敵な時間を過ごしてきてください、お客様をお待たせしたらいけないですよ……お客様も失礼しました」

幸四郎は後ろに立つ客に頭を下げる。

そして、ほんの刹那、目を合わせた二人。

なえは満足気な笑みを浮かべてから、

「さあ……なえちゃんワールドへようこそようこ、ハマると抜けれんぞお」

そう言いながら客の腕を取り幸四郎にウィンクしてから二階への階段を上がっていくのであった。

「初々しくて可愛かったよ……顔もプロポーションも抜群だし最高、また落札しなきゃね」

「お世辞上手いんだあ」

ベッドの上。

名前も知らない相手との激しい交わりの後。

そう声をかけられた崎原みなみは全裸で寝転がる青年に、自分も

同じ状態で身体を預ける。

「お世辞じゃないよ、みなみちゃんの常連になるからさあ」
「ホント?」

頭を胸元に抱き寄せられると、みなみはわざとらしく甘えてみせる。

「ホントだって……」
「ありがと」

みなみはニツコリ笑うが部屋の置き時計がピピッと軽く鳴ると、何かを思い出した様に顔を上げた。

「お客さん……時間、そろそろ服着ないと」
「延長って……?」
「ウチは無いんだ、始めからキツカリ2時間」
「そっかあ」

青年は名残惜しそうにベッドに座り、財布から一万円をみなみに出す。

「えっ?」
「チップだよ、予想以上に可愛かったからね」
「チップかあ……うーん、ちゃんとオークションしてもらったのに……貰っちゃっていいのかなあ」
「とっときなよ、これは俺の気持ちなんだから」

悩むみなみに青年は苦笑した。

「普通、悩まないぜ」

「いやあ……じゃあもらっとくね」

シートで胸元を隠しながら、みなみは出された札を受け取った。

「じゃ……プリンススルックはすぐに着れないけど……お見送り、バスタオル姿でいい？」

頬を赤らめるみなみ。

「もちろん！　それの方が好みだよ」

「もうっ、それじゃプリンススルックの意味が無くなっちゃうよ！」

名も知らぬ客の笑顔にみなみはそう赤らめた頬をふくらませるのだった。

部屋から手を振り客を見送ると、みなみはTシャツにショートパンツ姿に着替えて衣裳を脇に抱え、一階に降りていく。

「みなみちゃんが見送ったお客様が本日のお客様だよ」

一階に降りたレジに居たのは幸四郎。

さっきの客の青年の追加注文の精算を終えた所で待っていたのだろう。

「そっか……もう朝方なんだ……」

「そうだよ、今日はみなみちゃんは頑張ったね、みなみちゃんのお

客様、後の精算の時、みんな満足そうだったよ」

「……そっか」

幸四郎の言葉に、みなみは息をもらしながら笑みを浮かべた。

「相手名前も知らないけどね」

少しの間。

「シンデレラ……」

幸四郎はポツリと呟く。

「なに？ いきなり」

「いや……みなみちゃんにはシンデレラの王子様の名前知ってる？」

「……ふん」

幸四郎の問いにみなみは口元を緩め肩をすくめる。

「知らないよ、気にした事もない」

窓の暗闇が少しずつ明るみ始めていた。

続く

第66話「チーズケーキの種類は豊富です」

「開店して一週間、来店客数はかなりの物で好評です、お客様の反応も悪くないですし……ホームページにも各プリンセスにファンがいるみたいです」

「良い事ですね」

高音の言葉に幸四郎は満足気に頷く。

「しかし……」

優秀な秘書でもあり、現在マネージャーの立場でもある彼女の表情には冴えがなく重い。

「しかし……?」

「坊っちゃんも気付いているでしょう、お店の売上の事です」

「売り上げ?」

「早い話が……このプリンセスと部屋で過ごす権利の落札金額が期待ほどではないです」

「期待ほどではない?」

「そうですね」

高音はそう言いながらファイルを手を取った。

マメな彼女はそれぞれのプリンセスの落札金額を細かに把握している。

「ほぼ全員がプレオープンから3割から4割減といった感じです、期待の楓さんや知世ちゃんにしてもプレオープンからすれば低調と言ってもいいでしょう」

眼鏡を右手の中指で直し深刻まではいかないが表情を曇らせる高音。

だが、それを受ける幸四郎の顔は打って変わった笑顔。

「平気です、今は皆が初めての事をしてるんです、もちろん俺や高音さんも含めてね……」

軽くウインクをして、幸四郎は立ち上がる。

「坊っちゃん……お店というものは開店からひと月が勝負なんです、ここで売り上げを伸ばせないようだと先が心配になります」

「高音さん……」

「違いますか？」

高音はファイルから眼鏡越しの細い視線を幸四郎に向ける。

だが二代目のお坊っちゃんは、

「高音さんも平気って根拠は見てますよ、本当に大丈夫です、まずはオレ達がプリンスを信じないと始まりませんよ」

そう答えると、コンビニにお昼を買いにいきます、と彼女に手を振りながら事務所を軽い足取りで行ってしまう。

「……たまに全然、訳が解らなくして相手を煙に巻く所も似てるんですから」

一人残された事務所で高音は呟き、応接用のソファに背中から

身を委ねるのであった。

「百合乃さんの部屋、チーズケーキだってさ、1つでいいらしいよ」
「1つはいいけど、どれ？ チーズケーキには種類あるんだよ」
「あんのかよっ？」

厨房に向かって受けた注文を告げる知世だったが、メイド姿のくるみに聞き返されると声を上げる。

「あるよ、まずはバイクドチーズケーキ、あとはレアチーズケーキでブルーベリー、ピーチ、パイン……案外に美味しいのがパッション！」

「なんでそんなに種類あるんだよ、チーズケーキなんか1つだろうが!？」

「世の中は知世ちゃんみたく単純ではない、くるみとしては更にスフレチーズケーキもメニューに載せたいと思うてる」

くるみのまるで一流のパティシエの様に演技がかった表情。

「どうでもいいよ、どうせメイド喫茶宜しく百合乃さんにあーん、とかしてもらうんだよ……私だったら、私にも奢ってえ、とおねだりして店の売り上げに貢献するけどね」

「お客さん全員におねだりしてたら太らない？ プリンセスなんだから体型には気をつけないと」

「それもそうか……あたしというお客さんはあんまり料理とらない

なあ、開店してここままで一番お料理の注文をお客さんにさせてる
営業ガールは誰だ？」

「恋音ちゃん」

「ああ……」

くるみの即答。

知世はやっぱりかあ、とでも言いたげな顔をした。

「ダントツだよ、恋音ちゃんはお客さんが来る度に毎回夕飯食べて
んの？　ってレベル、もちろんそんなに派手に一回では食べないけ
ど毎回だからね」

「まさかお客さんも次の客とも同じように食べるとはおもわないだ
ろうなあ、アイツちゃっかり食費浮かして悪女だな」

ニヤニヤしながら腕を組む知世。

「でも楓ちゃんもよく高いお酒も入れてるみたい、くるみはお酒は
関わってないからよく知らないけど」

「あいつも実益兼ねてんだろ？　でもちゃっかりやってもお客さん
が納得して出してるなら良いんだし」

「そういう物なんだよね」

「多分、そういう物だよ、私だって始めたばかりなんだぞ」

「ふーん」

見合う二人。

「あつ……チーズケーキだよ！？」

「そうだよ、早く出せよ……百合乃とお客さん待ってるだろ！」

「だから何のチーズケーキなの！？」

「何でもいいだろ！　めんどくさいから……そのキュアベリーチー

ズケーキとかいうのでいいよ！」

「そんなのないっ！」

ボケか何だか解らない知世にくるみは苦笑した。

「はい、はーい、百合乃さんの部屋にチーズケーキのご注文だよ、道を開けろーい」

「知世ちゃん、何してんのさ？」

プラスチックケースを被せたチーズケーキを乗せた皿を持つ知世と階段で通り過ぎた幸四郎は彼女を呼び止める。

「ああ……くるみが色々忙しいみたいでさ、私は出番がまだ先だからちょっと手伝ってたんだ」

「……そうか、俺や高音さんも立て込んでるからね、ありがとう」

幸四郎は微笑む。

本来なら彼女の仕事ではない、高音なら何というか分からないが、素直に知世に感謝する。

「いいって……落札金額が思うより低いんだろ？ 高音がぼやいてる、ってみんな気にしてた、人を雇うのもお金かかるし、やれる事は皆がやる……売れてない時代はあたしもアイツと何でもやったよ、ミニコンサートの準備とか、会場設営の手伝いとか……って、売れてないままであたしはアイドル辞めたから売れてない時代という言い方はおかしいな」

知世の笑顔。

「知世ちゃん……」

プリンセスである彼女にそういう気を回させてしまっているのが気が引けるが、それ以上に知世の気遣いが嬉しい。

彼女はアイドル時代に解雇になる過ちは犯したが、苦労もたくさんしたのだ、アイツと言うのは当時のアイドルユニットのパートナーだろう。

「知世ちゃん……」

階段の途中で止まり、知世を見つめ、もう一度名前を呼ぶ。

「行っている？ 遅れてるんだ、百合乃が文句いわれるかも」

「うん……」

そうは答えながらも幸四郎は彼女の頭にポンと手を置く。

「え……？」

驚く知世。

「大丈夫……君達は絶対にこの街で一番愛される女の子達になれる……いや、俺がしてみせる」

幸四郎が告げると、

「……そりゃいいや」

知世は驚いた顔を落ち着いた笑みに変えるのだった。

続く

第67話「泣かしちゃったあ!？」

「参りました……まさか、こんなになるとは」

スポットライトを浴びる舞台を袖から見て、そう呟いた高音。

「でしょ？ でも言いましたよね？ きっと大丈夫だって……」

高音と一緒に舞台を覗く幸四郎は口元を緩めた。

プリンセスオークション開店一ヶ月を迎えた週末……ホールは明かりを強くしなければすぐにぶつかってしまう程に客で埋まり、一種特殊な雰囲気が漂っていたのである。

もちろん、開店以来の最高客数。

「これなら……」

「そうです、自ずとオークションは盛り上がり、盛り上がりは落札金額に直結します」

頷く幸四郎。

「確かに……確かに前兆がまったく無かったとは言いませんが……」

高音は綺麗な形の顎に手を当てる。

前兆はあった。

開店から一ヶ月の店の売上げは期待程では無かったが、ホールの客数はわずかずつだが増加をたどり、オークション自体の熱もオークションニアを務める高音は感じてはいたのだ。

「確かに、確かにホールとお客様の雰囲気は悪くなかったです、で

も……」

「高音さんくらいならそこまで感じていたのなら十分なんじゃないですか？」

幸四郎は自信に溢れた顔を見せた。

「ウチの女の子はまた二人きりで会いたい、また二人で時間を過ごしたい、って思わせるのに十分な魅力があるんですよ」

「リピーターという事ですか！」

「当然了」

リピーター、繰り返し店に来てくれる客。

風俗店ではそれを掴むのが生き残りを分ける鍵。

決して安くはない風俗店では一人の客は月に何度も来てはくれないが、月に一度だけでも繰り返し来てくれる客が強い経営の味方になるのである。

その為の必須な事はサービスと女の子の質だ。

「何よりも大切なのはですね……またこの娘に会いたい、って思える女の子が居るって事ですよ……そうすれば……」

幸四郎はウインクする。

「ですね、そうすれば何もなくても……」

敢えて幸四郎が言わなかった先の言葉。

それは解っている高音も言わずに口を緩める。

そう、プリンセス達と時間を過ごしたい者達が集まれば……

自ずと高音が問題としていた落札金額の問題は解決する。

それがオークションというシステムの最大の長所なのだから。

「予定の通りスタートいきます……うわあっ！」

舞台の裏の小さな控え室を覗き込んだ幸四郎は声を上げそうになるが、それを自分の手で抑えた。

別に控えていたプリンセスの着替え中だった訳でもない、彼女は大人しく座っているだけだった。

そして、上げてしまった声は驚愕ではなく感嘆。

「わかりました、こちらは準備出来てますよ」

椅子に座ったままで微笑む一人の美女。

そこには男なら感嘆を禁じ得ない程に美しいプリンセスがいた。まるで古代ローマ時代の王妃を思わせる白の布を使ったドレス。頭には草の冠。

Vの字に開けられた首筋から胸元のデザインが豊かなでは陳腐な表現と言っている胸の見事な谷間を魅せている。

コスプレ婆からの物なのだろう、足元もそれらしいサンダルだ。

「ゆ、百合乃さん……すごく似合ってるっ、か、かわいい」
「もう……」

素直な感想を漏らしてしまう幸四郎に百合乃は苦笑する。

「これは今日の最高金額、最初の百合乃さんで決まっちゃうかも」

「うふふっ、幸四郎さんはお世辞上手いです」

「いやいや……お世辞抜き、お世辞抜きで……本当に可愛いですよ」

笑顔を浮かべる幸四郎。

「嬉しいです」

百合乃は立ち上がり、寄ってくると幸四郎の頬に軽くキスをしてきた。

「ゆ……百合乃さん？」

「幸四郎さん……」

赤面する百合乃。

数秒モジモジする仕草の後、彼女は顔を上げて幸四郎を見つめ、

「ええっと……もし、もしですよ、私が今日のお店落札金額のトップになったら……そうしたら今度の日曜日……私と、私とデートしてくださいますか？」

と、切り出す。

「デート!？」

「はい……お願いします、そのもちろん今日のプリンセスのお仕事は手を抜いたりしません! あくまでもデートはプライベートの事で……その」

瞳を逸らし赤面したまましまごつく百合乃。

だが、幸四郎は少しの間の後……ん、と唸ってから答える。

「凄く嬉しいですけど……百合乃さんはこれからプリンセスとしての大切な仕事がありますからね、お客様が待ってますから、そちらに集中して下さい、それに落札金額の事を何か賭ける対象みたいには……出来ないですよ」

「え……!？」

「百合乃さん……後で俺から話があります、そろそろ出番ですよ？」

「え……す、すみませんでした」

意外な返事。

百合乃は声を詰まらせたが、すでに舞台に出ていた高音からの呼び出しがかかり、幸四郎から促されたのでうわの空ではあるが、舞台に進み出るのだった。

「またいらしてください、待ってますから」

「うんっ、百合乃さん可愛くてサイコーだったよ、今度は二週間ほどイギリスに出張するから何かお土産買ってくるよ!」

夜明け前の店の裏口。

両手を下げて前で組み、丁寧にお辞儀して帰りを見送る百合乃に、三十代のスーツ姿の青年は上機嫌で彼女に笑う。

「いいですよ、お仕事上手くいかれて、無事にお帰りくだされば……」

小首を傾げて微笑む百合乃。

「ゆ……百合乃さん、わ、わかりましたあ、頑張ってきてまた必ず百合乃さんと過ごす権利を絶対に競り落としますっ」

何かの感情に震える青年は奇妙な言葉遣いをして、百合乃に手を振りながら、薄い闇の街に飲み込まれていく。

「ふう……」

振り返す手を上げたままのため息。

「どうしたのよ？ 本日のナンバーワンがため息をついちゃって？」
「えっ？」

そこに立っていたのは崎原みなみだ。
首を隠すくらいの黒髪のショートカット、ドングリ目の可愛らしい印象の強い同僚である。

「みなみさん……」

「今日のトップは自信があったのに！ って、楓も悔しがってたわよ、でも今日はみんなスゴかったね……で、その中でもトップの百合乃さんが一体どうしたのよ？」

みなみもこの裏口まで客を見送ったのだろう。

別段、決まりではないからプリンセスによるが、裏口までの見送りは結構行われていて、その中でもみなみは高い確率でそれをして
いるらしい。

「表情暗いし、お客さんと何かあった？」

人懐っこい瞳を向けてくるみなみ。

みなみは百合乃より一回り以上年下なのだが、こういう姐御肌であり、それがなければ百合乃自体、ここで働いてないかもしれないなかつた。

「いえ……大丈夫です」

「大丈夫じゃないっ、百合乃さんはすぐに顔に出るから解るのっ！」

うつむく百合乃の肩をみなみは両手で掴む。

「何か嫌な事があったら相談に乗るって！ 遠慮しないで言ってよ」

真顔のみなみが細めた瞳を合わせると、

「私が……私がいけなかったんです」

百合乃は少しずつ唇を噛み締め、涙を流してすすり泣き始めた。

続く

第68話「また泣かしちゃったあ!？」

「幸四郎!」

「えっ?」

夜明けの陽射しが差し込む事務所。

仕事終わりのミーティングに行こうと椅子から腰を上げた幸四郎は突如、名前を呼ばれ棒立ちになる。

「みなみちゃん?」

「なあにが……みなみちゃんよ、百合乃さんに酷い事を言ったくせにっ!」

ただ事ではないと、今日の売り上げを計算していた高音が立ち上がるが遅かった、事務所には乾いた音が響く。

「あんたね! 百合乃さんがアンタの為に頑張ってるのに何考えてんのよ!」

みなみは高音を無視して怒鳴り散らす。

「えっ……あっ」

「あっ……じゃないわよ、信じらんない! なんなのその態度!？」

再び手を上げるみなみ。

「止めなさいっ! 百合乃さんがどうにかしたんですか、みなみさん、訳を話なさい、訳を!」

高音が幸四郎とみなみの間に立つ。

「どうしたあ？ スゴい声聞こえたぞ？ ミーティング無いなら帰ってもいいのかよ？」

睨み合う高音とみなみ、そこに顔を出してきたのは知世だ。

「良いところにきた、聞いてよ知世、幸四郎がね！」

素直に高音に話すのがはばかれたのか、みなみは知世に向かって振り返るのであった。

「んゝ、なるほど……幸四郎がねゝ」

みなみの話を聞いた知世は腕を組む。

高音も机に手を付き、それを聞いていた。

「百合乃さんがせっかく頑張ったんだから、デートの申し出ぐらい受けてあげればいいのよ！」

「いや……だからさ」

「その意見には納得行きませんね」

熱くなるみなみに返答しようとする幸四郎、だが高音が細い眼鏡のフレームを直しながら、彼女に向かって冷たい視線を送る。

「坊っちゃんのプライベートです、仕事を頑張ったんだから、デー

トに連れていってくれなんていう条件は間尺に合いませんね、矛盾しています」

「なるほどな……わかるよ、わかる、仕事とプライベートが混同すると面倒臭いぜ、ファンにプライベートで声かけられるのは困る時あるからなあ」

高音の言葉に対し知世は頷く。

「何が矛盾しているよ、女の子はねえ、頑張ったご褒美が欲しい事もあるのよ、仕事を頑張って、仕事面でしかお返しが無かったらやる気なくなるわよ！」

「それもそうだ、頑張ったご褒美欲しい時もある、女の子は男の子とは違うんだなあ、これが！」

強く反抗するみなみ。

うんうん、知世は首を縦に振る。

「な……知世さん!？」

「一体、どっちの味方なのよっ!？」

知世の不可解な態度に高音とみなみはまるで示し合わせた様に彼女を睨む。

だが、知世はそれを待っていましたとでも言わんばかりにニヤつく。

「別にどっちがどうでもいいだろ？ そんな話」

「知世!」

みなみはぶっきらぼうに言い放つ知世を思いつき睨むが、

「だってなあ、百合乃と幸四郎がそれで喧嘩しているのならともかく、みなみと高音が言い合ってるのには意味がないしな……こういうのは当人同士の認識の問題で他の人間がどうこういう事じゃねえ、と思うんだけどな」

「ぐっ!?!」

知世の反論に思わず詰まってしまう。

「……た、たしかに」

高音も複雑な表情ながら納得の態度で、ずれてもいないであろう眼鏡を右手の中指で上げている。

「で……でも、デート断られて、それで仕事の後で呼び出されてるなんて言ったら、気の弱い百合乃さんじゃ不安にもなるわよ、公私混同を叱られるんじゃないかと思うわよ」

詰まった状態から、どうにか口を開くみなみだが、

「で? それで幸四郎に文句を言ってきたくれ、って百合乃に頼まれた訳? みなみが何とかして、って言われたのかよ?」

すかさず知世に突っ込まれると、

「そ、そうじゃないよ、結構無理無理に聞き出した、始めは言いたく無さそうだったし……」

みなみは罰の悪そうに顔を逸らす。

「ならこれは……百合乃と幸四郎の問題だな、高音もみなみもいわ

ゆる横槍って奴、男と女に横槍が入ってロクな事にならないのは常識だな」

知世が腕を組みながら、高音とみなみを見た。

「……ですね、店の事に直接に影響が出ないのであれば、坊っちゃんのパライベートを私は尊重します」

「ま、まあね、でも……百合乃さん、スッゴク落ち込んでるんだからね」

知世の言葉に、高音は無理矢理に冷静さを保ち、みなみはまだ半分納得はいかなそうな、互いに複雑ながらも、口論の鞘は収めた様子だ。

「と、言う訳で……」

知世は視線を幸四郎に向ける。

「ありがとう、知世ちゃん……」

みなみと高音に黙らされてしまった様子の幸四郎は案外に明るい笑みを知世に見せ、

「みなみちゃん、後で来るように百合乃さんを呼び出したのは叱る為じゃない、でも誤解させる様な言い方をしたのは俺が悪かったからね、百合乃さんの誤解を解いてくる」

みなみに告げると、事務所のドアを開けた。

「坊っちゃん、ミーティングは？ 今日止めておきますか？」

「そんなにかからないです、みんなにはいつもより15分遅れるって伝えておいてください」

声をかけた高音にそう返事して、幸四郎は廊下に駆け出していくのであった。

「あの様子じゃ、百合乃には悪いようにはならないんじゃないかな？」

「多分ね、どうやら私の暴走だったかな？ ごめんね、高音さん」

「まったくです、でも貴女が謝る相手は坊っちゃんにですよ」

「そうだね、後で謝らなきゃ……」

幸四郎が立ち去った後の事務室。

三人はそれぞれ言葉を交わす。

「しかし、百合乃も大人しい振りしてやるよな、幸四郎と幾つ離れてると思ってんだよ？ 頑張るなあ」

腰に手を当て、ほほえましく笑う知世。

「百合乃さんに年齢なんて関係ないんじゃない？ スッゴく可愛いもん」

みなみはそう答えてから、意味深な笑みで知世を見据える。

「それより知世は幸四郎と気が合うみたいだけど、いいの？ 百合

乃さんとデートさしちゃって？」

「……なっ？ あたしが幸四郎と！？」

みなみの思わぬ奇襲に知世は赤面する。

「そう言えば、知世さんは坊っちゃんが個人的にスカウトしてきたんですよ、随分と二人で仲良くされたみたいですが、ボヤボヤしてたら、百合乃さんに取りられちゃいますよ」

「ば、ばっ！ あたしが百合乃に負ける訳……ち、ちがっ」

「あゝっ、そうなんだあ！？ 知世は幸四郎を信じてるんだあ、健気、健気」

畳み掛けた高音に、思わず答えてしまった知世、みなみは拍手する。

「みなみーい、アタシだって知ってんだぞ、幸四郎との秘密の営業練習、とやら結構頻繁らしいじゃねえかよ！ 最近は恋音を誘わずに昼間っから二人つきりでしっぽりと……」

「あゝ、あゝ、あゝ、あれ、あれはねえ……まだ経験があ……」

真っ赤になりながらの知世の逆襲。

みなみも耳まで真っ赤になる。

「まったく……坊っちゃんにも困ったものです」

真っ赤になりながら、喧々囂々に言い合いを始めた知世とみなみを見ながら、高音は右手で顔を覆いながらため息を付いたのであった。

「百合乃さん」

ミーティングの終わった後、みなみは百合乃に声をかける。

「はい」

振り返った百合乃。

彼女の頬には涙の跡が見えるが、先ほどまでとは違う安堵が感じられる。

「幸四郎……あれから何か言ってきた？」

「ええ……」

みなみの問いに対して、百合乃は嬉しそうにコクリと頷く。

「プリンセスとプライベートはキッチンと分けてほしいから、売り上げナンバーワンのご褒美でデートは出来ないけど……」

「出来ないけど……？」

説明が止まる百合乃。

みなみが反芻して先を訊くと、百合乃は涙声になりながら、

「出来ないけど……プライベートで私とのデートはしたいから、ってデートに誘ってくれました」

と、数十分前とはまったく違う涙を浮かべた感情を見せた。

「そうかぁ、良かった……デート楽しんでね」

そう百合乃を祝福しながらも、みなみは高音に言われた時はそうしなければ、と思ったのだが、暴走し頬を叩いた事を謝るのは止めようと決めたのだった。

続く

第69話「小悪魔のちゃっかり微笑み!？」

「幸四郎さん、おはようございます」

午前11時。

新大空町駅から、急行で2つ目の駅前で待ち合わせた百合乃はやってきた幸四郎に笑顔を見せた。

いよいよ本格的な暑さに百合乃は白いワンピースに、ピンクの薄手のカーディガン。

「おはようございます、早いなあ、一本前の電車でした?」

「タクシーで来ちゃいました、実は支度に時間がかっちゃって……」

挨拶を交わす二人。

今日は定休日で今夜は空いているが、今朝は朝まで仕事だった。同じ寮に住んでいるのだから、一緒にここに来れば良いのだが、幸四郎は済ませなければいけない仕事があつて、別々に出たのである。

「じゃ……まずは周りの店を観てみます? この駅ビル大きいですから、結構店があるらしいですよ」

「ええ……」

幸四郎が駅ビルを指差すと、百合乃は微笑み、二人は並んで歩きだした。

「まずはウィンドウショッピングか……」

フライドチキンチェーン店のシンボルマークとなっている人物像の影から、知世が姿を現す。

「まあ……よくあるオープンングなんじゃない？」

みなみが知世に並ぶ。

「あんまり近づいたらマズいですよ、ただでさえ、こんなにベタな事をしてるんですから……」

二人に心配そうに声をかけるのは恋音だ。

「何言ってるんだよ、たまたま、たまたま、あたしとみなみとお前で遊びに来ていたの！　そこにあの二人がデートしていただけ！」

「たまたまだったら、尾行はしないですよね？」

力説する知世だが、ツツコミを入れる恋音。

「違う、違う……尾行じゃないよ、あたし達は見かけて話かけようとしたけど追いつかないだけ」

「そう、それっ、追いつかないだけなんだ」

「脚が遅い人なんですか……何か近づけない後ろめたさがあるんですか？」

助け船を出すには出したが、ハチャメチャなみなみの言い訳、それに同意する知世。

それに対し結構、冷徹な恋音であった。

「似合いそうですよ」

「……そんなあ、私には若すぎますよ」

「そうかな、百合乃さんにはいいと思いますよ」

「あ、ありがとうございます……幸四郎さんにそう言ってもらえると、すごく嬉しいです」

ウィンドウショッピングの会話に頬を赤らめる百合乃。

『本当に箱入り……って感じの可愛いお姉さんだよな……お客さんの人気も上がるよなあ、そんな人にこんなセリフ言われて嬉しくない男はいないって』

百合乃の仕草に思わず顔をニヤつかせてしまう幸四郎。

ポーカーフフェイスや気の効いた笑みを浮かべられる人間ではない。

「もしかして……わ、笑っていられますか？」

赤面したまま、百合乃が訊く。

「あ……その……」

しまった、とは思いつつも、女性の言葉ににやけてしまった失礼さに嘘を重ねる気にもならず、

「いえ……オレも百合乃さんにそんな言葉を言われて舞い上がっち

やった嬉し笑いです、すいません」

そう正直に返答して謝罪すると、百合乃は一瞬、ボーッととなり、真っ赤な頬を両手で覆う。

「う、嬉しい……ですか？ あ、あの……な、な、とにかく嬉しいです」

「……次のお店、いきましようか？」

「え……はいっ」

怒らせた訳ではないと安心した笑顔を幸四郎が浮かべると、百合乃は微笑んで頷き、二人は自然と手を取って次のショップに歩き始めた。

「見た目は完全に恋人ですね」

「ああ……」

「ええ……」

あっさり言う恋音に頷く知世とみなみ。

「気になるのは解りますがついていっても、きっと不機嫌になられるだけですよ、あの二人、すごく相性よさそうですし……」

「……」

「……」

恋音の言葉に何も言い返せない知世とみなみ。

「ほら、今度またお二人がそれぞれオーナーをデートにお誘いすれば良いじゃないですか、きっとオーケーしてくれますよ」

優しげ美少女の微笑。

少しの間が空き……

「……そうだね、私は今回の事はちょっと関わりがあったから気になっただけなんだから、もうここまで見送れば、べ……別にもうきにならないし」

みなみが腕を組み少しうわずる声で答えると、

「あ、あたしだって興味本位だっ、デートだって……別に……まあ、少しアイツをつれ回してやりたいから今度誘うかも知れないけどな」

知世も腰に手を当てて、頬を膨らます。

「じゃ、見てもつままない尾行は止めて、焼肉の食べ放題にでもいきませんか？ オススメのいいお店がこの近くにあるんです」

「そうね、今日は色気よりなんとやら！」

「仕事も無いから多少のぼっこり覚悟だぜ！」

ウフフと笑った恋音の提案に二人は何かを吹っ切った様にハイテンションで答え、三人は幸四郎や百合乃のいる駅ビルと反対方向に歩き出す。

「知世、あんた今度幸四郎をつれ回してやりたい、って言ってたけど、いつ誘うつもり？」

「あ？ もちろん、次の休みの日だよ」

歩き出して少しして、みなみが訊くと、当然の様に答える知世。

「あたしも今回の百合乃さんのデートをセッティングしてあげたお礼を幸四郎には果たしてもらわないと、あたしも次の休みにアイツを誘いたいんだけど……譲ってもらえない？」

そう言い、みなみが不敵な顔をする、

「おもしれえや、誘えばいいじゃん、なんなら一緒に誘う？ どっちを選ぶかをアイツに任せて」

知世も似たような表情で返す。

「へえ、あたしは別にこだわらないけど、そういう物言いは好きじゃないんだけど……良いわよ」

「決まりだな、じゃあ……明日一緒に誘うか」

何故か唐突に闘志を燃やし始め見合う二人。

すわ、幸四郎を賭けた新たなバトルの予感だが、それはまた、突然に終わりを告げる。

「次のお休みはオーナーは私と一緒にホテルバイキングに行く約束

があるんですう、ごめんなさい」

振り返り、申し訳なさに舌を出す恋音がそこにはいたのだった。

続く

第70話 「意外な所で意外な事があるもんだ」

「はぁ……はぁ……」

行為の後の激しい息を整えながら、自分の胸板に頬を寄せるようにして身体を預けてきた百合乃の頭に幸四郎は腕を回す。

「幸四郎さん……」

「百合乃さん、可愛い」

互いに生まれたままの姿だ。

男子の情を嫌でもほだされてしまう百合乃の完成された魅惑的な身体の感触を全身に味わう。

「百合乃……まだまだしたい」

「あっ……」

我慢しきれない様子で百合乃の豊かな胸に手を移す幸四郎。

「また……するよ……一回じゃとても我慢しきれないよ」

「ああんっ……幸四郎さんっ、だ、だめえ」

身体を反転させられ、再開される行為に百合乃は言葉は拒絶しながらも、甘い期待の声を上げていた。

「今ごろあのオバハン……一回り近く下の子供相手に……シヨタコ
ンって言うのかよ!? きっとそうに違いない!」

「言わないですよ、いいじゃないですか、時間からいってデートの
夜なんですから……お互い子供の訳じゃないんだし」

香ばしい煙を上げた焼肉を裏返しながら唇を噛む知世。

そんな彼女に恋音は苦笑し、焼けた焼肉を口に運んでいく。

時間はもう夜だ。

みなみ、知世、恋音の3人組は百合乃と幸四郎の追跡を諦めた後、
カラオケとショッピングで時間を潰し、夕食となっていた。

「それにしても……今日の一日は一体なんだったのかしら、幸四郎
と百合乃さんのデートをつけようとしたり、結局は遊び回っただけ
だしな」

焼肉を野菜で巻きながらみなみはため息をつくが、

「無造作に毎日をごすのは良くないですけど、たまには意味の無
い一日を過ごすのも逆に意味があるんじゃないですか? 少なくとも
も私はお二人と遊べて楽しかったです」

恋音は美味しそうに焼肉を食べると、二人を見てニッコリと笑う。

「まあ、いいか……カラオケはなりに燃えたし、ショッピングもし
たからな、二人をつけてたって、どうせ見せ付けられて腹が立つく
らいくらいだろうし」

自分を納得させる様に、頭の後ろに手を回した知世が席の背もた
れに身体を預ける。

「知世ったら、結局はヤキモチじゃん!？」

焼肉用レタスを平らげたみなみは親指を舐めながらツツコミを入れるが、

「ち……ちが、幸四郎は……あ、その、そうだ、みなみはどうなんだよ？ お前だって幸四郎を誘おうとしてたろ？」

思わぬ知世の反撃にみなみも赤面してしまう。

「いやあ、それは……まあ幸四郎は誘いやすいというか……そう、こういう仕事をしてると逆にプライベートでは異性にはなかなか会わないのよねえ？」

「そう、そうだよな？ だから遊び相手が少ないんだよな？」

「そうそう」

何かの妥協点を見つけたように赤面しあう知世とみなみ。

「まったく、二人とも可愛いんですから……」

肩をすくめる恋音。

そんな三人の前に新しい皿が追加される。

見るからに霜降りの入った見事な肉質の牛肉。

「誰か頼んだ？ 高そうなのいったね？」

「いや、あたしはもう頼んでねえよ」

「私の食べる量でこんな良いお肉頼んだら、結構な金額になりますよ」

三人は顔を見合わせてから、そのお肉を持ってきた制服の青年を

揃って見上げる。

三人の美少女の視線を受けた二十代前半の純朴そうな短髪の青年は頬を赤らめてペコリと頭を下げた。

「あの……みなみさんのファンなんで良かったら……サービスです」
「えっ!？」

意外な展開にみなみは呆気に取られる。

「……じゃあ、ホントに良かったら食べて下さい」

青年はもう一度、頭を下げてから厨房の方に逃げるように立ち去っていく。

「……なに？」

「言ってたじゃん、お前のファンなんだろう？」

「ファンって……もしかしてお客さん!？」

みなみは青年の立ち去った厨房の方を見ながら驚きの声を上げた。

「みなみ、有名人だなあ……覚えてるか？ あの様子じゃあ、相当高値で落札してくれただろうに」

「んー、あんまり……実を言えば、全然」

茶化して訊く知世。

みなみは申し訳なさに頭を掻く。

「もう仕事を始めて経ちますからね、みんなは覚えてないですよね」

？ とりあえずは感謝して頂きましょうよ、帰りに声くらいかけてあげたらどうですか？」

「サインくらい書いてやれよ！」

「アイドルじゃあるまいし、サインなんてある訳無いでしょうが！
？ まあ、機会があれば、声くらいはかけるけど」

恋音と知世に複雑な表情を見せながらも、みなみはトングで肉を摘んで網に乗せる。

高級霜降り肉の豊富な脂が焼かれパチンと網の上で音を立てた。

「ごめんなさい……ちゃんとしたお店見つけれなくて……」

「いいんですよ、こんな時間なんですから」

テーブル席の正面で百合乃は謝る幸四郎に屈託のない笑顔を見せる。

午前零時七分。

ラーメンチェーン店の比較的広めの店内は客の姿はまばらだ。

「少し……ホテルに居すぎましたよね？」

「あははは……百合乃さんが可愛すぎて」

互いに苦笑する二人。

「まあ、幸四郎さんったら……でも、嬉しいです……本当にお疲れ様でした」

照れ笑いでペロツと舌を出す百合乃。

「…………え…………ええ」

その可愛らしさに、もう少しホテルに居ても良かった、などと思
い始めてしまうのだった。

続く

第71話「楓と一緒」

「今日のベストオークション賞は愛日ちゃんでした、おめでとう！」
「いやいや……ありがとうございます」

出勤者全員を集めての閉店後のミーティング。

幸四郎に本日のトップ賞の功労の金一封を貰った愛日は後ろ頭を搔いて照れてみせる。

「今日は愛日ちゃんかぁ、昨日と一昨日が楓ちゃんだったけど、3連勝とはいかなかったね？　なかなか3連勝ならないね」

まゆりが横に並ぶ楓にウィンクする。

冷やかし半分かも知れないが、あまり悪辣な言い方ではない。

「まあ……仕方ないですわよ、お客様の周りもありますしね」

腕を組んだまま、素っ気なく答える楓。

「ちなみに楓ちゃんは第二位だからね」

プライドの高い楓を気遣うつもりで幸四郎が補足したが、

「まあ、上出来ですわ……まあ二位には何も出ないんですけど？
それなら何位でも一緒ですわね」

楓は二位になった事をさして気にしていないかの様に、笑顔すら見せたのであった。

「どうしちゃったんでしょねえ……」

朝日が差し込む事務室で幸四郎は腰のチェーンに繋がった黒いサイドバッグを持つ。

中には一日の売上金が入っている。

「何がですか？」

高音も同じように腰のベルトに繋がったサイドバッグを更にハンドバッグに入れて肩から架けた。

こちらは伝票類だけ。

いわゆる強盗対策だ。

プリンセスオークションでは毎日の売り上げを溜めずに金融機関の貸金庫にいらしてしまうのだが、一日分と言っても、かなりの金額になり、犯罪の標的に十分になりえる。

もちろん新大空町は政府の管理が行き届き、治安はかなりしっかりしているのだが、沢山の多額の金額の動く風俗店がある以上、その危険は消えず、そういう事件は聞くのだ。

二人の人間で、どちらも現金が入っているであろう同じデザインのハンドバッグを持っているのはささやかな防犯なのである。

「楓ちゃんです、今日はトップを逃したのに何だか淡泊な印象だったんですよ、前は他の娘にトップをとられた時はもっと悔しがって

たと思うんですよ」

「ああ……」

幸四郎が答えると当然、ミーティングに出ていた高音は思い当たる様子で相槌を打つ。

「何か他に気にかかる事でもあるのか、それとも……この女の子の中では突出した成績は難しいと思います始めたんですかね？」

「……まさか、まだ坊っちゃん御堂楓という人が解ってない」

疑問を呈した幸四郎に対して、高音は意味深な笑みを浮かべた。

「彼女は今、一流と言われる女優もモデルも見飽きてきた業界のトップクラスの男たちが自分の女性にしようと躍起になった程の逸材なんです……だから」

「だから？」

「彼女は美の関わる事において、誰かに遅れをとる事を極端に嫌います」

「プライドの高いのは解りますよ」

幸四郎も相槌を打つ。

それは百も承知の事だ、だからこそ最近の楓の態度が気になるのである。

「だったら良いじゃないですか……彼女が執着する事を諦める訳が無い、それはそのうち解る事です……少なくとも私は彼女が他のプリンセスに気後れしてトップを諦めたとは思えません」

高音はそう言うと、ドアを開けて外の様子を伺ってから、幸四郎を軽く促すのだった。

「行きませんか？ って、私を誘う訳！？」

「ええ、いけなかったかしら？」

突然の誘い。

思わず声を上げてしまうみなみに似合わない大きめのスポーツバックを持った楓は肩を竦める。

「なんで私？」

「暇そうな方があまり居ませんでしたから、今日は特別ですわ、あなたも興味ない訳では無いでしょう？ それに休日には自らを磨く必要があなたにはあるんじゃないの？」

そう言いながら、携帯を取り出す楓。

「誘う手前、あと10分で準備出来るなら、少しくらいは料金を出して差し上げますわよ？」

「10分！？ 私、今起きた所！」

「あと9分56秒」

楓はみなみの抗議をまったく受け入れない。

「わ、わかったわよ、わかったから……そのおんぼろドアを閉めて、9分30秒待ってなさいよ！」

みなみはそう怒鳴り付けると、いそいそとパジャマを脱ぎはじめるのだった。

「どこかいくの？」

黒の袖無しハイネックにロングブーツ、紺のショートスカート姿の楓。

水色のカジュアルシャツに白のショートパンツのみなみ。

共通するのは大きめのスポーツバック。

青のジャージ姿のまゆりは二人が揃って出かける姿に声をかけた。足元にはタツノリが楓とみなみを見上げる。

「ええ……少しね、まゆりさんのその格好はジョギング？」

「うん、欠かさず毎日やってるよ！ タツノリの散歩も兼ねてね」

「立派ですわ……私も頑張らなくてはね」

まゆりと言葉を交わし、楓は足元のタツノリを軽く撫でてから歩き出す。

「うん、楓ちゃんも用事、何だかわからないけど頑張ってるね」

まゆりは歩いていく楓に手を振ってから、

「二人で出かけるなんて珍しいね、何かあんの？ どこに行くの？」

と、後ろをついていこうとしたみなみに耳打ちしてくる。

「ん」

訊かれたみなみは少し考えてから……

「多分、まゆりのやってる事と大して変わらないんじゃない？」

そう答えて、まゆりに手を振って楓に続いて歩いていくのだった。

続く

第72話「楓、真っ赤！」

「ふあああああっ！」

ジャージ姿のみなみは声を上げ、大きく息を吐きながら、ランニングマシンのバーに手をつく。

「はあっ、はあっ」

荒い息と滴る汗。

マシンから降りると中腰になり息を整える。

「はあはあ……か、楓、みた！？ い、今からでも国内なら通用するスピードが出ちゃった……わよ」

「見てませんでしたわ」

みなみは得意げにピースサインを向けるが、横のマシンで淡々と走り続ける楓は冷ややかに返事する。

「こういった運動は極端な強弱を避けて、ある程度の時間をこなさなければ効果が薄いですわよ」

楓もジャージにスポーツシューズである。

「言ってる意味はわかるんだけどね、スピードメーター見てたら……つい」

「おバカさん」

フイと横を向き、自分のペースで走り続ける楓。

「なにをーお、今度は別のをやるから」

みなみは腰に手を当てて膨れると、次は別のウェイトトレーニングのマシンに歩み寄っていく。

「こゝゆゝの燃えちゃう、目指せスクワットプレス300?！」

「あまり無理して腰とか痛めたら、かえってオーナーに迷惑がかかるでしょうに、お止めなさいな」

「平気、平気」

「あれだけの勢いで走っておいて……まったく、どうやらあなたにはこういうトレーニングは必要ないようですわね」

ランニングマシンで全力疾走したかと思えば、すぐにスクワットプレスを始めるみなみに、楓は呆れと驚き半々の顔をするのだった。

「ふう……」

汗をタオルで拭きながら息をつく楓。

「それにしても……よく続きますわね」

視線の先にはバイクマシンを漕ぐみなみ。

「だってさ、こんなにたくさんトレーニングマシンがあるジムなんて、アンタがいなきゃ入れないんだからさ、目についたのはやってみたいじゃない」

「そんなに遠くないのですから会員になれば宜しいのですわ……わたくしは入店を決めてすぐにジムを探しましたわよ、駅を2つ行きますけど近隣じゃ、ここがいいですわよ」

「お金無い！」

楓の薦めにみなみは力一杯にペダルを漕ぎながら即答した。

「無い……って、それはここは設備も良いですから、入会金とかも高いですけど、あなたもなりに貰ってるんでしょう？ 店での人気も悪くないレベルだったでしょうに？」

楓は眉をしかめる。

開店して、一ヶ月以上が経つ。

店での落札金額が人気だとするなら、今は楓がトップ。

みなみは中堅どころといったところだが、ホームページでの客からのリピートの希望のメッセージの多さは楓にも迫る勢いがあり、有望株といった感じだ。

「いやあ……まあ、色々あるからねえ、終わり！」

みなみは玉のような汗を顔中にかきながら、バイクトレーニングマシンをピヨンと降りた。

「まあ、気が進まないのなら、いいですけど……わたくしとしても貴女みたいな騒がしい方が近くでトレーニングしていると調子狂いますわ、思わずオーバートレーニングしてしまいそうになります」

「悪かったわね、で？ トレーニングに終わり？」

ため息をつく楓。

みなみは邪険にはないが目を細め、スポーツドリンクのペットボトルに口をつける。

「いえ……このジムは設備が良いと言ったでしょう？ シャワーを浴びたら、スイミングですわ、その後はインストラクターさんに付いてもらってのストレッチもありますわよ」

そう平然と答える楓。

「アンタもいい加減、タフだと思うよ……チクショウ、飛ばし過ぎた」

トレーニングルームで既に一時間以上は過ごした上である。
みなみは苦笑した。

昼過ぎに着いたジムを出たのは午後4時近く。

ジムトレーニングに続くスイミングはゆったりと軽めではあったが、時間をかけての物であった。

みなみもいくらか自由に泳ぎ回った後は楓に付き合い、最後は楓からの申し出で100メートル自由形の競泳で締める事となり、楓の形の良いクロールに対し、パワーストロークのみなみが僅かの差で制する。

「基礎体力任せの方にはかないませんわね」

楓の捨て台詞にみなみは舌を出し、二人はスツカリ疲れ切った身体を先ほどとは違う鏡張りのトレーニングルームで、男性インストラクターの指導のもと、ストレッチでほぐしたのだった。

「まだあんの？ アンタはオリンピックにでも出たいわけ？」

「今度は方向性が違いますわよ、良いからついてきなさいな！」

声を上げたみなみに楓は怒鳴り返し、駅の構内の階段を上がる。

新大空町駅に向かう方面とは逆のホームだ。

「結局、あんたとほぼ一日いる事になりそう……」

「帰ってもかまいませんわよ！？」

「行くわよ、付き合うつもりだったし、アンタがこれから、何をするのかは気になるしさ……」

口を尖らせるみなみ。

「へえ、少しは見倣う気になったんですの？」

階段で立ち止まり、上から勝ち誇った表情で振り返る楓に、

「階段で立ち止まるんじゃないわよ！ そうよ、悪いっての？」

文句を言いながらもそれを認めざるえないみなみなのであった。

着いたのは更に急行で一つ行った新大空町よりも大きい規模の駅だ。

スポーツバックを駅の大型コインロッカーに預け、高級ビル街の一角のビルに入る、みなみは歩き慣れずキョロキョロしてしまい、先を歩く楓に注意されてしまった。

「いらっしやいませ」

受付カウンターには制服をきた女性。

楓は会員カードを出す、どうやら紹介制度があるようで、みなみも一緒にロッカーキーを渡され、脱衣室に通される。

「えっと……ここは温泉かな？」

「はあ？ 違いますわよ、ここはエステサロンですわよ……身体をきちんと引き締め、肌のお手入れもキチンとする、これで今日は一応、終了ですわ」

用意された薄手のバスローブのような格好に着替えながら尋ねるみなみに、楓は肩をすくめて答える。

「一応！？ まだ手の内あるなら教えてほしいんだけどな」

首を傾げるみなみ。

「え……ここを終えたら、最近は野菜料理のコースを出してくれるレストランに行ってますわ、とても美味しいんですわよ、ダイエツト中の女優やアスリートも通うお店です、一応、予約を取ってますが……どうします？　わたくしと食事というのも抵抗あるのではなくて？」

楓は自分から切り出しながらも顔を背ける。

普段は言い合いの多い、みなみとの二人での食事はトレーニングと違い、違和感があるのは否めないのである。

「今日は誘ってくれて……ありがとう」

「え……？」

みなみの意外な返事と微笑み。

その表情に思わず赤面してみなみに振り返ってしまう楓。

「今まで、楓は素がいいからとか言ったり、思ったりしてたけど、ここまでやってたとは正直に驚いたなり、お金がかかるから、なかなか真似は出来ないけど、それとは関係なしにスゴいと思う、やっぱりそこまで徹底しないと安くないお金を払うお客さんの間でナンバーワンにはなれないんだよね」

「え……まあ、まあそうですわよ、殿方はそれほどバカではありません、わたくし達とお客様の関係は普通にお付き合いしている男女とは異なるのですから」

「相手は私たちに会うのにお金がかかるんだもんね」

みなみは頷く。

「そうですわ、見合う物を殿方に与えられなければ相手に自分を選んで頂けません、だから……」

「努力する、楓はそれには多少の出費は当然って事だよね？」

「ええ……出費するしないはともかく多少、素材が良いからって黙っていてはトップには程遠いですわ」

楓は身体に纏ったバスローブの腰紐をキュツと引き締める。

豊かな胸元。

くびれた腰回り。

柔らかなボリユームのヒップから、スラリと伸びた両足。

楓の努力と言葉はその身体が証明していた。

同性から見ても惹かれてしまう身体。

「あたし、がぜん燃えてきたよ……楓みたいな娘がいてくれてよかった」

みなみの微笑みから、何か不敵な笑みに変わる。

「へえ〜？ まさか貴女、わたくしを目標にするおつもり？」

楓も赤面したままではなく、みなみの表情の変化に対し、自信満々の笑みを返す。

「違う……違う」

みなみは首を振ってから楓を見据える。

「……踏み台だって」

「出来る物ならやってみなさいな……いきますわよ」

肩をすくめて、ロッカーを閉めて歩き出す楓。

「楓……」

「なんですのよ？」

「アンタって……赤くなるとスツゴクカワイイ、抱き締めちゃいた
い」

「……んっ」

みなみのまたもやの奇襲攻撃に楓は顔面を再び真っ赤にするのだ
った。

続く

第73話「ピンチですか!？」

「恋音ちゃん……恋音ちゃん……恋音ちゃん……」

男は途切れそうな声で彼女の名前を呼ぶ。

「あっ……スゴいですう、スゴいですう……恋音、もう……もうっ」
「お、俺もっ……恋音ちゃん、可愛すぎっ……あああっ……あうっ
!」

「あふうんんっ!」

恋音の上で細かに動いていた男は大きく身体を震わせると声を上げ、恋音もそれに反応した様に大声を上げて彼を抱き締めた。

「ふう、ふう、気持ち良かったあ、恋音ちゃんサイコーだよ、溜まっていたのスッキリだよ」

「はあ、はあ、ふふっ……ちよつとため過ぎです」

生まれたままの姿で隣同士に寝転がり、男と恋音はギュッと手を握りあった。

「いやあ、やっぱり恋音ちゃんだね! この間の佐久耶ちゃんもよか……」

「佐久耶ちゃんが……何ですか?」

恋音はスツとシーツを胸元に寄せて目を細める。

「イヤイヤイヤ……あ、そうだ、そうだ……恋音ちゃん、はい、これはチップだよ、すごく可愛かった」

失言に案外鋭い反応をした恋音に焦り、全裸の男は慌てて足元に脱ぎ捨てられた上着から財布を取出し、一万円札を出した。

「大丈夫ですよ、今チップを貰うよりも今度、佐久耶ちゃんよりも私のオークションに参加してくれた方が嬉しいですから」

「大丈夫……大丈夫だって、俺はもう恋音ちゃん一筋だよ、だからチップは安心して受け取って！」

少し恋音が膨れてみせると、男は苦笑する。

「……もうホントですよ？　じゃあ……頂いちゃいますね」

恋音はクスリと笑みを見せて、左手でシーツを口元に当てながら右手で差し出されたチップを受け取るのであった。

「じゃ……恋音ちゃん、またね」

「はい、また」

スーツを着て部屋を出ていく男を白のショートワンピース姿の恋音は見送る。

「また絶対に競り落とすからね、ホームページで見たけど次はコスプレパーティーウィークだからね」

「……あ……そうでしたね、そうでした」

男の言葉に恋音は思い出した様に手を合わせた。

「競り落とせばコスプレをリクエスト出来るらしいからね、覚悟しててね、恋音ちゃん」

笑顔を見せる男に、

「もうあんまりマニアックなのは困りますう」

恋音は眉をしかめながらも小さく胸の前で手を振るのだった。

「おお……なかなか繁盛しているそうじゃのう！」

「久しぶりです」

「こんにちわ」

午前10時。

店先でカカカと剛毅に笑う老婆に頭を下げる高音と幸四郎。

「連絡した通り来週はコスプレウィークですので、準備の状況を見させてもらいに来ました」

「任せておけ、任せておけ、そちらの女の子のサイズのデータももらっておるからな、万全じゃ……ついてこい」

高音の言葉にコスプレ婆は自信満々に店の中に歩いていく。

コスプレ婆はこの風俗街で長く貸衣裳屋を営み、プリンセスオークションはホームページ作成から衣裳の面倒を見てもらっている。

もちろん、予定しているコスプレウィークでは彼女の協力なしでは成り立たないのである。

「見てみい……」

店先の奥の倉庫には様々な衣裳がかけられていた。

アニメのキャラクターの着るような服から、制服系の定番まで様々だ。

既存の衣裳を借りるつもりでいたのだが、コスプレ婆から、料金は格安にするから新しく作った方がいいと勧められたのだ。

「小さめの娘はサイズが共用できる娘もおるが、百合乃ちゃんとかは上背もあってバストもデカイからのお、結構な数じゃ……しかし、お主の店は本当に素材が良い娘が揃っていて、衣裳を作るのは楽しいぞ」

笑顔のコスプレ婆。

既存の衣裳でなく、格安にも関わらず、新たに衣裳を仕立て直すのも、彼女がプリンセスオークションのプリンセス達のルックスを特別に気に入っているからであろう事は想像に堅くなかった。

「これは凄いですね、みんなのサイズを揃えると数も普通じゃないや」

「仕上げまで終わってるんですか？」

驚く幸四郎に、尋ねる高音。

「いやいや、幾らか細かい所を手縫いでやらないといかん部分があるんじゃが、あと3日あるから間に合わせてみせるわい」

コスプレ婆はそう答えて満足気な顔を見せたのであった。

「いよいよ、今日からコスプレウィークの開始かぁ……夕方には店に運び込まないとな」

3日後の朝、アパートの部屋で幸四郎はそんな事を考えながら、歯磨きをしていた。

昨日は休業日でコスプレウィークの初日は休みのプリンセスも居らず、全員登場である。

『みんなのコスプレ、個人的にも楽しみなんだよな』

そんな事を思いながら歯ブラシをくわえていると……

「坊っちゃん！」

「んんっ？」

突如、安普請のドアが開け放たれ、幸四郎は面食らう。

「た……たひゃねさん？」

そこに立っているのは休業日だったのに、レディーススーツ姿の

高音だ。

急いできたのか、少し息が上がっている。

歯ブラシを啞えたままで声を上げた幸四郎に、

「大変です、大崎さん……その貸衣裳屋さんのお婆さんが倒れて、病院に運ばれたそうです」

高音はそう大声で言ったのである。

続く

第74話「今はキスだけで……」

「ゴメン……手伝わせる事になるなんて」

「良いですよ、興味あったんですよ……今日は無理でも今度詳しく色々と教わりたいですね」

謝る幸四郎に爽やかな笑顔を菜ノ花は見せた。

臨時休業の札が店先に張られた店内の奥、畳の間で脚を崩した菜ノ花の膝の上に仕上げを待つ衣裳が乗せられている。

色々と派手な衣裳がかけられているが、菜ノ花自身は針仕事をするせいか、Tシャツにパーカー、そしてショートパンツの大分ラフな姿だ。

「まさか菜ノ花ちゃんが仕立て出来るなんて思わなかったよ、それもかなり手慣れた感じで……」

「ふふふっ、ミステリアスって事で特に理由は聞かないで下さい」

驚く幸四郎に、菜ノ花は肩をすくめる。

黒髪セミロング。

額を上げたカチューシャから幾筋かの髪を垂らした前髪。

フレームの細目の眼鏡（度なし）に、丸めの瞳。

鼻筋から輪郭、唇に特に高い薄いは無いが、高いレベルで整った美貌、可愛らしさを残した顔立ち。

160?を少し越えた身長にモデル並に細い腰回りから、スラリと伸びた両足、ウエストの細さがキチンと出た胸元をより強調させている。

『菜ノ花ちゃんはやっぱり可愛いし……落ち着いてて頼りになるよな』

今回の一件。

緊急入院したコスプレ婆の容態は数日安静にしていれば大丈夫と医者に教えられ、その点は安心したが、ベッドに寝たコスプレ婆がまだ今日からコスプレウィークに使う衣裳の服の仕上げが一部、終わっていないと言い出し、ベッドを出ようとする為、その場で知り合いにコスプレではないが、服を取り扱う業者がいるから任せてくれ、と言い繕って、落ち着かせてしまったのである。

そこはそれで良いと同伴した高音も納得したが、それは嘘であり、どうにかしないといけない。

考えた挙げ句、店の女子達にもダメ元でそういう知り合いがいな
いか、と聞いてみた所……

「あんまり難しいのは出来ませんけど……今日一日、どうにかなる
位の仕上げなら……」

そう言いながら、菜ノ花が立候補してくれたのであった。

「上手いもんだね……」 「ほとんどが完成してるからですよ、私は
ほんの少し手を入れてるだけですから、簡単な作業です」

出来上がりの服をハンガーにかけて、服飾用のビニールを被せ、
幸四郎が言うと、菜ノ花は謙遜するように首を振りながら、カラフルな衣裳の袖を丁寧に縫いあわせていく。

その姿に格好はラフだが、幸四郎は何か昔の良き日本女性を感じてしまう。

菜ノ花が綺麗な黒髪だからかもしれないし、普段からの彼女の落ち着いた性格もあるのかもしれない、出来るのなら、その光景を午前中いっぱい眺めていたい気持ちになるのだった。

「ご苦労様……あと一枚だね、かなりの量をやらせちゃってゴメンね」

「午前中には終わるかな？　とか思いましたけど、無理でした……すいません」

残り一枚を手にとると菜ノ花は肩をすくめて笑う。

素人の幸四郎が言うのも何だが、菜ノ花の手際は良かった様に見えたが午前8時30分から始めた仕上げの作業は結局は午後2時近くまでかかってしまっていた。

その間、幸四郎も出来る事は手伝っていたが、作業の大半は菜ノ花による物である。

「……これは比較的簡単な仕立て……はい、完了しましたよ」

十分ほどして、菜ノ花は衣裳を渡した。

これで終了である。

「終わったあ……どれも一応、見てみたけど今日明日着るには問題

はまったく無さそうだよ！　ありがとう菜ノ花ちゃん、もちろん、この作業時間は時給に換算しておくからね……本当に恩に切るよ」

開店以来、初のイベントの成否がかかっていた事もあり、幸四郎は笑顔で菜ノ花の手を握る。

「ご褒美くれます？」

「ご褒美……ああ、いいよ、今日の感謝は相当だよ、何でも言っ
て！」

眼鏡越しの菜ノ花の上目遣い。

その可愛さも手伝って幸四郎が頷くと、

「じゃあ……キス」

菜ノ花は目をつぶった。

「え？　キ……キス？」

「はい……もつと、って言いたいけど……帰って少し寝ないとせっ
かくのコスプレウィーク初日に寝ちゃいそうですからね」

狼狽えた幸四郎に目を閉じたままで答える菜ノ花。

「菜ノ花ちゃん……」

幸四郎はふと笑みを浮かべると、菜ノ花の唇に少し強めに口づけ
し、

「じゃあ……続きはまた今度ね」

と、優しく耳元で囁くのだった。

「コスプレウィークはボクの物なのです！」

「すごい自信だね」

開店前の舞台袖、いつもは巫女服の佐久耶もそれに苦笑する恋音も白いTシャツにショートパンツのお揃いである。

今日はコスプレがメイン、舞台上がりオークションで競り落とした客にその娘のコスプレを決めてもらい着替えて再登場、お部屋にという寸法なので、始めは特にニュートラルな感じとなったのだ。

「ボクとしては、ニュートラルなら全裸でも構わなかったのです」

「恥ずかしすぎますう」

胸を張る佐久耶に恋音は真っ赤になる。

「ならば……水着、ボクはビキニに定評があったのです！」

「ううう……私もスクール水着には定評があったよ、ある層の方々には」

立派なバストを張る佐久耶に恋音は無駄な抵抗を試みるのだった。

「佐久耶ちゃん、そろそろ……一番手準備してね、開店するよ、今日は開店待ちのお客さんがいつもと何か違うよ」

そこにメイド姿のくるみが顔を出し準備を促す。

「よっしゃあ、なのです！ コスプレはボクの専売特許である事を世に知らしめるのですっ！」

佐久耶は気合い一閃とばかりに膝をバシッと叩き立ち上がる。
ここにプリンセスオークション初のイベント、コスプレウィークがスタートしたのだった。

続く

第75話「コスプレウィーク開幕！ 佐久耶VS高音」

「プリンセス佐久耶と一緒に時間を過ごす権利を落札されたのは31番のお客様ですっ！」

「おめでとうなのです、あなたは運がいいのです」

コスプレウィークという事で、婦警風の格好をし、マイクを手に持った高音がテンションの高い進行をすると、一番手から白熱した競りをニッコリとして観ていた佐久耶は高音のマイクを奪い、舞台から薄暗いフロアーを指差す。

詳細な人数は確認できないが、フロアーは既に満員で広さを確保する為、今日はサービスのフライドポテトやドリンクが乗っているテーブルを一つ減らしているくらいだ。

「返しなさいっ！ ええっと、では31番のお客様、モニターを御覧ください、佐久耶ちゃん用のコスプレが表示されてますので、この中から佐久耶ちゃんに着てほしい物をお選び下さい！ さあ……シンキングタイム！」

高音はマイクを佐久耶から奪い返し、大型モニターを観る様に促す。

そこには佐久耶用に用意されたコスプレが明記されている。種類はかなりの物で、二十種類に近い。

コスプレ婆が新作を拵えた物と在庫で佐久耶に合う物を用意したのだ。

「さあ……31番のお客様……そろそろ、シンキングタイムは終わ

りですよ、この中から……あなたのプリンセス、佐久耶ちゃんに来てもらいたい服をズバリ選んでくださいっ!」

高音が煽ると、

「じゃあ……ナース!」

31番のランプが点灯し若い男の声が響く。

オオオッ……

周りの客も沸く。

「佐久耶ちゃんの巨乳のナースは反則」

「見てえ……」

「凄そうだ」

そんな声が上がる中、佐久耶に一旦、裏に下がった高音からナース服が手渡される。

「では……一度、裏に下がって……」

「必要無しなのです、ボクはここで着替えるからいいのです」

佐久耶の言葉にフロアーから歓声が上がった。

「さ……佐久耶さんっ、それは!??」

打ち合せに無い暴走に本気で焦る高音、だが佐久耶はまるで気にしない。

「サービスなのです、こういう時でしか出来ない事なのです、皆さんもそう思うのです」

「そうだ！ 高音ちゃん、堅い事言うな」

「佐久耶ちゃんが言うんだから良いだろ」

「競り落とせなかったんだからそれくらい見せろ」

「生着替えキボンヌ」

佐久耶の言葉に客達は口々に乗る。

「こ、ここはストリップ劇場じゃありません！ ダメったら、ダメです！」

だが、高音は譲らない、佐久耶と客に圧されながらも必死に抵抗する。

「佐久耶さん、こら、こんなサービスありません……止めなさい！」

佐久耶を止めながらも高音の視線は舞台袖の幸四郎を見つめてくる、彼女にしては珍しく明らかに助け船を求めている。

『高音さん！ スゴい所での振りだな……』

流石に迷いたじろいしてしまう。

予定に無い事を嫌う高音の気持ちも解るが、客を盛り上げた佐久耶の作った勢いもオークションには是非とも捨てがたい。

いきなりの状況、オーナーとしてどちらを取って指示するか？
迷ってしまう。

「幸四郎ちゃん……幸四郎ちゃん」

悩んでいると背後から声をかけられる。

「えっ？」

「えへへ……」

振り返るとそこにはメイド姿のくるみが笑顔を浮かべて、タオルケットを持っていたのだ。

「お客さんの要望はもちろん、高音さんの顔も立てなきゃいけない、経営者っていうのはとても大変なんだ……ねえ！」

バツと豪快に開かれるタオルケット。

「サンキュー、くるみ……なんだかんだで、いつつもワリイな」

幸四郎は笑顔でタオルケットを受け取り、舞台の高音に振り返りざまにそれを放り投げたのだった。

「坊っちゃん……」

飛んできたタオルケットを受け取り、戸惑いの表情を見せる高音。フロアーの客は予想外のタオル投入にオオッと反応する。

「高音さんが何をしようとしなくとも、オーナーからの制止がなけ

れば……ボクは脱いちゃうのです」

タオルを手にもつとも言えない表情を見せる高音に佐久耶はニタリと笑う。

このお膳立ての意味が解った上での言葉と態度。

高音は唇を噛んだ。

「ならば……こちらで勝手にやります」

「うまくやるのです!」

佐久耶は受け取ったナース服を床に置くと、おもむろに今日のお揃いの白のTシャツを両手を脇に回してたくし上げる。

白のブラジャー。

南国の南の島出身のクセに佐久耶の肌はぬけるような白さ。

あくまでもイメージであるが、まるで雪国か、京都の美人だ。

その上、バストは予想以上のボリュームで白のブラにしはみ出し気味に収まっている。

「佐久耶ちゃん、やっぱり巨乳!」

「肌、キレイッ」

「ああ……俺も佐久耶ちゃんにするんだったあ!」

客が沸く。

佐久耶はシャツを脱ぎ捨て、上半身はブラジャーだけになる。

『この娘、ブラのサイズが一つ二つ……小さい……んっ!』

「ブラ……あげちゃいますのです!」

佐久耶がフロントホックを素早く外し、ブラジャーを放り投げた

のと高音がまるで闘牛士のマントを構える様にして、タオルでプルツとふるえる佐久耶の胸元を隠したのはほぼ同時であった。

「惜しいっ」

「一瞬、見えたっ」

「佐久耶タンのブラジャーはどこだ!？」

「高音さん隠すの上手すぎるだろう!」

フロアーの盛り上がりは最高潮に達する。

「高音さん……なかなか上手いのです、ちなみにボクは下も履き替えるのです、お着替えする時は常識なのです」

佐久耶は不敵な笑みを浮かべながらショートパンツを脱ぐ。

客の歓声。

彼女は既に白のショートパンツ一枚だ。

「じゃ……着替えるのです……用意はいいですか」

どこからか別のショーツを取り出す佐久耶。

「……いらっしやい、お客様を悦ばせつつ、見せ過ぎない様にする、私の技を見せて上げましょう」

高音と佐久耶は互いに不敵な笑みを浮かべ合い見合うのだった。

そんな二人、妙に盛り上がるフロアー。

「オレからは丸見えなんだけどね……」

頭を掻く幸四郎。

コスプレウィークの夜は始まったばかりであった。

続く

第76話「頑張る元氣娘」

「はぁーい、白衣のナースなのです！」

白衣のナースに変身した佐久耶はヤンヤンヤの歓声に手を振る。その前には大きめのバスタオルを構えた高音が彼女とは対称的な複雑な表情で汗だくで立つ。

「佐久耶ちゃん、可愛い、オッパイでかかった！」

「チラッと見えちゃったよ、今度は絶対に競り落とすからね！」

「どうもなのです、結構、高音さんにうまく隠されてしまったのです」

手に持ったナースキャップをポンと自分で頭の上に乗せて佐久耶はピースサインをする。

「それでは……皆さん、お待ちかね……」

佐久耶はナース服にしてはやや短めの白のスカートをたくし上げる様にして、両手の中に入れた。

ホールの客の何度目かの沸き上がり。

「なぜか……なぜか……ナース服を完全に着てしまっただけのショーツの履き替えなのです！」

中腰になった佐久耶がスカートの中に回した両手を腿に這わせるように膝まで下降させると、両膝を繋ぐ白いショーツが姿を現す。

「さ、佐久耶たんのパ、パンティー!!」

「み、見えない……脱ぎ方上手すぎ!」

「けしからん、なんてエロ巫女!」

歓声に笑みを見せ、佐久耶はゆっくりと片膝を上げてショーツを……が、そこでタオルが視界を遮る。

「ス……スカート奥の……い、一瞬……」

「高音さんのバカッ!」

「佐久耶ちゃん、前に出てきて!」

悲鳴に近い声。

「高音さん……今のは隠すの早かったのです」

「ギリギリです、プリンセスはストリップなんてしないんです」

「……いろんなプリンセスがいるのです……よ!」

高音と言葉を交わすと佐久耶は片方の足からもショーツを抜き、右手の人差し指に引っ掛けた白いショーツをポーンと暗いホールに放った。

薄暗い中で客達はそれを奪い合い始める。

「こ、こらっ! やり過ぎですっ、過剰な……」

「ゴメンなのです……ボクもそう思うのです」

高音が睨み付けると佐久耶はショーツを破れるくらいに引っ張り合う客を見て苦笑したのだった。

「では……行ってくるのです！」

落札者の若者と腕を組みながら、佐久耶はレジの幸四郎に手を振って、部屋のある二階に上がっていく。

「いってらっしゃい」

手を振り返し、彼女を見送ると、落札金を事務所の金庫にしまい幸四郎は舞台袖に走って戻る。

控えているのは本日二番手のまゆりだ。

「まゆりちゃん……しつかり頼むね」

「あっ……オーナー」

笑顔で振り返る黒髪ショートカットの元気娘。

「観てたよ、凄い熱気だったね……ボクもやっちゃうよ、生着替え！」

「あ、いや……あれは佐久耶ちゃんが自分の判断で始めちゃった事だから、まゆりちゃんまでやる事はないよ、特に下着ポーンはちよつと……」

幸四郎が複雑な笑いを見せると、

「盛り上がってるんだからね、それにコスプレウィークはウチの店の初めてのイベントなんだからさ……ポーンはともかく、着替えはするよ！」

まゆりはガッツポーズをする。

「……そうか、やり過ぎなきゃ舞台を盛り上げるのはアリだからね、後は……まゆりちゃんも元気だからあんまり動き過ぎないようにね、高音さんもタオルケット出すのに結構、神経使ってるみたい」

幸四郎が舞台に視線を送ると、高音はホールの客に大型モニターに映るPVについて説明している。

常連には要らない説明だが、初めての客、そして店には是非とも必要なのだ。

早い話が時間稼ぎ。

最大10人のプリンセスオークションは手早く次から次にオークションをしてしまうと、回転が早すぎて女の子が追いつかなくなってしまうのだ。

初めの頃は高音もその進行はぎこちなかったが、最近では客にはスムーズに見せ、なおかつ店には必要な時間を作る進行の妙すら見せ始めていた。

それを考えれば、服の余計な準備時間が必要なコスプレウィークには、お着替えショーは降って湧いたおあつらえ向きの時間稼ぎパフォーマンスかもしれない、それに気付いたからこそ幸四郎は止めなかったのであるが……

あくまでも、それは佐久耶が自ら思いつき志願したからであって、ミーティング等でのプリンセスへの相談なく、ここで頼むのは違うと考えていた。

そこで、ふと舞台上の高音と目が合う。

高音が幸四郎を見てきたのだ。

客の目が次に登場するプリンセスのまゆりの紹介PVの映ったモニターに向いた合間にこちらに何かの確認を求めてきている。

彼女は手に持ったタオルを幸四郎に返すように投げる仕草をした。彼女の言いたい事は理解できた。

だが……返事をするには、まゆりに確認しなくてはならない。

「必要はないんだよ？」

「ボクはあると思う」

「そうか……」

短いまゆりとの言葉のやり取り。

幸四郎は舞台を見つめたままのまゆりから、下手投げでタオルを放ってこようにする高音に顔を向けて首を振ってから、チョンチョンとまゆりを指差す。

「……」

それを受け、高音は眉をしかめるが、真剣な眼差しのみまゆりと目を合わせると、素早く幸四郎にタオルを投げて寄越して、

「さあ！ 次はプリンセスオークション一番の元気娘、まゆり嬢ですっ！ 皆さんの期待は裏切らないまゆりちゃんですが、今回はお着替えはありませんよ！ さあ、登場ですっ！」

そうマイクを持ち、コールしたのだ。

「高音さん、ボクはやっちゃダメなの？」

タオルを投げて返して来ての今のコール。

まゆりはショックを隠さない眩き、舞台に踏み出さない。

「バカだな……」

優しくまゆりの両肩に手をかける幸四郎。

「え!？」

「大丈夫……高音さんは今の一瞬でまゆりちゃんとお客さんを近付
けてくれる手筈を考えて整えてくれたんだよ」

「ええっ?」

「良いから……まゆりちゃんはまゆりちゃんらしく、行っておいで」

幸四郎はそう言って、戸惑う彼女の両肩をそつ、と押すのだった。

続く

第77話「どうするの？」

スポットライトが煌めく舞台に黒髪ショートカットの元氣娘が乗り出す。

「ヤッホー！！ 皆さん、ボクにどんなコスプレして欲しいのかな？」

右拳を挙げるまゆりに客は拍手と歓声。

「ハイ、まゆりちゃんです！ ボクっ娘が続きますが、まゆりちゃんは佐久耶ちゃんみたいな巫女ながらに小悪魔とは違う良い娘の真っ当娘なんで……コスプレ生着替えなんてしませんよね？ 私は信じていますからね？」

真顔でそんな事を言いながら、高音はインタビュウの様にまゆりにマイクを向けてくる。

『……真顔、ボク……どう答えたらいいだろう？』

打ち合せなど無い、佐久耶のアドリブから出た生着替えなのだ。

「……えーと」 まゆりは迷う。

高音が本気でこの流れを嫌っているかもしれないのである。

確かに客は盛り上がるが、まゆりが佐久耶に続けば後のプリンセス達もそれに倣わなければならない空気になりかねない。

高音はおそらくそこまで考えている、彼女は総合司会なのだ、自分の出番が盛り上がりやすいプリンセス個人とは違うのだ。

『どうしよう……』

やる気にはなってきた筈が、どうにも高音に返事が出来ないでいると、舞台袖に視線が行く。

幸四郎が笑っていた。

『オーナー……』

目線が合うと、幸四郎は口元に笑みを浮かべたままでゆっくりと頷いた。

「よし！」

まゆりは叫ぶ。

「フロアーの皆さん、皆さんはボクの生着替え見たいかな？」

「みたい！」

「まゆりちゃんのだけが見たいんだ！」

「キボンヌ！」

まゆりの問い掛けに暗いホールから声が上がる。

「まゆりさん！？ ま、まさか貴方まで？」

大仰に驚く高音。

そこに舞台袖からポーンとタオルケットが投げられ、彼女の頭にフワリとかかるとフロアーの客からドッと笑いが起こる。

「ん~~~~っ！」

高音が歯を食い縛り、舞台袖を睨む。

「高音ちゃんの負け！」

「まゆりちゃん、気にしないでいいよ、見せて見せて、生着替え！」

「まゆりちゃん〜！」

客から高音に愛嬌のある野次が飛び、まゆりに声援が浴びせられる。

「ありがとう！　じゃ、宜しくね、高音さん」

「か、勝手になさい！　ま、ま、ま……まずはオークションですよ！」

ウインクするまゆりに、高音は膨れてフロアーを指を差すと、オッと声が上がった。

『……高音さん……オーナーありがとう』

まゆりは微笑む。

解っている、タオルケットを舞台袖に投げ返した時点で、まゆりが止める高音に逆らい、客に応えて盛り上げる形でオークションを始められる様に演技したのだ。

「それでは……プリンセスまゆりちゃんのコスプレ生着替え付きオ

「クシヨン、開始します！」

「盛り上がってますわね……オーナー」

「楓ちゃん」

腕を組んだ少女が舞台袖の幸四郎の後ろに立つ。
まゆりの次の出番を待つ楓だ。

「楓ちゃんはやる？」

「どう思われます？」

幸四郎の問いに対し、腕を組み、問いで返す楓。

「うーん、楓ちゃんはやらないだろうねえ……でも、やらないと決
め付けられたらやっちゃうかも？」

「あら、挑発？」

楓は片目をつぶる。

「まさかあ……」

「ですわよね、まさかオーナーがわたくしを挑発できるとは思いま
せんもの」

「察しのおりだよ」

頭を掻く幸四郎。

「まあ、いいですわ……やるかやらないか、するのかしないのかをお問いになるのですたら……」

そんな幸四郎に楓は、

「求められれば……して差し上げるのがプリンセスだと思っていますわ」

と、フツと笑みを見せながら答えたのだった。

「決りました！ プリンセスまゆりにコスプレ指定&一緒にお部屋で過ごす権利は7番のお客様に落札されました！」

高音のコールに客達の拍手。

まゆりと高音の演出が効いたのか、オークションは盛り上がり、落札金額はかなり伸びたせいかな高音のコールもテンションが高い。

「では……7番のお客様、プリンセスに着せて上げる衣裳をモニターの候補からお選び下さい」

モニターにまゆりの着用可能なコスプレ衣裳が表示される。
十数秒の間が過ぎた後で7番のランプが点く。

「チャイナドレス！」

客席が沸く。

まゆりのスレンダーな身体には合うと思っていた客が案外、多か

ったのかもしれない。

紅の半袖、下は膝下までであるが魅惑的なスリットが大きく入っているデザインである。

「スリットかあ、ボクも下着まで替えなきゃ」

まゆりがペロツと舌を出すと、高音が微妙な表情をして、それを待っていたかの様に客は沸き、笑ったのだった。

「ありがとうございました〜！」

「まゆりちゃん、見えてた、見えてた」

「カワイイお尻でした、ごちそうさまです」

「プリティすぎる！」

チャイナドレスに着替えて、7番の客と手を繋いでフロアーを出ていくまゆりに客達は喝采を送る。

「次は……楓ちゃんだね、どうなるのかな？」

幸四郎は舞台に向かう楓に声をかけた。

「どうなるかはお楽しみですわ、無論、舞台を盛り上げるのは当然としまして……まずはオーナーがする事がありますわよ」

コスプレウィーク用のお揃いのシャツにショートパンツの楓は幸

四郎に振り返る。

「なに？」

「オーナー……せっかく盛り上がったまゆりさんの落札金額、レジに誰もいなきや受け取れませんわよ」

「あゝっ！」

楓の冷静な指摘、すっかり精算を忘れていた幸四郎は大声を上げて、舞台袖から通路に走り出したのだった。

続く

第78話「トッププリンセス」

「では……素敵なお時間をお過ごし下さい」

「じゃあ」

幸四郎が頭を下げると、赤いチャイナドレスのまゆりは客の腕にすがりつきながらウインクしてくる。

コクリと笑顔で頷き、階段を上がっていく二人を見送ると、駆け足で事務所に戻り、金庫に落札金額をしまい舞台袖に向かう。

『楓ちゃん……一体どうするんだろう』

それが気になって仕方がなかったのだ。

まゆりの様子を観ていた舞台袖でのやり取り。

前の二人のように生着替えをするのか、それともしないのか。

『それにしても……まだ三人目だっというのに、佐久耶ちゃんのお陰で大変な事になっちゃったよ』

プリンセスオークション開店初のイベントのスタートは波乱含みだが、佐久耶の機転というか、過剰なサービスで客は盛り上がっている、それに上手く乗ったまゆりもそれを切らしていない。

そして、続くはプリンセスオークション開店以来のエース、楓である。

ネット上でも彼女の美貌は注目され、ホームページでのファンメールも多く、客同士の口コミでも評価は高い。

だが、楓には他の娘と違い、異性を惹き付ける事で生きてきたプライドがある、まゆりの様に佐久耶の策をそのまま実行するとは幸四郎には思えなかった。

『落札金額は！？』

オークション前のデモンストレーションはほとんどやらない楓だ。軽い挨拶程度でオークションは始まる、既にオークションは終わっているだろう。

そう思い、幸四郎は舞台袖に滑り込む。

「八万八千円！ 八万八千円です……次はああと、九万円っ！？
きました九万円！」

そこには佐久耶が作り上げ、まゆりが引き上げたそれが爆発したかのような熱気があった。

汗だくの高音が開店以来のダントツの落札金額を叫び、横には自信満々に腕を組み涼しい笑みを浮かべる美少女がいた。

「九万……」

予想もしていなかった金額な上、暗闇のフロアーの競り合いは終わっていないかった。

舞台袖に来た幸四郎に気づいたのか、楓は薄い笑みのままチラリとこちらを見る、ほんの一瞥、一瞬だったがその顔からは、

「わたくしが本気になれば、こんなものですわよ」

と、でも声が聞こえてくるかのようにであった。

「十万、十万円……宜しいですね、十万円きました、1番のお客様が落札です、プリンセス楓のコスプレ指名権、そして一緒にお部屋で過ごす権利は1番のお客様に！」

沸き上がる歓声。

高音は少々興奮しているが頷ける。

まさか大台が出てしまうとは……

「では……1番のお客様、プリンセスがお迎えにいきますので、どうぞ！」

「えっ……!?!」

高音の進行に首を傾げる幸四郎。

通常のそれとも、生着替えがあるものともそれは違っていた。

「では……」

生着替えもせず、客のコスプレ指名も聞かず、舞台を降りていく楓。

「どういう事になってるんだ!?!」

幸四郎は舞台袖から薄暗いフロアーを覗く。

あまりやってはいけない行為だが、主役の降りた舞台に注目している者などいないだろう。

1番の客は幸四郎と年端の変わらない青年。

楓はその青年に優しく微笑み、顔を寄せて大型モニターを指差し

た。

「あれ？」

そこには既に楓の着用可能のコスプレ衣裳が表示されている。

着用可能のコスプレ衣裳表示はオークションが終わった後に高音のコールで表示され、落札客に希望の衣裳を言ってもらう手筈だったのだが、それはオークション前から表示されている様子だった。

青年が嬉しそうに楓に耳打ちすると、彼女はモニターを見ながら笑みを浮かべ、ウンウンと頷く。

まるで恋人同士のような楓の態度。

『……まさか』

幸四郎は息を呑む。

佐久耶、まゆりの勢いを受けての楓のパフォーマンス。

それが何であつたかを推測する。

「坊っちゃん……」

ヤレヤレといった感じで高音は汗だくで舞台袖に戻ってくると、机の上のスポーツ飲料を手に取り、口に運んでから、

「あの娘、やっぱり役者が一枚上ですね」

フウと息をつき、タオルで汗を拭く。

「生着替えはするけど、舞台じゃしない、部屋で二人っきりの時、それも何を着るかも二人っきりの秘密にする」

「流石、坊っちゃん……楓さんは舞台に上がるなり、そう言いまし

た、全て落札された方とプリンセスの秘密だと」

幸四郎が答えると、高音は肩を竦めた。

「それに……初めに着用可能のコスプレを表示させたのも良いですね、目当ての女の子には是非とも着せたい気に入った物があれば、オークションに熱が入るのは当然です」

「ですね……早速、改善出来しましょう、初めに服を見せてこそ、プリンセスのファンは想像が膨らむ、ってもんですね」

「ええ……結局のところ、楓さんは二人っきりの自分の価値を高める、それが自分を求める異性を更に惹き付ける事が解っていた、打ち合せもなく突発的に考えたのに……脱帽です」

流石の高音も今回ばかりは参った感じだ。

何よりも初の大台に乗ったオークション落札金額が全てを証明する。

「しばらくは楓さんには誰もかなわないですね」

「いえいえ……きつとそうでもないです」

高音の賛辞、だが幸四郎は首を振る。

「そうですか？」

「ええ……」

幸四郎は今度は精算を忘れていなかった。

楓と客がまだフロアーで和気あいあいに、何やら相談しているのを確認してから、

「結局、佐久耶ちゃんもまゆりちゃんも、店の為、プリンセスという自分の価値を上げる為に精一杯に考えたんです、別の女の子が何も考えない訳がないし、皆が異性には特別に見られる事に、意識するしないに関わらず慣れている位に可愛い上等な女の子達です、いつまでも一人に独走させるほど甘くもないし、プライドがないとも思えませんよ、可愛い女の子にはなりにそれを支えてきた努力とプライドがあるんですよ」

と、答える。

「なるほど……坊っちゃんも女の子が解ってきたようですね」

頷き笑む高音。

「まあ……その競争をいい方に出して上げるのが良い風俗店経営の秘訣かもしれませんね」

幸四郎はそう言うのと、楓と客がフロアーから出ていくのを見て、じゃ……次も頼みますと高音に告げて舞台袖を出ていく。

「秘訣か……まったく、その通りです」

高音は幸四郎の後ろ姿にポツリと呟き、次のプリンセスの登場を待つ客の視線の注ぐ舞台に向け、再び踵を返したのだった。

続く

第79話「マジックユーザーのどか!」

「えゝっ、十万円ですかあゝ!」

出番直前で楓の落札金額を聞かされ、口元に手を当てて驚く菜ノ花。

「ああ……始めにコスプレ可能な服は見せて、お客様にイメージを沸かせ、逆に着替えや何を着るかは落札者以外には見せない、楓ちゃんがどの服を選んだのかは俺も知らないよ」

幸四郎は楓のオークションの要点をかいつまみ説明した。

「でも……楓さんの衣裳を調べたらオーナーはわかるんじゃないですか?」

「そこはそれ、後で洗濯とかもあるから結局はわかるだろうけど、楓ちゃんがそれをお客様とだけの秘密にしたいならなれべくは見ないようにしてる」

「フフッ……オーナーご立派ですね」

菜ノ花はパチパチと手を叩く素振りで笑う。

「いやあ……そこで菜ノ花ちゃんからは始めからコスプレ可能な服は表示させるよ」

「はい、わかりました」

「あと……生着替えのことなんだけど、菜ノ花ちゃんは……やる?」
「やりません」

即答だった。

まるで考える時間も置かない返答、いかに鈍い幸四郎でもそれが近衛菜ノ花という女の子の取る強い拒絶の一つの態度である事は容易に解る。

「業務的な指示や命令ですか？」

「とんでもない」

僅かに下がるトーンが普段の彼女の容姿にも優るとも劣らない美声では酷く目立つ。

顔つきは穏やかなのだが、背筋をブルツとさせて両手を振るのが、幸四郎には精一杯であった。「じゃ………いつてきますね、普通にやりますよ、普通にね」

菜ノ花は声のトーンを戻し、笑顔をみせ舞台に歩き出していくのだった。

「コスプレウィーク四番手のプリンセスは菜ノ花姫の登場ですっ！」
「皆さん、こんばんわ」

菜ノ花は頭をペコリと下げて舞台に姿を現す。

「菜ノ花ちゃん！」

「いやあ、プロポーション抜群」

「声もカワイイね」

上がる歓声。

菜ノ花は手堅い人気をプリンセスの中で誇り、オークションでも

固定ファンがそれに貢献している。

「では……プリンセス菜ノ花のコスプレ可能な服を表示いたします！」

モニターに菜ノ花用のコスプレ衣裳が映されると、フロアーの一部の客から声が上がった。

「『マジックユーザーのどか』のヒロイン、のどかちゃんの戦闘服が！」

「おおっ！ 本当だ、菜ノ花ちゃん、ちゃんとコスプレするの？」

「ええ……ちゃんとのどかちゃんしてるショートツインテールしますよ！」

何か妙に熱っぽい客の質問に菜ノ花が笑顔を浮かべると、

「なにいいいつ、それはっ……すごいいつ」

「夢でござ候！」

薄暗やみで格段に盛り上がる客の一角。

「の……どか？ な、なんだそりゃ？」

「『マジックユーザーのどか』 現在第四部を好調放送中、映画化もしてるし、コンビとかでもよく協賛クジとかやってる人気のアニメだよ！」

「……なっ？」

舞台袖でフロアーの客の反応に首をかしげた幸四郎の背後にメイド服のくるみがいきなり現れた。

「くるみ!? お、お前なあ、こんな所に顔出しちゃダメだっ、厨房はどうしたんだよ? 部屋から注文来たら困るだろ!？」

「平気平気、厨房への注文の内線はこの電話にかかるようになってるから」

くるみは首から紐で胸元に垂れ下がらせた携帯を指差す。

「そんな問題じゃ……」

「シート、騒いじゃダメだよ! あたしマジックユーザーのどかのファンだからさあ、菜ノ花ちゃんのコスプレにあるの知って気になって見に来たんだ、菜ノ花ちゃんのオークション終わったら帰るから」

くるみは幸四郎の唇に右手の人差し指をつけ、左手を謝るように上げる。

「しょうがないなあ……で、あれはいわゆるアニメのコスプレなんだな?」

「そうそう、画像を観るにハイレンシバージョンのドライブモードのコスプレだね」

「わからんって……」

眉をしかめる幸四郎。

「では……一部の方の盛り上がりもありましたが、プリンセス菜ノ花の……」

もちろん高音も話が見えないようだ、多少戸惑いながらオークシ

ヨンを開始しようとした時である。
悪戯っぽい笑みを浮かべた菜ノ花が高音のマイクに顔を寄せた。

「じゃあ、いくよ……ドライブモード発動!! のどかオペレーシ
ョン・プリンセス開始します!」

「な、菜ノ花さん？」
「菜ノ花ちゃん……」

横から割り込んで発声された菜ノ花の声は明らかにいつもの彼女の
それではなかった。
まだ、十代もだいぶ前半の可愛らしい女の子の声。

「の、のどかだあ！」
「のどかあ！」
「うわあああっ！」

騒つく一角の客。

「な、菜ノ花ちゃん……今のなんだ？」
「あ……あああ……」

確認の意味で後ろの幼なじみに振り返るが、メイド姿の彼女はま

るで何かの化け物か幽霊を見たかの様にガタガタ震えていた。

「あわわわわ……」

「くるみ!？」

「のどちゃんだ、あれはまさしく国民的アニメーションヒロイン『マジックユーザーのどか』の愛仲のどかちゃんの声だあゝ、ふはあああ」

くるみはヘナヘナと座り込み、

「これは出る……まるで……今までの落札金額などまるで話にならない大金がうごくううう」

まるで怪しい宗教の教祖が紛い物の占いをしているかのように眩くのであった。

続く

第80話「探りって何ですか？」

「えっとお……」

オークション開始のわずか数秒後、高音は目を丸くしてモニターを見る。

「39番のお客様ですね？ 本当に宜しいのでしょうか？」
「宜しい！ 俺は後悔はしないと決めた！」

普段ならば絶対にしない不粋なオークションニアの金額の確認に39番の中年の男が無駄に強い口調で答える。

「漢だ！」

「すごいぞ！」

「か、かなわんっ！ ボクに経済力があれば……」
「か、金が愛の差ではないっ、俺だって今日の出会いを知ってさえいれば全財産を持って、のどかの為に馳せ参じていたのだ」

なぜか自ら舞台の下まで歩み寄る39番の客にはヤンヤの歓声と口惜しがる声が浴びせられる。

「で……ではプリンセス菜ノ花さんのコスプレ指名権及びお部屋で過ごす権利は15万円で39番のお客様が落札されました！」

沸き上がる拍手。

いくらなんでも届かないと思われていた大台に二人ものプリンセスが連続して達してしまったのだ。

それも菜ノ花は新たな方法というか、コスプレウィークを最大限

に利用して、三人目で早くも本日のトッププリンセス確定と思われる
た楓の最高落札価格を五万円も上回ったのだ。

「のどか！ カモーナ」

まさに開口一番、問答無用の一発落札を決めた39番の客が舞台
の菜ノ花に向かって手を上げた。

「わかったよ！」

菜ノ花の高いアニメ声。

「うおおおっ……のどかつ、のどかだぁ！」
「のどかぁ！」

くるみは幸四郎の後ろでガッツポーズをし、フロアーの一部の客
は大熱狂である。

「ま……まあ、菜ノ花ちゃんの声、可愛いもんな、まさかそういう
真似が出来るとは思わなかったけど……マニアックな層にもこれか
らはアピールが必要って事かな？」

そのマジックなんたらのだかを知らない幸四郎は、大熱狂を不思議
そうにしているフロアーの大部分の客と同じような苦笑を浮かべ
るしか無いのだった。

「では……素敵なお時間をお過ごし下さい」

「じゃ、いきましよう」

支払いを終えた客に頭を下げる幸四郎に菜ノ花は軽く目を合わせ
てから、客の手を取った。

マジックユーザーのどかの戦闘服らしい赤と白のコスプレ姿の菜
ノ花。

眼鏡といつものカチューシャを外し、ショートツインテールな
のもその一環なのだろう。

『元のアニメを知らないけど菜ノ花ちゃんみたいな可愛い女の子が
自分の好きなアニメキャラのコスプレしてくれたらって、これが萌
えるって奴だな……コアな客層だけど盛り上がりは無視できないな』

仲良く階段を上がっていく二人を見ながら、そんな事を幸四郎は
考えるのであった。

「はい……ではコスプレウィーク初日、プリンセスの皆さん、全員
欠けずに出勤ご苦労様でした」

コスプレウィーク初日の業務終了のミーティングが始まる。

「今日のナンバーワンプリンセスは菜ノ花ちゃんです、落札金額十
五万円は開店以来の最高金額になります、はい、ご祝儀」

幸四郎が差し出した一日のトップ賞のご祝儀袋を菜ノ花は笑顔で受け取る。

中身は正直に言えば、現金だ。

一日の最高落札金額のプリンスに与えられるそれは、その金額にある割合で比例しているので落札金額が高ければ、高い程に高額になる。

店としては素直に売上に計上したい最高落札金額だが、一位のみに支払われる事、そして何よりもプリンス達の研鑽を高める意味合いがあり、開店以来続いている。

開店以来の最高落札金額を出した菜ノ花は必然的に開店以来の最高額のご祝儀を受け取る事となり、笑顔も当然だ。

「スゴいのです、ボクが今日は頂くつもりだったのにやられたのです」

「運が良かったよ」

屈託のない笑顔で、手をパチパチ叩く佐久耶に照れ笑いをする菜ノ花。

菜ノ花の後もコスプレウィークは盛り上がり、コスプレの幅が広そうなみなみ、そのボディーを活かしてのコスプレの破壊力がありそうな百合乃が菜ノ花の金額に挑戦したが、普段よりは落札金額は伸ばしたが、それからの誰も楓の金額にも達せず、二回目、三回目のオークションに記録更新の楓と菜ノ花も一回目の勢いとはならなかったのである。

「菜ノ花さん、驚きましたわ、わたくしは一度目で決めたつもりでしたが、上がったとは……」

ミーティングの解散を告げると、菜ノ花に歩み寄る楓。

「んゝ、運ですかね？」

「運で上回れてもこっちが情けないですわ」

頬を搔く菜ノ花に、楓は肩をすくめた。

二人の間に僅かに詰まった空気が流れた、殆どの者がそれを聞いていなかったり、すぐにシャワーを浴びて寮に帰ろうとしていた為、それを聞いていた者はたまたま横を通った知世とトップ賞の菜ノ花に激励の声をかけようとしていた幸四郎だけであった。

「運以外に何か思い当たるフシがあります？」

菜ノ花の声のトーンが下がった。

彼女の礼儀は正しいが、決して弱気ではなく、出るところは出る性格は楓の強気にも退かない。

「フシ、そうですねえ、あるとしたら……」

楓は腕を組み、右手を顎に当て考える仕草をする。

「しいて言うならば、貴女でなく、マジックなんたらのだかちゃん
の人気なのかしら？」

「……」

睨んだ。

どっちがどっちではない、互いを互いが睨む。

「ちょ……」

「待てっ」

仲裁に入ろうとした幸四郎だが、知世は低く鋭い口調でそれを制する。

楓と菜ノ花の睨み合いは続く。

二人とも幸四郎と知世の視線には当然、気付いているに違いないが全く気にもしない。

ゆっくりと菜ノ花の手が上がった。

幸四郎の喉を唾がやたら存在感を誇示しながら通過する。

「ピンポーン！ コスプレウィークだっていうから、前から物マネ出来るアニメキャラをコスプレお婆さんに頼んでたんです！」

菜ノ花は正解とばかりに人差し指で楓を指さして笑顔を見せた。
その表情にはまったく数秒前の面影が消えている。

「でも、運が良かったんですよ、このアニメキャラ、今が旬なんですけど……フロアーに熱狂的なファンがいてくれたんですから、コスプレウィークだからあるかな、とは踏んだんですけど、やっぱり運とキャラクター人気ですよ」

まったく屈託の無い言い様。

「いえ……よく考えれば、相手の求めているコスプレを求めているレベルで魅せられるのも、立派ですわね……失言を許してくださいまし」

そんな菜ノ花の笑顔に対して、案外に楓も素直に謝る。

「良いんですよ、なんだったらのどかのライバルキャラのシエラちゃんのパトルコスチュームもありますから、楓さんも明日着てみますか？」

「いえ、いえ……遠慮しますわ、貴女は声マネもするくらいそのアニメキャラが好きだからこそ、お客様もより魅力を感じたのでしょう？ わたくしがしても只のその格好をした女に過ぎませんわよ……では失礼しますわ」

楓は軽く会釈して、その場を去り、菜ノ花も何事もなかったかのように自分の部屋にシャワーを浴びに上がっていく。

「ふう、なんだったんだよ？ 今のやり取り、お互いに気が少し強い所があるから、こっちは気が気じゃなかったよ」

「ふふ、なるほどなあ、なるほど……」

すわプリンス同士の口喧嘩かと息をつく幸四郎、だが知世は何か面白そうに呟く。

「なるほどって……楓ちゃんが案外に素直に謝ったから良いけどさあ」

「菜ノ花……何かあるとは思ってたんだよな、楓の奴探りやがったな？」

「えっ、探りって？ どういう意味だよ？」

探り。

意外な言葉に反応した幸四郎に、

「あ、気になるの？ だったら教えてやるよ、でも寿司が食いたんだよなあ」

知世はお腹を擦りながらニンマリ笑った。

続く

第81話「気にしないでいっしょよ!」

「いっただきます!」

前にみんなで行った回転寿司店のカウンター、知世は朝から満面の笑顔で鯛を頬張った。

「まあ、朝まで仕事してるみんなにはこれが夕ご飯の感覚なんだけど、頼むから体重を上げないでね、人气が下がるから……」

「平気、平気、あたしは寿司じゃ太らない体質なんだよ! ムグムグ……」

「そんな体質あるかよ」

いつまでも眉をしかめていても始まらないので幸四郎も目の前を流れてきたイカの皿を取る。

店の打ち上げでもないので払いは自分だ。

楓と菜ノ花のやり取りの意味が知りたいが為に、知世に奢る羽目にはなったが悪い気はしていなかった。

見かけはまったくロリっ娘美少女のクセに気っ風が良い姐御肌の知世は雇い主が言うのも変だが、頼りになるし、一緒に居て気分のいい女の子なのだ。

「朝だからってネタの手を抜かないのがいいよな、旨いよ」

「この街では朝に手を抜く店はやっていけない、回るお寿司屋さんだけど値段はある程度張るんだから、仕事帰りの女の子の目は厳しいよ」

店内を見渡すと朝の五時だというのに、ちらほらと客が見える。

数人のグループで、男女で、一人で、と様々だが間違いないのは女の子はみんな風俗関係の女の子であるという事だろう。

「だろうなあ……店も色々と苦労してんだろ、じゃあ今度はこれ！」

知世は今度はイクラの軍艦巻きに手を伸ばす。

イクラが軍艦一杯に乗っている、安い寿司店の様に胡瓜で半分以上を誤魔化す様な握りではない。

「まあ、ドンドンいきなよ、ところで菜ノ花ちゃんの事だけど……」

「ああ……あれね、楓の奴の態度だろ？」

「うん……探りを入れた、って知世ちゃんは言ったよね？　それがどういう意味か俺には解んなくて」

「んー、あたしもおそろくだけど、大きくは間違っていないと思う……ムグムグ」

知世はイクラの軍艦巻きを口一杯に頬張り、それを美味しそうに咀嚼した後で飲み込む。

「いやあ、旨い！　ああ……そうだ、だからさ、ああいう典型的な楽屋での嫌味攻撃にこういう対処するかを試してみたあたしは思うんだ」

「試す？」

「ああ……」

まだ意味は解らない。

そんな幸四郎に知世は口元を弛ませて頷く。

「楓の奴は菜ノ花を元業界人なんじゃないか？　って探りを入れたんだよ」

「業界人!？」

「うん……あたしもそうなんだと思ったよ、菜ノ花は舞台慣れしてるし、プロポーションもキチンとした指導を受けて作った感じがすぐくするんだ」

「作ったプロポーションって？」

「聞いた通りだよ、オーナーの解るように言えば、身長もサイズも似通った楓とみなみだけど、部分部分は楓の方がキチツと絞れてるから、胸もデカくみえるし、腰も細く見える、なかなか素人にはやれない感じなんだよ」

「なるほど……」

元業界人と言うなら、楓が売れっ子モデルだったならば、知世は売れはしなかったらしいがアイドルだったのだ、プロポーションを作るレッスンや食事制限は受けていたのだから、作ったそれが見分けられるという説明にはある程度の納得が出来る。

舞台慣れも言われてみると、短いアピール時間で落札金額を引き上げる盛り上がりを生むトークも菜ノ花は達者だ。

「トップをとった人間への挑発もよくある事だよ、あたしだって相方が売れてテレビにチラホラ映った時は結構言われたよ……菜ノ花みたいに上手くはかわせなかったな、アイツは短気だけどそういうの慣れてるみたいだ」

「じゃあ、楓ちゃんがあんなに突っ掛かったのは、菜ノ花ちゃんを探る為の演技だったの？」

「全部が、とは言わないよ、楓だって悔しさもあるだろうな……まあ、ともかくだ、あの態度から楓も思ってるだろうけど、あたしは菜ノ花は元々業界人じゃないかと思うよ」

業界人。

モデルかアイドルか。

菜ノ花のルックスならばそれも十分にあり得る。

「でもさ……あたしみたいに面接の時に言っちゃいけないんだろ？」

言ってたらあたしに寿司おごる意味ないしな」

「まあね……知世ちゃんも思い当たる様な娘もないんだろ？」

「……あるかよ、あたしと菜ノ花の歳の差じゃ、アイドルとしては世代違いだし、デビューして可愛いのに売れずに消えていくアイドルなんか年間にそれこそ何百人もいるんだって、あたしなんて売れてなかった、売れてなかった、って言うけれど、相方のお陰でテレビにも出れたんだからマシなんだよ」

「そうなんだ、菜ノ花ちゃんの歳で知世ちゃんとは世代違いになっちゃうのかあ、アイドルも大変だな、ところで知世ちゃんの相方のアイドルって？」

「調べりゃいいだろう？　すぐにわかるさ」

「またにするよ、菜ノ花ちゃんの事にしてもこれ以上は野暮かな、どちらかと言えば、楓ちゃんが菜ノ花にあんなに突っ掛かったのが気になったんだ……さあさあ、知世ちゃんもドンドン食べなよ、オレは今度はトロでいくよ」

わずかに陰のある知世の瞳、幸四郎はそれにわざと気付かない振りをすると、肩をすくめて答え、ルールに回る寿司に視線を移すのだった。

「ごちそうさま、結構食ったなあ」

「どういたしまして、知世ちゃんも結構食べるね、恋音ちゃんにはかなわないけどさ」

「ああいうのと一緒にするなよな、あたしはあんまり体重に出ないんだ」

「アハハ、でも恋音ちゃんも太らないよね、ダイエットに悩む女子からしたらうらやましいかぎりだね」

店員に精算を頼み、幸四郎が出された伝票を持って立ち上がると、

「まあさ……」

知世もテーブルに手をついて立ち上がった。

「菜ノ花の事は色々と気になるだろうけど、あんまり女の過去は気にしない方がいいかもな、アイツが話すなら別だけどさ」

「だよね……詮索は無用だと思うよ」

幸四郎は笑う。

嘘では無かった、職業柄と言えばそうだし、菜ノ花の望む事では無いのかもしれないという思いが出てきたのだ。

「ありがちな言い方だけど過去よりも大切なのは今で、もっと切なのは未来だからね……それにさ」

「それに？」

「俺……知世ちゃんがテレビ出たの観たことないけれど、知世ちゃんが可愛い事は知ってるよ、だって毎日観ているからね」

「幸四郎……」

意外そうな顔を浮かべる知世。

「そうでしょ？ 今の知世ちゃんが、今までの知世ちゃんよりもきつと可愛いに違いないからね、それを直接、毎日みてる俺は得して

るの」

「そうだぞ……」

口元を緩め知世は幸四郎の手を取る。

「この後も可愛いあたしに付き合え！」

「えっ？ 寝ないで大丈夫なの？」

「平気、平気……」

「何が平気なの？ 今日の夜は仕事あるよ」

驚く幸四郎。

だが、手を握った知世はウインクして言った。

「これから行った先で寝りゃいいじゃん！」

続く

第82話「コスプレのある週末？」

コスプレウィークは予想を越える売上げを記録して、週末を迎えようとしていた。

流石に初日の様な高額には達しないが、普段よりは遥かに高い水準の売上げを記録して、オークションの熱気も上がっている。

事務室で仕事をする高音は初のイベント企画の成功に気をよくしているし、プリンセスも佐久耶や楓のように自分を上手くアピールしようと、舞台上でも努力していた。

そして、衣裳を提供していたコスプレ婆が病院から復帰し、迷惑をかけた罪滅ぼしと、更にバリエーションを増やすのに沢山の衣裳を格安でレンタルしてくれたのだ。

いい流れがコスプレウィークにはきていた。

「しかし、コスプレウィークとなると菜ノ花さんは周りを圧倒しますね、初日と四日目はトップになってますからね、キチンとしたメリハリがあって細い身体つきがコスプレ映えるんでしょうね」

「ですね、でもは二日目は楓ちゃん、昨日は百合乃さんでしょう？ 知世ちゃんもトップにはならないけどコンスタントに上位にいますし……お客さんが増える週末はやっぱりいつもの上位陣が強いかも知れませんね」

上機嫌でコスプレウィークで実績急上昇の菜ノ花を褒める高音に対し、幸四郎は応じた。

開店一ヶ月あまり。

やはり人気トップにあるのは楓だ。

開店前のポスター、ホームページのトップ画像になったのもある

のかもしれないが、高い水準で安定している。

続くのは知世。

楓とは反対とまでは言わないが、異なるベクトルを持つ美少女はホームページにある個人の掲示板では人気ナンバーワンだ。

三番手は愛日と百合乃、菜ノ花のデットヒートと言っている状況。後はそれぞれのプリンセスがその日毎に上記の三人に迫ったり、落ちたり、上がったりの混戦模様となっている。

「いい感じですよ、プリンセスがプリンセス同士かなり意識しあっていますよね」

「ええ、だってみんな可愛いですから……魅せるのに慣れている楓ちゃんや知世ちゃんがトップになるのはある程度予想してましたが、後がいい争いになるのも予想と言うよりは狙い通りですね」

「フツ、坊っちゃん、自信満々ですね」

「女の子のルックス、雰囲気には俺の出来るだけの高い水準でこだわりましたからね、ウチの女の子は可愛いんだっ、とはこの街のど真ん中で言えます、あとオーナーの手腕をカバー出来る位に、って付け足しますがね」

笑みを浮かべて、頷く幸四郎。

風俗経営に慣れている高音の助言を重視してきた幸四郎だが、質を少し譲ってのプリンセス増員だけは頑として譲らなかったのだ。

「風俗は数」

高音は言った。

幸四郎もそれは否定しない、むしろ模範解答なのだろう。

だが、それは売り上げが高い風俗店を作る模範解答であって、風

俗最激戦区新大空町で素人がオーナーとして確固たる何かを築く手段ではないと判断したのである。

何故、病床の父が信頼も経験もある高音ではなく、勝手に家を出た自分に最後の砦を任せたのか？

これが父への解答の始めのつもりなのだ。

「さて……そろそろ女の子達が部屋の準備に入ってくる時間ですね」

腕時計をみる高音。

女性用の高級腕時計をしていると思いきや、ピンク色の小さな可愛らしい腕時計をしている。

「そうですね、くるみがいると思うから厨房に行って仕込みの確認をしてきますよ」

腕時計について何かを言おうかな、とも思ったが気の効いた言葉が浮かばず諦め、幸四郎は椅子から立ち上がり、事務所を出ていくのだった。

「幸四郎ちゃん、おはようねえー！！」

厨房には既にくるみが入って、料理の仕込みを始めていた。

まずはフロアーでサービスで提供するフライドポテトの準備だ。

開店すると、白黒のメイド服を着るが今はTシャツにジーンズのラフな格好である。

「おう、もう入ってたんだ、材料は平気か？ 松岡さんや伊達さん

に配達を泣き付くのは嫌だぞ」

「平気だよ」

確認をする幸四郎にくるみは笑う。

ちなみに松岡さんは八百屋、伊達さんは個人スーパーのそれぞれの店主だ。

両方ともに新大空町商店街の近所で、普段からも仕入れ食材などで取り引きがあるのだが、たまにくるみがウツカリをして食材が足りなくなると真夜中は流石にしないが、まだ夜には電話で泣き付き、配達してもらう事もある。

店が歩いていける近距離な事もあり、相手は笑顔で配達をしてくれるのだが、あまり頼るのも良くないと仕入れ食材のチェックは最近幸四郎も一緒に行っている。

「幸四郎ちゃん、サービスのフライドポテトだけどさあ……」

「どうした？」

「あれ……冷めたらやっぱり手が出ないよ、お店が終わった後で捨てちゃうのも多いんだよね、食べ放題とかのお店でさ、よくヒーター付いた容器に入ってるじゃん？ ああいうの欲しいなあ」

「ん」

くるみの提案に幸四郎は考える。

費用のかかる事だ。

提案されて即答はどうしても出来ない。

「時間が経ったら、取り替えてるけど、それだと食材のロスが多いよ、私も他が忙しいとつい後回しになっちゃうしさ」

確かに頷ける。

食材のロスが出ているのも確かだし、くるみには他にも何かと雑

務を抱えてもらっている状態で、欠かさずにフロアーを注意している、とは言えない。

「わかった、高音さんに相談してみるよ……あと、くるみにも考えて欲しいんだけど」

「なに？」

「ポテトは何か対策をするとして、フロアーのテーブルに置いて、冷めても手が出る様な物を考えてくれないかな？　それが旨かったら部屋から注文してくれるお客さんが増えるかもしれないから……」

「うーん、ポテトともう一種類ね、あんまり手間がかからない物にしないといけないよね」

「難しいか？　くるみにあんまり負担になるならポテトだけのままで……」

前から考えてはいたが、そこまで必要な事項ではない、幸四郎は提案を取り消そうとしたが、

「いや……あたしもポテトだけは寂しいと思っていたからね、すぐには思い付かないけど考えるよ」

くるみは頭に人差し指を当てながら言った。

「よし、それじゃあ任せたぜ、新しいサービスメニューのアイデアに期待する、そろそろ開店準備だ、今日も宜しく頼むぜ、メイドくるみ！」

「アイアイサ！　フライドポテト作戦に続く作戦を引き続き考えますっ！」

幸四郎が笑みを見せると、くるみもノリ良く敬礼してニッコリ笑う。

『昔から懐っこくて、かわいいよなあ』

その笑顔に幸四郎は思わずにやけそうになってしまった。だった。

続く

第83話「コスプレのある週末?―事件発生!?!」

「では、ごゆっくり素敵な時間をお過ごし下さい」

頭を下げる幸四郎。

なるべくならプリンセスとは目を合わせない。

「ご苦勞様あゝ、じゃあ知世ちゃん行こうね」

中肉中背のスーツ姿、出来る中間管理職サラリーマンに見える客は支払いを済ますと、上機嫌で知世の手を引く。

「うん、了解、了解」

「ダメダメダメ」

「えっ?」

促されて頷いたのにダメ出しをされ、知世はキョトンとする。

あくまでも客のダメ出しは優しい口調だが、ダメ出しはダメ出し、だがその原因が分からない知世。

「知世ちゃん……自分の格好を見て、コスプレはなりきらなきゃ」
「うっ……」

ニッコリ笑みを浮かべる客に知世は一瞬、引く表情を浮かべてから自分の服を見つめた。

ひまわり組

えんどうちせ

チューリップ型の名札に書かれた平仮名の名前。
黄色い帽子。
ピンクの園児服。

「ね？」

「は、はぁーい、ちせはおにいちゃんどこにいけないのぉー？」
「よし、お兄ちゃんとおままごとだぁ！」

冷や汗を流しながらプロ根性で応じる知世に、満足気に客は彼女の手を引いて階段を上っていく。

『いくら知世ちゃんでも、園児は無いよ……でもプリンセスにどうコスプレさせるかも選択肢にあるのなら自由だし……さすがに目を合わせたら笑いそうだったんだよな』

流石の知世のコスプレに幸四郎は二人の後ろ姿にニヤニヤしてしまうのを禁じえなかった。

「プリンセスみなみ、体操着ブルマーでの登場になります！」

高音のコールに応え、着替えを済ませて舞台上上がると、オオツという歓声が彼女を迎えた。

「こりゃ、現役」

「みなみちゃん、ってナチュラルに素材がいい！」

「かわいい！」

「ははは……ありがと、ウチは田舎だったけど流石にブルマーは全滅してたよ、ジャージだったね……でもそんなに前じゃないから違和感はないかな」

舞台のすぐ下までやってきた数人の客に苦笑するみなみ。

自分の舞台の時は固まってやってくるので、もしかしたらファンなのかもしれない。

「イケてる、イケてる」

「落札したかったあ」

「どうもね、またよろしくね」

「似合ってますね、みなみちゃんは素朴系コスプレがはえるのかもしれない、体操着ブルマーが素朴系かは別として……さあ、そちらが11番のお客様です」

高音にさり気なく促されて、みなみはファンらしい数人に手を振りながら、舞台を降り、落札客の前に歩いていく。

「宜しくね、この文字はこれでいいよね？」

「ああ……いいね」

体操着の豊かな膨らみの部分に張られた白い布に書かれた、みなみという平仮名を指差すと、初老のスーツの男は落ち着いた笑みを見せる。

「じゃ……行こうか？」

自分の父親といった年齢の客の手を引き、体操服姿のみなみはフロアの外に続くドアに歩き出す。

そこには幸四郎が待っており、初老の男は高級そうなサイフを出

して支払いをする。

みなみは支払い時は後ろで手持ちぶさたにしていたが、偶然、高そうな財布から見えた札入れには決して安くない落札額を払っても、なおかなりの枚数の札がチラリと見えた。

『初めてのお客さんだけど、お金持ちみたい、常連さんも頑張ってたけど、とても競り勝てる相手じゃなかったんだね、チップはずんてくれないかな?』

後ろ手を組みながら、自分と過ごす権利を彼と争っていた若い男達を少し可哀相に思いながら、みなみは待つ。

「ありがとうございます、では二階へどうぞ」

「じゃ、いこ……」

支払いが終わり、頭を下げる幸四郎。

男性の手を再び取り、二階への階段を上がる。

「みなみちゃん」

「え?」

みなみに手を引かれ階段を上がりきり、二階の廊下を歩いていた男性は立ち止まる。

「……いや、なんでもないよ……君は若いよね?」

「んー、そうかな? でもここで働いちゃいけない年齢じゃないよ、この街はそういうのとかスゴくうるさいからね」

「そう……あまりにも似合ってるからさ、もしかしたら現役の高校生じゃないかと思っちゃってさ」

「ふふっ……んな訳ないない、まあ、そんなに前じゃないから、さ、行こ……二時間のカウントはもう始まってるんだよ」　みなみは笑いを浮かべ手を振り、自分の部屋のドアを開けて彼を中に招き入れた。

「みなみちゃんはここに住んでいるのかい？」

男性は部屋の中を見るなり驚く。

「まさかあ、ここは自分の部屋を再現してるの、彼氏を部屋に招いたって感じになるのかな、何かお酒とか飲む？　それとも何か頼もうか？」

「いや……いいよ、それよりもみなみちゃん、目の前に立ってみてくれる？」

「ん……いいけど」

傍らに置かれた冷蔵庫に手をかけたみなみだが、男性に酒を断られ、呼ばれると別段何も気にしていない様子で彼の前に立つ。

こういう時、お酒や料理を頼ませる上手いセールストークはみなみはかなり苦手だ。

「みなみちゃん……」

「ん？」

見つめられる。

嫌な風ではない。

部屋に入るなり、という客は割と多く、他のプリンセスは色々と

あるようだが、みなみは余程の事が無ければスンナリ受け入れている。

スツと両肩を掴まれる、初老だが男性はわりかし身体も大きく、腕も歳の割りにはガツシリしていた。

「……もう、お歳の割りには手が早いんだから」

みなみは妖しげな笑みで囁く。

そして、首元に両手を回そうとすると……

「ああっ……もう、もう……我慢できない、梓ちゃんっ！　梓ちゃんっ！」

「なっ!?!」

今までの落ち着いた様子をかなぐり捨て、男は涙声を上げながら、みなみの身体を乱暴にベッドに押し倒したのだった。

続く

第84話「コスプレのある週末―君は彼女に似ている―」（前書き）

お詫び。

先日、話数が被っていたので第84話を訂正しようとした所、操作を誤り第84話を消してしまったのでコピー出来た1000文字以降を書き直しました。

基本的には以前載せた第84話と同じです。

第84話「コスプレのある週末―君は彼女に似ている―」

「ちょ……なに!? 梓ちゃん? なんなの?」

「ああっ……梓ちゃん、もうオレ我慢できない!」

「ああんっ」

押し倒され体操服に顔を埋め、激しく胸元をまさぐられるとみなみはビクツと身体を震わせる。

「ちょ、ちょっと落ち着いてっ、お願いっ」

「梓ちゃんっ、もう」

首を振り何とか自制心をうながすが、二の腕をベッドに押さえつけられる。

『……ヤバイッ』

みなみは唇を噛む。

もちろん、強引な客はいるが、あくまでもプリンセスオークションで落札されたのは一緒に部屋で過ごす権利。身体を自由にさせる権利ではない。

「梓ちゃん……オレは……オレはっ!」

「はうああああっ」

男の手がみなみのブルマーに滑り込む。

「はああ……あたしはあゝ、梓ちゃんじゃないわよおおっ!」

みなみは良く締まった健康的な脚で男の急所を蹴りあげた。

「ぐははああああ」

もんどり打ち、ベッドから転がり落ちる男、みなみはベッドの脇に置いてある小さな猫のぬいぐるみを左手に取った。

「お客さん、悪いけどね、承諾なしのこういうプレイはお断りなの！ このぬいぐるみに仕込んだベルが鳴ると結構面倒な事になるけど……あら？」

睨むみなみだが、素っ頓狂な声を上げる。

「すまない……すまない……すまない」

うわごとの様に呟きながら、初老の男は股間を押さえてダウンしていたのだった。

「本当にすまない」

男はベッドに座り込みうなだれる。

股間を強打された痛みは引いたようで、興奮していた顔はスッキリ落ち着いていた。

「もう平気よ、ああいうプレイがしたいの？ したいのならきちんとねえ……」

「いやいや、違う、違うんだ、君には本当に悪い事をした……これはお詫びの気持ちだ、もう出ていくから許してくれ」

男は手を振り、財布から一万円札を三枚抜き、躊躇無く申し訳なさそうに差し出した。

「ぐっ……」

一瞬、手が伸びかけるがそれを引っ込める。

「なんなのよ、訳が分かんないわよ、説明しなさいよ、説明を！」

「それはちょっと」

「何よ、三万円は出しても説明は出来ないの？」

「あ……みなみちゃん、五万円にするから聞かないでくれないか」

「ええっと……って、ちがうっ！ 三万円と五万円でも違う、でも違う……ああ、もうめんどくさあい！」

揺れる心を振り切り、みなみは再びぬいぐるみを抱き抱える。

「言わないとブザーを押すからね、押したら用心棒の元全米ボクシングチャンプが部屋に来て大変な事になるんだからっ！」

「お、おいっ……落ち着いてくれよ」

「押すわよ、全米ボクシングチャンプのマッハパンチを受けるか、素直に話すかはっきりしなさいよ！」

全米何たらが嘘なのは明白だが、みなみには男を制する迫力があつた。

「わかったよ……みなみちゃん、話そう」

「よし、じゃあ隣で聞いてあげるから」

諦めた様にベッドに座り大きく息をつく男の隣に、ぬいぐるみを抱っこしてみなみは腰掛けた。

「梓ちゃんは……ボクの初恋の女の子なんだよ、君はその梓ちゃんに本当に瓜二つなんだ」

男は呟く。

「そう思った所だと思ったけど……本当に？」

「ああ、そっくりだ……でもね梓ちゃんは君よりも大分、お淑やか……」

「ああん!？」

「い……いや、みなみちゃんは梓ちゃんよりかなり元気なんだけど、それに髪型が梓ちゃんはもう少し長いんだ」

お淑やか云々に眉をしかめたみなみ、男は慌ててその辺りを誤魔化す。

「全部、一緒な人なんていないわよ」

「そうだね……でも当然、梓ちゃんはもてたよ、なにせみなみちゃんにソックリなんだから」

「でも、さっきの様子からすれば、梓ちゃんへの思いの結果は言わずとも……だけど」

「あははは……」

男は頭を掻く。

凶星の様だ。

「ボクは田舎の出身で通っていたのは過疎でね、高校生、中学生が一緒の校舎で勉強していたんだけどさ、梓ちゃんは同じ高校生だけ

でなく、中学生の男子からも憧れの的だったんだ……みんなに優しくてさ」

「へえ、あたしの田舎も全校生徒少なかったけど、そこまでじゃなかったな、さしずめ学校のアイドルって感じ？」

「……そうだね、眩しかったよ、私の他にも彼女が初恋の男子は何人もいたし、女の子からも好かれていたんだよ」

天井を見上げる男。

その瞳は何か懐かしそうだ。

「私を見て、その梓ちゃんを何十年振りに思い出しちゃった？」

「ああ……君を見たのも偶然なんだ、飲み会で酔った部下がさ、今ハマっちゃってるお気に入りの子の女の子がいるんです、って君の写真を見せてきてさ」

「へえ、凄い偶然、それじゃあ驚くよね？」

「驚いたよ、酔いが覚めちゃって、その部下に店を聞いて来たんだ、俺のマイプリンスをとらないでくださいよ、とか念を押されちゃったけどな」

「常連さんかな？」

みなみは笑う、写真は写メ等を一緒に部屋で撮る事もあるし、ブログをプレゼントもしている。

「本当に笑顔が似ているよ、可愛い」

笑みを返し、改めて見つめてくる男。

「ありがと……」

体操服姿のみなみはベッドの上で体育座りをする。

「事情はきちんと話して聞かせてくれたから……あずさ、って呼んでもあたしはいいよ」

「みなみちゃん……」

「あずさでいい」

「いや……」

意味深な瞳で男を誘ったみなみだが、首を横に振り男は立ち上がった。

「君はみなみちゃんだ」

「いいのに、まだ時間はあるし……梓ちゃんでもいいから可愛がつて」

みなみは体育座りから誘うようにベッドに四つんばいになり、男に寄るが、

「実はね、梓ちゃんはもう居ないんだ……」

立っていた男は目をつぶり俯きながら絞りだす様な声を出す。

「えっ……」

「梓ちゃんはね、実は高校の卒業寸前に事故で亡くなってしまったんだよ」

「な……」

みなみは男の告白に声が出ず、驚いてしまう。

自分に瓜二つという少女が居たというだけでも驚きなのだが、その少女が数十年前に事故で亡くなっていたとは。

「梓ちゃんを思い出したのは部下の持っていた君の写真もあるが、今度、その母校の建物が無くなる事になって、卒業後初めての同窓会が開かれる事になったからなんだよ」

「同窓会？」

「ああ……こんな歳になるまで同窓会をしなかったのは、皆が集まればどうしても思い出してしまう梓ちゃんへの思いが出てしまうからなんだろうが、校舎を撤去するという事で最初で最後に集まろうって事になったんだよ……それで梓ちゃんの事を思い出してしまった所で、偶然……写真を見てしまっ

「お客さん」

どう声をかけていいか解らない。

「みなみちゃん……本当に済まなかった、これは昔を忘れられず遣り切れないバカな男の話を聞いてくれたお礼だ」

迷うみなみの手を男は両手で取った。

何枚もの万札が一緒にみなみの手に握らされる。

「いや、こ、こんなの受け取れない、せめて……」

「いいんだ、本当に済まなかった」

拒否をするが、男は手を離して踵を返してドアに向かっていく。

「ち、ちょっと……待って、まだ時間も……」

みなみは男を追おうとしたが、

「本当に君が梓ちゃんに見えたんだ」

と、哀しげに笑われてしまうと、追いついても何を言えば良いのか解らない自分に気付くのだった。

「恋音ちゃん……」

「なんれすかあ？」

仕事帰りのファーストフード店。

窓際の席でみなみは道を歩く同業者であろう女の子達の歩く姿を頼杖について眺めながら、目の前でソーセージマフィンをパクつく恋音を呼んだ。

「恋音ちゃんさあ、誰かに似てるって言われた事はある？」

「似てる？……えーっと、何日か前に若いお客さんに元カノに似てる、って言われまして」

何かを思い出したのか、恋音は何かを我慢しきれないようにププツと笑う。

「どうしたの？」

「どうやら声も似ていたみたいで……あれの最後、お客さんが私の事、奈央くって呼んじやって、終わった後……お互いに苦笑いしちゃったんです」

「そうかあ、でも喜んで貰えたんでしょ？」

「ええ……それはもちろん、今度はちゃんと、れいんくでお願いしますって頼んだら、絶対にまた今度、競り落とすよ！　なんて言ってもらえました」

笑顔の恋音。

みなみは頬杖を付いたままだ。

「みなみさん、何かあったんですか？」

心配そうな声で首をかしげる恋音。

「恋音ちゃんみたいに上手く相手を喜ばせてあげられたらなあ」

大きく息を吐き、みなみは髪を掻き上げ、

「私はプリンセスなのに……お客さんとの時間を悲しい時間にしちゃった、出来の悪いお姫様なのよ」

と、呟くのだった。

続く

第85話「美少女、誘いの微笑み」

「コスプレウィークのプリンセスMVPは菜ノ花ちゃんでした!」

コスプレウィーク最終日、業務後ミーティングで弾む高音の声。

「ありがとうございます」「ご苦勞様、はい、これがトップ賞」

笑顔を浮かべて、菜ノ花は丁寧に頭を下げ、幸四郎の出したトップ賞の特別ボーナスの入った封筒を受け取る。

「二番手は接戦でしたが、知世さんです」

「あたしかぁ、この週は一日もトップはとってないんだけどな」

高音の発表に複雑な表情を見せる知世。

彼女の言う通り、知世はコスプレウィーク中に一度も一日の落札金額でトップにはならなかったのだが、週を総合すると二位の成績になる。

「安定して高い人気があったんだよ」

「へへへ……悪い気はしないけどね」

そう言って、幸四郎が知世に笑いながら封筒を渡すと、知世も複雑な表情からニツと笑い返す。

三位は楓、こちらも一日のトップを獲ったりと高い人気を安定させ、普段は不動のトップなのだが、コスプレウィークの爆発力は菜ノ花と知世に譲ってしまった形だ。

「知世さんはあの幼稚園児が効きましたわね、到底わたくしには不可能なコスプレですわ」

「ほっとけっ！ 私は成果主義なんだっ、園児でも幼児でもなんでも客を喜ばしてナンボなんだっ、悔しかったら園児服にスクール水着、ゴスロリが似合ってみせろっ！」

順位を譲った楓の皮肉に対して舌を出す知世。

「まったく、その通り……参りましたわ、わたくしも色々な局面での魅せ方を磨かなければいけませんわ」

楓は苦笑しながらも、それを認める。

プライドの高い彼女だが、他人の才能を認めない程に意固地ではない。

中でも美少女としてのベクトルは真逆に近いのだが、知世に対してはライバル視しているフシもある。

「さて、今日は休みですし、夕方から希望者による打ち上げを企画してしますので、出れる人は教えて下さい、ちなみに焼肉屋さんですよ」

「やたら、焼き肉」

「楽しみでございますな」

高音が言うと、くるみと愛日は手を合わせて喜び、

「楽しみですよ」

恋音もニツコリと可愛らしい笑みを浮かべるのだった。

「ここの焼肉屋さんは結構、行ってます……お仕事が丁寧で好感がもてます」

嬉しそうに看板を見上げる恋音。

場所は地元の焼肉屋。

ファミレス程の広さがあり、結構流行っている店である。

「さっき起きたばかりでさあ、まだ腹が肉を食うモードになってねえ」

欠伸をする知世。

朝まで仕事をするプリンセスの生活は普通の生活とは真逆だ、休みの日は朝から寝て昼に起きてから遊びに行く者もいるし、夕方まで寝ている者もいる。

「愛日はお昼ご飯を控え目にして、この夕食に賭けて参りました」

「愛日ちゃんはいいいねえ、お腹が膨れても減多な事じゃ、そのオッパイよりも前には出ないからね」

お腹を擦る愛日、まゆりが彼女の胸元に注目し羨ましそうに言う
と、

「ホントに羨ましいですう、愛日さんは私よりも背が低いのに……
胸がこんなに大きくて」

恋音も彼女の胸元を覗き込む。

「は、恥ずかしいでございます、ほら……早くお店に入りましょう、良い香りがしてまいりました、ささっ……こういう場所は総大将たるオーナーから」

顔を赤くした愛日がまるで戦国武将に仕える小姓よろしく、入口をガララと開ける。

「ああ、ありがとう、愛日ちゃん……別に気にしなくていいのに」
「そうはいきませぬ、愛日にとってオーナーは大将にございます、この身を捧げ忠誠を誓いまする」

「あ……ありがとう、じゃあ一緒に行こうね」

少しズレた愛日に対応に迷う幸四郎、しかし悪い気は全然しない。身長は151?と低いが、抜群の美少女ルックスに超と言っても過言ではないグラマーなプロポーションを持つ久川愛日にそこまで気を使ってもらえるのである、むしろ男として素直に嬉しい。

「じゃ……一緒に失礼いたしまする」

スッと幸四郎の腕を取る愛日。

腕に感じる明らかに豊満で男にはない魅惑的な柔らかみ。

「あははは……」

思わず幸四郎は赤面してしまう。

地元の焼肉屋に入るだけなのに、まるで高級レストランに格別な美少女を伴って入店する気分になるのだった。

全員が3つのテーブルに別れて席に着く。

幸四郎は正面にまゆりと百合乃、隣に愛日という4人のテーブル。

「坊っちゃん、こんなに沢山キレイどころが集まったから他の客が何事かと、見てるよ」

そこに現われたのはこの店の主人の大町という太った中年。

四十代半ばでスツカリと頭は両耳の周りを残してハゲているが、愛嬌のある性格と顔立ちで商店街の副会長も務めている。

「こんにちわ……大町さん、今日は店のイベントの打ち上げなんですよ」

「こんにちわ」

「お世話になりまする」

幸四郎が挨拶すると、百合乃や愛日も頭を下げる。

「よう、愛日ちゃんに百合乃ちゃん！ イベントの打ち上げか、めでたいなあ……それにしても本当にキレイだ、今日はたくさん食べていってよ」

百合乃と愛日に笑顔を浮かべ、メニューを置き、大町は厨房に下がっていく。

「さあ……みんな、ドンドン注文してね、さて、俺はどうするかかな？」

皆にそう告げて、お手拭きで手を拭きながら幸四郎がメニューを

開くと、

「わたくしにも見せて下さいませ」

顔を寄せてくる愛日。

「ああ……うん」

左側にだけピンクのリボンを付けた薄い茶髪のセミロングから舞う弱いが心地よい香り。

赤面して周囲の目を気にするが、周りの女子は配られたメニューに集中している。

「オーナー」

「えっ？ なに？」

愛日の声は小さい。

思わずその声量に合わせて、彼女の顔を見ると、愛日は幸四郎に身体を寄せて微笑む。

「この後、ふたりっきりになりませぬか？」
「ん……？」

可愛らしく、美しく、そして……妖しい、女からの誘いの微笑み。

「……………うん」

抗する手も理由もまるでない。

幸四郎はまるで漫画の表現の様に生唾を呑み込み、操られるように頷くしか出来なかった。

続く

第86話「アイスクリームは別腹でいけます」

こうばしい匂いと言えない音をたて焼けていく骨付きカルビをトングで網の上で転がしながらの雑談は楽しくもあり、少し緊張もしてしまうシチュエーション。

営業時間中はオーナーとして振る舞えば、多少の迷いは解消できるのだが、プライベートという事になれば十数人の選りすぐり美女達に囲まれた一人の青年に過ぎなく、下手をすればその女性特有のかしみに存在さえも忘れられてしまうのではないかといった風である。

「オーナー、焼けてるみたいだよ」

「とりましよう、はい……どうぞ」

「百合乃さん、ありがとうございます」

まゆりが差した焼けた肉を百合乃に皿に取ってもらう祐一。

正面にまゆりと百合乃、横に愛日のテーブルは比較的穏やかに食事は進んでいく。

まゆりが振る話題に百合乃や愛日、幸四郎が答える形がほとんどなのだが、雰囲気は悪くなく、むしろ和気あいあいといった様相である。

他のテーブルの様子を見ていても、知世や佐久耶が騒ぐのを諫めるみなみの声などが聞こえてはくるが、特に問題はなく焼き肉を楽しんでいるので、幸四郎も安心して焼き肉をしばし楽しむのだった。

「ふえー、結構食べちゃったなあ」

「まゆりちゃん、たくさん食べましたね」

椅子に深々と座り、お腹を擦るまゆりに笑顔を浮かべる百合乃。まゆりとは対称的にキチンと椅子に姿勢よく座ってはいるが、百合乃もすでに食べる手は止めている。

「俺もこのあたりかな？」

「そうでございますか、でもお肉が残ってますゆえ、もう少し頑張っ
て食べて下さいませんか？」

幸四郎も箸を置こうとするが、愛日に取り皿に残った少しのカルビをトングで取り微笑む。

正直を言えば腹具合は限界に近かったが、残ったカルビも多くはなかったし、唯一の男として多少の無理は利かせる価値が目の中の美少女の微笑みには充分すぎる程にあった。

「よし、それ一気に片付けちゃうぜ」

「流石は男の子、素敵でございます、愛日は惚れ直しましたあ」

箸を取り直す幸四郎に、愛日は少し冗談めかした様に大仰に声を弾ませたのだった。

「よく食べたねえ、デザートのアイスを全員にサービスするよ」

最後のカルビをどうにか食べきり、ウーロン茶を飲みながら話していると、店主の大町が小さなバニラアイスに乗せたトレイを持ってくる。

「ありがとうございます、美味しいから食べ過ぎちゃいましたけど、アイスは嬉しいなあ」

幸四郎は苦笑する。

幸四郎達のテーブルは食事という行動は完全に沈黙したが、他の席ではまだ食べている者もいる。

特に恋音はまだ嬉しそうに肉を焼いており、引き上げるのはもう少し待ってあげたかったので、冷たく別腹で入りそうなアイスはありがたかった。

「どうもありがとうございます」

「デザートは別、おいしそうだね」

「かたじけのうございます」

百合乃、まゆり、愛日の三人もどうやらアイスは入るようで喜んで受け取る。

「みんなアイスは食べられるんだ？」

「あはは……ウチに来る女の子は大抵そうだよ、焼肉をお腹いっぱい食べても最後にデザートは入っちゃうんだね」

自分もそうだが、三人が三人とも別腹でアイスが入るのを驚くと、大町はハハハと笑う。

「まあいいや、ところで坊っちゃん」

「はい？」

「俺ね、今度の商店街夏祭りで実行委員をやってるんだけど……」
「そうでしたね」

ひとしきり笑い大町が切り出してきた話に地元の事で知らない話ではない幸四郎は頷く。

「毎年、商店街の人間達で店を出して盆踊りやカラオケをしてるんだけどさ、最近は出店も減ったし盛り上がってないんだ」

「そうなんですか？ 俺がまだ居た時は結構ワイワイやってたじゃないですか」

ため息をつく大町に幸四郎は目を丸くする。

家を出ていた間は知らないが、新大空町商店街の夏祭りは決して規模は大きくはないにしろ、手作りならではの活気があった記憶が残っていた。

「ああ……ほら、あのさ、坊っちゃんの親父さんが実行委員会じゃなくても色々と面倒見てくれたんだよ、でも親父さんが体調を崩してから……何か坊っちゃんにいい知恵がないかな、って相談したいんだ」

何か言いにくそうに俯く大町。

「そうか……あの人はなんだかんだ呼ばれても無いのに顔を出して、引っ掻き回すのが好きだったからなあ、いなくなればいなくなっただけ活気が無くなる、って事ですか……」

幸四郎は務めて明るい声色で応じた。

きつと相談はしてみたいが言いにくい事に違いないのだ。

風俗大王チェーンが進出してくる前は、御神本のこの風俗街での力は並みでは無く、例えるなら超巨大航空母艦の様に偉容を誇っていたが、今は少し上手く漕ぎ出せた程度の小型艦艇がいい所。

それでも御神本の旗が立っていれば、この街の人間には大きいの

だろう、経験皆無の頼りない艦長に替わってしまってもいるが、頼りは頼りなのだ。

数秒の間。

顎に手を当てていた幸四郎は顔を上げ、

「わかりました、どこまで出来るかわかりませんが出来るだけ協力しますよ……高音さん、こっちの席に来てくれませんか？」

と、大町に答え、恋音がまるで無尽蔵に焼肉を頬張るのを呆れて細い目で観ていた高音を呼ぶのだった。

続く

第87話 「それは先入観でござります」

「はあ……はあ……ま、愛日ちゃん」

「あ……あんっ、オ、オーナー、あんっ」

激しい行為。

久川愛日という美少女に酔い痴れ、頭が真っ白になってしまう幸四郎。

「はあ……はあ、この胸、オレ、スッゴい好き」

「あああんっ」

「愛日ちゃん良すぎっ、ヤバイ……く、くうっ」

「オーナーあああ」

「な、名前呼んで……ま、まなびちゃんっっ」

「こ、幸四郎さまあああああ！」

「まなびっっっ！」

互いに叫び、重ねた身体をビクッと大きく躍動させると、二人の男女はそれまでの勢いを失速させ、激しい息を細かく整えながら抱き合うのだった。

「何か、飲まれますか？ 少し暑いのでは？」

「え、じゃあ……ジュースある？」

「かしこまりました」

ニツコリ笑顔を見せ、愛日は幸四郎の胸板に預けていた小さな身体を起こしてベッドから降りる。

プリンセスオークションの店舗の愛日の部屋。

焼肉屋で打ち上げを終え、それぞれがその後遊びなどに散った中、さり気なくバラバラに別れて幸四郎と愛日は誰もいない店舗で会ったのだ。

『ちょっと部屋が暑かったから、頼んじやったけど、よく考えたら愛日ちゃんとのこの状態、惜しかったな……小さいけど抱き心地最高だね』

タオルケットを身体に巻き、部屋の備え付けの小さな冷蔵庫を覗く愛日に幸四郎はそんな事を思う。

「クーラがあります、宜しいですか？」

「ああ……エアコンの設定、何度にしてる？」

「29度でございます」

「少し下げない？」

「拙はクーラーに弱くて、どうにも……」

幸四郎の提案に冷蔵庫から小さめの瓶のオレンジジュースを取出しながら、苦笑する愛日。

「初耳だ、愛日ちゃんはクーラーに弱いのか、だったら温度はそのままでもいいよ、気にしないで」

「かたじけのうございます、営業時間中はもう少し下げているのですが」

「そうだね、今は夜も暑さ真っ盛りだからね、営業時間中は悪いけど、どうにか我慢してね」

コップに移したジュースを受け取り、ベッドに腰掛けた幸四郎はそれを飲み干した。

「オーナー、もう少しゆっくりしませぬか？」

「そうだね」

隣に座り、身体を寄せてくる美少女の肩に優しく手を回す。

「寝転がっちゃっていいかな？」

「腕枕してくれたら」

「もちろん」

「フフッ……」

寝転がる幸四郎に身体に巻いたバスタオルを取り、笑みを浮かべ、一枚の薄手のシーツを腰まで掛けて寄り添う愛日。

『愛日ちゃんって、たまにスゴく印象変わるよな……妖しい色気と
いうか、妖艶というか』

その妖しさに少し戸惑いも覚える。

プリンセスオークションの女の子は皆が美少女、美女だと幸四郎は思うが、タイプはもちろん様々だ。

大雑把に言えば、都会育ちの洗練された可愛らしさを持つのが楓や恋音、知世達とするなら、田舎育ちの純朴な可愛らしさを持つのが、みなみや佐久耶達だと判断している。

実際、みなみは内陸県のかなり山奥の出身だし、佐久耶は一応は東京都だが数百キロ海の向こうの離島育ちだ。

そして、久川愛日も出身は近畿地方の内陸の山奥らしい。それをして純朴な可愛らしさの原因とするのは先入観かもしれないが、幸四郎は愛日の可愛らしさをみなみや佐久耶と同じベクトルに思っている。

だが、愛日には時折、妖しい色香を感じてしまうのだ。アイドルに負けないルックスに、小さい身長とはアンバランスにも思える程のボリュームのプロポーション、そして色気を兼ね備えた超を付けても決して過言ではない美少女。

そんな久川愛日という少女との現在のシチュエーションは幸四郎には当然ながら満足で、意外な妖艶さに覚えた違和感など小さな事であった。

「そう言えば……」

何かを思い出した様に少しつり目がちな瞳と太めの眉を上げる愛日。

「どうしたの？」

「オーナー、今日焼肉屋さんの店主の大町殿と高音さんとで祭りの相談をしばしされておりましたね、何かしら妙案が浮かばれましたでしょうか？」

「んー、ウチの店も商店街には世話になっているからね、頼られたらどうにかしたいよね、でも今日は特に思いつかなかったな」

愛日の問いに、幸四郎は頬を掻いて微妙な笑みを浮かべてしまう。

「祭りは楽しみでございますな、それを盛り上げるにはやはり催しの活気がなければ人も集まりませぬ」

「だよねえ、話によると最近は寂しげみたいだ、前を知ってる俺は新大空町商店街祭りは活気があって、ってイメージがあったから意外なだけどさ」

「なるほど」

「親父の時は結構、首を突っ込んで皆を引っ張って祭りを盛り上げていたらしいよ、ワンマンと言えばワンマンだけど、そういう人間は必要なのかもな……商店街に店なんて持っていないくせにさ、色々顔が効いたからね」

そこまで話すと幸四郎は腕枕した愛日の頭をソツと撫でる。

「でも……正直、俺にはそこまでの牽引力というか、引っ張る力はないよ」

「幸四郎様……」

「ん？」

「わたくしめは先代は存じ上げておりませぬが、お店はこの街に沢山持っていたと伺っております」

「そうだよ、全部風俗店だったけど」

「ならば……」

顔を寄せてくる愛日。

「ならば、新大空町商店街にお店があったのでは？　なぜ先程は商店街にお店が無いのに首を突っ込んでなにと？」

「ハハッ……だってそりゃ、風俗……」

「お店ですな」

空笑いの幸四郎の言葉を遮った愛日の顔は真顔だ。

「愛日ちゃん？」

「幸四郎様も持っておりまする、商店街にお店を」

「あっ……」

愛日の言葉に何かに気付き声を上げた幸四郎。

「愛日はプリンセスオークションは立派なお店だと思ってましたが……」

「そうだよな、そうだよ、そういう事だよ」

声のトーンが上がり、

「ありがとう、愛日ちゃん、変な先入観だった！ 気付いたよ」

幸四郎はガバツと身体を起こし、一緒に上半身を起こす形になった愛日の両肩を掴む。

「先入観はいけませぬ、偉大な先代の牽引力に、二代目がかかわぬ等というのはその極みにあると愛日は思いまするよ」

優しく微笑む美少女。

それは確実に、そして強烈に男の感情を鷲掴みにする物だった。

「愛日ちゃん、可愛い、可愛い過ぎるっ……また、我慢できないよっ！ たくさん愛日ちゃんを可愛がりたいっ！」

「あんっ……幸四郎様」

抗しえなく、抗する気にもならない。

興奮気味に幸四郎は目の前の美少女をベッドに再び押し倒し、沸き上がった感情を激しくぶつけるのだった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3591p/>

プリンセスオークション！

2012年1月12日07時35分発行